
ゼロの使い魔～無能王と七号と...零号？

黒仮面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜無能王と七号と…零号？

【Nコード】

N4859K

【作者名】

黒仮面

【あらすじ】

ゼロ魔の世界にトリップ…よくある設定かと思いきや呼び出された先がまさかの… オリ主最強物＋一部キャラ改変ありなのでクセの強い作りになってます。その手の小説が嫌いな方は閲覧注意

…

第1話：召喚の儀… だけと呼んだのは… (前書き)

思いつきとノリと勢いで書いてるので読み手を結構選ぶかも…

(加えて主人公チート能力をFFから取る予定)

後、小説を掛け持ちしてるので更新はかなり不定期になります。
それでもいいって方は…どうぞ。

第1話・召喚の儀…だけと呼んだのは…

「ほう…コレが俺の使い魔か…サモン・サーヴァントが一発で成功するとはな…」

……………何がどうなってる？ここはどこだ？俺の身に何が起きた？

今俺は石造りの壁に高そうな絨毯の敷かれたただっ広い部屋に座り込んでいる。

巨大な窓と高そうなカーテンがいくつもあり、天井には豪華なシャンデリア

まるで中世ヨーロッパのお城の中とでも言わんばかり。

そんな俺の目の前にはある1人の人物が俺の顔をまじまじと見ていた。

「えーと…」

わけのわからなさすぎる今の状況を必死に整理すべく

俺は大して大きくもなく口クな知識も詰まっていない脳みそをフル回転させる。

そして…

「ええ」……」

今の自分の置かれた状況を何となく理解して俺は口をあんぐりと開けて固まる。

*

俺の名前はサイガ・トオル斎賀徹

19歳の大学生

ボサボサの黒髪で丸メガネ着用

顔には……ほんの少しは自信があるが世間一般で言えば普通だろう……

服装にはあまりこだわらない。

今だって黒いトレーナーに黒ジャンパーを纏い

下は黒いジーパンを着用している。客観的に見れば地味の一言。

成績中の上、運動神経はそこそこ

好きな物と趣味はネットとマンガとゲームとその辺を適当に散歩する事。

どこにでもいる大学生その1みたいな存在なわけで。

朝普通に起き、学校で勉強し、友達と話し、

1人暮らしの安アパートの自宅に帰れば

飯食って勉強してテレビ見て風呂入って寝るだけ
なんてことない日常の繰り返しだった筈だ。

それが突然変わったのが今日の日曜日。

昨日は友人数名と遊んだわけだし

今日は1人で買い物でも楽しもうかと街に出た。

そんで行きつけの中古ゲーム屋で昔持ってた売ったFFを数本
安く購入。

早速家帰って久しぶりにプレイするかと店を出たその瞬間だった。

店を出た矢先、いきなり目の前にでっかい鏡みたいなのが現れて
なんだよいきなり!?みたいにビビって立ち止まっていたら

後ろから走って店から出てきた小学校くらいの子に突撃されて

バランス崩して鏡に突っ込みそうになってヤベエ!と思って目を閉
じたら

何かに吸い込まれていくような感覚がして、ふと気づいて目を開け
たら…

…とまあそんな感じで冒頭に至るわけだ。

とりあえず身の回りの確認から…

ポケットの財布と携帯は無事だ。

脇に抱えたカバンの中身は……おろ？買った筈のFFが無い……
さっきのアレで落としたのか？いや、そんな事よりだ。

俺はふと、先程目の前の男が言った単語を思い返してみた。

サモン・サーヴァント……

使い魔……

……少し時間が経ってて落ち着いていた所為か、一瞬でピーンとくる。

ゼロの使い魔か？という事は俺は……使い魔の儀式で呼び出されたのか！？

そこまで考えて俺はもう一度周りの光景と目の前の男を見直す。

……そして思ったね。こんなのアリかよと……

イヤイヤイヤイヤ……そもそもラノベの世界に呼び出されるとか俗に

言う転移物ってやつ？

別にそういうのが嫌いなわけじゃないし

寧ろネットではその手の二次小説は大好きで

いろんな作品を読みあさったりしてるんだよ。

でもそれはあくまでも「小説」という想像の世界だから楽しめるわけ
で

自分が当事者になつたら苦勞の連続なのは目に見えてるだろう？

それでも……それでもまだこうなつたもんは仕方ない。

とりあえずなるようになれで行くしかないと前向きに考えようとしたのだ

ゼロの使い魔はお気に入りだし、ある程度原作読んでるし
クロス物や転移物の二次小説も結構目を通している。

虚無のルーンの力と原作知識を駆使して上手い事やっていけるか？
元の世界に帰るまでにそれなりに楽しめるかな？

……なんて考えがクックベリーパイより甘かつたんだろうな。

何故なら俺の目の前にいたのはお約束の桃髪ツンデレ虚乳少女では
なく

二次小説によくある金髪天然巨乳少女でもなかったからだ。

俺の目の前にいた人物……つまり俺を召喚した奴は……

「おかしな格好をしているが……見たところ平民のようだな……
ハッ！無能の俺にはお似合いの使い魔という事だ……」

自嘲気味に笑う青髪のダンディーな髭男……

え？ジヨゼフですか？ジヨゼフなんですか？

俺はこいつに呼ばれちゃったわけですか？

うそ〜ん…

いくらなんでも斜め上すぎる…基本行き当たりばったりで細かい事は気にしない、嫌なことは1日経てば忘れるような俺でもこれは流石に無いわ…って思うわ…
転移早々死亡フラグがブンブンしてるんですが…

弟に嫉妬するあまり勢いで殺しちゃって

その反動で何かおかしな方向に進みまくってるこの人の使い魔をやれと？

うわ〜…シェフィールドさん助けくれ〜…俺には無理だ〜
最終的にこいつと一緒に火石で心中する気なんて俺にはねえぞ。

とかこんな風に頭の中がごちゃごちゃになっていたから俺はそれに気づくのに遅れてしまった。

「フム…まあいいだろう…また何かの退屈しのぎにはなるかもしれん…」

ジヨゼフがそんな事を言っただけで座り込んで俺の前にかがみこんで段々と俺の方にそのダンディーな顔を近づけてくる…

いやわかってるけど！！熱いってコレマジで！！
張り裂けんばかりに胸が熱い！！！！
ってちよっと待て胸ええええ！！？頭じゃないの！？
ミヨズじゃないのおおおお！？アアアアア！！

……俺の意識はそこで途絶えてしまった。
いや本当にマジで熱かったんだもん……

ジョゼフの……無能王の使い魔か……本当にどうなるんだろこの先……

第1話：召喚の儀… だけど呼んだのは… (後書き)

なんで契約がキスなのかは未だに疑問です。

つまりヴィットーリオとジュリオは… って事になりますよね？

グダグダなスタートになりましたが、
楽しく読んでくれる方には心から感謝です。

第2話…まさかと思いきや…でも何でFF？

「夢……ではないか…はあ……」

ベッドの上で目を覚まして俺はため息を一つ吐く
さつきとは違う部屋らしい。

俺はある個室の小さなベッドに横になっていた
すぐ側の窓からは2つの月明かりが入ってくる。夜も大分遅いらし
い。

そして胸に刻まれた解読不能の文字…使い魔のルーン。

「…うん」

ジョゼフの使い魔…またとんでもないポジションになったもんだ。

ベッドから立ち上がってとりあえず頭の中で状況整理を試みる。

記憶違いでなければここはゼロの使い魔の世界・ハルケギニア

召喚したのがジョゼフで間違いないのなら

ここはガリア・グラントロワ宮殿なのだろう。

そしてコントラクト・サーヴァントの…いや思い出すのやめよう。

何か今も唇に嫌々感触が残っている…

とまあそういうわけで俺はシェフィールドに代わり虚無の使い魔と
して

召喚されたわけなんだが大きすぎる違いが一点。

ルーンが刻まれたのは頭ではなく胸…
要するにミヨズニトニルンではなく記すことさえはばかれる第4の
使い魔という事だ。

…これは非常によろしくない事態なわけであって
何せ原作でも未だにほとんど触れられていない要素なのだから。
どんな能力があるかなんてサツパリなわけで。

ガンダールヴやヴィンダールヴなら武器やら幻獣やらを用いて立ち
回れるし
ミヨズニトニルンもまあマジックアイテムさえあれば十分チートな
わけで
でもこの第4については全くの未知数。

しかも召喚主がよりにもよってあのジョゼフ…

「…ぐわあ…帰りてえ…」
思わず両手で頭をガリガリと掻き始める。

別にジヨゼフが心底嫌いなわけではないよ？

寧ろゼロ魔キャラの中では気に入ってる方。

でもさあ…いくらなんでもその彼の使い魔やれっつのは予想外すぎる。

ぶっちゃけ何やらされるかわかったもんじゃない

原作の記憶が曖昧になってるのに加えてかなり不安になってくる。

「何だっけか…クロムウエルをアンドバリの指輪でたぶらかして
レコンキスタ結成のきっかけを作ったり

その後もちよくちよくクロムウエルとあれこれやったり

サイトが死んだと思い込んで傷心のルイズを襲撃したり…

後は…ヨルムガント制作にも関わったり…したっけか？」

ダメだ。記憶があやふやになっている。

ああ〜ちくしょ〜！これからマジどうしろっていうんだよ！

ポジションが特殊すぎるわ！ベタでもいいから

どうせトリップするならもっと安全な場所のが良かったのに！

って…ルイズの使い魔も決して安全とは言えそうにないが…

ああ〜でも本当にどうするよ!？

先が読めなさすぎるぞコリア!

「あ…あの〜…大丈夫ですか？」

「へっ…?」

ひたすら頭を引っ掻きまくってたから気づかなかった。

開かれた部屋の扉の前にいるライトグリーンの短髪の小柄なメイドの少女が

ちよつと引き気味な視線をこちらにむけていた

つまりさつきまで頭を引つ搔いてバタバタしていたのを
おもつくそ見られていたわけで…恥ずいなオイ…

「ええつと…君は？」

とりあえず服装の乱れを整えて深呼吸した後に彼女の方に向き直る。

「あ、はい…私はマリーと言います。陛下から
目が覚めたらあなたをお連れするようにと…」
そう言つてメイドの少女マリーは軽く微笑んだ。

…その顔に何となく癒やされる。

小動物チックな可愛さが滲み出ているな…

つて…そんな事言つてる場合じゃないつーに…

「陛下つていうと…ガリア王ジョゼフ…様の事か？」

慌てて様付けしたら何か変な言い回しに…

「はい、何でも大切な客人だから丁重に扱つようと…」

「そう…わざわざありがとうね。俺の名前は斎…じゃない
トオルつていいいます。よろしく」

名字を言おうとしたけど何となくやめた。

ゼ口魔世界では名字を持つのは貴族だけだし。

にしても大切な客人ねえ…ジョゼフは気づいてるのだろうか？

俺が虚無の使い魔って事…それ以前に自身が虚無の担い手って事に。その辺も原作知識が薄れて曖昧になってるな。

*

とにかくジョゼフと話をしないと始まらないっていうわけで俺はマリーの案内でジョゼフの部屋へと向かう。

にしても流石はグラントロフ宮殿…滅茶苦茶豪華だよ。

廊下一つ歩いているだけでもいろんな内装に気品が漂っているのがわかる

そんな場所をこっちの世界で言う平民…

現代日本の一般人に過ぎない俺が歩くのは非常に場違い極まりない…？

時折すれ違う他のメイドや兵士の視線がグサグサ突き刺さって正直居心地が悪いです…

前を歩くメイドの少女…マリーはどう思っているのだろうか？

それにしてもなあ…やっぱり気持ちの整理がつかない。

異世界トリップなんていう非現実が自分の身に降りかかって…

いや、それはそれで面白いとは思っよ？

でも何度も言うようにジョゼフの使い魔なんて先が見えなさすぎる。始まる前から不安だらけのリアルファンタジー体験するくらいならゲーム機と画面上のファンタジーで十分。

…そっぴゃ何でこっちに来た時に購入したFFのソフトが消えたの
だろうか？

こんな状況となつては些細な問題だが…

「せめてFFみたいに黒魔法の一つでも使えたらなあ…
例えばこっ…ファイア！って言ったら炎が舞い上がり…」

ボツ！！

「きゃあっ！！」

「……………な？」

その音に驚いたマリーは体をビクリと動かす。

「ト、トオル様…今何か…」

俺の方を向いてこんな事を言っているが寧ろこっちが聞きたい…

え…？何今の？ちょっと右手翳してその気になってみたらいきなり手の先から小さな炎が飛び出して…

試しに俺はもう一度右手を前に出して呟く。

「ファイア」

ポウツ！！

「ひいつ！」

マリーまたしても驚いてビクリと反応。そして今の俺は完全硬直…

…な、何で俺がFFの魔法を使っている？ここハルケギニアちがうの？

世界観が無茶苦茶ではありませんか？

いやちょっと待て…仮に本当に使えてるとしても

何かの間違い？これがルーンの力だとしてもアレだ炎を発生させるなんてドットメイジでも出来る。

もしだ…もし本当に俺がFFの魔法を使っているとしてだ…手っ取り早く試すには…

俺は近くの窓を開けて外の様子を見る。

「トオル様…?」

メイドのマリーが声をかけてくるがお構いなしだ頭の中にイメージを浮かべて遠く離れた人気の無い野原に向けて手を向け

そして俺は呟いた。

「メテオ」

ドゴオオン!!ドゴオオン!!ドゴオオン!!

「きゃあああ!!」

「何だ!?何が起きている!?!」

「流星だ!流星が降ってきたぞ!!」

アハハハハ…乾いた笑いしか出ないわ…

まさか本当にメテオが発動するとは思わなんだ…

でもこれで間違いない…メテオ発動と同時に

俺の胸のルーンが強烈な光を放ったのだから。

このルーンによって俺は魔法を発動している…

これはまた何ともトンデモな能力だわ…でも何でFFなんだろう…?

しかもファイアやサンダークラスならまだしも

メテオクラスの魔法までイメージしただけで簡単に発動してしまう…

ある意味確かに記すことさえ憚りたくなる気もするが…

「ト、トオル様……あ、あなたは一体……」

と……よく見たらメイドのマリーが腰抜かして尻餅ついている……

あー……うん……流星にメテオはやりすぎだね……どうしようこの空気……とか何とか考えてたら反対側から誰かが慌ててやってくる。

「オイ！これは何事だ！」

「陛下！」

つてウオイ！このタイミングでジョゼフ登場！？

「りゅ……流星が……流星が突然降ってまいりました……」

ガタガタ震えながらマリーが説明しています。

すると何故でしょう。ジョゼフが俺を睨んでくる

「……これをやったのはお前か？」

凄みのある声で俺に詰め寄る。めっちゃ怖い……

「どうなのだ？先程の流星はお前の仕業なのか？」

ダンディーなお顔を近づけて俺にズイッと近寄る。本当に怖い……
たまらず俺はコクリと頷いてしまう。

「……………ククク……クハハハハ！ハハハハ！」

するとジョゼフ、今度は感極まったように大声で笑い始める。

……やっぱり怖い……今度は別の意味で。

「そうかそうか！お前の仕業なのか！？フハハハハハ！」

…ご立腹なんだろうか…トリップ直後に死亡…？

調子乗ってメテオなんて言うんじやなかったか？

…でもジョゼフの考える事なんてわからないしなあ…

なんてあれこれ考えている間もジョゼフは大声で叫びまくる。

「始祖の分身…神の心臓！そして我がガリア王家に伝わりし
幻想世界の魔法の1つ！面白い！実に面白い！

俺は神の生まれ変わりを召喚したというのか！？

フハハハハハ！！無能王のこの俺が！！」

……神の心臓？幻想世界の魔法？

何かよくわからない単語をいくつか口走ってるな……

というより興奮のしすぎで周りが見えてないらしい…

メイドや使用人達の視線に全く気づいてないよ…

本当にこの先俺はどうなるんだろ…？

第3話…ご都合主義にも程があるだろ！？…な話

グラントロワ宮殿、ジヨゼフの王座

またしても俺はこのダンディーなオッサンと2人きりに…

「おう！そう固くなるな始祖の分身よ！！」

無理です。異世界とはいえ相手は大国の王様よ？リラックスしろっ
ていう方が無理あります。

でもって何か知らんがジヨゼフさん、さっきから妙に上機嫌。

窓際の丸テーブルに向かい合って俺とジヨゼフは座っているのだが
ガチガチの俺に対し、ジヨゼフは終始笑顔を絶やさない。

落ち着け…とりあえず落ち着け俺…

ジヨゼフの上機嫌ぶりから考えるに少なくとも即処刑

なんつー悲惨な結果は免れたっぽいが…問題がまだまだ山積みなの
も事実。

今後の俺の待遇とか、元の世界にどうやって帰るかとか

それまで何が出来るとか、俺のルーンと能力の詳細とか…

「そついえばお前の名を聞いていなかったな」

「…トオルです」

「そうか！トオルというのか！始祖の分身に相応しい良い名だな！」

いや…基準がわかんねーよジヨゼフさん…

こんなに愉快な高笑いする人だったっけ？なんかもつと暗いイメー

ジがあっただが…

とか考えているとジョゼフは唐突に立ち上がって王座の近くに移動する

そしてその椅子の裏側をゴソゴソと探ったかと思うと...

ゴソゴソ.....

鈍い振動音と共に王座の近くの壁が回転してそこから本棚が現れる。

うわー... 本当にこの手の技術は凝ってるよねえ...

ジョゼフはその本棚からいくつも古い書物を取り出して持つてくる。

俺が座る丸テーブルの前に置いた後、その一冊を楽しそうに開く。

「我がガリア王家に残されし秘蔵書... 名を『最終幻想伝』という...」
「..... はいい!？」

思わず俺は間抜け声を出してしまう。いやだってあまりにも...

最終幻想って... まんまファイナルファンタジー...

ちよっと待て何だその裏設定は? ガリアにFFが伝わっているって
のか?

「ほう? やはりお前は知っているのか!？」

「ええ…いやその…」

またしてもジョゼフが興奮気味に尋ねてくる。

答えづらい…こっちじゃ当たり前のように伝わっている話…

というか何の脈絡も無いフィクションに過ぎないなどと…

「お前が使った流星を召喚せし魔法…『メテオ』といったな？」

第7項 - 星の命 - では特に強調されている究極の破壊魔法と…!!」

第7…まんま7の事だな…間違いねえわ…やっぱり俺が使ったのは…
…ってやっぱりまだ納得してはいけないだろう？

仮に俺が飛ばされた『このハルケギニア』でもFFが伝わっている
としても

俺がそれを自在に扱えることになる説明には全然ならない。

「あのお…ちょっと1つお尋ねしたいのですが」

「何だ？何でも聞くがよいぞ始祖の分身よ！」

恐る恐る拳手をして俺はジョゼフに声をかける。ジョゼフは実に気
の良さそうな声で答えた。

「さつきから始祖の分身とか言ってますけど…その事とその最終幻
想伝に何の関係が？」

「そうかそうか！ここに来たばかりでまだ何も知らぬのだな！」

あの魔法を知っている以上それについても知っていると思っていた
が…」

うるせえくらいに響く声でジョゼフは説明しているが…

本当に機嫌良さそうだな…そんなに気に入ったのか？

いや…気に入られる分にはいいと思うけど…少なくとも嫌われるよ
りかは

今後この世界でやっていく上で特にジョゼフとの関係は重要なのだ

から。

「お前の出身はどこなのだ？」

「ちきゅ…じゃない…ロバ・アル・カリイエ…」

とりあえず面倒が出ないようにゼロ魔トリップの出身誤魔化し手段のテンプレとも言えるべき答えを言っておく。

「そうか！見た事無い服装だからもしやと思っていたが…では始祖ブリミルとその使い魔については？」

「存じております、俺の故郷では最終幻想伝も広く知れ渡っておりました」

ある意味嘘は言っていない。FFは本当にメジャーなのだから。

「成る程な…ではここから説明するのでしょうか…」

ジヨゼフはそう言って別の本を手に取る。

神の左手ガンダールヴ、勇猛果敢な神の盾

左に握った大剣と、右に掴んだ長槍で、導きし我を守りきる。

神の右手ヴィンダールヴ、心優しき神の笛

あらゆる獣を操りて、導きし我を運ぶは地海空

神の頭脳ミヨズニトニルン、知恵の塊神の本

あらゆる知識を溜め込みて、導きし我に助言を呈す

そして最期にもう一人…記すことさえ憚れる…

四人の僕を従えて、我はこの地にやってきた。

ジヨゼフはそうやって読み上げる。

「始祖の調べですね：俺の故郷にも伝わっています」

虚実を織り交せて説明しておく。でもそれがFFと何の関係が？

「その通り：一般的にはこれが始祖の調べとなっているが…

実はな、俺は別の真実を知っているのだよ」

別の真実？ どういうこつちや？

「お前の胸に刻まれし記すことさえ憚れる者の使い魔のルーン…

それこそが始祖と幻想伝を繋ぐ鍵なのだ！！」

始祖とFFを繋ぐ鍵？ 益々もって意味がわからない。

するとジョゼフはまた別の本を手にとつて読み上げ始める。

「ガリア王家にのみ伝わりし禁書：『虚無と幻想』これにはこう記されているのだ…

『始祖ブリミルの他にもう1人始祖がいた』とな！」

またまたビックリ…何だその話のクライマックスでわかるような最重要情報…

ブリミル以外のもう1人の始祖？ そんなもん聞いたことも無い…

「ブリミルは当時従えし3人の使い魔と共にそのもう1人の始祖と戦い…

激戦の末に第4の使い魔として従える事にした」

成る程：チートの塊と言える虚無の使い魔3人に加え

その更にも上のチート能力虚無魔法を扱うブリミルと激戦を繰り広げる…

とんでもない化け物ですな…するつてーとつまりそいつが…

「そのもう1人の始祖が使った魔法こそが俺の持っている最終幻想伝に記された数々の魔法！

第4の使い魔はブリミルとは異なるあらゆる魔法を使いこなし

ガンダールヴに強力な武器を生み出し、ヴィンダールヴには強力な幻獣を与え

ミヨズニトニルンにあらゆる魔法具を渡し、その力を振るったそう
だ！！

第4の使い魔はブリミルに出会う前に自分が見聞きした数々の戦いを最終幻想伝として書き残した！」

つまりその記すことさえ憚れる使い魔はFF世界の住民か何かで
何の因果かは知らないがここハルケギニアへと流れ着き
持っているFF知識でブリミルと一緒にやりたい放題だったわけで…

何ともまあご都合主義な話だなあ…俺が召喚された時に
無くなったFFのゲームソフトがこの世界に変な影響でも与えたん
だろうか？

FFの魔法を使いこなし、武器を作り幻獣を……

ちょっと待て…

「あらゆる武器や幻獣を生み出したって…それもそのもう1人の始祖が？」

「その通りだ！あらゆる魔法を使いこなし、あらゆる物体を生み出すその姿は

正に神…もう1人の始祖と言える…故に神の心臓…始祖の分身というわけだ

どういう思惑かは知らぬがそれを伝えし禁書は我がガリア王家にか伝わっておらぬ…」

そして俺はそのもう1人の始祖とも言えるFF関連の魔法や…

話を聞く限りでは武器やモンスターすら生み出す能力を手に入れてしまったと…

マテマテマテマテ…いくらなんでもチートすぎるだろ…

これは願っても見ない好都合ともいえるわけだ。

FFに関しては結構詳しいという自負があるので

上手い具合に立ち回れば、このハルケギニアでの生活をエンジョイ出来るし

原作介入なんかもちよくちよく出来たりするのでは？と思う。

だがしかし最大の問題…目の前のこのダンディーなおっさんことジョゼフだ。

「それでジョゼフ陛下…俺のこの力をどうしたいのですか…？」

重圧に耐えながら必死に真剣な表情を取り繕って俺は尋ねる。

正直この男にシェフィールドのように道具扱いされるのは絶対嫌だ。レコンキスタの系引きとかそんな俺には絶対無理だぞ…

こいつが主だとあらゆる行動を制限されかねない…

最悪…まだよくわかっていないこのルーン的能力を使ってここから逃げるか…

「なに！その力で俺を楽しませてくれればなんでもいい！！」

「と、言いますと…？」

「俺はなあ…幼少の時からずっと憧れていたんだよ…この最終幻想伝の魔法や武具の数々に…」

始祖ブリミルなどというカビの生えた偉人などよりよほど俺の心を動かしてくれる…」

……ん？何か話がおかしな方向になってないか？

「俺の心の空虚感は今まで、どんな事をしてでも埋める事は出来なかったよ…」

だが今日お前を召喚し、刻まれたルーンと放たれた流星を見て俺は久方ぶりに心が躍った！！

憧れていたあの力を使いし者が現れたとな！！ブリミルなどよりよほど強力な

もう1人の神を召喚したのだと！！」

「…陛下は俺の力を利用しその空虚な心を埋める為に破壊をするつもりですか？」

再び恐る恐る尋ねてみる。

「まさか！！恐れ多い幻想の魔法の使い手を利用などするわけが無いだろう！？

俺はお前という存在を召喚したという事実だけで満足している！！あとはお前が俺に幻想伝に伝わりし魔法や幻獣の数々をただ俺に見せてくれるだけでいい！

お前がいるだけで俺の心は満たされる！俺のこの空虚な心が満たされるのだ！！

シャルルをこの手につけ、拭うことの出来ない絶望を忘れることが出来るのだ！

お前は始祖の分身なのだから、俺の遊びに付き合つかはお前が決めればよい！めればよい！

その力をどう使うかは始祖の分身であるお前が決めればよいのだ！俺はお前にあらゆるもてなしをして迎えるぞ！このハルケギニアに留まらせるためにな！」

……何という展開なのだろう…都合主義万歳ってやつ？

つまるところジョゼフは俺の存在と俺の力を見ればそれで満足で後は好きにすればいいと言っているわけだ。

でも口ぶりからすると俺を帰すつもり無さそうなんだけど…

それはそれで困るんだが…まあいいか、少なくとも道具扱いではなさそうなので。

毎日毎日同じ事の繰り返しで人生的には退屈であったし…

召喚された時は参ったが、この待遇と能力を考えると悪くない気がする。

問題は帰るなどと言い出したら絶対『このハルケギニア』のジョゼフを阻んでくる事なんだが…

それもまあしばらくは無いから後々考えることにする。

基本的に行き当たりばったりな俺はそんな風に考えてしまうわけだ。FFの力を使ったジョゼフと一緒にハルケギニアライフ…これならいいかもしれない…

俺は椅子から立ち上がってジョゼフの前に片膝をつく。

「ならば俺は…陛下の…いや、マスターの為にいろんな物を生み出しましょう…

それをお見せする事によってマスターの空虚心が暴走せぬように…私が支えとなります」

思いつきで何ともクツサイ台詞を言ってみる。

ぶっっちゃけ中二病以外の何物でもないかもしれないがこれに対してもジョゼフは好印象を示した。

「ハハハハ！…そうかそうか！感謝するぞ始祖の分身！幻想世界の申し子よ…！

今日は何という最良の日なのだ！シャルルよ見ているか！？

俺はお前などよりよほど凄い律業を…ブリミルを上回る神の力をこの目に収めたぞ…！」

上を見上げてジョゼフは感極まったように叫んでいた。

そんなこんなで俺のハルケギニアでの生活が幕を開ける。

第4話：検証と要望…零号と七号

グラントロワよりやや離れた位置に点在する小さなお屋敷
あの日ジョゼフと話し合った後、俺はここに住んでいる。

なんやかんやであれからもう二ヶ月ほど経過している。
時間飛びすぎ？そう言わないでください…

いくらFFの要素を自由自在に操れるというチート極まりない能力
を手にしているとはいえ
いきなりそれを使って大暴れしようと思うほど俺も阿呆ではない。
テンプレ展開なルイズの使い魔と違って不確定要素が多いのだから
出来る限りの準備をしてから臨みたいと思ったわけで。

そついうわけでマスターであるジョゼフに寢床の確保と
能力検証用の敷地が欲しいと頼んでみたら即効で用意してくれまし
たとさ…

二階建て地下室つき、広い庭付きのちょっと裕福な平民が住んでい
る感じのお屋敷を
どれだけ俺の事を気にいつているんだと逆に怪しくなったよ…

「うーん…」

因みに今俺は自室で手を翳しルーンを光らせ、机の上に守りの腕輪
を召喚する。

これは物理と魔法の攻撃を3分の2に抑えてくれる優れものだ。

最初に思ったのはやはり戦闘事に関する問題である。

いくらFFの魔法をポンポン使えるからといって

身体能力は一般ピープルと何ら変わりはないのだから。

それこそハルケギニアのよくいる劣悪貴族みたいに

魔法の力を過信していたら凄腕の平民にやられてしまったなんていう結果を招きかねない。

いや、ここまでチートな能力を持っておきながら何を臆病なと思うかもしれないが

それでも準備できる物は準備しておきたいのだ。

基本リフレク、プロテス、ヘイストの3つをかけておけば大概は何とかなりそうではあるが…

また、魔法以外で気になっていた道具とモンスターの召喚についてだが

いくらチートといえどもやはり制限があったようなのだ。

魔法に関してはフレアだろうとメテオだろうと何回使ってもほとんど支障は見られなかったのだが

(これだけでも十分すぎるチート能力ではあるが…)

道具やモンスターの召喚には結構な体力…こっちのメイジという精神力的な物を結構消費する。

ポーションや毒消し、ダガーやブロードソード程度の初歩的な道具なら問題無いのだが

これがエリクサーやディフェンダーなど高ランクな物になってくると限界個数が出てくる。

まあそれでもエリクサーなら1日に10個程度までなら作れるのだが。

アルテマウェポンとかグラウンドアーマー、源氏シリーズなどの

最高級品とも言える存在は1個作るだけでもフラフラになってしまう。

作れるだけでも十分問題な気はするのだが…それはまあ置いておく。ジョゼフが個人的に特に気に入った品はグラントロワに保管され残りは全部この屋敷の地下にある薬品庫やら武器庫やらにまとめて保管してある。

といってもポーシヨンやその他の道具類はともかく、武器なんてほぼ使わないだろうからどうしよう的な気もしているのだが…

(後々サイトやアニエスとかに会ったら渡しちゃおうかな……)

なんて事を考えつつ俺は背後の窓を開けて外の景色を眺める。眼下の広い野原にはナツツイーターやらウェアラットやらの小さい物の群れもいれば鉄巨人やベヒーモスなどの強力な奴も少数いたりする。

特に体力消費を一番感じたのはモンスターの召喚であった。ゴブリンクラスのモンスターでもそれなりの数を召喚していると限界が見えてくるしベヒーモスや鉄巨人、モルボルなんかはアルテマウェポンなどと同じく一匹出しただけでも回復までに結構な時間を要していた。

後、召喚の際に頭でイメージする事によってある程度の性格操作が出来るのが判明した。

最初に特に考えずに召喚したゴブリンに襲われそうになったのも今

ではいい…思い出ではないな。

次に召喚した時に大人しくなるように念じたら本当にその通りになったのは驚いたが。

でもそれをやると余計に体力を消費するように設定されているらしい…

ジヨゼフにしきりに頼まれて、自分に従順なバハムートを召喚した時なんか

(幻想伝を読んで一番に見てみたかった生物なんだとか)

召喚直後に気絶しちゃったし…目覚めたらバハムートの周りで子供みたいにおおはしゃぎするジヨゼフというレアな光景は見れたが…

ともあれ無節操に道具やモンスターを召喚するのは危険である。この二ヶ月でわかっただけでも十分な収穫である。

というかモンスターは召喚しすぎると世話が追いつかないという問題が…

みんな大人しいし勝手に餌はとってくるのでそこまで大変でもないのだけど…

そんな事を考えて外を眺めていると、遠くの方から大きなシルエツトがこちらに近づいてきて

そして一匹の巨大な赤竜が窓の前にやってくる。

「…呼び出しね、すぐ行く」

それが何を意味するかがすぐにわかって俺は赤竜に乗り込む。

この赤竜もジョゼフのお気に入りなのだが

あるうことかジョゼフはこいつを俺との連絡役代わりになりたいと言ってきたわけで。

物騒な事に使われるよりは全然いいからすんなりOKしたんだが
よくよく考えてみれば結構凄くないか？ 竜族を個人専用の連絡役代
わりにするなど…

というよりあれは本当にジョゼフなのか？ とたまに思う。

魔法にするモンスターにしる道具にしる、何を見せても子供みたい
におおはしやぎ

王の威厳なんかとは程遠い反応を多々示している。
いや…それはそれで面白いからまあいいんだけど。

*

グラントロワ宮殿、ジョゼフの自室。

赤竜にここまで運んでもらった後、俺は使用人の案内でジョゼフの下へとやってくる。

丸テーブルを境に真剣な表情で向かい合って何をしているのかというところ……

「……セイム、加えてコンボ……これで俺の勝ちですね」

「なに！？……ぐぬぬぬぬ……よもやこのような手札がまだ残っていたとは……」

ジョゼフが子供じみた悔しげな顔で呟いた。

……今俺はFF8でお馴染みのカードゲーム、トリプルトライアドをやっていた。

でもまさかこんな娯楽品までFFの道具として召喚出来るとは思っていなかった。

ジョゼフはこれを斬新な遊びとしていたく気に入って、やたらと俺との対局を申し込んでいた。

グラントロワに来たのもジョゼフのカードの相手をするのが目的だったりする。

ジョゼフはよっぽど気に入ったのかこのトリプルトライアドをガリア中に広めていた。

だからガリア貴族の間では多少の知名度が出始めているんだとか。

とはいえこの手の娯楽には滅法強いジョゼフ……

まだ二ヶ月程度だというのに今回勝てたのも結構な僅差だった。

正直昔FF8でしこたまカードにはまっていた経験が無かったら負けていた……いやマジで。

「……おお！もうこんな時間か！！」

ジョゼフはふと時計を確認してそう言う。

よく見れば宮殿に来てからもう2時間も経過している。

その間ずっと時間を忘れてトリプルトライアド……ちよっとやりすぎ

たかなあ…

「マスターも大分腕を上げました…驚きです」

「おおそうか！お前にそう言ってもらえるとありがたい！

やはりお前と一緒に娯楽に興ずるのは何物にも代えがたい時間だな
！！」

相変わらずこんな事を言っている。本当どれだけFF世界に憧れて
いたんだろうか。

でもこのジョゼフは結構好きだからいいんだけど…

因みに今いるジョゼフの自室は一種の物置みたいになってしまっ
ていたりする。

エクスカリバーやセイブザクインといった名剣や

フェニックスの尾やラストエリクサーといったこちらでは貴重な薬
品の数々

モルボルの触手やバジリスクの爪といったよくわからない品や

ギサールの野菜の山盛りなどの物品も置いてある。

後、部屋の扉の前を2体の鉄巨人が護衛代わりに守っていたり…

とにかくいろんな物を手当たり次第にねだって来るので最初は本
当に大変だった。

今は大分落ち着いてるみたいだけど。

「トオルよ、どうだハルケギニアでの生活は？」

「とてもいいですよ…自然は豊かだし空気は澄んでるし…」

これは結構マジな感想だった。現代日本と違って科学の概念が無い
に等しいハルケギニアは

環境汚染？何それおいしいの？な状態なわけなので

空気は綺麗だし、水も澄んでいるし、とても居心地が良かったのだ。
ただ、逆を言えば電気もガスも水道も無いのでその点では非常に苦

労したが…

なのでその辺をファイアやらウォーターやらで賄うというチート能力の無駄遣いまでしたし…

ジョゼフからは貴族の称号を得て使用人でもつけてみてはと薦められたりもしたが

それはお断りしておいた。俺はジョゼフのバックアップだけでも十分だし

下手に貴族になったりしたら領地経営やら作法やらの面倒事がついてまわる。

俺はジョゼフの下で彼のご機嫌を伺いながらのびのびやっていくという

そういうスタンスで十分満足していたから。

でもってそろそろ準備も整いつつあるので、やはりここハルケギニアに来たからには

原作介入というのをやってみたいと思うわけで。

ジョゼフの性格が大分違うからどの程度まで影響しているのかは知らなかったが

歴史の修正力かなんかなのか、レコンキスタは存在していた。

じゃあ一体誰がクロムウエルにアンドバリの指輪渡したんだよ…と別の疑問が浮かんだりしたが。

そういうわけで俺はジョゼフに対して切り出す。

「マスター… 1つお願いがあるのですが」

「おお何だ？なんでも言ってみる」

「この国にはガリア北花壇騎士団というのがございますよね？」

「ああそうだが…」

ガリア花壇騎士団

ガリアには正式に南薔薇花壇騎士団、東百合花壇騎士団、西花壇騎士団の3つが存在している。

そして残る北花壇の騎士団は王家の汚れ仕事を秘密裏に片付ける暗部として存在する。

「恐れながら俺を…その北花壇騎士団に入れて欲しいのですが？」

「なんとトオルよ！？始祖の分身であるお前が汚れ仕事を引き受けるとな!？」

「はい…いくら始祖の分身のルーンにより

あらゆる魔法や召喚を使えるとはいえ俺は1人の非力な人間にすぎません

ましてや俺の故郷は戦乱とは無縁の平和な国…俺には実戦経験が皆無なのです

なので…北花壇騎士団に所属し、実戦の空気というのを学ばせていただきたい…」

これもまたマジなお願い。召喚した魔物相手に魔法の実験や鍛錬とかは何回かやってはいたが

やはりそれも自分の敷地内という安全な場所での話である。

元の世界に帰らないつもりは…無いというわけではないが

それでもやはりゼロ魔に原作介入をする以上、戦闘は避けられなくなる。

北花壇騎士団での任務を経て、それに少しでも耐性をつけておきたかった。

存在が秘密裏な北花壇ならば他の騎士団と違って俺の名前が露見する事はなく

面倒事にも巻き込まれないだろうし…

「ククク……クハハハハ！いいだろうトオルよ！やはりお前は面白い！」

それほどの力を持っておきながら非力な人間というか！？
よからう！！すぐにイザベラを通じて取り計らってやる！」

「ありがとうございますマスター……」

高らかに笑うジヨゼフを前に、俺は右手を前に出して深々とお辞儀をする。

……まあ本当の目的がもう一つあったりもするんだけどね……

*

グラントロワより少し離れた、ちょうど俺の屋敷の真反対に位置する薄桃色の小宮殿プチロワ

「父上も何をお考えなのか私にはサツパリだわ！あんたみたいな平民を

北花壇警護騎士団に寄越すなんて……」

「……………」

膝をつく俺の前には椅子に座るつり目の女性・イザベラがいる。どうやらマスター…もといジョゼフの通達がよっぽと気にいらぬらしい。

まあ仕方ないといえば仕方ないんだろうけど…

外面的にはジョゼフの客人とはいえ貴族崩れの一平民にすぎない俺が(という設定にしている)

花壇騎士団の団員になるというのだから…

でも何というか…本当に物凄いヒステリーな雰囲気だ。オイ…下手をすればルイズ以上に傲慢かもしれない…

「貴族崩れだかお父様の大切な客人だかは知らないけど…

北花壇騎士団に入る以上団長の私にはしっかり従ってもらおう? いわね零号!」

「御意…」

無能王ジョゼフの使い魔にして、北花壇騎士団零号…それがこの世界での俺の役職…

とか何とか考えていたらイザベラが唐突に手をパンパンと叩いてイライラした口調で口を開く。

「ガーゴイル!!七号!!さっさと来なさい!!」

……え七号?もしかとは思いつけどもうご対面ですか?

とか思っている矢先分厚いカーテンの奥から青髪メガネの小柄な少

女が姿を現す。

そう…北花壇騎士七号…本名シャルロット・エレーヌ・オルレアン…タバサだ。

(まさか入団直後にお会いすることになるうとは…)

現れたタバサをポカンとした感じの視線で俺は見つめる。

もう1つの目的…原作のキーキャラの1人であるタバサとの接触。

それに伴う原作外伝…タバサの冒険への介入が俺の狙い。

それに関してもジョゼフにいろいろお願いして取り計らってもらったのだが…

もう既にこっちに呼ばれていたとはな…

つかつかとタバサがこちらに近寄ってくる。

そんなタバサにイザベラは手持ちのセンスを首元に向けて嫌らしい笑みを浮かべる。

「今日からこの零号があんたの仕事のパートナーだよ…」

貴族崩れとはいえ父上の大切な客人の凄腕メイジ様らしいからねえ…

精々後ろから刺されないように気をつけるんだね!!」

そう言っつてイザベラはあっはっはっつと笑う。

ちよつと待てつて…後ろから刺すとか何とも怖い事を

あんたとんだけタバサの事嫌いなんだよと…

(これが後々和解するっていうんだから驚きだよねえ…)

そんな風に考えつつ2人のやり取りを見守っているが

タバサは微動だにせず無表情を貫いている。

流石、この程度では物怖じしないらしい…
傍から見てみるととっても奇妙な光景ではあるんだが…

そんなタバサが気にいらなかったらしく、イザベラはフンと鼻息を
鳴らしてそっぽを向く。

うーん…まあとりあえず挨拶からだよね…

「よろしく」

親しげな笑みを浮かべて俺は手を差し出すが…

「……………」

ぐああ…予想通りとはいえ完全スルーはやっぱ少し心が傷つくよ…
俺がにつつきジョゼフの大切な客人とか言われてたらそりゃまあ挨拶もしたくないんだろうけど…
そんな事を考えつつ俺は苦笑いを浮かべた。

まあどの道タバサに嫌われようが気に入られようが
俺の今後に関しては関係ない問題なんだけどな。

第5話：任務その1翼人掃討（前編）

「うーん…これは本当に癒される…」

さて、冒頭から何事かと思ったかもしれないが別に何か怪しい行動をしているわけではない。

今俺は屋敷の自室の机の上で召喚したムー3匹と戯れている。

本当はチヨコボとかでも良かったんだけど個人的にムーの方が可愛かったので…

リアル世界でいうところのリスみたいなもんで、そのまんま小動物の癒しがある。

2匹肩に乗せて、もう1匹を弄って遊ぶ。

あーもう…見ているだけでも可愛いのに手で触るとじゃれてくるのはもう至福だわ。

といてもルーンの副作用で全員大人しい状態で召喚したからこそなんだがな

いきなり地下水ぶちまけてきたり自爆とかされたりしたら正直困りますので。

「にしても…いい加減何か働き口を探すべきなのかねえ…」

ムーとの戯れをやめて、俺は1人で呟く。

こっちに来てからジョゼフのバックアップで生活には苦労が無いのだが

かといってこのままおんぶに抱っこが続くのも何か嫌だ。

親のすねかじりならぬ王のすねかじり状態なのだから。

北花壇騎士の任務があるとはいえ、このまま実質的な二ト生活が続けば

人として駄目になるような気がする。

とはいえ致命的なのはやはり文字が読めない事だ…

言葉は通じるのに本当に何故と思う…ハルケギニアの七不思議。

文字が読めない奴が働くとかマジどこいってもあり得ない。

(文字の読解はその内何とかするとして…やっぱりアイテムの売買でもするべきかね…)

生憎チートなFFルーン能力でいろんな物を作り出せるのだから元手はタダだ。

ポーションやハイポーションなんかを安価な水の秘薬として売り出せば

結構な金稼ぎになるような気がする。

後はミスリル製の剣や鎧あたりも武器屋に流せばそれなりに…

ただエリクサーとか万能薬とかはやめておく。世界のバランス崩壊しかねない。

どんなに妥協してもエクスポーションあたりが限界だな。

というより異世界ファンタジーという名目では、ゼロ魔の世界って武器や薬の価値が一般的な世界と比べて結構高いような気がするんだよね

死者蘇生なんてFFはフェニックスの尾でいくらでも出来るがゼロ魔ではまずあり得ん。アンドバリは概念的にはアンデット操作だし。

ゲームとラノベの世界を比べるのが無理あるのかもしれないけ

ど…

そんな風に商人としてやっていくかの事を考えていると
机の後ろの窓に伝書梟が飛んできたので窓を開けて入れてやる。

「……………いよいよ来たか」

梟が持ってきたのは北花壇騎士団団長イザベラからの任務の指令。
俺はそれに目を通した後、すぐさま準備を始める。

地下の薬品庫からハイパーシオンを何本か取り出して…
今回の任務にエーテルとかエリクサーは必要ないか…
そんで念には念を武器庫からダガーナイフを2・3本ほど…
守りの腕輪と守りの指輪に…エルメスの靴とかもつけておくか…？

…何分実戦は初めてなので滅茶苦茶慎重になってしまっている。
前も言ったが魔法は使えど身体能力は一般ピープル
出来る限りの準備はしてから望みたいのよ本当に。

一所準備をした後それぞれの倉庫にしつかりと鍵をかける。
そして玄関から出る際に警備兵代わりに召喚した鉄巨人達に言うて
おく。

「留守は任せるから、くれぐれも地下倉庫にだけは人いれないでく
れよ?」

鉄巨人達は俺の言葉を聞いてゆっくりと頷いた。

まあ…ハルケギニアのメイジではたとえスクウェアクラスでも鉄巨人一体潰すのにはかなりの力を労するだろうから問題は無いと思うが…

というか地下倉庫は今やハルケギニアの視点で見れば宝の山だし…

「さうと…ハルケギニアでの原作介入行ってみますか」
そして俺は屋敷の近くのモンスターの詰め所から移動用のそれを呼び出す。

*

「……………」
「……………」

ガリアの上空を2体の竜が飛んでいる。

1体はタバサの使い魔、風韻竜のシルフィード。もう1体は俺が移

動用に召喚した銀竜。

中み きではないが、文字通り「銀の龍の〜背に〜の〜って」な状態なのである。

でもこれが意外と快適。鱗もツヤツヤだし乗り心地は抜群。

これに乗ってガイア中を飛び回っていたクジャちよつと羨ましいかも…

ただ何というか予想通りと言うか…タバサは終始無口なのだ。

やっぱり俺がジョゼフと関わっているから警戒してんのかね…

タバサだけならともかくあのお喋り好きなシルフィードでさえ泣き声1つ発さないのだから。

(でもこれじゃ胃が重くてやってられんわ…)

「タバサはメイジのクラスは何？」

「……………」

「…君みたいな可愛い娘が花壇騎士やってるなんて、とっても優秀なんだろうね…」

「……………」

「ええっと…その風竜も強力そうだし…心強いよ…」
「……………」

うがあああ！何か喋れよこんちくしょう！俺がかawaiiそうな子みたではないか！

……やっぱり警戒すんのやめよう、一々気を使ったら何のためにここに来たかわからん。

楽しめる物も楽しめなくなる…少し素の口調でいかせてもらおう…

「ふう…そんな終始無口じゃコミュニケーションもままならないだろ？」

お願いだから何か喋ってくれない？シャルロットに風韻竜シルフィード？」

「きゅい！？」

おっ…ようやくシルフィードが反応を示した。

でもタバサはちよつとピクリと反応してこちらを見てくるだけ…

もうこれはアレか？俺をジョゼフの監視かなんかだと思ってるってやつか？

「お、お姉さまに指一本でも触れてみなさい！シルフィが許さないのね！」

「いやちよつと待て…何もするつもりはだな…」

「何もへつたくれもないのね！シルフィやお姉さまの事知ってるってことは

やっぱりあのイザベラあたりのスパイかなにかに決まってるのね！」

…ビンゴだ。やっぱり俺をジョゼフ側のスパイ的な物だと思ってるな。

別にタバサとシルフィード「自身」には何もするつもりはないんだけどな…

「まあまあ落ち着きなつて…これやるからさ…」

そう言つて俺は持つてきた道具袋から干し肉を取り出してシルフィードの方に投げる。

「きゅい！？いらなのねっ！どうせ毒でも入ってるんだわ！」

なに〜！あの食いしん坊のシルフィードが肉を爪で弾いただど〜！

どんだけ警戒されてんだ俺は…

「うるさい」

「いたいいたい！だつてだつてお姉さま！こいつは！」

「黙る」

「きゅい！」

タバサが持っていた杖でシルフィードの頭をぽかぽか叩いて黙らせる。

そんでもってまた沈黙…もういいやあきらめよう…

「……似ている……」

とか思っていたら唐突にタバサが俺の顔を見て呟いた。
似ているって誰にだよ…ああ、ひよっとしてサイトか？

アイツは気に入ってるからなあ…同じ現代日本人として是非ともお友達になっておきたい。

*

さて、そうこうしている間に今回の目的地エギンハイム村が見えてくる。

これを聞けばもうわかりだと思うが、今回の任務は翼人掃討ライカ櫛の森林を占領しているそいつらを退治してほしいとの事…

当然俺は全部知っているのでどうとでもなりそうな話ではあるんだが…

でも一応最初に翼人との戦闘があるから警戒するに越したことはない。

「……ってアララ？もうドンパチ始めてんの？」

眼下に映る森林で村人と思わしき集団が森の中で騒いでいる。

その視線先には羽の生えた人間…翼人の集団がいた。

「…プロテス…ヘイスト…シエル…」

俺は懐からダミーのタクト杖を取り出して呪文をかけておいた。

タバサも身構えている。さてと…いよいよ開始だな。

「銀竜、ツイスターを」

銀竜が一声鳴いてその口から竜巻を吐き出して翼人達を吹き飛ばす。それを合図にするかのようにタバサがシルフィードから飛び降りる。俺？銀竜と一緒に降下します…くそっ…俺の記憶にはFFで浮遊の呪文なんて見当たらん…

一度レビテトで試したことがあるんだが…すっかり急降下したしな！！

飛び降りても大丈夫な高度まできてみれば

「枯れし刃葉は契約に基づき水に代わる“力”を得て刃と化す」
つてちよつと待て！木の葉を刃に仕立てて村人殺す気満々ではないか！

ツイスターで結構な数ふつ飛ばしてたと思っただけ…

ゴオオオオオオ！！

おっ、タバサが呪文を唱えて木の葉の軌道を逸らしたか。

ヒュン！！

「っつてうおおおお！！？」

いきなり俺の眼前に木の葉が飛んできたが紙一重でしゃがんで回避する。

危ねえ…エルメスの靴とヘイストが無かったら当たってたぞ…

この野郎…いきなり殺す気満々ですか！…とか思ってたらまた飛んでくるし！

「ええい！トルネド！」

ついやけになつて無茶苦茶強力な魔法唱えてしまった…

翼人の何体かが木の葉と一緒に巨大な竜巻に切り裂かれて吹っ飛んでいく。

「なんなんだあのメイジ達は…」

「翼人と互角に渡り合うなんて…」

背後で村人の声が聞こえてくるが今はどうでもいい！

今度は残った翼人たちが枝を伸ばして俺達に攻撃してくる。

「ブリザラ」

こんな場所でガ系の魔法は使えない。俺はダミー杖の先から冷気を放ち枝を凍らせて動きを止める。

そして翼人たちが俺とタバサから少し距離を保って相對する。

さーて…物騒なのは嫌いだからストップでもかけて終わらせるか…

「みんなやめて！」

とか思つてたら上空で女性の声が響き渡る。

「争つてはダメ！森との契約をそんな事に使わないで！」

上空にいるのは人目を引く綺麗な女性の翼人…つまりあれがアイーシャか。

と、アイーシャの声で動きが鈍った翼人相手にタバサが杖を振ろうとしたが…

「お、お願いです！杖を収めてください…！」

側にいた青年の1人が慌ててとめに入った。つまりあれがヨシアね。そしてその後翼人たちはアイーシャに従つて飛び上がり、その姿を消していった。

*

「ふう……………」

一息吐く。まさか初っ端から攻撃に当たる寸前とは思わなんだ。本当はフレアなりアルテマなりを唱えれば一瞬でケリついたんだけどそれではダメだ。全ての事情を知っているこっちからしてみれば。

(チートがあるとはいえ…本チャンの戦場慣れは必須だから…)正直サイトがスゲーと思うわ。ガンダールヴがあるとはいえ7万人の軍人相手に真正面から突っ込んだ事もあるのだから…俺には絶対出来ん
少なくとも離れた場所でアルテマ連打する姿しか思いつかん。

「も、もしかしてお城の騎士様で？」

「ガリア花壇騎士、タバサ」

「同じくガリア花壇騎士、トオルだ」

村人に尋ねられたので一応素直に返答しておく。

そしたらその後大歓声が上がって歓迎ムード一色に

チートの補正のおかげとはいえこういうのはちょっとな…

さてそのまま一気に翼人退治を…という感じになったその時

くじくじくじくじ

「……空腹」

タバサの腹の音とその一言で遮られた。

*

俺とタバサは村人の案内で村長の屋敷に案内される。

そして座ったテーブルの上には料理の山山山…こんなにたくさん誰が食べるんだよと？

流石に申し訳ない気分になってくるぞこれは…

「そんなに気を使ってもらわなくても…」

「とんでもない！領主様に翼人退治のお願いをしてもナシのつぶて

諦めかけてたところに来てくれたんですから！」

まいったなあ…俺はマントをつけていないから貴族ではないってわかるだろうに…

現代日本人の俺にはこのメイジにビクつく平民という構図はどうにも居心地が…

って横を見てみればタバサが凄い勢いで料理を食べているし…

少しは気を使えよ…っ！かその体のどこに入るんだよ？村人も啞然としてるじゃねえか…

はあ…とりあえず腹はそんな減ってないし俺は紅茶だけでも飲んでおくか…

「ハシバミ草が好きなんで？」

ふと、肉料理の盛り合わせの葉っぱを食べたタバサを見て村人が尋ねる。

成る程…あれが噂のハシバミ草…

少ししてポウル一杯にハシバミ草が運ばれてきて、

タバサはそれをムシャムシャと口の中に頬張っていく。

うーむ…目の前でそんなに夢中で食べられるとちょっと興味が沸いてくるなあ…

そんな風に思っただけで俺はこっそりとハシバミ草を一枚、ポウルから失敬して一齧り…

「ぬがああああああ！…！！！」

「騎士様！？！」

直後に俺は後悔する…一瞬で舌の感覚が消滅するどころか頭痛までしてきたぞ!?
これ毒草なんじゃないか?こんなのを山のように食べるタバサの味
覚がわかんねえ…
村人が持つてきた水を俺はがむしゃらに飲みまくった。

*

結局ハシバミ草の苦味と格闘していた為、直後のシルフィードのやり取りには全く参加していない。

因みに銀竜には事前に村の近くで待機しているように言って干し肉を渡してある。

にしても本当に苦いなオイ…口の中にまだ不自然な感触が残ってるぞ…

「…うせわたしは…ーゴイル…この韻…失礼しちゃっ…」
…シルフィードうるさいな。隣のこっちの部屋まで響いてるじゃねーか。
…そっぴやそろそろ時間だな。というわけで俺は用意された部屋から出る。

外に出てみれば案の定、タバサの部屋の扉の前でヨシアが突っ立っている。

「何してんの？」

「騎士様！？実はその…」

「だからそんなに警戒しないでくれって…騎士つつつても俺は貴族崩れだから」

そんじよそこらの貴族よりよほど恐ろしい力とバックアップがあるが

「き、騎士様にお願いがありません…」

「まあとりあえず中で話す？」

人懐っこい笑みを浮かべて俺は言うておく、そしてタバサの部屋へと入っていく。

*

ベッドの裾にタバサが座り、俺が傍らに立つ。

「夜分に恐れ入ります…本当にその無礼とは思つのですが…」

「翼人を追っ払うのをやめてくれとか言うのか？」

答えを先に言ったらただでさえ震えていたヨシアがビクンと跳ねる。

「それはできない」

タバサがピシヤリと言い放つ。無関係の人間にはほんと容赦ねえな…
「お願いします！このとおりです！」

「ちょ、ちょっと…土下座されてもねえ…」

全部わかってるこっちの身としては心が痛んでくるぞ…

「…まあ昼間のやり取りを見てなんとなく察してたけど…つまりア
ンタ…」

と、怪しまれない感じに正解を言おうとしたら

「アイーシャ!?!」

「ヨシア…」

あらら…窓の外にアイーシャがやってくる。それを見てタバサが杖
を構えるが。

「ま、待って！彼女は危害を加えにきたわけじゃない！」

ヨシアがタバサを制した。

*

その後はまあ展開どおり、ヨシアとアイーシャが恋人どうしな事とか
種族が違うだけで争ってしまう事の悲しみとかを2人が話していく。
そして

「ごめんなさい…今日はお別れを言いに来たの…」

アイーシャが悲しげな顔をして切り出す。

「みんな話し合ったの…争うくらいなら増えなくていいって…」

「そんな！僕が皆を説得する！だから」
「でも…そちらには強力な騎士が派遣されたし…精霊の力を争いは…」

と、そこまで来てヨシアが俺達に懇願してくる。

「騎士さまお願いです！何とかお城に訴えて…」

「ああわかったわかった…お2人の事情はよくわかったよ…だから「それは無理」ってオイ！」

こいつには人を気遣うという概念が無いのか！？

思った事をズバズバ口にすぎだ…

「騎士様には心が無いのか！？命令でしか動けないならガーゴイルと同じだろ！？」

「ヨシア何を！」

「君は子供だからわからないんだ！愛する人と離れるのがどんなに辛いか…！」

「ヨシアやめて！」

「こいつらを殺せば時間は稼げる！もうこつするしか…！」

ヨシアがタバサに掴みかかって首を絞めようとしている。

まったく…ある種タバサの自業自得だが流石に止めないと…

「エアロ」

出来る限り威力を加減してヨシアに向かってつむじ風を放つ。

ヨシアは近くの壁に叩きつけられ、彼のもとにアイーシャが近寄る。

「やめて！彼を殺すなら先に私を殺して…！」

「待った待った…そんな物騒な事しないってば…」

窮地に陥った恋人のセリフのテンプレみたいな発言だなアイーシャ…

俺は近くにいるタバサをチラリと見た後2人に向き直る。

「連れが短絡的で失礼した…お2人を別れさせずに済む方法はきちんとあるから」

「…?!?!?」

その言葉に2人はおろかタバサまでも驚いたように反応する。何故に？

「要するに村人全員に翼人と人間が協力し合えるってところを見せればいいわけだろ？」

そうすれば村人の総意で翼人掃討は必要ないって任務取り消しが可能になる…」

「でも…どうやって？」

「まあ具体的に言えば…」

…とりあえず今回は原作そのままに進めておこうと思う。

ヨシアとアイーシャの気持ちはわからんでもないから。

恋人が離れ離れになりたくないってのはよくある話だし。

翼人も翼人で事情がちゃんとあるだろうしね。

俺は原作でタバサとシルフィードが使った方法をそのまま話しておいた。

それにしてもタバサと一緒にいるのがこんなに疲れるとは思わなかった…

第6話：任務その1翼人掃討（後編）

「ガーゴイルが暴れてる？」

翌朝、用意していたとおりの流れになり

俺とタバサの下に村人が報告にやって来る。

そして村長の屋敷を出てみれば……

「おなががすいたのーッ！！おなかあーッッ！！！！」

シルフィードが街のと真ん中で大暴れ。

あたりを片っ端から破壊してまわり、口から火炎を放つ。

「あ、ありやあそつちの青い騎士様のお供では……」

「黒い騎士様のお供の銀の竜もやられちまつてる！」

村人の言うとおりシルフィードの側には銀竜が倒れ伏している
当然演技なわけだが。

迷惑かけるな銀竜……帰ったらたくさん肉やるから……

「タバサどうするよ？お前のガーゴイルだぜ？」

「供のガーゴイルが暴走するなど武人として恥のきわみ」

……何故にそんな古風な口調なんだ。しかも意外とノリノリだし……

「精神集中……一呪入魂……仇敵戦滅……雪風魔法」

本当にどこの時代劇の受け売りだっけって言いたくなるような感じだな…
そっぴやこつちの世界には劇団とかオペラとかはあるんだろうか？
この任務終わったらジヨゼフに聞いてみようかな

とか考えている内にタバサが杖を構える。

「最強呪文！風棍棒！」

ただのエアハンマーです（笑）

でも村人たちからは「最強呪文！？」「何か凄そうだ！」とどよめ
き上がる。

うーん…胡散臭いとは思わんのだろうか？

タバサの放った風の塊がシルフィードに直撃する

…って計画内容じゃ当てはしない筈なんだが

「痛いっ！なんで本当に当てるの！」

シルフィード泣いてるし…でも隣のタバサは冷たいくらい無表情…

こいつ本当に使い魔に愛着あんのかよ？

表面上は冷たくても心の奥底では…なんつーベタな話なのかねえ…

（…とそんな場合じゃない…俺も演技しねーと…）

シルフィードに向けてダミーの杖を構え

ブリザドやらエアロやらを連射する。

たまたまシルフィードは空中に飛び上がる。

それを追うようにしてタバサもフライを唱えて飛び上がる。

「さっきは痛かったのー！」

シルフィードがタバサに襲いかかり、それをタバサが器用にかわす。そして地上にいる俺がタバサに向かって叫ぶ。
「タバサ気をつける！空中じゃ反撃出来ない！
上手く地上に引き寄せるんだ！」

こっちの世界じゃフライの最中には他の魔法が使えないらしい。
もとより最初から飛べない俺には関係ないが…

と、俺の声に気を取られたタバサにシルフィードのタックルが炸裂する。

「タバサ！」

そして俺が落下してきたタバサに駆け寄る。うん計画どおりだ。

「なんといいことだ：タバサがやられるとは…」

「ふ、不覚…かたじけない…」

どうでもいいがその口調は何とかなんのか？

「騎士様危ない！」

すると背後で村人が叫ぶ

俺がタバサに気を取られてる間にシルフィードが俺を攻撃する手筈だ。

俺は村人の声を聞いて背後に振り向くと、シルフィードが急降下してきた。

……ん？何か微妙ににやけてるような…

「きゅいいいいい！！！」

「！！グツハアアツ！」

腹部に強烈な頭突きを食らって俺は大きく吹き飛ばされる。

あ、あの野郎…本気でやりやがったな…

うぷっ…マズい…腹部のダメージがでかくてリースしそう…
「騎士様！」

腹部を抑えて苦しげに呻く俺を心配して村人が近寄ってくるが
ヤバいって…本当に腹が痛くてクラクラする…

生憎演技のつもりだったプロテスも唱えてないし

守りの腕輪も外してたからダメージはダイレクトだ。

正直言ってかなりキツイ…シルフィードめ…

「あのガーゴイルには弱点はないんですか？」

「足の裏に矢が刺さってる…踏んづけたみたい…あれを抜けば正常
に…ガク」

タバサが事前の打ち合わせどおりのセリフを言って気絶のフリをす
る。

「グウツ……………」

「そんな…こっちの騎士様もやられちまってる…」

「もうおしまいだ…」

だが悲しいかな。こっちは腹部のダメージが頭痛にまで発展して
リアルに気絶しそうだよ…早く先に進めてくれ…

「罰が当たったんだよ！」

と、タイミングよくヨシアが登場。

「翼人たちを追い出そうとしたから罰が当たったんだ！

わかっただろう？すむ場所を追い出されるってことが！」

「うるせえ！それとこれとは話が別だ！」

「別じゃないよ！協力しあうって選択肢もあつたはずさ！

そうすればあんなガーゴイルだってやっつけられる！」

ヨシア…演技とはいえ男らしいなあ…昨日のビクビクが嘘みたいだ。

「どうやって!」

「こつやるんだ!」

兄貴のサムの言葉に強く言い返した直後

アイーシャが茂みから現れてヨシアを抱えて飛び上がる。

そしてシルフィードと相對すると同時に

茂みから他の翼人たちが舞い上がる。

「矢を射かけて!ガーゴイルの注意を引くんだ!」

翼人の声を聞いて我にかえった村人がシルフィードに向かって矢を放つ。

翼人たちはシルフィードを幻惑するかのようにあたりを飛び回る。

「これを抜けば…!」

その隙にヨシアとアイーシャがシルフィードの足下に接近
足の裏に刺さっている矢を引き抜いた。

「…あれ?わたし…いままで何してたのかしら!」

シルフィードが暴走をやめて超棒読みで言った。

それと同時に村人たちから歓声が上がった。

*

三日後…

原作の流れどおりにヨシアとアイーシャの結婚式が行われている。幸せそうな笑顔を浮かべる2人を村人も翼人達も祝福している。

うんうん… やっぱり結婚式ってのは見ていて微笑ましいねえ…

アイーシャさん綺麗だしヨシアもハンサムだし…

何より人間と翼人の種族を超えた愛という

ファンタジーにはありがちだけど感動的なシチュエーションだ。

これを見ただけでも今回の任務を引き受けた甲斐があったというものだ

だがシルフィードの一撃は本当に予想外だった…

いくら嫌われてるからってあれは無いだろ？

村長の屋敷に戻った後、こっそり自分にケアルガを唱えておいたので腹部のダメージはすぐに治ったから良かったが…

回復魔法の初使用が味方からの攻撃とかちよつと泣けるんですが…

「ありがとうございますました騎士様」

すると、俺とタバサの下にヨシアの兄のサムがやってくる。

「いやいや…俺らは特に何もしてませんよ

ああしたいって言ったのはヨシアさんです」

「いえ…今回筋書きを仕組んだのは騎士様でしょう？」

ヨシアはいい奴だが頭はよくねえ。こんな筋書きは立てられねえ」

いや…といつても俺も今回は原作の流れに従っただけなんですけど

ね…

ちよつと気まずい…

「俺だつて弟は可愛いです。だが俺はいずれ村を背負つ…
心を鬼にしなきゃいけない時もあります

ま、騎士様と同じでさ！」

そういつてサムは朗らかに笑う。

「…弟さんを大切にしてくださいね」

「へい！」

その顔が何かこそばゆくて俺もつられて笑った。

*

翼人退治は村人と翼人の和解という形で幕を閉じ、俺とタバサは帰路につく。

「結婚式きれいだつたのね！お姉様も誰かと結婚なさればいいのに！
そしたらシルフィーも着飾るのね！花でいっぱい飾るのね！

ああ、まずは恋人なのね！恋人つてすてきなのね。

お姉様も早くお作りになつてなのね！

こいびと！こいびと！きゅいきゅい！」

銀竜に跨る俺の隣でシルフィードが興奮ぎみにまくし立てている。

「でもお前の計画があんなに上手くいくとは思わなかったのね
ジヨゼフの手先の癖にあんな作戦考えるなんてちよつとは見直した
のね」

「手先つて…だから俺はそんなじゃねーのに…」

ここまで疑われてるともうあきらめがつくな…

するとしばらくした後、タバサが唐突に俺の方を見て呟く。

「あなたは何者？」

「何者つて…ガリア北花壇騎士零号のトオルだけど…」
急に何を聞き出すんだ？

「…あなたの呪文の詠唱…常識では考えられない速さ
それに普通のメイジの魔法と細かい部分が違う」

…やっぱり気づかれたか。何せこのFFルーンの呪文は
ワンスペルで魔法が使えるからなあ…疑われても無理はないか…け
ど…

「スクウェアメイジだからね俺は…長いこと魔法の研究もしてたし
他と違いがあるのはよく言われたよ」

煙に巻くように俺は答えておく

タバサには俺の正体を教える理由も意味もない。

タバサはその一言であきらめたのかまた無言に…

「…あなた達にはこれ以上…何も渡さない」

とか思ってたらいきなりこんな事を口走る。

やれやれ…随分と嫌われているもんだよ…

まあ何度も言うようにタバサに嫌われようがどうでもいい
彼女の母親を治すつもりもサラサラ無いしな。

何故かって？

グラントロワ宮殿

月明かりの下で俺はジョゼフとカードゲームを行っている。

「報告は聞いたぞトオルよ？何でも翼人達を上手く説得して村人たちと和解させたそうではないか？

流石は始祖の分身だな！異種族と手を取り合わせるとは！」

「たまたま上手くいっただけです。運が良かったんですよ」

「クハハハ！相変わらずの謙遜ぶりだな！

やはりお前は面白い！いつも俺の予想外の行動を見せてくれる！」

ジョゼフは心底気分良さそうに豪快に笑う。

本当にこのジョゼフは愉快ないい人だよ。

今日も帰ってきたらバハムート相手に楽しそうに虚無魔法の練習してたし…

「その功績を称えてお前にはシュヴァリエの爵位申請をしておいた」

「…ええっ!？」

俺は思わず手に持っていたカードを落としてしまった。

シュヴァリエってそりゃあつまり…

「マスター…俺は貴族になるつもりは…」

「謙遜もそこまでいくと寧ろ哀れになつてくるぞトオルよ？」

なに、シュヴァリエとはいえ名誉勲章みたいなものだ

お前ほどの力の持ち主が貴族崩れの平民では俺も付き合いつらいからな！

王宮のうるさい愚か者どもの盾代わりか何かだと思っておけ！

お前ほどの実力者にはシュヴァリエでもちっぽけなくらいだからな

「！」
「はあ…」

うーん参った…そこまで気を使われると断るわけにもいかない…
それにジョゼフの言うとおり平民である俺が
何度もジョゼフに会ってるのを快く思っていない奴らは確かにいるの
だ。

ジョゼフの立場を考えるとこれは受けとくべきかな…
それに…今後アイテムの販売とかをする上でも使えるかもしれない。
まあシュヴァリエなどはいえ領地を授かったりするわけではないし
あの屋敷でいつもどおり暮らせばいいわけだしな

「…わかりました。マスターのお心遣いに感謝します」
「おうとも！これからも派手に暴れてくれトオルよ！」

俺は片膝をついてジョゼフに礼を言った。

*

基本的に俺は自分が気にかけた人物以外には
理由もなく余計な気を使うつもりはない

貴族に理不尽な虐げを受けている平民とか
原作で救いのない悲惨な末路を遂げた人物とか
そういうのは親切心で助けたりしたいが…

現状感謝している人物はこの世界のジョゼフ
原作で気に入っていたのはサイトとギーシュ、シエスタくらいかな？
ルイズは寧ろ嫌いな部類に入る。

そしてタバサはどちらでもない。好きでも嫌いでもないのだ。
母親の事は可愛いそうとは思えど、気にかけるまでには至らない。

この2ヶ月ちよいでわかったのだが、このガリア国内では
未だに亡きシャルルを支持する声が圧倒的に多いのだ。

ジョゼフは俺にFFルーンの力を与えてくれて
しかもご都合主義な改変もあつて愉快的な人物となっており
使い魔である俺に様々な施しをしてくれている
現状ではこっちの世界で一番信頼のおける人物だ

俺にとってタバサは好きでも嫌いでもない基本どうでもいい人物で

タバサは俺をジョゼフ派の敵だと認識している
タバサの母親はタバサ筆頭のシャルル派の暴動を抑える楔みたいな
ものだ

その彼女の病気を治してやるというのはつまり
シャルル派を抑える楔を消すようなものだ。

それが無くなればシャルル派が一斉にジョゼフに反旗を翻す。

こちらとしてはどうでもいい人物、向こうにとって俺は敵認識
そんなタバサに気を使った結果、今現在一番感謝している人間に
迷惑をかける事になるなんてアホすぎる。

ジョゼフの罪ではあるが異世界人の俺にはそんなの関係ない。
ガリア王家の内情に首を突っ込む理由なんて無いのだ。

俺はジョゼフの使い魔として彼を満足させつつ
好きな原作場面を体験し気が向いたら改変を行い
FFルーンの力で様々な益を生み出していき
このハルケギニアでの生活を満喫していく。
今の俺の優先順位はタバサよりジョゼフが上
だからタバサ本人に何かをするつもりはない。

彼女自身原作では結局復讐を忘れてサイトのハーレム要員と化すし
母親の病気もいずれは治っていたのだ。
決して悲惨な末路を辿るわけではない

まあジョゼフ改変で他の人物が暴走して
本当にタバサがヤバかったりしたら助けるかもしれないが…
ともあれ現状では何かをするつもりは無い。
ただそれだけだ。

第7話：商売、見せ物、新しい住人

こんにちは、斎賀徹改めトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。前回の翼人掃討の褒章としてシュヴァリエの爵位を受け取りました。本当は貴族にはなるつもりなど無かったのだが

マスターであるジョゼフの折角の御好意なので、無碍にするわけにもいかない。

そんなわけで開始早々に貴族になってしまったわけで。

といってもシュヴァリエは爵位的には一番格下だし

領地が与えられたわけでもない。つまるところ現在は今までの生活とそんなに変わらないわけで。

「む…まさかこれほどとは…」

さて、俺はいつもどおり屋敷の自室にいるわけなんだが

机の上にポジションが数本、その傍らには小規模なエキュー金貨の山そしてリュティスにある秘薬屋からの追加注文の申請書類だ。

（物は試しにと売り出したはいいいんだが…こんなに売れるのは予想外だぞオイ…）

初任務終了後、俺はFF世界のアイテムを売り出す計画を練った。といってもこっちの世界ではほとんど無名の俺が

いきなり何でもかんでも売り出そうというのは流石に無謀すぎるとりあえず外面的には水・風に特に精通したスクウェアメイズという事にしてあるので

無難にポーシヨンとハイポーシヨンを新種の水の秘薬として売ってみる事にしたのだ。

*

城の兵士にジヨゼフを通して実験として無料でサンプルを配布したのだが

ポーションでもちよつとした切り傷やら打撲程度なら一瞬で治療できハイポーションだと骨折やら血管の破裂といった重傷でもピタリと治せるといふ結果がきた。

兵士達はこれが大量生産出来る事に心底驚いていたらしい。

これならいけるかなと思つてガリア首都リュティスの秘薬屋にジヨゼフを通して頼み（何かジヨゼフに頼りつきり…）販売してみることにしたのだ。

ただ、こつちの秘薬の代金というのをどうも読み間違えたらしい。ハルケギニアでは水の秘薬というのは、ドットクラスのそれでも高級な品らしく

平民がおいそれと購入出来る代物ではないのだ。

城の兵士の評判では、ただのポーションでも水のラインメイジハイポーションではトライアングルクラスの秘薬に匹敵するんだとか。

こちららFFルーン的能力で元手はゼロ。ポーションやハイポーション程度なら
道具召喚のリスクはほとんど無くほぼ無限に作り出せるので
とりあえずポーションは5エキュー、ハイポーションを10エキュー
程度で譲り渡した。
するとどういいうわけか口コミであつという間に知れ渡ってしまった
らしく

国王直属のスクウェアメイジが制作したというお墨付きもあつてか
最初に渡した試供品が3日程度で完売してしまったそうだ…

マジかよ…と思って実際にその秘薬屋に足を運んでいったら
店主が物凄い歓迎ムードで出迎えてくれたのを覚えている。

「試供品だったのにそんなにすぐ売れたんですか？」

「へい。あの秘薬はラインやトライアングルクラスの効果があるつ
てーのに

それがドットと同じかそれ以下の価値で売っていると評判になりや
してね…

あつという間に売れちまつたんでさあ！」

店主は物凄いホクホク顔で話してくれた。

記憶がおぼろげではあるが、1エキューって確か日本円で1万ちょ
いはいつた気がするんだが…

というよりFF世界の通貨「ギル」がどの程度の価値があるのかさ
っぱりなので

ポーションに本来どの程度の価値があるのかはさっぱりだったのだが
それでも高すぎるかな？って思ってたんだぞこっちは？

(ファンタジーの常識を少し舐めていたかもしれん…)

そんな風に考えつつも俺は店主と今後の注文について話をした後、その場を去っていったのだ。

「じゃあとりあえず…今後も販売の方よろしく…」

「へい！これからもご贖に！サイガー様ならいつでも大歓迎でさあ！」

*

そこで秘薬屋としばらくポーション・ハイポーションの商売取引をしている間に

あれよあれよの間に売り上げが伸びていき、注文がどんどん増えていった結果

俺の下に結構な量の売上金が入ってきたのだ

貴族は勿論、裕福な平民にも怪我の即時治療によく効く秘薬として大好評

ガリア王国内では新種の水の秘薬ポーション…並びにその制作者たるトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーの名前がチラホラと広まりつつあった。

商売をする上では名が広まるのは良い事かもしれないが
まさかポーシヨン1つでこれほどの効果があるのは俺にも予想外だ…

（売り出すアイテムはちゃんと考えないと…ろくでもない結果を招
きかねないかもな…）

とりあえず今後商売をする上での参考になったからよしとする。
売上金で食料品やら雑貨やらも買い込めそうだしな。

とか色々考えていると窓の外に赤竜がやってくる
いつものジヨゼフの呼び出しだ。

「またカードゲームのお誘いかな…」

俺は窓から直接赤竜に跨ってジヨゼフの下へ向かう。

*

しかし連れてこられたのはいつものグラントロワ宮殿ではなく
そこから大分離れた人気の無いだっ広い平原だった。

そして到着に近づくにつれてドカーンだのバコーンだの騒音が響き
巨大な2つのシルエットが視界に入る。

「おお来たかトルよ！これは面白い見せ物だと思ってるな！」

近くにいたジョゼフはそう言うて実に満足げな笑いを浮かべたが…
いやいや…何してはるんですかという気分だ。

騒音の原因は2体の青い巨竜の争いだった。

片方はジョゼフもお気に入りのバハムート。

そしてもう片方は2日前召喚したばかりの
バハムートに酷似した竜、ティアマトだ。

(ティアマトではない。念の為)

互いに爪を打ち合い頭突きをかまし合い

メガフレアの白い閃光とダークフレアの黒炎が辺りを破壊する。

何ですかね怪獣大決戦みたいなこの状況は？

「見せ物ってマスター…俺の召喚した竜で何やってんですか？」

「なに、これほど立派な竜をただ眺めてるのはつまらんからな！

ちよつと同じようなのが2体で丁度良いから

是非とも戦っている姿を見てみたかったのだ！」

むう…確かにそれはわからんでもないが…

「しかしマスター…あんまり派手にやらせても…

この平原既に大変な惨事になってますし…」

実際2体が戦っている平原は至る所に穴が空き、灰になってる場所
もある

「心配は無い！お前が召喚したから生憎命令には素直だからなあ！

ここの平原は俺の私有地だからいくら壊れようが問題ないしな！

それにこいつらも運動不足で丁度良かったという反応をしてたぞ？」

マジすか…最強の召喚獣が随分とまた人間臭い理由で…
召喚時の設定を間違えたかな…それはそれでなんか親近感が持てる
が。

（でも実際並みの三流映画なんぞよりよほど凄い大スケールだし…
俺ももう少し見ておこうかな…）

結局途中から俺も大ざっぱな思考になつてきて
しばらく2体の戦いを観戦していたのだった。

ご都合主義な改変はあれどころいうよくわからん事をするあたり
やっぱり根本は原作のジョゼフなんだな…

*

さてバハムートとティアマトの怪獣大決戦を十分楽しんだ後

（俺とジョゼフが一声かけたら一瞬で猫みたいに大人しくなった
もう本当に竜の威厳もへつたくれも無かった…）

一旦屋敷に戻った後に銀竜に乗ってガリア首都リュティスに買い物
に来ていた。

今までそういうのはジョゼフ王の臍齧り状態で全部支給してもらっ
てたが

ポーシヨンの商売を始めたのでその売上金もあることだし

いい加減それくらいは自分で養わなければいかん

街の外に銀竜を待機させて、エキユー金貨の入った布袋片手に食料やら雑貨やらを物色していく。

(にしてもまんま映画とかでよく見る中世ヨーロッパの街並みだなあ…)

両サイドにレンガ造りの建物が並び、あちこちに露店が開かれている。

通りは買い物客で賑わっていてそれなりに混雑している。

流石にハルケギニア内でもトップクラスの強国の首都だけあってファンタジー世界とはいえ大概の物は揃う。

ただまたしても現代日本人故の問題が発生したりもした。

ポーションの一件でも触れたがこっちの金銭感覚はさっぱりだったので

支払いは全部エキユー金貨になるわけである。

食料なんて下手な高級品でもないかぎりド工硬貨で十分払えるのにそういうのも手当たり次第にエキユー支払い。

店員からの「どこの成金？」と言わんばかりの視線が正直辛かった…

「さてと…こんなもんかな…」

両腕に食料やら羽根ペンやら替えの服やらが入った紙袋を抱えながら俺は店を後にする。因みに腰の布袋はエキユー支払いのお釣りで重量は来た時よりも重くなっていたりする。

すると、通りの一画に人だかりが出来ているのを発見する。
何だろぅとばかりに野次馬になってそこに近寄る

「なっ…何これ？」

人だかりを掻き分けて中心にたどり着いた先に見えた光景…

ボロ雑巾みたいな布を羽織っただけの十歳位の金髪ショートの蒼眼で
頭に大きな黒いリボンをつけた少女が

けばけばしい服を纏った人相の悪い貴族の前で震えていたのだ。

貴族の方は何やらヒステリックに鞭を振るって涙目の少女を痛めつ
ける

少女は抵抗する術もなくされるがまだ。

どういう状況よこれ？俺は周りの野次馬に尋ねる

「はあ…何でもあの女の子があっちの貴族様の足を踏んじまったら
しく…」

それで貴族様が怒ってるみたいですよ…」

…

…

……はあ？

「エアロ！」

反射的に俺はダミー杖を取り出してケバ貴族に向かって風を放つ。それに吹かれてケバ貴族は鞭を手放す。

「貴様！何のつもりだ！？」

「そりゃこつちのセリフだつーの？」

こんな小さい少女相手に何してんのオッサン？」

「黙れ！その小娘は貴族である私の足を踏んだのだぞ！

私は無礼な平民にしつけをしたままだ！」

…聞いてて頭痛がガンガンするわ。大人気ないにも程がある。

これがハルケギニアによくある平民を平気でいたぶる貴族の図か…生で見るのは初めてだけど本当に胸糞悪い。

足を踏まれた程度でこんなボロボロの女の子相手に鞭振るうとか…

「あんたみたいな腐った貴族がいるから国が腐敗するんだろうねえ…」

鼻で笑って吐き捨ててやったらケバ貴族の顔がみるみるうちに赤くなる。

「貴様！どこの田舎貴族か知らんがもう許さんぞ！その平民諸とも始末してくれるわ！」

…はいそうですか。ご立派なこつた。

久しぶりに本気で頭きたわ。あんまり人間相手にルーンの力を本気で振るいたくはないんだがこつというのは話が別だ。

ほつといたらまた俺の後ろでポカンとしている少女と同じような被害者がかねない。

二度と同じような事したくなくなるようにしてくれるわあ！

「リフレク」

一声呟いてリフレクを展開。しかしそんなのわからないケバ貴族は俺に向かって杖を振るいエアハンマーを放つ。

そしたら見事にカウンター。風の塊はケバ貴族に直撃して吹っ飛ぶ。

野次馬も少女もカウンターを食らったケバ貴族も何が起こったか全くわからないといった表情だ。

「サイレス」

俺がもう一声呟くとケバ貴族は途端に口元を押さえて挙動不審にはたつく

当然と言えば当然か。声が出せなくなるんだからハルケギニアの系統魔法にそんなの無いのだから

「ん？始末するんじゃないの？」

冷たい視線で言い捨ててやったらケバ貴族は途端に顔を青ざめさせる。

「サンダガ」

そして仕上げにケバ貴族の眼前に巨大な雷を直撃させる。

野次馬もこれにはびっくり。ケバ貴族は顔が真っ青だ。

「次同じような事したら…わかってるよね？」

俺の言葉に涙目で首をブンブン振って答える。

このくらいでいいかな…というかこれ以上やったらこっちが大人げない。

「エスナ」

治療魔法を唱えてケバ貴族の沈黙を解除する。

「ヒッ…ヒアアア!!」

なんとも情けない悲鳴を上げて脇目も振らずに逃げ出した。
やれやれ…これでとりあえずは大丈夫かな。

「大丈夫？怖かっただろ？もう安心だ」

その後俺は少女の前にかがみ込んで優しく微笑んでみせた。

「……………ううっ……………ひぐっ…えうっ……………」

緊張状態から解放された少女はひしひしと泣き始めた。

*

「……………あの…本当にありがとうございました」

「気にしないで…あんな話聞かされたら放っておけないっての…」

さて時刻は夜遅く。今俺は件の少女と一緒に屋敷に帰ってきている。

少女の名前はリア、何でも元貴族の令嬢だったらしいんだが
父親が領地経営に失敗して財政破綻し
子供を養えなくなったという事で彼女は捨てられてしまったそうなの
だ。

それで今まで街の近辺で物乞いしながら生き延びてきてたらしい…

もう本当に聞いてて可哀想すぎて放っておけなかった。

すぐに彼女用の服を調達してから屋敷に連れてきてあげたのだ。

今は俺が購入した服に身を包んでいるが

貴族にやられたミミズ腫れがなんとも痛々しい。

俺はリアにエクスポーションを手渡してやる。

「とりあえずそれを飲んでおいて。よく効く水の秘薬だから」

「そ、そんな…私みたいな者に水の秘薬だなんて…」

「いいからいいから」

リアはおずおずとエクスポーションを飲み始める
すると体中の傷があつという間に消えていった。

「す、凄い!」

リアはびっくりして飛び跳ねる。

流星はエクスポーションだわ。致命傷でも一瞬で治療出来るのだから。

「さて、ケガも治った事だし夕食にしようか？」

「あ、あの！本当にありがとうございます！

きよ、今日のこの御恩は決して忘れません!」

「気にしなくていいって。俺の勝手なんだから」

感謝感激な状態のリアにやんわりと答える。

今住んでる屋敷は見張りの鉄巨人とかもいるとはいえ人1人増えるくらいなら問題は無い。

秘薬屋とのポジション取引での稼ぎもあるし

1人で住むのはちょっと静かすぎるので丁度良いくらいなのだ。ましてやあんな話聞かされて放っておくなんて俺には無理だ。

あのまま見過ごしたらまた他の貴族に絡まれるか

最悪人身売買なんかにつつかかる可能性もある。

そんなくらいなら俺が引き取った方がいいと思っただ。

この屋敷に住ませるといっのはつまり俺の秘密をバラすという事だが

まあこんな十歳程度の少女に野心などあるまい。

チョコボやムーと一緒に遊ばせたら絵になりそうなくらいなのだから。

俺が元の世界に帰る時はどうするかなんて問題もあるがそれはその時考えればいい。今は1つの命を救えたという自己満足かもしれないがその結果だけで十分だ。

「じゃあ行くこうかリア？」

「はい！サイガー様！」

俺の呼びかけにリアは元気いっばいに答えた。

サイガー様…やっぱりこういっ呼ばれ方はまだちょっと慣れない…

屋敷の住人が1人増えつつも、俺のハルケギニアでの1日が
今日もまた過ぎていく…

第8話：チヨコボ？ミスリル？そんな些細な事より奴だ！

「あはは！くすぐつたいよ〜」

可愛らしい笑顔を浮かべながら黄色い鳥と戯れる美少女
……もうね、女の子は笑顔が一番ってこれマジだと思っわ。

冒頭からまたしてもわけわからん事を言っつて失礼
トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

前回助けた少女・リアが俺の召喚したチヨコボと遊んでるわけであ
つて。

もうアレだ。可愛いくてしゃあないんだよ。

因みにリアには俺の能力の事は包み隠さず話してある。
そしたら大して驚きもしないで
「やっぱりサイガー様って不思議な方なんですわ〜」
と、ほのぼのとした感じに言っつてきたわけ。

何で驚かないの？つて尋ねてみたんだが
「私のような貴族崩れの平民を何の理由もなく
助けてくれただけで十分不思議でしたから」
なんて言われてしまったんだよな…正直泣ける…

曰く、貴族が絶対的な権力を握っているこのハルケギニアで
貴族絡みのゴタゴタに首を突っ込む輩は滅多に存在しないらしい。

たといいたとしても必ずといっていいほど裏があるのが常なんだとか。
俺みたいに単なる善意で助けて、しかも引き取ったりするような人間は
まず存在しないらしいのだ。

そりゃあまあ…ラノベ世界のトリップなんて普通あり得んのだから
世界の違いと言ってしまえばそれまでだ。

俺だってFFルーンの力が無かったら多分助けてないと……思うし…

(…ってやめやめ…んなネガティブに考えてもじゃあない。)

どうもまだふつきれない部分もあるらしい。

だがこの世界にいる以上深く考えるのは損だ。

もっと前向きに楽しまないと……それこそマスターであるジョゼフ
みたいに…

チョコボに跨りながらリアがこちらにやってくる

「でもサイガー様、このチョコボ…でしたっけ？」

こんなにいっぱい呼び出して何するんですか？」

実際今俺たちがいるだだっ広い平原には10羽以上のチョコボがいる。
る。

近くには専用の宿舎まで建てたのだ。

俺はリアの顔を真っ直ぐ見据えて答える。

「…チヨコボレースだ」

「チヨコボレース？」

「そつだ。単純に言えばこいつらを走らせて競わせる。その順位を当てる…って感じの娯楽を考えてる」

ぶつちやけた話こつちで言う所の競馬だな。

というかチヨコボレース自体はFFにもあつたし

成金貴族に上手く宣伝すれば結構な儲けにもなるだろう。

何より…俺がやってみたかつたしチヨコボレース…

レース場とファームの土地はポーション販売の金で確保してるしな！

「へえ〜楽しそうですね〜！」

リアが目を爛々と輝せながら言う。

「ああ…準備が整つたらリアには一番いい席で見せてやるからな」

「はい！ありがとうございますサイガー様！」

満面の笑みでリアは答える。

ああもつ…本当に助けて良かったと思うわ…

さて所変わって、俺は銀竜に跨って上空を飛んでいる。
その傍らには数本のミスリルソードやミスリルアーマー。

ミスリル製の武具くらいなら大丈夫かなと思い
ポーションに続く第二の商売として武具の販売を始めたのだ。
例によってガリア王宮の平民兵士に試させたが
そんじょそこらの武具よりよほど軽くて頑丈で扱いやすいと大好評。
これはいけると思ってリュティスの武器屋に試供品を持っていったら
ポーションの時と同じであっという間に売れた。
もう本当に怖いくらいにあっという間に…

でだ。武具って結構高値で取り引きされるから
売上が益々伸びるわ金貨が山積みになるわで…
地下金庫が金貨で溢れかえってしまっりアも目を丸くしていたも
のだ。

おまけにそれにつられてまたしても俺の名前が各地に広がり
トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーの商品が
最早一種のブランドと化していたりするのだ。

トントン拍子すぎるって？言うな…俺も驚いてんだから本当に…
ポーシヨンとミスリル製武器だけで有名人とかある種笑い話なんだ
から…

それでもって最近ではガリア以外からも注文が入って大忙しなのだ。
今向かってる先もガリアではない場所…

街の外に銀竜を待機させて街中に入り目的地へと向かう。
うつつ…ミスリル製とはいえ剣と鎧は結構重い…

今回の目的地とは…
「いつつも思うけど…ガリアに比べりゃ流石に小規模だわな…
まあある意味仕方ないか…？あの色ボケ姫の統治下じゃ…」
トリステイン、ブルドンネ街…その路地裏…これだけ言えばわかる
よね？

あそこの主人とは何回か取り引きをしていますがすっかりお得意様だ。
因みにデルフリンガーには手をつけていないが。

関係ない話だがアンリエッタは大ツツツ嫌いです
多分俺の中での嫌いなゼロ魔キャラではトップ3に入るな。

（あの色ボケと無鉄砲なルイズの所為でサイトが苦勞したんだからな…）
常識の違いつて物があるにしろ、四巻や六巻からの展開で俺のアンリエッタへの評価はマイナス急降下したからな。
挙げ句十六巻とかでもサイトに余計な事をして…

おつと愚痴はこの辺にしておこう。
ともかくアンリエッタは大ッ嫌いだ。
アイツのメリットになる行動は絶対にしない。あとルイズも。

*

さて件の武器屋に到着したわけなんだが
「こんにちはご主人…ってアラ…？」
俺は目を丸くしてしまう

「店一番の業物…ってこれはこれは！サイガー様じゃねえですか
！」

主人が気前よく俺に声をかけてくるが俺の耳には入らない。何故なら…

「誰よアンタ？」

「この剣すげえ…ってどうしたルイズ？」

桃髪の小柄な少女とパーカーを纏ったこの世界には場違いな少年…

(マジか…よりによって今日がデルフリンガー購入の日かよ…)

このタイミングでサイトとルイズに会うとは思ってなかった。
完全な不意打ちだよ……

落ち着け…とりあえず落ち着いてクールになれ…

「注文のあったミスリル武具を持ってきました」

「へい！いつもありがとうでさあ！

サイガー様の商品は売上が良くてこっちも大助かりだよ！」

「それはどうも……」

店主にミスリル武具を渡して金貨の山を受け取る

「ちょっと！アタシ達が先に買い物してたのよ！

勝手に割り込まないでよね！」

そしたらルイズが横から割り込んでくる。

ウ、ウゼエ…正直ウゼエ…だがこの程度で逆ギレしてもしゃあない。

「これは失礼しましたお嬢様……」

へりくだった挨拶で表面上の謝罪をしておく。

そして俺はそそくさと端に移動して事の成り行きを見守る事にする。

しばらく店主とルイズ達の交渉が続いた後：

「おめえみてえなヒヨっこにゃあ棒つきれがお似合いさ！」

「なんだと？」

突如響いた乱暴な声にサイトがムツとして反応を示す。

「やいデル公！お客様に失礼な事言うな！」

「お客様？こんな小僧っこがお客様なんてふざけんじゃねえよ！」

「やいデル公！それ以上言ってみやがれ！溶鉱炉に突っ込むぞ！」

「おうやってみる！どうせこの世にゃ飽き飽きしてたところさ！」

錆び付いたボロ剣と店主の罵り合いが始まる。

「剣が喋ってる！」

未知の遭遇にサイトが驚きを示す。

「インテリジエンスソード…ですか？」

知らないフリして店主に質問してみる。

「そつでさサイガー様、一体どこの物好きが始めたんですかねえ…

こいつときたら口うるさいだけで何の価値も無いんでさあ…」

店主が愚痴をこぼす。

「でもまあ…珍しいっっちゃ珍しいんじゃないですか？」

「そつだよ！喋る剣なんて面白いじゃないか」

俺の言葉に何故かサイトが乗ってきた。そしてデルフリンガーを持ち上げて…

「…おでれーた。てめ、『使い手』か」

「使い手？」

「ふん、まあいい。てめ、俺を買え」

「買つよ」

…まあ原作通りの流れになったわけなんだが。

*

サイト達と一緒に店を出る。

「まったくサイトつたら…もっと綺麗なやつにすれば良かったのに」

「いいじゃんかよ。喋る剣なんて面白いじゃん」

不満たらたらルイズにサイトが話している。

(…キツカケは作つとくべきかな…それに試したい事もある…)

唐突に俺はサイトに話しかける。

「サイトって言ったかな…さっきの剣…良かったら見せてくれないかな」

「え…え…何いきなり…？」

「いや…その…インテリジェンスソードって滅多に見ないから羨ましいなあって思ってたね…」

ちよつと理由が苦しかったか…？

「だ、だよな！アンタもそう思うよな！いや…ハハハ…」

とか思ってたら気前よく鞘ごとデルフリンガーを渡してきたのせられやすい奴だよ…だがそんな性格がいい。

「ちよつとバカ犬！どこの誰とも知らない奴に勝手な事してんじゃないわよ…！」

横でルイズが喚いてるがどうでもいい。

俺は鞘からデルフリンガーを抜き出す。

「…！！な、何者だテメエ！何でそのルーンが刻まれてやがる…？」
そしたらまあ予想通り…俺の手の中でデルフが暴れ始める。

(何故にデルフは第4の使い魔の出現を恐れていたのだろうか…)

原作で語られてないから一度試してみたかったんだが…

「は、離せ！離しやがれええ…！」

「ちよつ…何もそんなに怯えなくても！」

「う、うるせええ…！！いいからとつと離し…」

カチン！

あまりにうるさいから鞆に戻して黙らせる。
まさかここまで拒絶されるとはな…

(まあ第4のルーンが大幅な改変を受けてるから
知ってもあまり意味はないかもしれないけどな)
そんな事を考えつつサイトにデルフを返す。

「ごめんな…何かこんな展開になって…」

「あ…ああ…」

サイトもルイズもデルフの反応は予想だにしていなかったらしく
完全にキョトン顔だ。

「じゃあ失礼するよ…俺の名前はトオル・シュヴァリエ・ド・サイ
ガー…

良かったら覚えておいてくれ…」

そう言つて2人の横を通過しようとして…

「トオル…トオルってアンタまさか…！」

「トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーって…あの成り上がりの…
？」

ちょうど2人と並列になった時サイトとルイズが驚いたように俺に
言う。

だが…サイトの反応はルイズのそれとは完全に別だ。
恐らくわかっている…そんな気がした。

(意外と鋭いな…)

まあ今回のこの状況をたつぷりと楽しませてもらったし……
かといってまだ早いから……今日は軽く種を植え付けとく程度で……

「……また会えるといいね……同じ召喚された現代日本人の仲間として」

「……!!アンタ……っておい!ちょっと!?!」

サイトの耳元でそっとそんな事を囁いたら案の定俺を呼び止めようとした

だが俺はお構いなしにヘイストを唱えて猛ダツシュ!

あっという間に2人から離れていきましたとさ。

*

「いや〜まさかサイトに会えるとはな〜」

帰りの銀竜の上で俺はホクホク顔になっていた。

完全に予想外だったが最大のキーパーソンである

サイトと接触できたのはかなり大きい。

まあ……いきなり全部教えてはつまらないから意図的にああしたわけだが

我ながら何とも悪趣味な楽しみ方ではある。

だがいずれはサイトに全てを知らせるつもりだ。

同じ異世界人として繋がりを作るため…そしてもう一つ…

「さてと…今後どうやってルイズから引き離して
サイトを『こっち側』に引き込もうかなあ…」

第9話：任務その2 吸血鬼退治（前編）

今、俺は薄暗いコロシアムのような場所の一際高い席に座っている。隣にはリア、眼下の一般席には多数の貴族が座っている。

そして中央の簡素な作りのリング上で巨大な頭と牙を持った緑の巨竜カオスドラゴンと、フードを被り仮面を装着し両手に杖とナイフを携えた男が相対する。

そして男の方が杖を構えて何やらブツブツと呪文を唱える。

一瞬の間を置いた後、カオスドラゴンは鳴き声も上げずに崩れ落ちる。

その脳天には巨大な刺し傷と夥しい量の血。

「フム…やはりバハムートやティアマトでなければ相手にならんか…だがハルケギニアの見慣れた獣どもよりは遥かに狩りがいがあるしな…」

俺の加速もこういう目的なら急ぐ甲斐があるというものだ…」
先程までドラゴンの正面にいたはずの男が
血塗られたナイフを片手に崩れ落ちたドラゴンの亡骸の反対側で咳く。

その瞬間に一般席の貴族達から大歓声が上がります。

男はやっぱりと手を振って答えていた。

「…リア、見えたか？」

「わ、わかりません…気づいた時にはもう…」

俺の隣で酷く困惑し、目をゴシゴシこすりながらリアは呟く。

…実際俺にも何がなんだかだよ。あのスピードはチートすぎる。

一般ピープルな俺にヘイストをかけた時は勿論

ガンダールヴだってあのスピードは見切れまい。

全く…呪文の名前「加速」じゃなくて「瞬間移動」に改めるべきだ
ろ！？

「自分のマスターとはいえ本当に恐ろしいわ…」

*

一旦リアと別れて特等席から離れた後、リングの舞台裏へと向かう。

「相変わらず無茶苦茶なスピードですねマスター……」
「おうトオルか！何、お前の幻想魔法の数々に比べれば俺の虚無など大した事はなかるうよ」

舞台裏にいた仮面の男もといジョゼフが上機嫌に答える。

はてさてこれはどういった状況なのかということ

今、俺やリア、ジョゼフがいるのはリュティスに新たに建造した竜の首コロシウムという施設。FF6のあれだ。
(因みにジョゼフの持つ最終幻想伝第6項 - 幻獣と人間 - にも記されている。)

人間がモンスターと戦うという点は同一であるがアイテムの賭けとか戦利品の取引はしていない。
勝てば単に賞金が貰える程度の施設なわけで。

ジョゼフは最終幻想伝内で存在を知り興味を持ち
また、俺も新しい商売として活かすために
突貫工事ではあるとはいえコロシウムを建造した

ポーシヨンとミスリル武具で名の知れた

トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーの新たな商売という名目や
ハルケギニアの秘境や東方より捕らえた珍しいモンスターを見れる
という

虚実を織り交ぜた宣伝

更にモンスターに勝利した際の賞金を目当てにした傭兵メイジや
観戦目的の暇を持て余した成金貴族がゴロゴロやってくる。

戦闘の参加費用、そのモンスターと挑戦者の試合観戦の入場料で
売り上げは今までの商売を遥かに超えた物になっている。

…で、何か知らないがジョゼフが身分を偽り

謎の仮面メイジ・ジークとしてコロシラムのスターに君臨している。
暇を見てはここに来て俺の召喚したFFモンスターを狩っている。

（召喚するこっちの身にもなってほしい…結構体力使うから…

コロシラムのモンスターの半分以上がジョゼフに倒されてるし…）

ジョゼフが参加する試合はいつも超満員。

観客席の売上が普段の何倍にもなったりする。

まさか観客も思ってもみないだろうなあ…国王自ら戦ってるなんて

ジョゼフも最終幻想伝のモンスターと戦えるのが面白いんだとか…

この間グランベヒーモスを倒してた時は流石に少し驚いたし…
まあ…普段からバハムートやティアマト相手に暇つぶしで
戦ったりはしてるんだけどね…

「カオスドラゴンとて強力なモンスターですよ…
本当にマスターの実力には驚かされますって」
「そう言うな！お前がくれたコイツのおかげでもあるしな！」

そう言ってジョゼフが血塗られたナイフ・ゾーリンシェイプを手に
握る。

コロシム参加の際に物質召喚でジョゼフに渡した物だ。
力や素早さ、回避率が大幅上昇する優れたものだ。

でもそんなのに頼らずとも虚無の加速で
十分対応出来ると思うんすけどねえ…

「幻想伝の魔物と戦えるのもお前がいるからこそだしな！」
「…まあマスターがお楽しみになってるなら俺はそれで結構ですよ
…」

「まったく！相変わらず真面目な奴だ！
機会があれば是非お前とも手合わせしてみたいものだがな！」
「…だからそれは絶対嫌ですって！」

うん、絶対無理。勝てる見込み0だから。
加速という名の瞬間移動で瞬殺されるのがオチだ。
原作でも普通にサイト圧倒してたしね…
つくづくこの世界のジョゼフが弟への執着をさっぱり忘れた
愉快な人物に改変されて助かったと思うよ…

*

さて数日後、またしても場所が変わり今はタバサと一緒にいる。
ガリア北花壇騎士の任務の為だ。

今回の目的地はサビエラ村、つまり吸血鬼退治。

FFの印象深い吸血鬼ついたら俺は2の
ヴァンパイアガールとヴァンパイアレディを思い浮かべるかな…
いや、そんな事はどうでもいい。

あの幼女吸血鬼・エルザはかなり吹っ飛んだ性格してるしな…
下手に矛先がこっち向いて血を吸われんように注意せねば…

村から少し離れた位置にタバサと共にシルフィードが
俺と共に銀竜が降り立つ。そしてタバサがシルフィードに言う。

「化けて」

「いやいやー！」

「化けて」

「やっ！」

「やじゃない」

「うううう……」

しばらく唸った後、観念したように呪文を唱える

「我をまといし風よ……私の姿を変えよ」

そしてシルフィード光に包まれ、それが収まった後に立っていたのは……

青髪ロングの全裸の女が1人……

「やっぱりこの体嫌い！動きにくいー！」

そう言っつてシルフィードは準備運動を始める。

「……韻竜の先住魔法って凄いだねえ……」

いろんな意味でな……全裸の女が飛んだり跳ねたりしてるなんて果てしなくシユールな光景だぞオイ……

「そうよ！シルフィにはこれくらい簡単なのね！見直した？きゅい！」

「だあああ！まず服を着てからにしろつての！」

シルフィードが胸を張ってズイツと俺に近寄る。全裸で…
エロゲにもまず無いシユールの極み…正直俺の頭が保たない…

「うっ…ごわごわするのね…」
不満タラタラにシルフィードはタバサの用意した服を着る。

「…それで、どういうシチュエーションで行くんだタバサ？」
何となく尋ねてみる。原作ではシルフィードが騎士でタバサは従者だ。

しばらく沈黙が続いた後タバサがマントと杖をシルフィードに渡す。
「彼女が騎士、私とあなたが従者」

「…了解」
そこは原作とあんま変わらないって事ね…
俺もマントを外し、ダミーの杖と一緒に近くに隠しておく。

(まあ…想定してた状況の1つではあるか?)

タバサ達に見えないように物質召喚を行い、ミスリルスピアを取り出す。

*

「ようこそいらっしやいました騎士様。村長のアイザックです」
村にはいると防止を被った白髪の老人が俺らに挨拶をしてくれる。

「私はガリア花壇騎士シルフィード！風の使い手なの！」

「シルフィード？」

名乗ったシルフィードに対して村長は完全なキョトン顔だ。
シルフィードがみるみるうちに青くなっていく。

「偽名です。花壇騎士ともなればいろいろ事情があるんです。おわかり下さい」

「ああ！これは失礼いたしました！」

俺がフォローを入れると村長がポンと手を叩いて納得する。

(…まずシルフィードって名前が人間には不自然だと考えるよ…)

(うるさいのね！そんなの知らないのね！)

(やれやれ見た目は美人でも中身は子供か…)

(ば、馬鹿にしたわね！ジョゼフの手先の癖に！)

小声でひそひそとやり取りする。

「…かい加減やめろそのジョゼフの手先っていうのは…」

「あ、あの騎士様…？」

「おっと失礼：私は従者のトオルです」
「同じく従者のタバサ」
ミスリルスピア片手に自己紹介し、タバサも後に続いた。

*

村長の屋敷に案内され、事情説明をしてもらう。
まあ俺は全部知ってるんだがな！！

（アレキサンドルがグールである以上…
マゼンタ婆さんの疑いを消すのは難しいわな…）

グールってつまりは要するにアンデットだ。
レイズの一発でも唱えれば簡単に無力化出来る。
でも知ってるからって短絡的にいきなりそんな事すれば
マゼンタ婆さんの家に火が投げられるのが早まるだけだから意味が
無い。

でも任務の達成には村人に吸血鬼を殺したという事実を
その目で認識させる必要があるわけで…つまり…

「おじいちゃん…?」

とかなんとか考えてると部屋の入り口からおずおずと1人の少女が現れる。

「まあ可愛い!」

シルフィードが声を上げると少女がビクツと飛び跳ねる。

「エルザ、騎士様達に挨拶なさい」

村長が言々とエルザがスカートの裾を持ち上げて一礼する。

「お人形さんみたい!食べちゃいたい!!」

シルフィードが満面の笑みで抱きつくとエルザは更に震えだす。

(白々しい…)

俺はエルザを終始冷めきつた視線で見ました。

タバサがこいつも調べるとか言ったり

村長が勘弁してほしいと言ったり

シルフィードが例外は認められないだの

タバサが涙目になったエルザの体を調べるだの

村長がエルザの生い立ちを説明するだの…まあ色々あった。

その間エルザはずっとメイジが嫌いなか弱い女の子を…演じてました。

エルザが吸血鬼です!なんて言ったところで

マゼンタとアレキサンドルを完全に疑っている村人を納得させるのは難しい。

ましてやエルザの演技はほぼ完璧と言える。

原作知識が無きゃ俺も絶対騙されてるよ。
知ってる身だから演技が上手ければ上手いほど白々しく感じるわけ
で…

うーむ…単なる一般人Aとそんなに変わらん脳みそな俺には
事態を丸く収めるいい手段が思い浮かばない…
(となると…やっぱりアレで行くしかないか…)

*

その後俺はタバサとシルフィードと別れ
村の外部の調査を開始する。

「出てこい吸血鬼！」

「いるのはわかってんだ！」

村人たちが村はずれのあばら家を囲んで喚いている。

「誰が吸血鬼だ！失礼な事を言うな！」

あばら家からがたいのいい男が出て来て怒鳴る。

(おっとと…これはいかな)

騒ぎがでかくなる前に俺が割って入る。

「何の騒ぎですか？」

「騎士様の従者か…ちようどいい！この家を調べてくれよ！」

「そうだ！あんた槍持つてるみたいだしそれなりに腕はたつんだろ？」

そいつでこの家の中にいる吸血鬼をぶっ刺して下さいや！」

「おつかあは病気で寝てるだけだって言ってるだろうが！」

「違うだろ？陽に当たると肌が焼けるからだろ？」

「お前の首にも2つの牙の跡があるしなあ！」

俺の姿を見て好き勝手言う村人にアレキサンドルが怒る。

疑心暗鬼つてのは恐ろしいなあ…見ていて気分が悪いわ…

「アレキサンドル…お客様かい…」

すると件の老人・マゼンタが家から姿を現す。

「マゼンタ婆さん…！いい所に…！」

村人の1人が危ない顔つきでマゼンタ婆さんに近寄る。

おいおいまずいって…

すかさず俺はその村人にミスリルピアを向ける

「なにすんだよ！」

「…俺が調べましょう」

その一言に村人がしぶしぶと引き下がる。

アレキサンドルがバタバタ騒いでるが村人が取り押さえている。

「な、何を…」

…こんなか弱い老人相手に乱暴するとはな…

少々胸は痛むが計画の為には仕方あるまい

俺はマゼンタ婆さんの口を掴んで中をのぞき込む仕草をする。

「ちょっと！何をしてるのね！」
ちよつどその場にタバサとシルフィードが駆けつける。
が、俺はガン無視してマゼンタ婆さんをまじまじと観察する。

「…見た感じ牙は無いみたいですけど？」

「…だが吸血鬼は血を吸う寸前まで牙を隠しておけるんじゃないかね？」

「…確かにそうですね」

「じゃあこいつが吸血鬼じゃない証拠にやらねえ！」

「てめえら…！」

取り押さえられているアレキサンドルが激昂する

あーもうコイツらは…

「黙ってるっての！」

…いかん、つい感情的に叫んでしまった。村人達の視線が冷たい

「失礼：騎士様提案があります」

「へ？な、何なのね？」

1つ咳払いをした後にシルフィードに持ちかける

急に話題を振られてシルフィードは慌てて威厳を取り繕う。

タバサはずっと黙ったままだ。

「村人達はマゼンタお婆さんを吸血鬼

アレキサンドルさんをグールだと疑っています

ですが確たる証拠も反証も無いのにご覧の通り疑心暗鬼になってい

る…

このままでは騎士様も調査しづらいでしょう…そこで」

そこまで言った後に懐から小さいベルを取り出して鳴らす。

するとそれに応じて俺の側に銀竜が舞い降りる。

「ちょ…ちよつとその子は…」

予想外の俺の行動にシルフィードが困惑してるが関係なし。

「そ、そいつはアンタの竜なのか…？」

「ええまあ…魔法は使えないけど竜と槍の扱いには長けてましてね…」

大嘘だな。何となく竜使いなら槍かな？

なんて適当な考えで槍をチヨイスしただけ

平民の従者を装うだけなら何でも良かったのだ。

そもそも杖なんか無くてもFFルーンの魔法を使うのに支障は出ない。

だからまあ…今回は原作とは別行動を取らせて貰うとする。

マゼンタ婆さんとアレキサンドルの末路は悲惨すぎるしな…

「調査はタバサと騎士様にお任せします

その間俺はこの家に泊まり込んで2人を見張り

更に家の周辺を銀竜コウゴンに見張らせる事にしましょう」

第10話：任務その2 吸血鬼退治（後編）

「……にしても災難な話ですわねえ……あちこち追われて漸く辿り着いたら

今度は吸血鬼扱い……お辛かったでしょうに……」

「そうなんだすじゃあ……私が病弱なばかりにアレキサンドルにまで迷惑をかけることになってしまって……ヨヨヨ……」

「ああほら……泣かないで下さいって……」

……吸血鬼退治の任務が何か知らんが老人介護にすり替わっています。

冒頭の呟きも段々おなじみになってきたトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

前回の流れ通り、俺は今マゼンタ婆さんの家にいる。

外の玄関前ではさっき呼び寄せた銀竜が横になって欠伸をしている。

最初俺の提案にシルフィードが何やらぶつぶつと文句を垂れていたんだが

意外にもタバサの方があっさり二つ返事でOKしてシルフィードを黙らせていた。

危険は伴うけど、調査がしやすくなるという点ではありなんだと。

（……ひょっとして俺がどうなるうが気にしない……なんて考えてたりしてな……）

いつものことだったんだが、ああも無表情でキツパリOKされるとそんな邪な考えが浮かんだりするんだよなこれが…

翼人掃討任務の帰りでハツキリした事だが、タバサは俺をジョゼフ派の刺客だと思ってるので

その俺が吸血鬼に殺されようがどうでもいい…なんて思ってるんじゃないかなろうかという…

そりゃまあ…確かに俺もタバサに関してはあまり干渉しないと決めていて

原作体験の為の重要人物の1人程度にしか認識していないが

流石に目の前で生死の境を彷徨うような羽目になっていたら見捨てたりはせんぞ？

一応北花壇騎士という仕事の上でのパートナーではあるんだから。

…長々と失礼。それでまあ話の通りマゼンタさんの家の監視を始めたわけなんだが
どうにもこうにもやる事が無いという…

グールと化しているアレキサンドルも流石に入ってきたばかりの俺をどうこうするつもりは無いらしく、仏頂面で俺の事を睨むばかりであつた。

それで、退屈凌ぎも兼ねてマゼンタ婆さんの部屋を訪ねて

ちよつとお話を伺つてもいいですか…みたいなノリで接してみたらあれよあれよという間にマゼンタさんが俺に自分の境遇の辛さをペラペラ話し始めて

そして今に至るといふわけである。

(それにしても…酷い話だよなあ…)

テーブルで向かい合って向かい合って座っている。
反対側のマゼンタ婆さんは話をしながら目頭を抑えてすすり泣いている。

ここ数年前から彼女は病気がちになり、まともにも外出する事さえ叶わないらしい。

なのでどこに住んでいようと家にも寄りつきりになり
行く先行く先の村々で常に周りの人間気味悪がられていたらしい。

それだけならまだいいんだが、アレキサンドルもアレキサンドルで母親の看病に一生懸命なあまりつつい感情的な行動を起こしてしまつらしく

周りの人間に母親を馬鹿にされてそれに反応してしまいトラブルを起こす事もしばしばなんだとか…

……ってこれはアレキサンドル本人も悪い気はするけど…
ただまあ…病弱な母親の世話をするのに頑張っているだけなのにその上更にあらぬ噂を立てられたりしたら、感情的に持たないのだろ…

そして極めつけは…そんな母親思いなだけのアレキサンドルが今はグールになって操られているという…

(なんともまあ…救えない話だよねえ本当に…)

別にこの2人に特別に思い入れがあるわけではないのだけれども原作に従っていったら、この2人が辿りつく末路は悲惨極まりない
そういうわけで俺は、強引だが2人を何とかする方向で話を進めていくつもりなのだ。

「とりあえず顔を上げて下さいマゼンタさん」

にっこりと微笑を浮かべて優しく話しかけてやる。

「先程も言いましたが俺はあなたが吸血鬼だとはこれっぽっちも思
つてませんから

大丈夫です。シルフィード様はとても優秀な騎士様ですから

直に吸血鬼を見つけて退治してくれますよ。もう少しの辛抱です」

「おお……おお……すみませんのう……こんなへんぴな老人を気遣っ
てくれるなどと……」

境遇上こんな風に気遣ってくれる人がアレキサンドル以外殆どいな
かつたらしく

マゼンタさんの俺に対する好感度は現状かなり高めと見ていい。

……まあ俺の考えてる救出プランは結構過激なので、その分何か申
し訳なさが生まれるんだが……

あと、関係ないがシルフィードが優秀って……語尾に（笑）がつくな

「失礼しますぜ」

と、ここでアレキサンドルが白い液体の入ったワイングラス2本を
丸い盆の上に乗せて部屋へと入ってくる。

「従者様がおつかあを疑ってねえつつうから……まあせつかく来てく
れたわけだし……」

「すみませんね……わざわざ……」

仏頂面のままなんだが、口調は家に入った直後よりは幾分落ち着い
ていた。

アレキサンドルがワイングラスを俺の前に置く。白い液体の注がれ
たそれを俺は片手に取って……

（……エルザの野郎……余計な事してないだろうな……）

……一瞬疑念が過ってワインにこっそりライブラをかけてみる。

脳内に情報が流れ込んでくるが別に毒とかは入ってないらしい。

一安心した後に俺は手に取ったワインを一口口に入れる。

「……む……これはなかなか美味しいな……」

そして、少し地の口調が出ながらそんな事を呟いてしまう。

こつちの世界に来て以来、ジョゼフに付き合わされてアルコール飲料の類はもう何回も口になっている。

（まあ…未成年だけど、ここに来る前から飲酒は結構こつそりしてたんだが…）

それで…ジョゼフが勧めてくる代物なのだから

平民には到底手出しが出来ないような高級ワインをやたらと口にしているのだ。

いや、別に俺は酒の味に詳しいわけではないのだが

貴族と平民に絶対的な格差のあるここハルケギニアでは

かけられるコストやら材質やら醸造法の違いやらで

平民用と貴族用のワインには超えられない壁みたいなのが存在している。

一度平民用の酒場で酒を飲んだ事もあるんだけど

流石に貴族用のソレとは味に結構な違いがあったのだ。

しかし、今口にしたワインは貴族用の物にも劣らない美味さがあった。

こんなガリアの外れの田舎村でこういうのはちよつと意外だ。

「これはなかなか見事な…どこで手に入れたんですこのワイン？」

ちよつとほろ酔い気分でアレキサンドルに尋ねてみる。

「ああ、そいつはトリスティンのタルブっていう村だったかな…」

そこで取れる良質のブドウから作られた白ワインなんだよ。おっかあがいたく気に入っててな」

「……………はい？」

またしてもこんな所で意外な接点を発見してしまった…

タルブ村といえば言うまでも無くシエスタの故郷だ。

確かにシエスタ本人も第三巻で言っていたっけ。良質なブドウが取れるのだの
それでサイトと一緒にブドウ畑を買ってワインを作ろうだのなんだの…
成る程確かに、それも納得出来る話だ。

(シエスタには…まだ会ってないんだよなあ…この任務終わったら学院に行ってみるかな…)

シエスタはお気に入りキャラの中でもかなり上位にいる。サイトと一緒にこちら側に引き込む気満々である。

いっその事タルブ産のブドウの買収でも始めようか…商売で設けた金で

いや、本当に美味しいんだものこのワイン。もう一杯目が空になつてるし…

*

「…………頭痛え…………」

日はすっかり傾いて、今は夜だ。吸血鬼が最も活発に動く恐怖の時間帯

…だというのに俺はマゼンタ婆さんの家の案内された自室のベット

で横になって頂垂れている。

細かく言うなら、FF8でバラムホテルのティンバーマニックス
を読んだ上で

デリングシテイのホテルで酒にやられてぶっ倒れているラグナの如
く…

…… ってネタが細かすぎるか、失敬。

… タルブ産ブドウのワインを飲みすぎて頭が痛くなってしまつとは
情けない…

というより昼間っからワインの飲みすぎてダウンするとか俺はどこ
のダメ人間だ…

ここにリアがなくて良かった…今の俺の姿を見たら呆れていたに
違いない…

とはいえこれじゃあ任務に支障が出兼ねない…そんなわけで俺は意
識を集中して一言呟く。

「エスナ…」

白い光が一瞬体を包みこんだと思うと、あっという間に酔いがさめ
ていく。

「すげえ…こりゃ新発見…」

どうやらアルコールによる酔いはエスナの「状態異常」の内に認識
されるらしい…

こんな事で魔法を使うのもかなり馬鹿馬鹿しい話なんだが…

*

で…俺達が村に滞在し始めて数日が経過する。

俺という本来存在しないイレギュラーがいる所為なのか

ここ数日でアレキサンドルに目立った動きは無い。

家にいる時は俺と銀竜の監視下でマゼンタ婆さんの看病に付きっ切りだし

見る限りでは外でも怪しい行動はしていない。

村人の方も俺らがいるおかげで吸血鬼も迂闊に動けないでいると考えているらしい。

とはいえ、このまま引っ込まれたままというの困る。

俺の計画を進めるにはアレキサンドルがゲールである事を村人の前に晒す必要があるのだから。

(どうしたものかねえ…)

そんな風に考えながら頭をガリガリと引っ掻き、俺はタバサと村外れで合流する。

「どうよ、そっちの様子は？」

「これといった手がかりは見つかっていない」

「ああそう…」

いつもの無表情でタバサは淡々答えるばかり。

「そっちは？」

「見た感じ怪しい動きは無し。やっぱりあの婆さんが吸血鬼とは思

えないけど？」

「そう」

思えないというか…吸血鬼じゃないんだし…

というかエルザは今頃何をしているのだろうか…？

「…引き続き監視をお願い、私達も調査を続ける」

そう言つてタバサはくるりと振り返つて村長の屋敷へと戻つていく。

「りょーかい…」

俺は俺でやる気のなさそうな声で答えて、来た道に戻つていった。

*

そしてその日の夕刻、事態は急変する。

以前のようにマゼンタ婆さんの部屋で彼女とお喋りをしていた時だ

「いやあああああ………」

「グオオオオオン………」

遠くの方から叫び声と唸り声が聞こえて、俺は窓を開けて外を見る。
どうやら叫び声は村長の屋敷の方からで

唸り声はついさっき外出したアレキサンドルを見張っていた銀竜の
ものだ。

……となると、遂に痺れを切らして行動したというわけか…

「な、なんじゃ…一体何の騒ぎ…」

「スリプル」

マゼンタ婆さんも先程の声を聞きつけ窓際によつてくるが俺は素早くマゼンタ婆さんに睡眠魔法を唱えて眠らせる。

ばつたりと床に倒れこんだ婆さんをおぶり、擬装用のミスリルスピア片手に家から飛び出す。

何分時間が無いから急がねばならない…

と、家から出てきたところでアレキトサンドル、もといゲールを仕留めた銀竜が戻ってくる。

銀竜の口に銜えられたアレキサンドルは目を血走らせ、鋭い牙を剥き出しにした

怪物としか言いようの無い不気味な姿へと変貌していた。

つくづく吸血鬼つてのが恐ろしい…こんな何の罪も無い人間を

ここまでおぞましい怪物に仕立て上げ尚且つ自分の手駒として操るとは…

悪趣味に程があるというものだ…

マゼンタ婆さんを銀竜の背に乗せて、俺は言った。

「事前に打ち合わせたとおりだ。俺が戻ってくるまで村の外で待機な？」

銀竜はコクリと頷いた後に翼を大きく広げて飛び立っていく。

俺はというと後ろに振り向き懐から赤色の染液が入った小瓶を取り出して

左手に持ったミスリルスピアの先端へとぶちまける。

そつした上でマゼンタ婆さんの家の方へと右手を掲げ、イメージを浮かべて呟く。

「フレア」

胸のルーンが一際強く輝き、全てを燃やし尽くす黒い光を伴った原初の炎が大爆発を起こし、一瞬にしてマゼンタ婆さんの家を火の

海に変えた。

「うわ…相変わらず馬鹿みたいな威力だわ…」

自分の屋敷で何度か検証した事があるとはいえ、やはりその威力は絶大である。

メテオやアルテマと並んで、ハルケギニアではオーバーキルな魔法だ。

火のスクウェアメイジが全力で放つ魔法でも遠く及ばないだろう。

「なんだなんだ！？もう燃えてやがるじゃねえか！」

「あれは従者さんじゃねえか！」

すると辺りが段々騒がしくなってきた。火炎瓶やら松明やらを持ってきた

大勢の村人が息を切らしながら姿を現す。

やはり原作通りにこの家を燃やしにきたのだろう…やれやれ…

しかしマゼンタ婆さんもアレキサンドルも逃がしており

家の方もさつき言ったように俺がフレアで燃やしてしまっている。

「従者さん、一体何があったんで…」

「…どうやらマゼンタさんが吸血鬼だったみたいですね…

監視を始めて以来血を吸ってなくて大分弱ってたのが幸いでした
血を吸われる前に何とか仕留められましたよ…

今は念の為用意していた火属製のマジックアイテムで家ごと火達磨
です」

そう言っただけ俺は先程染色液で赤く染めたミスリルスピアの先端を見
せる。

「おおそうか！あんたよくやってくれたなあ！」

「本当だぜ！あの頼りなさそうな騎士様なんぞよりよっぽど役に立
つな！」

不自然極まりないつきはぎだらけの俺の虚実を村人達はあっさり信じ込み
俺を取り囲んで賞賛の言葉を浴びせてくる。当然だが俺は嬉しくともなんともない。

…その後タバサとシルフィードが大慌てでやってきたが
原作と違い火を点けたのは俺で、俺が即席で作り上げた嘘の証言を
すっかり信じ込んだ村人に押されてしまい、結局マゼンタ婆さんの
家は
自然消火するまで火が立ち上り続けていた。

やがて散り散りに村人がいなくなって、俺とタバサとシルフィード
3人だけになった後

俺は村長の屋敷の方へと戻っていきこうとする。

「…あれはエサだ…マゼンタ婆さんは別の場所に避難させてある…
多分本物の吸血鬼は今夜動くだろう…警戒しておけ…」

「………」
そして呆然と立ち尽くしていたタバサにそっところ耳打ちしておいた。

(……さて…今夜が仕上げだな……)

*

その日の夜中に村長の屋敷をこっそりと抜け出して俺は銀竜に跨って村の上空を飛び回っていた。

「…来た来た…案の定狙ってたな」
すると、やや離れた位置の草原でエルザとタバサが草を摘んでいるのが見えた。

無事に事件解決で自分のマークは外れているとすっかり安心して
いるのだろうか…

しかし残念そうは問屋が卸さない…お前はここで退治してくれるわ
あ!!

俺は銀竜に指示を出して、2人のいる草原へと急降下していく。

「ニーんばーんわっ」

あからさまにわざとらしい猫撫で声でエルザに向かって挨拶する。
どうやらまだ事に及ぶ前だったらしく、タバサには何の異常も見ら

れない。

「あ、あれ…もう1人の従者さん…？ど、どうしてここに…」
突然現れた俺と銀竜を前に困惑するエルザは、何とか弱い少女を演じようと取り繕っていたが…

最早俺には白々しい以外の感情は生まれなかった。

「ブリザガ」

ダミー杖を取り出し、容赦なく大量の氷塊を放ってエルザを地面に磔にする。

「がっ！！…な、何で……」

「お前が吸血鬼だから。それ以外に理由あるのかよ？」

冷たい声で言い放ってやる。もはやエルザに対して何の後悔も哀れみも今の俺には無い。

「ね、眠りを導く…「エアロガ」があああっ！！」

地面に磔にされたまま先住魔法を唱えようとしたが

ワンスペルで発動する俺のFF魔法に比べれば全然遅い。

エルザは氷塊ごと風の刃に切り刻まれて吹き飛ぶ。

(…慣れてきたもんだな)

吹き飛ぶエルザを見て心内でこんな事を呟く。

実際問題、原作以外の北花壇騎士の任務をもう結構な数こなしてきたので

人が傷つくとか吹き飛ぶとかそういうのには大分耐性がついていて、それがいい事なのか悪い事なのかは別問題だが

(…つーか現代日本の常識で当てはめれば悪い事だよ多分…)

とはいえ世界が違えば常識も違う…俺も大分順応してきたという事だろうか…

「どうしてわかったの？」

と、俺の隣でぽかんと立っていたタバサが唐突に尋ねる。

「…村中の住宅は固く閉ざされてるから進入手段は煙突だけ

となると、犯人は子供か老人…

そんできつと吸血鬼は散々狩りを邪魔された俺達に恨みを持って事件解決と見せかけて安心しきつた俺達の誰かを腹いせに狙ってくる…こう考えたんだよ」

ここは原作でタバサが使ったセリフを一部引用しておく。

まさか最初から全部わかってました…なんて馬鹿正直に言えるわけねーでしょ…

「そう…さ、最初から…あれは罠だったという事かッ…」
仰向けに倒れこんだエルザが掠れた声を発する。

「けど…1つだけ間違い…そっちのお姉ちゃんを狙ったのは腹いせじゃない…」

お姉ちゃんを…気に入ってたから…私と同じ目をしていて…狩りがいがあったから…」

「あつそう。まあ今となつてはそんな事どうでもいいけど」
何の感情も込めない瞳でエルザを見下ろして俺はダミー杖を構える。

すると、エルザが急に涙を浮かべて懇願を始めた。

「お…お兄ちゃんお願い…こ、殺さないで…私は悪くない…
人間の血を吸わなきゃ生きていけないだけ…」

に、人間だつて生きるために動物を殺して食べる…どこも違わないつて

そっちのお姉ちゃんだつて言つてたよ…？だから…」
「トルネド」

「ああああああ！！？？」

返事は魔法で返しておく。最早ちよつとした怒りさえ沸いてくる。
マゼンタ婆さん、アレキサンドル…いや彼らだけではないだろう。

これまでも大勢あんな風にグールにしたり隠れ蓑にしたりして生きてきたのだろう。

生きるためだけだつたらあんな風に他者を利用する必要など無いはずだ。

そんな奴に今更あんな顔で命乞いされても逆に感情が冷めるばかり

だっつーに。

まあ…自分が今している事もエルザのソレと大差無いという自覚はあるが…

「悪いが小難しい話はわからん…ただ強いて言うなら…」

「ア……………カツ……………」

トルネドで大きく吹っ飛ばされて全身を切り刻まれ、最早虫の息になっっているエルザに近寄り

俺は少し考えた後にこう言い放つ。

「人間ってというのはワガママな生き物なの。生きる以外の目的でなにかにつけて他の生き物の命を平気で奪ったりする…」

しかもその対象を自分が好きだからとか嫌いだからとかで正当化する事もあるし…

その癖自分の番になると今のお前みたいに平気で命乞いをする事もある…

俺にはそうとしか言えないね…」

実際今の自分がそうなのだから。別に殺す必要も無いかもしれないがこの少女は放っておいたら俺の気がすまない、だから殺す。それだけ。

……………さつきも言ったが大分変わった気がする俺…ジヨゼフの影響もあんのかな？

(さてと…とどめだ)

事前に持ってきておいた火竜の牙をエルザの体に突き立てる。

直後炎が轟々と燃え上がり、エルザは物言わぬ灰へと姿を変えた…

「さて…ちょっと後味悪いかもしれんが任務完了だな？」

「……………」

「きゅい…」

翌朝、村の入り口の前で俺とタバサ、そして竜へと戻ったシルフィードがいる。

原作通りに村長にはエルザは王都に親戚がいたので引き取らせたと
言って納得させた。

考えてえみりやあの村長も気の毒なんだよな可愛がってた義娘が
まさか吸血鬼だったとはね…

「吸血鬼…手強かったけど…この先もっと手強い相手と戦うことにな
るのかしら…」

しよぼくれた声でシルフィードが呟く。

「…まあそれも任務にもよるだろ？とりあえず過ぎた事をクヨクヨ
言うのはやめにしようぜ？」

先の事なんてどうなるかわからないだし…」

「きゅい！お前には言っていないのね！お姉さまがこんな事してめの
も元はといえば…」

「うるさい」

「きゅい…！」

俺に向かってギャーギャー文句を言うシルフィードをタバサが杖の
一撃で黙らせる。

何かこの光景もお馴染みになってきているな…だがまあ今はそれよ
りも…

「タバサ、先に帰って報告を頼むわ。」

「どっしして？」

「俺はちよつと寄り道があるんでな。悪いけど先帰っててくれ」
そう言つて俺は銀竜に乗り込んでさっさとその場を離れていく。
そつ…最後にもう一つやる事があるからな…

第11話：吸血鬼退治のその後と雪風との対話

村から少し離れた平原、そこに俺たちは降り立つ。

「おおお……なんとという事じゃああ……ああ…アレキサンドル…何でお前がああ…おおお……」

そこにいたのは監視の為に召喚したもう1体の銀竜と

そして死体となったアレキサンドルの側で泣き崩れるマゼンタ婆さん。

可愛そうに…村人達から迫害され続けた拳げ句唯一の頼みの1人息子を失ってしまったのだ。

だから…この2人は何とかしたいと思ったのだ。

（死者蘇生…人間相手に実行するのはこっちでは初めてだが）

懐から一枚の尾羽・フェニックスの尾を取り出してアレキサンドルの側で掲げる。

すると、アレキサンドルの体がまばゆい光を放ったかと思うと彼の閉じられた両眼がゆっくりと開いていく。

「んあ……あ、あれ…俺あ一体何を…」

「ひゃあああああ！…！い、生き返りおつたあああ！…！」

むくりと起き上がってとぼけた声を上げるアレキサンドルを見てマゼンタ婆さんは大声を上げて腰を抜かしてしまった。

（いや驚きすぎ…でもないか、こっちじゃ神の奇跡に等しいんだし…っ！か俺もちよつと驚いた…）

モンスターの死骸で試した事があるとはいえ

人間相手に使うのは初めてだったからなフェニックスの尾…

しばらくしてマゼンタ婆さんが落ち着きを取り戻した後、俺は事情説明をする。

アレキサンドルがグールであった事。エルザが真の吸血鬼であった事。

2人を救う為に外面的には村人にはマゼンタが吸血鬼として認識させ家を燃やした事…

意外にもアレキサンドルはグールになっている間の記憶は完全に抜け落ちていたらしく

自分の所為で母親が疑われた事を酷く嘆いていた様子だった。

「で、でもちよつと待てよ…俺は一回死んだんだろ！？それをどうやってあんたは…」

そしてアレキサンドルが至極もつとつな質問をしてきたので

俺は懐からフェニックスの尾を取り出して説明を始める。

「俺は貴族崩れでしてね…家を離れる際に託された俺の家系に伝わる秘宝…不死鳥の尾羽…

死者蘇生の魔力が込められている伝説の品です…それを使用したんですよ」

俺の言葉に2人は息を飲んで手にしたフェニックスの尾を凝視する。…まさかいくらでも大量生産できるなんて知ったら失神すら起こしかねないだろうな

「そ、そんな貴重な品を何で俺なんか…」

「もとより不死鳥の尾羽はあと1つ残っているから大丈夫ですよ…
それになにより…吸血鬼に惑わされ人生を狂わされた…」

「そんなあなた達のような人を放っておけなかつたんですよ…性分
みたくないものです」

「どこか物悲しげな表情を浮かべて（取り繕って？）俺は呟く。

「そんな俺の言葉に感動したらしく、2人は号泣する。

「おお…おお…何という慈愛に満ちた方なんじゃああ…」

「すまねえ…本当にすまねえ…！！俺達みたいな田舎者なんかこ
んな…！！」

「謝らなきゃいけないのは俺の方ですよ…お2人を救う為とはいえ
家を壊してしまいましたし…」

「うん…実際これは本気で申し訳ないと思っている。

「何能が無い俺には、2人をあの村から外面的に抹殺した上で
アレキサンドルを蘇らせる…こんな方法しか思い浮かばなかつたん
だよ。だから…」

「自分で壊しておいて言うのも失礼かもしれませんが…
俺は商人として働いていましたね…安定した仕事が見つかるまで
お2人を俺の屋敷でお世話したいのですが」

「そ、そんな！そこまで面倒見てくれるってんですかい！？」

「お2人の住み場所を壊したのは俺なんです…それにマゼンタさんも
また今回みたいいな事になったら大変ですから…俺の屋敷で療養して
下されば…」

「な…何という…！！すまぬ…本当にすまぬのお…！！私らなん
かの為に…！！」

「……気にしないで下さい。結局は俺のワガママなんですから」
「アフターケアもしっかり整えておく事にした。

「救うだけ救つといて後はシーラネじゃ逆に無責任な気がしたし。
まるで聖人君主を見るような眼差しを向けてくる二人に対して
俺は嬉しさ半分、気まずさ半分といった感じだ。」

本来死ぬべきだったはずの罪の無い人間を救う事が出来た…これは
純粹に嬉しい事だ…
だが…全部を知っておきながらこのような自分についてこさせざる
をえないような
状況にしてしまったのにはやはりどこか気まずい思いを抱いてしま
う。
もつと他の方法を考えるべきだったんじゃないかってね…
これでは力で無理矢理ねじ伏せて自分に従わせるのとあんま変わっ
てないんじゃないかと…

（つて…何かまた余計な事を…やめだやめだ！この2人を救えた！
それで十分だろ俺！！）
ハルケギニアに順応しつつも、何かまだ元居た世界の常識も多少引
つ張っている。
でもまあ…今回は原作を楽しみつつ2人も救えたんだ
もつと明るく考えなきゃな！今回は実に収穫のある任務だったと前
向きな！

*

「……………」
「……………」
「……とか感情をプラスに持っていていこうとしていた矢先……面倒な事が起こった。」

もう1体の銀竜にマゼンタ婆さんとアレキサンドルを乗せて自分の屋敷に送るように指示した後、自分も最初に乗ってきた銀竜に乗って帰ろうとしたら

いつの間にか現れたのか……いつもの無表情のタバサがこちらを見つめていた。

先に帰れって言ったのに……何でここにいるんだよ……まさかとは思
うが……

「……もしかして全部見てたのか？」

「……………（コクツ）」

想像通りのシチュエーションに俺は頭痛を感じて頭を抱えてしまう……
ただでさえタバサには悪感情を持たれているのに

その上更に俺は死者を蘇らせる力のある得体の知れない人物という
点が増えられた……

ひょっとしてまさか……これは一触即発ってやつなのでは……

「もう一度聞く、あなたは何者？」

「前にも言っただろう……俺はただの北花壇騎士の一員にすぎない」

「嘘。死者を蘇らせる秘宝。そんな物を持っている人間が
ただの貴族崩れのメイジな筈がない」

「優秀な水メイジの家系だったんだよ……生命操作やら治療やらの
そういった秘薬秘宝目当てにいろいろあつたんだよ家は……」

「その話、本当に真実？」

やれやれ…本当に面倒くさい事になったなオイ…
悪感情が更に増してるじゃねえかよ…

「…人間誰しも話したくない秘密の一つや二つは持ってるんだよ
お前だってそうだろうタバサ？」

「……………」
言い訳苦しい言葉を言ってみたが
それを聞いたタバサはまた黙り込んだ。

「…ひとつ聞かせてほしい」
「なんだ…？」

「が、しばらくして、タバサがいつもよりどこか感情のこもっている
声で尋ねてくる。」

「私の母様を…俺じゃあないからな」
「…ついにここまで疑いがかかったか…とはいえ
流石にそれは心外だったので俺はスッパリ否定しておく。」

「疑いたいならいくらでも疑えばいいが、見に覚えの無い事まで
どんどん追加されてしまつては流石の俺だつて怒りますよそりや？
「そもそも俺がジョゼフ陛下と交流するようになってから半年程度
しか経つてないんだ」

「お前の家の事情は確かに知っているけど…お前の母親の毒を用意す
るのは」

「時系列的に考えて不可能な話なんだよ。わかるか？」
「……………」

確かに俺も自分から疑われかねないような無責任な行動を何度も繰
り返してきたが
かといつて何でもかんでも俺の所為にされてしまつたらたまつたも
んじゃないんだよ。」

「それに俺は陛下と亡きシャルル様との確執なんかには一切興味が無いの

ガリア王家の内部抗争なんかに首突っ込むつもりなんて毛頭無いから…」

だからお前やお前の周りの人間をどうこうする気は無い…そこだけは信じてくれよ？

俺は単に自分の目的の為に、お前と一緒に任務をこなしているだけに過ぎないんだから」

「……………」

…これだけ言ってもダハサは沈黙を保ち続ける…

まあ、俺の警戒心の無さも原因の1つなんだし…ここでグチグチ争っても…

「…これ以上…私を誑かせると思わないで…そうジョゼフに伝えて…」

「…俺の言った事聞いてた？」

流石にちよつと腹立ってきたぞおい…俺が無害だと知るやいなや俺をジョゼフに恨み言聞かせる為のメツセンジャーにしようってか？

図々しい…お前だって俺やエルザと同類だろうに…

復讐者としての道を歩んでいるくせに…友人には手を出さない…

その割には嘗て自分の家で世話になつた人間には

任務という名目で何の情けもかけない事だつてあつたのだ。

（非合法カジノのハンサムな男…あいつも可愛そうだったなあ…）
こいつもエルザや俺同様に私情で救うべき人間と狩る人間を選んでいるワガママな奴だ。

それだけならまだいいんだが…こいつはあるうことか目的そのものを殆ど忘却して

サイトのハーレム要員へと変貌してから今までの性格が嘘だったみたいに変化する。

そこが俺がこいつを好きでも嫌いでもない位置に置かせる最大の要因だった。

ジョゼフが死んだ後も、今までの汚れ仕事も全て母親と国のためだったのだから

水に流してね…そんな展開が気に食わなかったのだ。

かといって同情する面も無い事は無いし、本来のジョゼフはこのジョゼフと違って

かなり過激な事をしていたのだから。彼女の行動全てが不正等とは言い難いだろう…

だが…そんな好き嫌い云々の問題以前に、今の俺は立場が違うのだ。俺は無能王ジョゼフの使い魔であり

この世界のジョゼフはFF世界に多大な興味を示すだけのただの愉快なおっさんだ。

俺はジョゼフを気に入ってるし、ジョゼフもまた俺に良くしてくれている。

前も言ったが、そんなジョゼフに迷惑をかけてまでそんなタバサを救おうとは思わん。

優先順位が大きく違いすぎるのだ。それなのにコイツはあくまで自分の事しか考えていない…

自分も相手と同類だという自覚が無いと見える…

「…ああそうかい…別に俺を疑おうが、俺が今し方した事をシャルル派の人間に話そうが別に勝手にしてくれて構わないよ…けど」

俺もタバサと同様に冷たい表情を浮かべて反論してやる。

「1つだけ言っておこうかシャルロット？」

「その名前で呼ばないで」

ムツとしたように反論してきたが、俺はくるりと背を向けて低い声で言い捨ててやった。

「現実の世界にはイーヴアルデイの勇者なんか現れやしねえよ」

「！……」

震えるようにタバサが小さく声を上げるのが聞こえたが俺は気にせず銀竜に乗って飛び上がった。

復讐者の立場を貫きながら、本当は勇者なんてものに憧れるか弱い少女

…そんな矛盾ベタベタな性格もあいつを好きになれない要因の1つなのかもしれない。

今後の任務が多少ギクシャクするかもしれないが別にいい。

…というよりアレだな。今回の一件であいつの事段々嫌いになってきたかもしれない。

まあ…奴が協力したくないというのであれば、それに合わせて動くだけだ。

(それに実際…あいつの勇者は…サイトは俺が引き込むんだから…この世界のタバサに勇者なんてものは本当に現れないんだよ…)

第11話：吸血鬼退治のその後と雪風との対話（後書き）

次回からは多分、アルビオン編に入ります。

第12話：野望は広がるばかりなり…商売でも原作介入でもな！

「…俺は思っただよリア」

「どうしたんですかサイガー様？」

「いやあ…ここって本当にハルケギニアなのかねって？」

「あれですか？」シンジラレナイ！』みたいな感じですか？」

「いや…そこまで極端じゃないけど…」

作ってるのは自分なのに側にいた少女に何となく尋ねてしまう。

今更ながら自分って結構ヤバい事をサラッとやってる人間じゃないかと

そんな風を感じてしまつトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

何をまたわけのわからない事を思ったことだろう

俺とリアはリュティスの一画にある広大な施設の建設現場にいる。

その施設名は…そのまんま『ゴールドソーサー』

？で有名すぎる神羅カンパニーが経営している一大アミューズメントパーク。

？のソレと全く寸分違わず一緒というわけではないのだが

凝り性のジョゼフが最終幻想伝の資料を元に
出来る限りオリジナルに近い外観で建設を進めているもんだから
中世風の建物に近代的なキノコ型のアトラクションハウスが点在する
ハルケギニア中探してもまず見つからないだろう
何かよくわからん感じの景観になっちゃったりしてるんですよハイ…

因みに前回救出したアレキサンドルもここで働いてたりする。
他にも仕事口の無い平民がここガリアにも結構いるので
元々の商売で稼いだ俺の貯金を給金代わりに働き手雇ってるわけで。

… 実際薬と武具の稼ぎだけでも地下金庫が溢れかえっていたので
建設人員がかなりいるにも関わらず
普通の平民の稼ぎの3倍程の給金を払えたりしちゃうのだ。
おかげであっという間に人が集まってきて
工事が急ピッチで進んでいくものだから
完成までそう遠くはなかつたりする。

「しかしなんだなあ…こんな娯楽施設の建設までしちゃうと
後々大変そうな気はするけどなあ…」
「いいじゃないですか！私はとつても楽しみですよ！
こんな遊びの為だけの施設なんて初めてですもん！！」
目を爛々と輝かせてリアはウキウキした感じに言っている。

実際今やってる薬と武具の商売も取引先が膨大な数になってきてる
ので
個人経営でやっていくのが限界になってきているのだ。

チートな能力はあれど元は現代日本の一般ピープルな一大学生
商売経営に対する専門的な知識など持つてるわけないのだ。

（もうアレだ：本格的に人員雇って『サイガー商会』
なんて感じのを作っちゃいますかね…）

どの道アミューズメントパークなんていうのを作った時点で
従業員を雇うのは確定事項だったのだ。

ならいつそ、商売全般を商会形式で回して

自分は代表として裏方にいた方が能率的なのではないかと…

…っ！かこつちに来てから本当に凄いよな。

向こうの世界で言えば大企業のやり手社長みたいなもんよ？

知識の提供その他が専門で建設とかはジョゼフその他が主とはいえ
改めて自分に宿ったルーンの力のチートさを実感するわ…

「フハハハ！新記録達成したぞ！やはりシューティングコースター
とやらはやりがいがあるな！」

と、このタイミングでジョゼフが超ご満悦な状態で登場。

（当然身分を偽ってのお忍びである）

「また遊んでたんですかマスター…お好きですよね本当に」

ジョゼフは試験運用中のシューティングコースターを痛く気に入っ
ており

暇を見ては俺の指示の下で建設担当に伝達し

テストプレイヤーの1人として遊ばせている。

…まさかコースターやターゲットまでもが

FF世界の物質として召喚可能だとは流石の俺も思わなかった。当然動力源やら官制やらをハルケギニアでも運用出来るように大幅な改良を施してはあるのだが…

当然このハルケギニア式ゴールドソーサー内限定とし外部には詳しい事情は全て企業秘密にした上で運用している。

ハルケギニア式ゴールドソーサーは

今言ったシューティングコースターの他に

以前紹介した竜の首コロシウムやチョコボレーシングトリプルトライアド用のカードスタジアム

更にはオークション会場やオペラ劇場なども建設予定としているぶつちやけ言えばFFシリーズの娯楽要素集大成な施設となっている。

遊び好きのジョゼフがいろいろ取り揃えようと考えた結果

いっそ全部まとめてしまえ的な勢いで進んでいった結果である。

「このゴールドソーサー完成すれば我がガリアの注目も一段と集まる事であろうよ！」

平民貴族を問わずして入れる娯楽施設…実に素晴らしい事だな！」

「でもまさか…本当にここまで形になるとは

私も思ってたませんでしたからねマスター」

「それでもやっぱり素晴らしい事だと思いますよ今のハルケギニアにサイガー様やおじ様のような考えの人はほとんどいないでしょうし…

きつとたくさんの人達に喜んでもらえる筈です」

当たり前だがゴールドソーサーは貴族平民双方が遊べる施設として
いる。

入園の際に杖を預かるようにするし

万一トラブった際にも警備兵代わりに鉄巨人を配備するのでトラブ
ル対処も万全

この施設は純粹に誰もが遊べる樂園として君臨する予定なのだ。

あくまでも表向きであり本当のところは

俺とジョゼフが楽しみたいが為に作ったようなものなんだが

せつかなのだからハルケギニアの人々にも楽しんでもらいたいし。
世界中…なんてアホ臭い事をのたまう気はないが

せめて自分の周辺にいる人々くらいは気づかっても面倒は起きない
だろうしね…

あとつけ加えておくとリアはジョゼフの事を普通におじ様とか呼ん
でたりする。

以前も言ったがリアには俺の秘密は全て暴露しているので

(全てと言っても出身は東方って事にしてはいるが)

ジョゼフも俺がリアを助けた経緯を聞いて

お前がかくまっている人間なら無碍には出来んと

俺と同じようにフランクな態度で接してたりするのだ

最初はガチガチだったリアも今ではすっかり打ち解けて

家族ぐるみな付き合いになってたりする。

その所為で「近頃無能王は幼女遊びにお熱」なんていう噂が

リュティス内でチラホラ囁かれてるなんていう裏話もあつたりする
が…

*

それから数日経って、今は日が傾き始めた時間帯。俺は銀竜に跨って夕暮れ空の上をさっそうと飛行している。行き先は…トリスティン魔法学院である。

別に北花壇騎士の任務でもないし、学院とアポを取ってるわけでもない。

ただ、いい加減サイトやシエスタといったいずれはこつち側に引き込むつもりである人間ともうちよい深く繋がりを作っておこうかと思ったのだ。

…早い話が押しかけみたいなものなんだが今はシュヴァリエ用のマントも装着してるし今となつてはハルケギニア中で有名な

トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーの名前を用いてトリスティンでも有名な魔法学院を一目見てみたかったなんて感じに言い訳すればまあ大丈夫だろうし…
或いはオスマンに「となりのカノジョ」でも献上すれば一発で気前よく入れてくれそうな気がするしね…

(サイトと話もしたいし…生シエスタも見てみたいしなあ…)

普段の俺にしてみれば随分と無計画な行動ではあるんだが
好きな人間気に入ってる人間は
とことん気にかけるという自分の性格が今回は抑えられなかったの
であつたとさ…

*

………が、この世界に来て以来、どうも俺は
ご都合主義の神なんか目をつげられているらしい…

「あー…大丈夫でしたか皆さん…というより…」

「………」

「あらタバサ？その人の事知ってんの？」

「あ、あんた！確かあの時武器屋にいた…」

「あ！アンタはあん時の！」

「ふう〜…何はともあれ無事で何よりだ…」

「おやルイズ？知り合いかい？」

…様々なリアクションが俺に対して飛んでくる。

のんびりした気分で見下の風景を眺めてたのだが

その時ふと、馬に跨っている一行を襲う夜盗の群れが目に入ったので銀竜にツイスターを吐かせてまともに撃退したのである。

その上で、地上に降りて馬の一行の顔を見たらあらビックリ…

サイトと金髪のイケメン貴族…ギーシュ・ド・グラモンだったのだ。

しかも騒ぎを聞きつけて先の方からグリフォンが戻ってきて

それに跨るルイズと髭面ロリコン子爵…ワルド

更には本来この夜盗の集団を撃退する筈だった2人の人間

タバサと褐色赤髪でナイスバディな女性

キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェル

プストー

(本名クソ長え…)とシルフィードまでやってきて何ともカオスな状態になってしまったのだ

つまりはアルビオンの手紙奪還任務にまんまと鉢合わせたのだ。

もうね?ご都合主義もいい加減にしろよって思いたいわ。

いや…俺が勝手に学院行こうとしたからありえたかもしれないが…でも偶然にしたってちょっと…ねえ?

…それとも深く考えすぎなのだろうか…

「助けてくれたのは感謝しよう。でも君は一体何者だね?」

しばらくして気まずい空気を紛らわすかのようにワルドが俺に尋ねてくる

「…私はトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーという者です」

右手を前に出して貴族式の挨拶をしておく。

すると、やはり知られていたのか意外そうなりアクションが返ってくる。

「ほほう、近頃新製の秘薬や武具の商売で名高いかのミスタ・サイガー殿だったか…こんなにも若い青年とは驚いたな」

「恐れいります…」

値踏みをするかのような視線を向けてくるワルド

因みにワルドは…うん、あんまり興味ない。

ただサイトを引き込む上で障害になるのは間違いないだろうから敵対は必至だろうけど。

「あらん？最近有名なやり手商人様だったの…ふん…」
キュルケが興味深そうな視線を向けてくる。

「体つきも…顔もなかなかいい男じゃない
そっちの銀竜も勇ましくて素敵よ」

「は、はあ…どうも」

お前は結局そという面で他人を見るんかい。と俺は内心で呆れる。
この場にエドガーあたりがいたらノリノリだったかも…

キュルケはどちらかといえば好きなキャラだが
サイトやシエスタに比べれば優先順位は低い。

何より今の俺は彼女とセットとも言えるタバサに嫌われているからな。

無理にお近づきになるうとは思わない。

「な、何よ…別に助けしてくれなんて頼んだ覚えは…」

何か不満そうに後ろでルイズがぶつぶつ言ってるがどーでもいい。

「…か偶然…というかロリコン子爵の裏工作とはいえ
助けてやったんだから礼の一つくらい言えんのかね？」

成り上がりの貴族如きに助けられたのが気に食わないってか？

「よすんだルイズ、彼に助けられたのは事実だ」

「けど…ワルド様ならお一人でも…」

「いやいや形はどうあれ助けてくれた相手に敬意を払うのは貴族としての礼儀だよ。僕のルイズ」

とか思ってたらワルドと一緒に顔を赤らめて

ラブってコメリ始めるしよ…ごちそーさまだよ

どうせ裏切られるんだけどな！！

その後キュルケがワルドを口説こうとしたり

ワルドがそれを軽く受け流したり

それによってルイズとキュルケが口論を始めたが…

まず俺はその騒ぎからこっそり抜け出して

先ほどから疑い深げに俺を見ていたタバサの方へと近づく。

「目的は？」

「銀竜で飛んでる途中で夜盗に襲われてたから偶然助けたただけだ」
近寄るなり質問してきたので簡単に返す。

「お前の方こそ何してたんだよ？」

「…彼女の付き添い」

そう言っただけはルイズと口論してるキュルケを指差す。

それだけ聞いた後、俺は続いてサイトの方へと歩み寄る。

「やあ、また会ったな」

「…アンタ確か前に言ってたよな…俺と…」

「まあまあ、その話は後で詳しく…な？」

どこか落ち着かない様子で話かけてくるサイトを両手を挙げて俺はやっぱりと制する。

何分原作はまだ序盤だ。ルイズの待遇もまだ低い方だろうし望郷の念も色濃い状態だろう。そんな折に自分と同じ境遇の人間と出会えたというのはサイトにとっては思わぬ幸運というやつだろう。

ならば…それを利用させてもらうまでだ。

最初は流石に驚いたけど、これは幸運だったと考えるもいいかもし
れん

サイトを説得する上である種重要ともいえる

手紙奪還任務に同行出来るというのは寧ろ大きなメリットだ

偶然だったのでアイテムの蓄えが少ないのがチト不安だが

睡眠を取れる時間も何回か存在してるので

多少強力なアイテムを召喚するのも問題は無い筈だ。

ワルドは風のスクウェアメイジ：恐らくは今までの中では一番の強敵なので

万一の備えは出来る限りしておいた方がいい。ついていく理由なんてどうとでもなるしな。

原作でもお忍びとか言っておきながら

成り行きでキュルケとタバサが普通に同行していたのだから今更俺1人が増えたところで、アルビオンへの

商売へ行く途中だったし助けたのも何か縁：だから同行するみたいな適当な理由づけしときゃいい。

何よりサイトは俺にとって親交を深めておきたい人物

今までよりも多少の無茶は覚悟の上だ。

俺というイレギュラーが存在する以上

サイトは物語の主人公なんかではなく

俺の視点で見れば自分と同じ地球の人間

彼にハルケギニアの常識全てを受け入れる苦痛などさせる必要は無い根拠の無い発言かもしれないが

少なくとも今のルイズより俺の下の方が

サイトが安全かつ楽しく暮らしていけるという自信がある。

この奪還任務中に上手い事懐柔して

こちらに引き込む手筈を整えておくとしよう。

レコンキスタやらウェールズとかのいざこざは

：まあ任務中に追々考えればいいだろう。

とにかく今の俺にとっての優先順位は

サイトをどうするか。これに尽きるのだから。

あ、でも風のルビーはどさくさ紛れに俺が頂いておこうかね？

後々いろいろと役に立つかもしれないし。

ウェールズも俺にとってはどうでもいいサイドの人間だしな。
何よりあいつ助けたら色ボケアンリエッタが喜ぶだろうし…

(…じゃあ行ってみますかね…原作介入アルビオン任務編に…！)
内心で俺はそんな感じにほくそ笑んでいた。

第13話：アッって本当は興味津々のように見えるんだけど

「月明かりの下でワイングラス片手にほろ酔い気分…いい感じのシチューエーションだよねえ…」

目の前の丸テーブルに置かれた透明の液体の入ったグラスを片手で弄びながら、

俺はラ・ロシエールの街並みをまじまじと観察する。

「…これで座ってる男がイケメンだったら絵にもなるだろうに…」

こんな一般ピープルまっしぐらなフツメンじゃあ絵になる物もならないわな…」

そんな事を呟いて自嘲気味に笑いながらワインを一気に飲み干す。

流石に貴族用の宿『女神の杵』亭で出している品なだけあって、

その味はなかなか良質なものだ…

ちびちびと飲んでるつもりがもうワインボトルが3分の1程減っている。

こっちに来てからやたらとワインにハマッているのである。

おなじみの冒頭の呟きからどうも失礼、

トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

結局その後俺は手紙奪還部隊と一緒に港町ラ・ロシエールへと来ていた。

『ちょうど自分もアルビオンで用があった』

『ここで会ったのも何かの縁だし、行き先が一緒ならついていきましょー』

とまあこんな感じにいろいろ適当な理由立てをしてみたら、意外にもあっさりワールドがそれを快くOKしてくれたのだ。

タバサの奴に「あなたはその銀竜がいる」と疑い深げに睨まれたりしたんだが、

途中でキュルケが「旅のお供は多い方が心強いじゃない〜」とか言ってくれたおかげで、

上手い具合に誤魔化せたのは運が良かったというべきか…

…ワールドが裏で俺に対してどんな思惑を張り巡らせている知らないが、

同行の許可が貰えるなら俺は素直に享受した方が今は得だと思ったわけで。

だが、油断は禁物。今回の偶然は俺がちよつと無理強いをしていた途中で、

偶然発生したようなものだ。故に備えは今の内におこななければならぬ。

原作通りアルビオンへ出発するのは二日後なので

それまでに出来る限りのアイテムを取り揃えておかなければ…

因みに部屋代は持ってきていた自分の財布から自腹で払っている。

何というか…ワールドや、特にルイズの世話になるのは個人的に嫌だし…

「まあこの2つがあればワールドには問題無しかな…」

そうやって俺が見つめているのは八角棒とさんごの指輪（？仕様）だ。

八角棒の方は水・風属性を吸収し、尚且つ自身の水・風属性攻撃を

強化するるロッドで、

これは本来の自分の杖であるとも言え、十分誤魔化しが効く。一方さんごの指輪の方は雷属性を吸収するアクセサリーだ。

…つまり風のメイジであるワルドは風と雷の攻撃が効かない時点で、魔法による攻撃に関してはほぼ詰んでいるという事になるわけで。

だがあいつの場合は魔法だけでなく、肉弾戦もかなりの腕前だったので、

この2つだけで万全とは言えない。まあ後はプロテスやヘイスト使
うなりして、

強力な魔法を使って先手必勝を決めるといった感じで上手く立ち回
るとしよう。

現に今、さんごの指輪と八角棒を召喚した事によって

アイテム召喚の代償としてやんわりと頭がクラクラしているのだ。

それに下手に強力すぎるアイテムを召喚してワルドやタバサに、

いらぬ誤解を生んでしまうのも好ましくないと見える。

いや…あいつの魔法を無効化するだけでも十分向こうにとってはチ
ートかもしれないが、

とにかく今回は後々の事も考えて温存していく方向を取る。

場合によっては追加でモンスターを召喚したりする可能性も出てく
るかもしれないしね…

「じゃ後はハイポーションとエーテルを数本用意するとして……開
いてるよ?」

扉の向こうで気配を感じたので俺は軽い感じに声をかける。

何分北花壇騎士の任務をこなしているおかげなのか、

多少の気配くらいなら読めるようになってたりするんだよね…

「……………」
「話したいってのは当然だよな？俺がこっちから行くことと思ってたけど…」

親しい友人を招き入れるかのようなフレンドリーな声色で俺は語りかける。

部屋の扉の開かれた先には、真剣そのものな表情を浮かべたサイトが立っていた。

*

部屋の丸テーブルに座って俺とサイトは向かい合って話を始める。

「さーて…こうして顔を会わせる事が出来て光栄だね？同じ地球人の同士よ？」

「やっぱり…あんたも俺と同じで地球の人間なんだな！！」
まるで長年探していた人物に漸く巡り会えたといった感じに、興奮して落ち着かない様子でサイトは喋る。

「ま…結局のところ俺もお前と同じ境遇って奴だよ」
そう言っただけ俺は服の襟元を下に下げ、胸元に刻まれたFFルーンをサイトに見せる。

「…それは…俺と同じ…！」

「やっぱりお前もそうだったか…因みにお前はどこに刻まれたんだ？」

勿論俺は知っているわけなんだが、怪しまれるといけないのでこう尋ねておく。

すると、サイトは黙って左手を差し出してそこに刻まれたガンダールヴのルーンを見せる。

「ガンダールヴ…武器を使いこなすやつか…」

「やっぱりアンタも知ってるのか？」

「ああ…俺のマスターはその辺の事情に詳しいからな」

「マスターって…アンタの主人はどんな人なんだよ？」

「男。40代くらいのお髭のかっこいいダンディーなおじ様だよ」

「それってつまり…ウゲエツ…」

何かを思い出したかのように口元を押さえ顔色を青くするサイトを
見て、

俺はつい苦笑を浮かべる。うん…あれは確かに今でも忘れられないわ…

「…つと悪い悪い、アンタは胸元なのか…なあ、一体どんな能力が
使えんだ？」

しばらくしてサイトが再起動して、興味深そうに俺の能力に関して
尋ねてくる。

俺はというと黙って右手を差し出してある一本の特殊な剣を召喚す
る。

「これが何かお前にわかる？」

「これって…ガンブレード!?…いやちょっと待て!?これFFじ
ゃんかよ!…」

「ああ知ってたか…それは何よりだよ…」

…どうやらサイトのいた地球にもFFは知られているらしいな。

「なあなあ!これって本物か!?うわすげ〜…憧れてたんだよなあ

コレ…」

獅子の彫刻が刻まれたガンブレード・リボルバーを、

サイトは玩具を貰った子供みたいに目をキラキラさせて眺めている。「つまりこれが俺の能力…FFの魔法や武器、更にはモンスター…そういったありとあらゆる物を召喚するのが俺の力だ」
「マジかよ…くっそ」羨ましい…何で俺にそれが刻まれなかったんだ…」
今度は憎々しげな表情を浮かべて俺を睨んでくる。感情表現豊かな奴だなオイ…

その後俺はサイトと様々な会話のやり取りを行う。
まず最初にサイトの地球の総理大臣や外国の大統領の名前を聞いたりなんかした。
すると意外な事に俺の住んでいる地球のソレと同じ名前が挙がったのだ。

…実際問題何が一番怖いって、俺の住んでる地球とサイトの住んでる地球、
その2つが全く一緒だとは到底思えなかったからだ。
仮にいつの日か帰る事になったとしても、その場合どちらかがそれをあきらめるハメになる。
…その可能性が10割でないとわかったとはいえ、0という確信も無い。

帰る手段がある…この一言はサイトにとっては一番のイサとなる。だがまあ当分帰る予定はないんだが、というか現実性が無い。ぶっちゃけた話ロマリアのイケメン2人にはあんま関わりたくないし他の秘宝を使ってジヨゼフが世界扉を使えるようになるかもわからない。

だが実を言っちゃうと、俺は帰れるなら帰りたいたは未だに思ってるけど、

もし帰れないならそれはそれでまあ…仕方ないとは思う。

なんというか…大分こつちの世界に慣れてしまったっていうのもあるのかな…

俺がいなくなればリアも悲しむだろうし…何よりジヨゼフが全力で阻止してくるだろうしね…

こつちの世界で築いた物が大分大きくなっているというやつだ…

なのでとりあえず今は確認だけ。そんな遠い先の事など追々考えればいい。

慎重に事を進めるべきは目の前の事象だ。

サイトを俺の下へと引き込んで、如何にこつちでの生活を楽しませるか、

どうすれば俺に信頼を持ってくれるか、ここに尽きる。

「…それでさあ、あんな可愛い顔してんのに中身は最悪なんだぜ？」

「ふーん、どんな感じに？」

「飯は床で食えなんて言いやがるし、寝る時も床…」

「こちらら命がけで戦ってるのに碌な褒美もくれやしな…」

「うわあ…本当に災難なんだな」

「全くだよ…俺もトオルのような良識のある主人に召喚されたかつたぜ…」

…だが、それもこのタイミングならどうやらそれほど苦労はしなさそうだ。
サイトは俺が勧めるワインをグビグビ飲みながら、
普段ルイズにどんな扱いを受けているのかを悲壮感たっぷりに説明していく。

この時期のサイトはルイズに対して淡い恋心が芽生え始めている時期なのだが、
残念ながらその恋心の種は俺が目が出る前に刈り取らせて貰う予定なのだ。
というより、以前俺が「同郷者との出会い」という種を植え付けさせてもらったからな。
後はそれを如何に花開かせるかにかかっている…って何だろこのくっさい台詞は…

何はともあれ原作ではサイトとルイズが互いに相思相愛になるまでに、
かなりの時間を要していたのだ。ルイズに対する不信感が消えきっていない、
物語序盤の今ならサイトの心をグラつかせるのは簡単な事だろう…だから…

「な？酷い話だろう？」

「うん、確かに酷い話だなあ…だったらさあサイト」

俺はのっけから爆弾発言をかまさせてもらうことにした。

「俺と一緒に来ないか？」

「え……?」

当然の事ながらサイトはキョトンとして固まってしまう。

しばしの時間流れる沈黙、そして俺は再び尋ねる。

「どう?悪い話じゃないと思うんだけど?」

「……………興味ないね」

「クラウド乙、っーか嘘バレバレだぞ?冷や汗ダラダラじゃねえかよ」

こんな場面でもネタを出してくるとは…サイトってやっぱり軽い男なのかも…

「いや、でもよ…いきなりそんな事言われたってさあ…」

「何も今すぐには言わないよ。でもな、お前が主人に受けてる仕打ちを聞いたら

同じ地球の人間として黙って放っとくのは忍びないからさ?」

明らかにサイトは迷っている様子である…

やはり中身はアレでも見た目に惚れてたから、即断即決は難しいわな…

それに中身がああでも、一応形式的には今まで最低限自分を養ってきたんだろうし…しかしな…

「あのさ、よく考えてみるよサイト?俺たちは普通に考えれば

いきなりこの世界に呼び出された、悪く言えば拉致られたんだぜ?

いきなり見ず知らずの奴に「自分の為に一生働け!」なんて言われて

納得するような奴なんて相当の馬鹿か、あるいはマゾヒストしかい

ねーよ」

「トオル…けどここは地球とは違うんだぜ？俺だってそのくらいは…」

「確かにこの世界は異世界だよ。でも俺達には俺達の常識ってのがある

俺も大分こつちに順応しているとはいえ、地球人だっていう認識まで捨てるつもりは無い

自分から拉致つといて飯と睡眠は床、その上掃除洗濯といった強制労働

酷い時なんか自分の為に命張って戦えなんて…こんなものどう考えてもおかしいだろ？」

「それは…そんな事言ったらお前だって…」

「生憎、俺のマスターは偶然が重なった影響があるとは言え俺を奴隷のようにこき使ったりはしていない。だから俺も

マスターの為に自分の力を使って尽くそうって気持ちになるんだよ」

実際問題その通りなのだから。例え俺にこの力が宿ったとはいえ、もしジョゼフが原作通り俺を道具のように扱おうとしていたのなら俺は多分途中で逃げ出すか、はたまた捕まって殺されていたのがオチだったろう。

力の一部さえ見せてくれればあとは自由にしていよ…そうやって言われたから、

俺もそれだけ好待遇なら、何もしないわけにはいかないと思ってジョゼフの注文をいろいろと聞く気になれるのだ。

それと比べてルイズはどうだ？確かにあいつにも今まで失敗ばかりで周りから蔑まれてきたという苦痛はあったろう。

だが、それを召喚した使い魔に八つ当たりするのは、俺の中ではどう考えても悪だ。

平民は貴族に従って当然。

その考えはハルケギニアでは常識かもしれないが、はつきり言って俺の中ではそんな常識などクソ食らえだ。

あの日、リアをケバ貴族から助けたのもそういう考えがあったこそだ。

サイトはそのハルケギニアの常識を覆すだけの、十分な力と後ろ盾が無いだけなのだ。

使い魔にするな。とは言わないが最低限の待遇は召喚したその時から用意するのが礼儀である。

いや…その辺は三巻辺りから変わってくるが、俺に言わせりゃ気づくのが全然遅すぎる。

それに…俺だって1人くらいは同じ知識を共有する気の合うダチが欲しいのだ。

サイトというキャラは小説を読んでも上ではとても気に入っていた。

流されやすくしてお調子者で、しかし決める時は決める男…

友人になればきっと楽しく話せる筈だ。

ルイズが嫌いつてもあるからこんな強行手段を使ってるのもあるが、

ジョゼフもリアも俺を募ってくれる大切な人達とはいえ、

彼らはやっぱりハルケギニアの人間だ。

ジョゼフはガリア国王でリアは俺が保護してる養子のような感じだ。わけ隔てなく接してくれるとはいえやはり視線や立場の違いはある。

同じ地球の人間…それが側に1人くらいいて、

何気ない会話ができる。そんな関係の友人として俺はサイトを迎え入れたい。

ルイズの下で理不尽な仕打ちを受けるくらいなら、

俺がFFルーンの手でサイトに好待遇をもたらし、

同じ地球の人間として気の合う関係を築いていきたい…

それがサイトを引き込みたい理由と言える。

「他の使い魔とメイジの関係を見てそうは思わないのか？」

確かに人間の使い魔なんて俺とお前くらいなもんかもしれないが
使い魔になった生物は主人から愛されて、ちゃんとした待遇を受けている。

お前の話を聞く限りじゃあその辺の野良猫以下じゃあないか？

そんなんでいいわけないだろサイト？」

「トオル……」

「はつきり言おうか？多分お前このまま行けば……いずれアイツに見捨てられるか
お前自身が人として大切な物を失うかしかないぞ？」

「うつつ……」

明らかにサイトが迷っている……どうやら相当効果ありみたいだな……
しかし、今はアルビオン編という、原作の中でもそれなりに危険な
イベント中

あんまり刺激しすぎて、サイトに変なしこりが出来て

ひよんな事で大怪我でもされたりしたらたまんないから……今日はこ
のくらいにしておこうか……

「……ちよつと熱が入りすぎたみたいだな、今日はこのくらいにしと
こう」

「……ああ」

俺がそう言うと、サイトは複雑そうな表情をして立ち上がる。

離している間にワインも大分入っていたので足下がおぼつかない。

「じゃあまあ……最終的に決めるのはお前だからな、よく考えとい
てくれ。」

アルビオンに行くまでは一緒だから、俺も周りに怪しまれないよう

に協力してやるから」

「ああ…ところでコレ…」

サイトは手に持っていたガンブレードを見せて尋ねてくる。

「やるよ。お近づきの印ってやつだ」

「マジで！いいのかよ!？」

「更にもう一本こいつもプレゼントだ」

そう言っただけは更にもう一つガンブレードを・オートマ式のハイペリオンを召喚する。

「生憎俺は召喚するだけで武器の取り扱いは出来ないからな…」

ガンダールヴのお前が持ってた方がよっぽと価値あるよ」

「いや〜マジで!?!?こんな高い物貰っちゃって…」

「気にすんなって、いいじゃないか!ただ だし」

「…フリオニール乙」

ここでもノツてくるサイト。意外とコイツも詳しいな…

「とにかく、その気になっただらまた俺に相談しな。出来る限り力に

…」

「いや〜!まさかガンブレードが使えるなんてなあ!異世界も捨てたもんじゃねえな…」

…さっきまでのブルーな感じはどこへやら。

サイトはガンブレード2本に夢中になってそのまま部屋へと戻っていった。

「…まあ、とりあえずは第一段階完了って感じで…いいのかな?」
そう言っただけ俺もベッドに入って横になった。

第14話：たまにはハメを外してもいいじゃない！チートだもの

「昔……、といつても君にはわからんだろうが、かのフィリップ三世の治下には

ここでよく貴族が決闘したものだ」

「はあ……」

長つたらしい前口上乙だよ。本当ルイズの気を引くのに必死なんだな。

背中にデルフを背負ったサイトは物凄いやる気なさそうな顔してるし…何か右頬腫れてるし…

ロリコン子爵とサイトの決闘開始5秒前！！

そんな感じで始まります、トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

時間は翌日の朝早く。原作とおりワールドがルイズの気を引くためにサイトに対して決闘という名の一方的リンチを始めようとしていた。

「古きよき時代、王がまだ力を持ち、貴族達がそれに従った時代…」

ワールドが長つたらしい前口上を述べているが、

俺に言わせりゃ「壁とでも話してるよ」な感じだ。

というか実際、今俺の隣にいるサイトも同じような気持ちだろう。

（何か面倒臭い事になってんなサイト…というかガンブレード使わ

ないのか?)

ひそひそ声でサイトに尋ねてみると、途端にぶすつとした表情になる。

(…没収されたんだよルイズに…)

「何勝手な事してんのよ！剣は私が買ってあげたでしょ！」ってどやされて…)

(うわあ……)

成る程：右頬が腫れているのはその所為か…

あの高慢ちきなまな板娘が…それくらいで目くじら立てるなよ。

実際問題、ルイズの方もこの頃からサイトの事を意識し始めているので

ある意味無意識の独占欲ってやつなのかもしれない。

だが…そんなまわりくどい愛情表現など、悪いが俺には理解できない。

あんまりね…なんというか好きじゃないのよ「ツンデレ」は…

結局は嗜好の違い…その一言に尽きてしまうのだろうな。

そんな感じでいろいろ考えていると…介添人のルイズがやってくる。

「ワールド、来いって言うから来てみれば、何をする気なの?」

「彼の実力をちょっと試したくなってね」

「もう、バカなことはやめてよ。今はそんなことしている時じゃないでしょ?」

「そうだね、でも貴族というのは厄介だね、強いか弱いかがそれが気になる」と

もう、どうにもならなくなるのさ」

図々しいっすねえ…素直にルイズの気持ちを引き寄せたいって言やいいのに…

と、全てを知りえている俺はそんな事を思ってしまうのだ。

「やめなさい。これは命令よ?」
サイトにルイズが呼びかけるが、サイトは聞く耳持たずだ
「何なのよもう! 昨日からロクな事が起きないじゃない!」
…その昨日のロクでもない事には俺が渡したガンブレードが含まれ
てるんですかルイズさん?
…アホ臭い…だから嫌いなんだよこついうすぐに周りに当り散らす
奴は…

*

そんなこんなで決闘が始まる。今のサイトの心境がどうなってるかは計り知れんが、
今のところはサイトが突っ込んで行ってワールドが軽くかわしている
という感じだ。

(決闘に茶々入れるのは…やめておくべきだな…心痛むけど…)
サイトにもプライドというやつは当然あるだろう、結果がわかって
いるとはいえ、
ここで下手に手を出したりしようもんなら逆にサイトからマイナス
評価を受けるだろう。

心苦しいがここはちょっと我慢だ……

「相棒いけねえ！魔法が来るぜ！！」

しばらくしてデルフが叫ぶと、ワールドがエア・ハンマーをサイトに放つ。

巨大な空気の塊が横殴りにサイトを吹き飛ばして近くの荷物の山に激突する。

「勝負ありだ」

ワールドがどこか勝ち誇った感じにサイトに言い放つが、俺には正直関係ない。あいつ……額から血が出てるじゃねえかよ……グツタリしてるし……

「サイト大丈夫か！？」

「く……あ……」

どうやら体が痺れて動けないらしい……本当にすまないなサイト……

「ケアルガ」

右手を翳してこっそりと治癒魔法をサイトにかける。

すると、傷がみるみるうちに消えていき、サイトの表情にも覇気が戻る。

「……楽になったか？」

「ああ……すまないなトオル……やっぱりお前凄えよ……」

礼を言ってくるサイトの表情はやはりどこか浮かない感じだ。

当然か……こっちに来てからの初めての完膚なきまでの敗北だもんな……ここは下手に言葉をかけないでそっとしておくべきだろう……

「オメエ……やっぱりその魔法は……」

サイトから離れる直前でデルフが何かを呟いていたが、今はもういい…
とりあえずはまた先の事に関して動かなければ…

*

さて、あつという間にまた夜がやってくる。

俺は今一階の酒場で、キュルケやギーシュとは離れた位置で1人ワインを煽っている。

出来るならお気に入りキャラの1人であるギーシュと接触したかったが

側にタバサもいるので今回はあきらめておく。ちょっとリスクが大きいので。

(フーケ……いや、マチルダの襲撃か…)

今考えているのは今夜襲ってくるであろうマチルダ・オブ・サウスコーダの事だ。

トリステイン魔法学院、院長オールド・オスマンの秘書ミス・ロングビル、

そして巷で有名な怪盗・土くれのフーケと、二つの裏の顔を持つ人物。

彼女の父親がティファニアの父親であるモード大公の直臣であり、
そういう経緯でティファニアと彼女の母親を匿っていた結果、
家名取り潰しを受けて裏の世界に堕ちたという、なかなか複雑な事
情を抱えている。

正直言えば俺はマチルダの事はお気に入りのキャラとして見ている。
いろんな方面でだ。どちらかといえば姉御肌な性格も好きだし。
怪盗やら秘書やらと、勧誘した際にいろいろマルチに才能を発揮し
てくれそうという意味でも、
そして何より…結構悲惨な道を歩んできているから救ってあげたい
という気持ちもある、
それは当然ティファニアも含めてだ。

彼女が怪盗をやっているのは趣味も多少あるが、根本は故郷のティ
ファニアを養う為だ。
だったら、その為の救いの手を俺が差し伸べれば…とは思っただけ
ど、
マチルダって結構意固地な面もあるからなあ…あまり樂觀視はしな
い方がいい…

(ちょっと仕方ないけど…またちょっと強引な手段を使うしかない
かね…)

今回の任務中にサイトの心を掌握しておく必要もあるので、
マチルダの勧誘も大切とは言え、あまりじっくりは手間をかけては
いられない。
脅迫じみた展開はあまり好ましくはないんだけど…仕方ないかも…

「やっど…」

身の振り方がある程度決まったので、俺はサイトがいるベランダへと向かう。

「……たなんか一生そこで月でも眺めてればいいのよー!」
「ん…?」

ベランダの近くに来たところでそんな涙声が聞こえたと思うと、ルイズがこちらへとノシノシと歩いてくる。

「つと…」

「邪魔よー!」

んな…ちよつと肩がぶつかつたくらいで…まあ今のは仕方ないか、なんやかんやで今のルイズの心境も不安定だからな、俺には関係ないが。

「サイト……大丈夫か?」

「トオル……」

サイトは泣いていた…ワールドに負けたのがやはりシヨックだったか…見ててちよつといたたまれない気持ちになるが、やはりあそこで手出しをするのはな…

「俺…もう本当にわけわかんねえんだ…ガンダールヴの力があつたつて…」

それは無敵じゃないんだし…ルイズだって俺の事なんか全然気にか
けやしない…」

「……………」

「今はお前が羨ましいよ…その力で何でも出来て…ご主人様もいい人らしいしよ…」

「……サイト」

浮き沈みが激しい奴だなとは思ったけど、このまま落ち込ませてても仕方ない。

俺は落ち込むサイトの肩にぽんと手を置いて語りかける。

「負けて悔しいと思うのは当然の感情だよ、恥じる事じゃないさ」「けどよお……」

「ルーンの力つたって無敵じゃないんだから、人間誰しも限界はあるよ

寧ろ俺はお前が羨ましいくらいだよ武器を自由自在に操れて

真正面から敵に立ち向かっていけるんだから……」

「……お前が言っても説得力ないって」

「あら……」

逆に不貞腐れてしまった……うーん……やっぱり俺、落ち込んだ人間を慰めるとか

そついうのはちょっと苦手みたいだな……このままじゃ迂闊で残念な結果になりそうだ……

「ま、まあ……サイト。お前はどうしたいんだよ？」

「……正直言って悩んでんだよ……ルイズの事守ってやりたいとは思っけど……」

別にあのワルドがいるならいいんじゃないかってさ……」

「昨日言っただみたいな仕打ちを受けててもか？」

「そりゃ……お前と一緒にいつたら多分楽になれるんだとは思っぜ？

けど……あんなヤツでも一応俺のご主人様なんだよ……」

ましてや今は大事な任務中だし……そんな場面で逃げんのは薄情じゃん……」

「ほつ……」

どうやらルイズの事はまだ踏ん切りがつけきれないご様子みたいだね。

だが…俺と一緒に来るというのも満更では無さそうみたいだし…

…この局面で完全に引き込むとなると、ちよつと骨が折れるかもな…
やはりあれか？ルーンの強制力も影響している結果なのだろうか？
今はルイズが虚無に目覚めてないからこの程度で済んでるかもしれない…

この先引き込む際にはその辺りも気にしないと…

つーか考えてみたら俺のジョゼフに対する感情はどうなんだろう？
俺は結構自由きままにやってるつもりであるが、

それが無自覚な可能性もあるしなあ…

まあ、別に不愉快な感情ではないから今深く考えるのはよそう。

「…まあ俺が言えるのは1つだよ」

「……？」

「昨日も言っただけで決めるのはお前だ、ダメだと思っなら

今は一生懸命任務に打ち込めばいいし、嫌になったら俺のところに来ればいい

別に俺は無理強いしないよ。お前が後悔しないようにすればいいさ」

「トオル……」

「そうやって落ち込んで悩んでたら時間がもつたいないしな

どっちみち選択肢はやるかやらないか！この2つに尽きると思うぜ？

まあ…俺の所に来るってなら俺は喜んで歓迎する！これだけは言っ
とく」

「…うん…あんがとなトオル…ちよつと元気出た…俺、もう少し頑
張ってみるよ」

「気にするなって、俺とお前は数少ない同郷者なんだから」

うおう…何とかいろいろまくし立ててみたらサイトが元気出たみたいで良かった。
好感度も上がったっぽいし…これは結果オーライかね……………ってあらららららら…!!

「ちよっ…待っ…デカイなこれ!!」

「フーケ!!」

「感激だわ!覚えてくれてたのねえ!!」

まるで空気呼んだかのごとく絶妙なタイミングで巨大ゴーレムが出現

その肩の上で緑の長い髪を靡かせているのはご存知、マチルダさんだ。

っつてうおおおお!!…言ってる側からゴーレムの拳があああ!!…

「と、とりあえず下に下りるぞサイト!!」

「ああ…!!」

サイトと一緒に回れ右して全力失踪、直後背後で何かが壊れる音がしました。

*

しかし、1階は1階で修羅場と化しているわけだよこれが。
店中傭兵だらけだし、暗がりからは別の傭兵達が矢を飛ばしてくるし…
応戦しているキュルケやタバサ達もギリ貧といった感じだ。
まったく…おマチさん用意周到すぎっすよ…

「やっぱりこの前の連中はただの物盗りじゃなかったのね」
「あのフーケがいるということは、背後にアルビオン貴族がいるの
だろうな」

敵の攻撃を回避しながら、ワルドとキュルケがやり取りしている。
その間にも傭兵の攻撃が飛んでくる…ちくせう…
花壇騎士の任務である程度慣れてるとはいえ、
本ちゃんの傭兵と戦うなんて、やっぱり嫌っすよ…

「いいか諸君、このような任務は半数が目的地に辿り着ければ成功
とされる」

と、ここでワルドが原作と同じ通りの持ちかけをしてくる。

「…わかりました。ならミスタ・ワルドとミス・ヴァリエールとサ
イトさんはお先にどうぞ」

囃は俺含めた残りのメンバーで引き受ける事にしましょう」

「ほう？随分と乗り気みたいだねサイガー殿？」

「もとよりあなた方は極秘任務でしょう？なら俺達が残るのが筋で
しよっ…」

何か不愉快な表情でワールドが言ってくるが、気にせず俺はほくそ笑んで返してやる。

「まあ、ミスタ・サイガーの言う通りかもね、あなた達が何しにアルビオンに行くかも知らないし」

「うむむ、ここで死ぬのかな…どうなのかな…」

キクルケがやれやれといった感じに答える。

一方ギーシュは薔薇の造花を見つめながらぶつぶつ呟いていた…

キザだけど意外とハートは小さいんだよな…でもそんなキャラが好きだぞギーシュ。

俺も大して変わらないかもしれないし。

ルイズとサイトは納得いかないといった感じだが、ワールドが無理強いて引き連れていく。

「ああちよつと待てサイト…」

「何だよ？」

「これ持ってけ」

と、ルイズとワールドだけ先に行った後、サイト呼び止めて

俺は懐から事前に召喚しておいたもう一つのさんごの指輪をサイトに渡す。

「船に乗るまでこれをつけておけ、俺の勘だときつとそれが役に立つ筈だ」

「…ああ、ありがとな」

すぐさまサイトが指輪をはめて礼を言った後、ルイズ達の後を追っていった。

うん…流石にライトニング・クラウドの直撃は何とかしてやりたかったからね…

*

「さーて…じゃあ始めますかね？」

囃組の集団の先陣に立つ俺、右手には前日用意した八角棒。

目の前には今にも襲い掛かってきそうな数十人の傭兵の集団。

「自信たっぷりのご様子ですけど…何か策はあるのでミスタ？」

「なーに…簡単な事ですよ」

色気づいた口調でキュルケが尋ねてくるが、俺は得意げに返しておく。

残った目的はマチルダ1人だ…こんな三下どもに用は無い。

「とにかく片っ端から潰す、それだけ」

地の口調を解放して懐からベルを取り出して鳴らす。

「うわあああああ！！？？」

「な、何だあああ！！？？」

それを合図にするかのように銀竜が上空から現れ、ツイスターを放って傭兵どもを吹き飛ばす。

「そーれ！エアロガ！エアロガ！エアロガアア！」

八角棒を伝わせて、強化されたエアロガを問答無用に連射する。ピバ！連続魔！

銀竜のツイスターも合わせて、風の刃が縦横無尽に飛び交う。

傭兵の集団はてんでんバラバラにあちらこちらへと吹き飛んでいく。

「ちよ……無茶苦茶じゃないの彼……！」

「しかも何か詠唱も凄いい速いし……！……何者なんだよミスタ・サイガ
ーは……」

「というかエアログがって一体……うわっ……！」

エアログとツイスターの余波を受けて、後ろで必死に踏ん張りながら、

キュルケとギーシュがそんな事を呟いている。タバサは余波に耐え
ながらも、

じつと無言で突っ立っている。

何者と言われてもねえ……異世界人としか……

「……って……まだ何人か残ってるねえ……それじゃ……」

傭兵相手に情けなどいらん、今の俺はケフカの如くハイテンション
だ。

タバサとかもいる前であまり派手に動くのは好ましくないけど、
まあ、怪しまれない程度に暴れてみますかね。

「さて残った傭兵の皆さん。逃げるなら今のうちですよ？」

まだ反抗しようというなら死ぬよりも恐ろしい目に遭わせてあげま
す」

挑発するような口調で言い放つたら、傭兵5、6人が一斉に突撃し
てくる……

「一斉にかよよ！？うわ……とりあえずとりあえず……」

「うりゃ」

「っ！……っ！……っ！……っ！……っ！……っ！……っ！……っ！……」

懐から俺は小瓶を二本ほど取り出して、急いで傭兵に向かって撒き
散らす。

パシヤッと液体が体にかかった傭兵達は一瞬動きを止める。

「……トード」

そして俺は頭の中で密かにイメージを組み立てて、傭兵に向かって
呟く。

「ゼロオ!？」

「……………!!！」

するとどういう事でしょうか？傭兵達があつという間に、カエルに姿を変えてしまったわけで。

(うつひゃ〜い…これはやりすぎかなあ…?)

さっきぶちまけた小瓶の中身は何の変哲も無いただの水だ。

トードをかけたのとは何の関係も無い。が、

「な、ななななな…!!！」

「カエル!?!?ミスタ・サイガー…一体何を!?!?!」

俺の後ろでガタガタ震えてるギーシュやキュルケへの説明が必要だからだ。

「…俺が研究中の「カエル薬」の試作品を試しました
その名の通り触れた者をカエルへと変身させる…傭兵さん達に実験
台になってもらったのです」

まさか、本当にカエルに変える魔法だなんて説明がメンドいから。
まだ優秀な水メイジという虚実を利用した方が言い訳がつく。

「そ、そんな秘薬を持ってたのかね…」

「新種のポーションで有名とは聞いてたけど…そんな無茶苦茶な秘
薬まで作ってたの？」

「いやあ…こんなナリでも風と水のスクウェアメイジですからね
いろいろ創作意欲が沸いてしまうんですよ」

「なんとというか…意外とエゲつないのねえアナタ…」

「はっはっは…よく言われますよ」

キュルケ達の俺に対する視線が冷たい…そりゃそうか…

「ええいもう！頼りにならない連中ね！」

おっと…粗方傭兵が片付いたところで巨大ゴーレムが登場ですか。

「随分おかしな芸が出来る奴がいるみたいだけど

調子に乗るんじゃないよッ！」

ゴーレムの肩に乗ったおマチさん、かなりご立腹のようです。

「どうするんですのミスタ？」

「いやあ、流石にゴーレム相手にカエル薬は効きませんからね…

俺の風魔法でも銀竜でもあんなデカいのはちょっと…」

困ったなあ…という感じの顔を取り繕ってタバサの方にチラリと目を向ける。

タバサは両手を広げて首を横に振る。

まあ確かにあんなバカデカいゴーレムなんて、

普通じゃどうにもならないだろうからね…普通なら…

「諸君！突撃だ！トリステイン貴族の意地を今こそ見せる時である！

父上！見て下さい！ギーシュは今から…」

「いや、勝手に死に急がないでくれ」

「へぼっ！」

1人テンパっているギーシュを八角棒を引っ掛けて転ばせる。

「離してくれたまえミスタ・サイガー！僕を男にさせてくれ！」

「だから別に手段が無いとは言っていない」

うん。いくらでもやりようはあるからね。

しかし…マチルダの説得もあるので上手く片付けねばならん。

(初めてのケースだけど…予想通り行くかどうか…)

俺は再び懐からカモフラージュ用の品・何の変哲も無い芳香を風に
乗せて撒き散らす。

「なによ？今更香水なんてバラまいて何しようってんだい？」

ゴーレムが段々と近づいてくる。その前に俺はぼそりと一言呟く。
「ミユート」

次の瞬間、人型を保っていたゴーレムが凄まじい勢いでガラガラと崩れていく。

「ちよつと…な、何だいこれは！そ、操作が…きゃあああ！」
マチルダが違和感を感じた時にはもう遅い。

崩れていくゴーレムから転げ落ちて地面に落着した。

「…上手くいきましたか」

これは本心も含まれた呟きだ。

「…今度は何をしたんだい？」

「試作の秘薬その2「魔封じの芳香」です

これをバラまくと一定範囲で魔法が使えなくなる…皆さんも同じ筈です」

言われて各々で杖を振るう、そして魔法が発動しないのに恐れおののいていた。

…実際ミユートを使ってゴーレムが崩れるかは多少の賭けだったが、あらゆる魔法を無効とするこの魔法は、

常にゴーレムを形成・操作・維持するという魔法も無効化対象になつたらしい。

「そ、そんな無茶苦茶な秘薬をいくつも…アンター体…」

地面に落ちた衝撃でまともに動けないマチルダが悔しげに呻いていたが

「銀竜……」

「えっ……いいやあああ……」

俺は答える事なく近くにいた銀竜に指示を出してマチルダをくわえさせる。

そしてそのままあっという間に遠くの方へと飛んでいった。

「さてさて敵は片付きましたね、急いで後を追うとしましょうか」

「ミスタ・サイガー……あの……フーケはどうしたのだい？」

「適当な駐屯所か何かにぶち込んでおくよう指示しましたから」

皆さんはどうぞお先に……俺は銀竜が戻ってから行きます」

いや大嘘だけだね。アルビオンに行く前にまだやる事があるから。

ギーシュとキュルケは俺の言葉に納得するように頷いていたが、

「……………」

……タバサだけは物凄い疑念の視線を俺に対して向けていた……しかし……

「……悪いが余計な詮索はしないでくれよ」

今回は陛下の指示だ。また前みたいに覗いたりしたら

お前の母親の命は保証できない……」

「ッ……！」

死者蘇生の現場を見られたのだからって大きな誤算だったのだ。

その上マチルダとの対話まで覗かれたりしたらたまったもんじゃない。

なので冷酷かもしれないがジョゼフの名を使って釘を刺しておいた。

タバサは一瞬悔しげに顔を震わせたが、

すぐにあきらめてキュルケ達とその場を離れていった。

*

街外れで俺は銀竜と共にマチルダと相對している。当たり前だがマチルダは苦々しげに俺を睨みつけていた。念の為開放する際に杖を預かりはしたが、今は特に拘束とかはしていない。

「さて…取引といきますか？」

「ッ…本当に読めない奴だね…何でわざわざこんな場所に來たんだい？」

「人に聞かれたら困る話だからだよ。マチルダ・オブ・サウスコーダ」

「なっ！…アンタも知ってるのかい…」

「いや失礼…ミス・ロングビルの方が良かったかな？」

「！…！！」

何分交渉なんてのは俺は得意じゃない。寧ろ苦手な方だ。だが、情報というのは大きな武器となる。全てを知り得ている俺はマチルダに対して圧倒的優位に立っているのだ。

それを少しずつ吐露して何とか彼女とパイプを形成し、

いずれこちらに引き込む為の足掛かりとしたい。
悪質な気はするけど…まあ仕方ない。

「レコンキスタなんていう烏合の衆如きが、アンタを雇ってるのは
不相応なんだよ

俺だったら遥かに好待遇でアンタを迎え入れる準備がある」

「じれつたいねえ…つまりお前は私をどうしたいんだい？」

イラついた感じにマチルダが返してくる。

「率直に言えばアンタを雇いたいんだよ

俺の商売も大分幅が広がって優秀な人材が欲しいところなんだよ」

「お断りだね。どう考えたって怪しすぎるじゃないかい」

キツパリと断られる。まあ当然だろう…しかしこの程度あきらめる
かつつーの。

「…断るならアンタを王宮に突き出さなきゃいけないんだけど」

「チツ…なんだい。ほとんど脅迫じゃないかい」

「有り体に言えばそうなつちまうけど仕方ないんだよ…それに…」

そこまで言って俺は口元を微妙に釣り上げる。

「アンタが捕まったらウエストウッドにいるあの娘が悲しむだろう

？」

「ッ！！」

何故知っている…そう言いたげな表情へと変わる。

「あんな美しい少女が悲しむ顔なんて俺としては見たくないからね
それにアンタだって今まで苦労してきたじゃないか？

助けてやりたいんだよアンタ達の事」

「はあ…？今の世でのそんな理由かい？」

「はつきり言って俺は貴族や平民、エルフや亜人なんていう区別は
どうでもいい

俺にとつての判別は好きか嫌いか、あとは例外で助けてやりたいかそれだけだよ俺が人と接する時の理由なんて」

「…やっぱり胡散臭いねえ…そんなお人好しが今時いるたあ…」

「いや正直言うとね？アンタの能力とあの娘の美貌に引かれてるっ
てのもね？

「…か理不尽でしょ？耳が長いだけであんな絶世美人が迫害される
なんてさ？」

うん、本当にね？そう思うのよ俺は。

ティファニアのような天然おっとり系は俺にとつてどストライクな
のだ。

何よりアレだ。「バストレボリューション胸革命」

あれが自分の側にいるとか男にとつて最ツ高のロマンじゃん！？

スケベと言いたきや言えばいい。俺はフリオニールみたいに

ゴクツなんて固唾を飲んで躊躇ったりするようなチエリー違うのだ！

…まあ、あれの場合は罠だから誘いに乗ったらアウトなだけだ。

「…わかったよ。どの道私も命は惜しいからね。雇われてやるうじ
やないか」

「そう、それは何よりだ」

「ただしこの私を雇うからには安くないよ？仕事の内容にもよるし
ね」

試すかのような視線を向けてくる。

俺はというと右手を前に出して掌の上にある物を召喚していく。

「まずは何もしくない。ウエストウッド村で大人しくしていて
くれ

それがある意味仕事だ。レコンキスタには敗死でもしたって偽って
おけばまあ…

いずれ俺の方からそっちに迎えに行くから仕事はそれからだね
それまでの生活費その他は…これくらいで足りるかな？

本格的に仕事に参加してくれたら更なる報酬と好待遇を約束するよ」

「アンタ…どっからそんなモンを…」

俺の右手に乗せられた多数の宝石類を見てマチルダは目を見開く。

実は召喚獣の宿った宝石も含まれてたりするんだが、

このハルケギニアに召喚士やFF魔法の適性のある人間などいない。
それは検証済みだ。

魔石やマテリアと違って誰でも扱えるという品じゃないからこそ出したのだ。

召喚獣はおろか、魔法やアビリティすら使えない以上、
単なる工芸品としての価値しか見出さないが、

それでも大量に召喚しておけばかなりの稼ぎになるだろう。

「これが俺の力の一端。何の根拠もなくエルフという俗な世間に
忌み嫌われている存在を匿おうなんてバカはしないって事さ」

「さっきの秘薬といい本当にわけわかんない奴だね…けどいいの
かい？

そんな契約で？私がああ娘とこっそり逃げたりしたらどうする？」

「強がりにはよしなよ？忌々しいけど今のハルケギニアじゃ

あそこ以外に隠し通せる居場所なんてほとんど無いだろうな

それに…俺がアンタ達の事吹聴でもしたら…」

「わかったわかった…ちゃんと大人しくしててやるよ」

降参ですと言わんばかりにマチルダは力無く言う。

うーん…やっぱり脅迫っぽい形になったけど…

これで迎え入れるフラグは十分に立てられと言えるな。

後は頃合を見てウエストウッド村に出向けばいいだけだ。

「じゃあ交渉成立だ。近い内に迎えに行こう

渡した宝石の金が無くなったら本末転倒だからね

あの娘にも…ティファニアにもよろしく」

「……フンッ」

預かっていた杖を手渡しながら親しげにそう言う。

マチルダはティファニアの名前が出ると一瞬ピクリと反応したが、忌々しげな顔を浮かべたまま夜の闇へと消えていった。

…ここまですんなり行ったのは自分でも予想外だったわ。

いや、ほとんど脅迫だったんだけど出来る限り穏便に進めたつもりだ。

ともあれこれでマチルダとティファニアに繋がりが出来たのだ。

当然今は信頼関係なんて無いに等しいのだから、

それはこっちに連れてきてから少しずつ形成していけばいいだろう。

いやあ今回は実に大ラッキーだったと言えるな！

「じゃ…急いで後を追うとしようか…アイツとのパイプ作りも同じくらいに重要だからな！」

そして俺は銀竜に跨り、残ったもう一つのイベントへと向かう。

サイトとの好感度を更に高めてこちらに引き込むきっかけにする為に…

アイツと親しい友人関係を築く為に、いざアルビオンへ出発！

第14話：たまにはハメを外してもいいじゃない！チートなもの（後書き）

そろそろまた更新に間が空き始めるかもしれません…

第15話：立場的にはレオンハルト？クロムウエルは皇帝には程遠いが

「さて、取り引きといこうかなサイガー殿？」

「……………」

あれ？これなんてデジャヴ？決して掲載ミスではありません。
トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

何故にこんな面倒な事になってしまったのか？
数分前にノリにノリまくってた自分を説教してやりたい気分です…

今俺がいるのはラ・ロシエールにある酒場『金の酒樽亭』
名前こそ立派だが、その中身は『女神の杵亭』とは正反対。
ボロボロの廃屋みたいな場所だ。
入ってくる客も店に合った荒くれ連中ばかり。

そんな居心地悪い場所でテーブルの席に着き、
その真反対に座るのは髭の目立つロリコン子爵…ワルドである。

*

そもそもの発端はマチルダの勧誘を終えて、
ルンルン気分で銀竜に跨った時に起きたのだ。

「なかなか見事な手腕だったよ」

何やら後ろから聞き覚えのある声が聞こえて俺は固まってしまい、
錆び付いた機械の様に首をギギギ…と180°回した。

その視線の先にいたのは白い仮面の怪しいオッサン…

「ゲツ…ワルド…」

その時、気が動転して奴の名前を口に出してしまったのが運の尽き
だった。

「ほほう、僕の正体は既に看破していたか
流石は若きシュヴァリエ殿だ。ここまで成り上がったのも頷ける」

そう言って仮面を外したワルドの顔は、

如何にも何か良からぬ事を企んでるのが目に見えていたワケで…

…正直読みが浅かったのだと全力で後悔した。

奴の得意の魔法、風の偏在…

てつきり俺はサイトにライトニング・クラウドをかける個体の事しか頭になかったんだが、

まさか別の個体が俺を見張ってたとは完全な想定外…

サイトやマチルダの勧誘で頭がいつぱいで

そこまで考えが至らなかつた俺の完全な凡ミス…

「君の事は僕の組織の方でも噂になっていてね…

様々な秘薬や神業的な詠唱速度を見せる優秀なメイジがいると…

その件の人物が偶然にもそつちから来てくれたのは僕も予想外だったんだよ」

…成る程ね。やたら気前が良かったのはその所為だったか。

飛んで火にいる夏の虫つてヤツ？

有名になると厄介事も舞い込むのは当然の話だったわけだが…

「…それで？俺を監視してた理由は何なんだよ？

レコンキスタの手先さん？」

「やはり知ってたのかね？僕がレコンキスタ側だというのは？」

「商売つてのは情報が大切だからね。

最も…今回は活かしきれなかつただけだ」

「成る程御名答だよ。そうやって言うからには話が早く済みそうだね」

あきらめたような口調の俺に対して、
満足げな態度をワルドは示していた。

*

それであ、冒頭の場面に至るといつワケだ。

詰まるところ俺は、最初からこいつに目を付けられていたわけだ。
となると、話の内容は十中八九…

「レコンキスタは君のような優秀なメイジを求めているんだ
アルビオン王家を潰し、かの聖地を取り戻すためにね…」

レコンキスタへの勧誘という事になる。

「…断ると言ったら？」

わざと強気な姿勢を見せてみたが

「残念だが、それ相応に君が損をする事になる」

そう言ってワルドがある二本の剣を取り出す。

「げ……それって……」

「ルイズから預かってたんだ。実に興味深い品だからね」

ワルドが出したのはサイトに渡した筈の二本のガンブレードだ……
そっぴゃルイズに没収されたとか今朝言ってたっけか……
そしてそれがワルドの手に渡っていたとは……

「銃の機構を取り込んだ剣：加えて僕のライトニング・クラウドを完全に無効果する指輪：更には人間をカエルに変化させたり魔法を使えなくさせたりする秘薬の数々……
君の商品の引き出しは実に素晴らしいよ
土くれのフーケの穴を十分に埋められる程に」
「うぐっ……」

知られたくない事をズバズバ言われてしまう。
サイトに渡したさんごの指輪も既に奴にバレていたのか……
ああくそ……出所が俺だというのがサイトに口止めすんの忘れてた。
またしてもミスが重なってしまった結果だ。
どうも好きなキャラが側にいると気が緩んでしまっらしい……
その油断が今になって跳ねっ返ってきたわけだ。

「そこまで優秀な人材をみすみす見逃すってわけにもいかなくてね……
断ればレコンキスタ5万の軍勢の内……
そっぴゃだ……僕個人でならその2割程度は動かす権限があるな」

要するにお断りすれば最悪の場合、万単位の敵が俺を狙ってくるのか……

全力でorzな気分には陥ってしまおう。

いや別にバハムートなりジハードなりを使えば、

1万程度なら何とかならないわけじゃあない。

というよりしっかり準備すればレコンキスタそのものだって潰せる。

ワルドの言ってる事全てが真実とは限らないが、

少なくともレコンキスタにマークが厳しくなるのは間違いない。

それは俺が望むささやかな幸せを乱されるのに他ならない。

商売柄各地を飛び回っている以上、

その間にレコンキスタの間者に目を付けられてはたまったものではない。
ない。

その上、ワルドにガンブレードやさんごの指輪といった、

強力なアイテムの事を吹聴されたりしたら、

レコンキスタ以外にも余計な敵を作りかねない。

じゃあレコンキスタそのものを潰すのは？

それも現段階では論外なやり方だ。

何がと言つと目立ちすぎるといふ事だ。

レコンキスタは烏合の衆とはいえ総勢5万人の大軍勢だ。

それを1人の人間が潰すというのは常識で考えれば到底不可能。

この世界の人間で言えばそれこそ始祖でもない限りは有り得ない。

万一バれてしまえば俺の事が不必要に有名になってしまう。

いやこれだけ自由にやっという今更かもしれないが、

そこまで過剰な力があるというのを大多数の人間に知られたくないのだ。

現にこうして、俺の慎重さの欠如が要因となり、

このような面倒な事態になっているのだから。

それに：今の俺には少々準備が足りない。

アルテマやメテオを乱射したところで、

銀竜一匹を足場に、5万も削れるかどうかという問題がある。

臆病な話だが、万一足を滑らせたり不意打ちを喰らったりすれば…

じゃあより強力なモンスターを出せばいい気もするのだが、
そうなると召喚のペナルティで俺の体力が大幅に失われる。
その状態で無事に家路につけるかがこれまた疑問なわけで。

まあ纏めると、今俺はとてもよろしくない立場にいるのだ。
ぶっちゃけレコンキスタなんかに興味ないし、

ワールド自体もあんまり関わりたくないキャラだ。

…っかミヨズがないのに5万人なのは変わってないのな。

気分的には次元城最上階のレベル上げの悲劇…

セーブもしないでブラッドソードの乱れ打ちをしていたら

間違えてレッドドラゴン選んじゃったみたいなの…わかるかなこれ？

（かーっ…折角上手いこといったのになあ…）

内心で葛藤してみるが何の意味もない。

兎にも角にも今はこの場をどう切り抜けるかを考えねばなるまい。

とりあえず確認も含めて一言切り出す。

「…アンタの話は概ね理解したし、レコンキスタの内情も大体知ってるよ

けどさあ、聖地奪還ついたらあのエルフどもを何とかする必要がある
ちよつと夢見過ぎなな気がするんだけどねえ」

いつも通りの知らないフリをする。

本来いるべき神の頭脳が存在してない以上、

レコンキスタに何か変更点が発生してる可能性もあるのだ。

しかしワールドは得意げな姿勢を崩さなかった。

「なに、僕らも何の後ろ盾も無しに無謀な事をするつもりはない僕らには強大な力…生命すら操る万物の力があるのだからね」

生命…か…変更点は無いのか…？

「まさか…虚無か？」

小声でひっそりと尋ねてみる。

「…御名答だ。流石に察しがいいらしいね

そうだ。レコンキスタを統べているクロムエル閣下は虚無の担い手だあの力があるからこそ僕らは固い結束で結ばれているのさ」

固い結束ねえ…さつきから随分と芝居じみた語り口じゃないか。

自分が有利な立場だから自信があるのだろうか？

だが多分これで変更点は無いと確信出来た。

まあ前も言ったようにどうやって指輪を手にしたのかが疑問なのだが…

ともあれ懸念すべき問題点は解決した。

(あとは…利用出来る情報は全て利用するだけ)

一回フーツと大きなため息を吐いた後、俺はこう切り出した。

「やっぱりお断りだわ。レコンキスタとは契約できない」

「ほう…いいのかね？ならいつそ今ここで…」

ワールドが表情を歪めて杖に手をかけようとするが

「いや待った。アンタ個人となら契約する気がある」

やんわりと両手を上げて俺は制した。

…ここからだ。もう善悪だ倫理だなんて事は考えるまい。

「…どういう意味だい？」

「アンタが俺に関する情報を吹聴しない代わりに
商売上で入手した俺の持つてる機密を教える用意があるんだよ」

「ほう…何だね？」

訝しむ感じにワルドが睨んでくるが。

俺は口元を吊り上げて自信たっぷりな表情を取り繕う。

「…俺の持つてる虚無の使い手の情報」

「…！！…」

明らかにワルドは動揺したように目を見開いた。

よし食いついたか…ここから更に追い討ちをかける。

「そもそもアンタがこの任務に同行してんのもそれがあるからだろ？
トリステインでも伝統的家計の一つであるヴァリエール家…」

その三女が全く魔法が使えない理由…

それは未だに覚醒しない虚無の血によるものだ

そしてそれは彼女の使い魔に刻まれた神の盾のルーンが証明している」

話している間に見る見る内にワルドの表情が変化していく。

大きな野望を秘めた野心家のような顔つきに…

「…驚いたな。俺でも何年もかけて王宮で調べた情報をいとも容易
く…」

「実際アンタがルイズに近づいたのもそれが理由なんだろう？」

あの女の持つ始祖の力を自分の目的の為に使う…

レコンキスタとてアンタにとっては踏み台なのかもな…？」

「フフツ…生意気な事だ…そこまで俺の事を見透かしているとは益々持つて興味が沸いてきたよ」

もうワールドは完全に取り繕うのをやめたらしく、美男子とは程遠い、歪んだ表情を浮かべている。

俺も自信ありげな態度は崩してないが、内心はヒヤヒヤものだ。

裏世界の駆け引きはあっちの方が経験が長いのだから、油断は出来ない…調子づいてる間に上手く丸め込まねば。

「そうとも、どの道トリスティンに未来などないからね

アンリエッタ姫殿下ではこの変わり行く時代を乗りきれまいだったらまだレコンキスタの方が未来がある」

「ククツ…確かにそうかもな」

おかしくてつい、笑みをこぼしてしまう。

アンリエッタが嫌いなものもあるが、

ワールドが今いるレコンキスタも結局そんなに長くはないのだからね…

「それで？俺個人との契約というのは？」

「端的に言えば俺はヴァリエール、クロムウエル以外の虚無に関する情報を持っているという事だ

アンタが今持つてるそのガンブレード。

それを返して、更に俺の秘密を吹聴しないと約束するならそれを教える」

…かなり陳腐な思いつきだがこの際仕方がないだろう。

18巻を読んだ際に知ったものもあるが、

結局コイツは良い意味でのマザコン根性で、

聖地に行くために虚無の力を求めているようなもんなのだ。

だったら虚無の情報を上手くばかして餌にした上で切り抜ければいい。

最悪失敗したらレコンキスタを潰す方向になりかねないけど…

暫しの沈黙を挟んだ後、ワルドがズイツと顔を寄せてくる。

「…いいだろう、その話に乗ってやろう」

「そうか」

…よし、とりあえずの危機は何とか…

「ただし俺からも条件を出す」

と、ワルドが人差し指を立てて切り出してくる。

「まず一つ、これから俺に同行してアルビオンまで来てもらう

そしてもう一つは俺の今の任務が終わるまで

何もしないで大人しくしてもらう。」

「…どういう事だ？」

「お前のアイテムは強力だからな。実際あの使い魔の少年に渡した指輪の所為で俺の計画が狂うところだったんだ

だからこれ以上俺の任務に余計な首を突っ込まないと約束しろ

そうすればお前に関する事は何もバラさん」

あらら…そういう事か。

いや俺もコイツの側にいれるのは助かるんだが、

まさかこんな展開になろうとはね…

これ以上首突っ込めないというのはつまり、
サイトともう接触出来ないに等しいわけだ。
アイツを助けて交友関係を結べない事になる。

全く…折角アイツといい感じになってたのにここに来て躓いてしま
った。

これは結構な痛手はある…だが…

「…わかった。それで契約成立でいいかな？」

「よし、いいだろう。これはお前に返す」

先程のマチルダの如く、俺は降参だといった感じに両手を挙げる。
ワルドはそれに笑って答え、ガンブレードを返した後に俺と手を取
り合った。

悪いが自分の今後の安全に関わってる以上、欲張ってはられない。
サイトと接触するチャンスはいくらでもあるが、
とりあえず今はワルド…というか目の前のワルドの偏在に従つとか
ないと
何をされるかわかったものではないからだ。
寧ろ、凡ミスを取り繕う為に即席で作った俺の陳腐なやり取りが、
この程度の損害で済んだ事の方を喜ぶべきだろう。
どの道マチルダは勧誘出来たのだから、これ以上はやめておこう。
今回は油断していた…つまりそういう事だ。

*

結局その後、ワルドの偏在に連れられて、彼とその他数名のレコンキスタが用意していた空船に銀竜と一緒に乗り込んだ。

因みにライブラで調べてわかったのだが、ワルド以外は全員アンドバリの指輪で操られたゾンビだったが、見た感じは健全な人間そのものだったし、何より操られてる感じなど全くしない自然な態度だったのには驚いたわ。

ある意味洗脳という観点で見れば、ゴルベーザやゼムスをも上回るよコレは…

「ほう？ロマリアの教皇がか？」
「そう、聖エイジス三十二世…彼が俺の知る限りのもう一人の虚無だ」

「その情報は確かか？」
「信じる信じないは残念だけどアンタに任せるしかないな…
けど今まで欠片も無かった虚無の情報だし
教皇に陛下に関する嘘の情報なんてバラしたら重罪…
いや虚無って事をバラすのもある意味大変な事かもな」

「確かにな…とつさの思いつきでそんな情報をバラせるとは思えんが…」

しかし裏付けが無いからどうもな…」

「陛下の傍らにいる神官ジュリオ・チエザーレ…」

ロマリアと同業者の話によると、そいつが右手を光らせて竜を操っていたという情報もあるしね…」

「神の笛…か…少なくともロマリア教皇などまだ手の出しようが無いから」

まずはそつちからという事になるな…」

そして船の一室で話しているのはヴィットーリオの事。

当然、マスターたるジョゼフやティファニアの事をバラすなど論外だ。

だから消去法で自動的に奴の情報をバラす事になるわけで。

ワルドの方も俺がルイズの情報をピタリと言い当てたのもあって、それなりに俺の話信じ込んでいるらしい。

ネットなんか無い上、郵便組織もまだ整ってないハルケギニアだから、

俺みたいな情報が命の商人の（という設定での）話というのは、それなりに信憑性があるものとして認識されるらしい…

「まあ、聞いてて悪い話ではなかったな。

今までルイズ以外の虚無など、てんで見当もつかなかったからなこの任務を終えてルイズを手にしてから

閣下にロマリアの探索を進言してみるか…」

ワルドもどうやら俺との契約内容である、
虚無の情報を得られてご満悦らしい…

レコンキスタが予定変えてロマリアを攻めたりするかもしれないが、
るが、

ぶっちゃけロマリア関連はどうでもいいしな。

理由は追々話すけど、ヴィットーリオとジュリオは嫌いなキャラだしね…

(はてさて…今後どうなることやら)

一応の危機は脱したかもしれないが、

俺は未だにワルドの偏在の監視下にいるのだ。

まだ俺の身の安全が保証されたとは言い難い。

ここで何か事を起こせば嗅ぎつけた本体に何をされるかわからない。

とりあえず到着まで大人しくしとくしかないか…

やれやれ…本当に調子に乗りすぎたのかもな…

何度も言うのがこれくらいで済んで寧ろラッキーだったのかも…

以後気をつけよ…

第16話：今更気づいたのかよ！？って自分でも感じた（前書き）

リーヴスラシル？何ソレ？俺は何にも見てない
後、17巻での感動を返してくれデルフリンガー

今頃になって最新巻を読んだ駄作者の眩き

第16話：今更気づいたのかよ！？って自分でも感じた

「暇だわ〜…」

アルビオンのとある街中の裏通りの外れにある一軒家、俺はそこに佇んで

ワルドの偏在から返して貰ったガンブレードをいじくりながら暇を潰している。

何故こんなひねくれた展開になってしまったのだろうか？

トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

あの後特に何の問題もなく、俺とワルドの偏在を乗せた空船はアルビオンに到着した。

にしても…本当に驚いたよ。島が丸々空に浮かんでいるんですから。古代ロンカ文明もビックリというかそんな感じ。

そんてまあ、他のレコンキスタの操り兵隊連中と別れた後、俺はワルドの偏在にこの一軒家に案内されたわけなんだわ。

それではまあ…原作の流れを話していたというかそんな感じだから詳しい流れは省くが

とにかく、明日本体が任務を終えたらルイズと共に一度ここにやって来るので

それまでここで大人しくしているとの事だった。

戻ってくるまでに妙な動きをすれば他のレコンキスタ兵が俺を追撃

する手筈になってるんだと…

「…本当に面倒なのに目つけられたものだよ」
誰もいない一軒家で俺は1人でゴチる。

本来なら今頃サイトと一緒にニューカッスルでいろいろ話し合っ
て華麗に裏切りロリコン子爵を撃退してアイツの好感度もアップ…な
予定だったんだがなあ…

しかしサイトとのパイプと自分の身の安全、どちらが大切かといえ
ば何の躊躇いもなく後者を選ぶのが俺の性分だ。

トリップ世界でのストーリーを楽しむというのは自分の安全が保証
された上で行うべきなのだ。

クドいようだが、俺は単なる一般ピープル。

チート能力以外では特に何の取り柄も無いのだ。

あのワルドの偏在の話がどこまで本気かわからない以上、下手に動
くのは危険なのだ。

準備も整っていない今の状態でレコンキスタに追われるのは非常に
望ましくない。

だからとりあえず今は、ワルド本体がここに来るのを黙って待つて
いるというわけである。

ガチャリ

と、唐突に家の扉が開く音がしたので、俺はそちらに目を向ける。

「クソッ…！」

そして入ってきたのは、忌々しいオーラ全開な表情をしたワルド。
血は流れていないものの、左腕の二の腕から下が無くなっていた。

つまり全ての原作イベントが終了した証拠だ。

状況から察するに、原作通りに事が運ばれたと考えていいだろう。
(それがいいのか悪いのかはわからないけど…)

ただまあ、こんな場面で原作から外れた流れになってしまうと
今後の動きを考え直す必要があったので、コレはコレで良かったの
かもしれない。

「随分と重傷だねえ…任務とやらはどうだったんだい？」
いつものことながらみんなわかってんだけど

俺は知らないフリして白々しくもワルドに尋ねてみる。

「…平民だと思って油断したよ。お前の渡した道具云々以前にな」
冷静な口調ながらも、言葉の節々からは悔しさが滲み出てるのがわ
かる。

「そいつは災難だったねえ…腕一本犠牲にした上
目的のお嬢様も一緒じゃないみたいだし」

ニヤリと口元を吊り上げてワザとらしく挑発してみる。

それに対して表情を歪めて反応するワルド。意外と気が短いのか…？

「まあいい…目的の1つは何とか果たせたのだ

その代償が腕一本なら安い取引だった」

フンとワルドは鼻を鳴らす。つまりウェールズは仕留めたわけね。

まあ俺の中ではワルド同様、どうでもいい位置付けのキャラなので、
死のうが生き延びようが知ったこっちゃないのだけど。

「でだ、後は何をすればいいのかな？アンタの任務とやらは終わっ
たみたいだけど」

「いや、もう結構だ。俺はこれからレコンキスタに戻る。

お前が言っていたロマリアの教皇についても調べる必要があるのではな
いとお別れだ。お前との関わりがこれでおしまいだ」

そう言っつてワルドは背を向ける…アレ以外に素直な展開だなオイ？
こっちとしてはシーモア的な話の流れも展開の1つとして想定して
いたんだが…

(考えてみりゃこいつの結婚式イベントって微妙にそれに近かった

かも)

まあ別に何もしないというならそれはそれで。

「ふう…そう言ってくれて何よりだよ

じゃあせっかくだしも一つだけ情報というかアドバイスね」

「…？」

俺の言葉を聞いてワルドは再びこちらに向き直る。

別にこいつには特に思い入れも何も無いが、

かといって嫌いなキャラでもないの、せっかくだし一言だけ述べ
ておく。

「本気で聖地を目指す気があるならレコンキスタは早めに見限った
おいた方がいいよ

俺の商売上の経験じゃあ、ああいう寄り集め組織ってのは長くは保
たないから

必要な物を手に入れたら早々に身を引くのが一番かもね」

「……………」

ワルドは何も答えずに一軒家から出て行き、俺はまた1人になった。

正直言つてクロムウエルではハルケギニアの統一など不可能だろう。

ミヨズの介入が無いとは言え、指輪の力に頼りつきりではな…

アイツ自身がチート能力に酔いしれて調子乗って泣きを見る奴の見
本みたいなもんだし。

いずれは他の虚無の担い手の台頭と共に、落ちぶれるのが積の山だ。
というよりアレだ。俺が多分潰す事になると思つし(笑)

あんな無法者集団のさばらせてたら、こっちの商売にも支障が出か
ねないしね…

今回はチキンそのものな対応しか取れなかったがいずれはきちんと準備を整えて、飽くまでも俺がやったとわからないように

アイツらを潰してやる…いや、というかだ

「さて…帰るぞ銀竜」

家の外で欠伸をしていた銀竜を呼び寄せ、俺はその上に跨る。

今更ニューカッスルに行ったところでサイトはもう逃げ延びたろうし風のルビーも回収されているだろうから行く意味などあるまい。

ましてやレコンキスタの総攻撃真っ只中なのに、

準備が整っていない状態で首を突っ込むのはリスクが高すぎる。

だから今回はもう、素直に家に帰る事にする。

何より、帰ってまた別の準備をする必要があるからだよ。

「……タルブ村の襲撃はどうするかねえ…」

飛び上がった銀竜の上でポツリと呟く。

アルビオン編が終わった以上、次にやってくるのはレコンキスタによるタルブの襲撃だ。

それに関しては何とかして防ぎたいと俺は考えている。

あそこはシエスタの故郷だ。それだけでも守る価値がある。

あと…葡萄酒の買収もしたいし…ザビエラ村で飲んだワイン、美味かったしなあ…

正直な話、タルブ村の近くで待ち伏せして魔法を連射するだけでも有りかもしれんが

前も言ったようにこっちは必然的に1人だ。

可能ならば一発か二発程度で何とかするのが一番望ましい。

となると、バハムートやティアマト辺りを引き連れていく事になるが、

アイツらの火力でも艦隊相手では数発の攻撃が必要だろう。

いや、それ以前に色々目立ちすぎるのがまずよろしくないな。俺のルーンで召喚したあの二体の巨竜との付き合いは大分長い。レコンキスタの艦隊を潰した後、アイツらをどうすればいいのかという問題が出る。

戦場にいきなり現れて敵の艦隊を片っ端から潰すわけなのだから事が済めば、いらぬ注目を浴びまくるのは想像するまでもなくわかる。

あんな目立つ竜を隠匿し続けるのは、やはりいろいろ面倒だしそして万一バレて俺との繋がりが露見してしまえば…考えるだけで嫌になる。

個人的な感傷だが、アンリエッタ並びに奴の治めるトリステインに目を付けられるなんて、レコンキスタの勧誘以上に最悪な話なんだよ。

アイツに協力するくらいなら俺はトリステインを潰す覚悟があるね。いやもう、本当にいろんな意味でアイツとは関わりたくないのだ。じゃあいつその事、サイトとルイズに任せきりにするのはどうか？

…いや、これもダメだろうな。原作に任せきりにするという事はタルブ村の襲撃も未然防止出来ないという事に等しいのだから。

何より…ただでさえ今回干渉出来なかったというのにこれ以上放っておいたらルイズとサイトの仲が更に深まってしまっではないか!?

俺としてはそっちの方が有意義では嫌なんだよ。

サイトの勧誘が難航するのに加え、俺の目的の1つもまた遠のく事になるからな…

とはいえ、バハムート以上に強力なモンスターなぞ使ったら余計目立つし

戦艦といった類の道具も論外、というより操縦方法に慣れる時間が無い。

使った力が使用直後に消滅するのが一番いいんだけど…

使用直後に消滅…ん？ちょっと待てよ？
「そついや…アレで召喚したらどうなるんだろつか…」

*

レコンキスタの追っ手なども現れることなく、
俺は数日後に無事にガリアの屋敷へと到着した。

「お帰りなさいサイガー様！」

「ああ、ただいま」

戻ってきた俺を、屋敷の庭でチョコボと遊んでいたリアが、明るい
笑顔で出迎えてくれた。

この娘の笑顔は本当に癒やしになる…特に今回は目的を果たせずに
凹んでいたのだ

より一層彼女の純粹な笑みが眩しく見えるわ…

こういう場面を見る度に、本当に助けて良かったと実感するよね…
とまあ関係ない話をダラダラ続けてもしょうがない。

「どこに行くんですかサイガー様？」

「帰ってきて早々なんだけどちょっと試したい事があったね…」
俺の後ろを、首を傾げたりリアがトコトコとついてくる。

歩きはじめて1、2分。やって来たのは屋敷の敷地内にあるただっ広い平原。

普段魔法やモンスターの召喚実験を行っている場所だ。

「さて…召喚のリスクはどの程度なのか…」

ポツリと呟き、右手を突き出して頭の中にイメージを思い浮かべる。その瞬間に胸のルーンが光を放ち、右手の掌に1つの宝石が現れる。「うっ…」

流石に物が物なだけに、やんわりと頭がクラツとしたな…

でもコレ、ランク的には下なんだが…

「わあ〜綺麗な宝石ですね」

興味津々といった様子でリアは俺の手に収まっている宝石を覗き込む。

些細な一挙一動が本当に可愛いよなこの娘は…

「でもサイガー様、これ一体何なんです？」

次いでリアは再び首を傾げて可愛らしい仕草で尋ねてくる。

「使いようによってはハルケギニア中がひっくり返るような道具だよ」

「????？」

リアがわけがわからないと思うのも無理はなかるうよ…

これとあともう一つのある物は出来たら召喚したくはなかったのだ何せ外部に1つでも漏れてしまえば、さっきリアに話した通り

ハルケギニアの歴史をひっくり返しかねない危険な道具として認識されるからだ。

そんな物をいくらでも生産出来るなんて知られてしまったら

世界中の性悪貴族から命を狙われかねない事態になってしまうからな…

だから今召喚したこれも丁重に扱わねばなるまい。

絶対に俺の秘密を知る人間以外に流したりするのは防がねーと。

(さてと…想像通りに行くかな?)

そして俺は召喚した宝石を高く掲げて念じる。

「出よ、シヴァ」

直後、手にした宝石から光が放たれる。

そうして俺の前に現れたのは、一片の布を纏った青白い肌の神々しい1人の女性…

FFシリーズでは同じみの氷属性の召喚獣 - シヴァだ。

「キレイ…」

隣にいるリアはシヴァの姿に見惚れている。ただまあ驚くのにはまだ早い。

「ダイヤモンドダスト」

俺が呟くのと同時に、シヴァがその両手を高く掲げる。

次の瞬間、そこから夥しい量の冷気が平原に向かって放たれる。

そして俺達のいる緑の生い茂った平原を数秒の内に白銀の世界へと変えた。

「は、はわわわわ…」

リアはあまりの光景に腰を抜かしてしまっている。

しかし俺が知りたいのはこの後の事だ。

「あ、あれ!? さっきの女の人はどこに…」

だが正気に戻ったリアの一言が、俺の知りたかった事を教えてくれた。

ダイヤモンドダストを放ち終わったシヴァは、その姿を跡形もなく消滅させ

またもとの宝石 - いや魔石へと姿を変えていたのだ。

「やっぱりそうか… ルーンと違って魔石による召喚なら役目が終わると同時に姿が消える…」

そう、今回一番試したかったのはそこに尽きる。

ルーンによるモンスターの召喚は、召喚後もずっとこの世界に留まるが、

魔石による召喚は、召喚魔法として見なされ
役目が終わるとその姿を世界から消滅させる…

詰まるどころ、普通にモンスターを使役するより遥かに足がつきづ
らいのだ。

モンスターそのものは消えてしまうので探しようがないし

何も知らないハルケギニアの人間は、それが魔石によるものだと知
る由も無い。

つまりは多少派手に暴れても大丈夫…かもしれないってわけだよ。

好きなキャラに関する事には慎重さが欠けてしまう俺にとって

この事実は大きな武器となる。上手く駆使すれば目立たずして

巨大な力を使役することが可能になるのだ。

「す、凄かったですサイガー様！あれも例の力の1つなんですか？」

「そうだな、確かに新しい力ではあるけど…」

そしてもう一つ、調べる事があるので、俺は左手を翳して新たな魔
石を召喚する。

その魔石を興奮しきった状態のリアに手渡す。

「これはな…誰でも使える力なんだよ」

「えええっ?!?!?」

「そりゃ驚くよなあ…でも百聞は一見にしかずだ。やってみな、リ
ア」

そう言っただけはリアに一言耳打ちをする。

これが成功するか否かが1つの分かれ目になるからな…

「イ、イフリート！」

たどたどしい口調でリアは名前を呼ぶ。

リアの手にした魔石から光が放たれ、それと同時に現れたのは炎の
巨人・イフリート

イフリートはリアが指示するまでもなく、その体に宿った燃え盛る

火炎を放ち、

シヴァによつて銀世界へと変わった平原を、一瞬にして焼き払い、その姿を消した。

「す、凄い凄い！凄すぎますよサイガー様！！」

「やっぱ凄いと思う？」

「当たり前ですよ！私があんな凄い幻獣を召喚するなんて！」

「そう…これがあれば誰でも強力な幻獣を操れるようになる
それこそ貴族だろうと平民だろうと誰でもな…」

「あつ…」

リアは俺の考えを悟つたかのように声を漏らす。

まああれだけの力を目の当たりにしたのだから仕方あるまい。

口ではああ言っておきながら、リアがイフリートを召喚したのは俺も驚いてる。

つまり魔石はハルケギニアの人間でも扱える品物という事が確定したのだ。

ましてや、まだ検証してないからわからないとはいえ

魔石はFF魔法の習得や成長ボーナスなどといった別の力もあるのだ。

前述したようにこれ程の品が外部に漏れればどういう事になるか…だからこそ本当に魔石は嚴重に使わねばな…

（まあ…召喚した後消えるってのは非常に役立つしな）

つまりは、最強の魔石であるアレを使つても
事が済んだ後は消えるのだから大丈夫だろう…

それこそ変に宗教に浸かっているハルケギニアの連中ならば

神々がレコンキスタに罰を下したなんて風に解釈するだろうしね…

そしてこの分ならもう一つの召喚道具…マテリアも行けるかもしれない。

魔石とマテリア…つまりは？と？の召喚獣はある程度自由に使えるのだ。

これなら姿を見せずにレコンキスタの艦隊を
タルブ村が襲われる前に撃退する事も出来るかもしれないな。

扱いにさえ気をつければ、これは俺にとって更なる強みになる。

ともあれある程度の見通しは立ってきたな。

アルビオン任務の失敗は痛手だったから、今度は上手くやらないとな。

(じゃあ襲撃前にいろいろ関係も作っておきたいし…)

今度こそ行ってみますかね、トリステイン魔法学院に…)

第17話：本物も結局は「最強の剣」ではないけど

白い柱が立ち並ぶ豪華な内装の大理石のホール。

そこでは大勢の貴族が椅子に座って真剣な表情を浮かべている。

「さて！続いている商品は…」

そんな貴族達の目の前に立って、大袈裟な身振り手振りをしながら声を発している

スーツ姿がイマイチ似合わないトオル・シュヴァリエ・ド・サイガ―です

俺の声を聞いて、1人の男が車両の付いた台座を押しながら現れる。その台座の上に乗っているのはゴテゴテと派手な飾りのついた一振りの剣。

「始祖ブリミル時代、かの伝説の使い魔、ガンダールヴと渡り合った伝説の剣士

ギルガメツシュが使っていたとされる伝説の名剣、エクスカリパーです！！」

パーです（笑）パーではありません。ある意味これも名剣だけど。

しかし、何も知らない成金貴族達は俺の説明を聞いて「おお！」と声を上げる。

今や多数の秘薬と武具の売買で、一段と有名になっているのが効いている。

こんな根も葉もない品でも適当な説明で簡単に信じてしまうのだ。

何よりエクスカリパーは「見た目」だけは無駄に立派なので

派手好きな貴族にとってはそれが更に信憑性を高めているのだろう。

「ではまず1万エキューから…」

「2万エキュー！」

「5万エキュー！」

「10万エキュー！」

「15万エキュー！」

そしてエクスカリパーに次々とトンデモな値段をつけていく貴族達…
いやあ、本当に外聞だけで判断するって怖いよねえ…

現実のネットオークションとかもこんな風に騙したりするんだろうか…

そして最終的にエクスカリパーは200万エキューで売れました。

*

今日の分の品物を全て捌き終えて、俺は舞台裏で帰り支度を始める。

「いやあオークションって楽しいよねえ…」

普段着に身を通しながら1人で呟く。

今回俺が新たに始めた商売がオークション。

ハルケギニア式ゴールドソーサーの施設の1つとして作った物を先
んじて公開したのだ。

そこで俺は自ら支配人となって、多数のFFアイテムを売りさばい

ている。

一般に流出しても支障が出ないFFアイテムを売ってるのだ。売っているのは大抵、エクスカリパーやミニシド、グリフォンハートといった

普通じゃ何の価値もつかないような品ばかり。

しかしこの世界の貴族というのは、始祖に関わるだとか伝説とかその手の話にやたらと食いつくのが多く

適当ないわくをつければ案外簡単に高値で売れてしまうのだ。

なんとという詐欺商売…と、感じる事たまにはあるんだが

自慢げな顔して堂々と大金出していく成金貴族を何人も見ていると何かその手の後ろめたさも薄れていくから不思議だったりする。

まあ実際、そういう品の価値観つてのは人それぞれによるものだし相手が満足してんならまあ別にいいかと、軽く考えてたりするのだ。中世ヨーロッパスナハルケギニアにおいて

そういう品の偽物本物を見抜く術など無いだろうしね…

実際金目的よりも、ゴールドソーサーの宣伝の意味合いの方が強いし。

因みにゴールドソーサー自体も、既に8割型完成していたりする。全体的な娯楽施設として稼働を始めるのもそう遠くはないだろう。

因みに、オークションの売上を建設の為に雇った

平民への給金としてまわしたりもしている。

さつきも言ったがオークションは宣伝目的の方が主だし

金自体は今やってる商売でも事足りてる

「…まあ、アイツへの土産は本物だけだ」

オークション会場の裏口から外へ出て、1人で呟く。

前回失敗した以上、ここで何とかして引き込みたいからね…

さて、所変わって翌日の朝早く、いつものように俺は銀竜に跨って空に行く。

行き先は今度こそトリステイン魔法学院である。

因みにおれの後ろには大きめの布袋が置いてあるのだが

そこから剣の柄がはみ出していたりもする。

サイトへの土産含めて、結構な量のアイテムを持ってきていたからだ。

「今度こそは上手くやらんとな…というか原作序盤じゃここが一番のチャンスだし」

そう、タルブ戦の前にもサイトとルイズには一悶着あるのだが

その一悶着の間に上手い事介入出来れば、

ほぼ確実に、そして合意的にサイトを引き込む事が出来るのだ。

この原作三巻に当たる部分を逃してしまえば

サイトとルイズにそれなりの確固とした信頼関係が生まれてしまう。

それだけは何としても避けたかった。サイトの引き込みが難しくなるもあるし、

それ以外にも、俺にはある一つの目的があるからだ。

「サイトがルイズとくっついたら、アイツが本当は一番悲しむんだもんよ…」

*

今回は特に滞りなく、無事に学院へと到着した。

「にしても大きいよなあ…」

目の前にそびえ立つ学院を見上げる。

外観は普通に他の建物と変わりはない。

石造りの巨大なお城、取り囲むようにそびえ立っている塔。

ギーシュとドンパチやったのが風と火の塔の間の中庭だったか？

いや今はそれはあまり関係ないだろう。

とにかく到着した以上はさっさとサイトを探したいのだが、

闇雲に歩き回っても怪しまれるだけだろう。

となれば誰かしらに道を尋ねるべきであるが…

「おっ…誰かいるな」

ここでグッドタイミング。籠を片手にした1人のメイドが建物から出て来た。

ちようどいいから彼女に聞いてみるとしよう。

「おい、ちよつといいかなその人？」

「はい、何でしょうか」

メイドは俺の呼び止める声に気づいてこちらへ振り向く。

カチューシャで纏めたこの世界では珍しい黒髪に

そばかすは目立つものの、素朴な感じの綺麗な顔立ちの少女

俺が貴族という事で多少緊張しているように見て取れたが、

屈託のない笑顔で俺の方を見ている。

(間違いなえ…)

これだけ外見が一致していれば9割方そうであろう。

俺は初っ端からシエスタと思わしきメイドに声をかけたという事が、ゼ口魔の女性キャラでは恐らく一番気に入っているキャラに…

「あの…どうかなさいましたか？」

「えっ！ああ、いやいや別に…」

シエスタの声でハッと我にかえる。

一番のお気に入りだったとはいえ、初対面で見惚れてしまうとはな…
こっちの世界に来てから貴族の令嬢なんてのは何人も目にしてきたが、

皆、自ら己の美を強調するような、何というか

自分は綺麗だと自己主張するようなオーラを纏った輩ばかりなので、いくら外見が良くても俺は何も感じなかった。

(どちらかと言えばキュルケとかも俺的にはこの部類に入る)

だが、目の前にいるこの少女からはそんな類の雰囲気は全く感じない。

なのに見惚れてしまう。自然美、とでも言えばいいのだろうか？

まあ果てしなく話とは関係ない俺の個人的好みは置いといてだ…

「この学院にいる、平民の使い魔というのに会いに来たんだが…君、彼がどこにいるかとか知らない？」

なるべく警戒心を持たれないように、フレンドリーな感じで尋ねる。

「え？ひよっとしてサイトさんの事ですか？」

すると、首を傾げてキョトンとした感じに返答する。

サイトさんなどと呼んだ時点で、彼女がシエスタだというのは確定だな。

「そうそう、そのサイトだよ」

「あの…サイトさんに貴族様がどんな御用が…」

「いやいや、別に何か疚しい事をしにきたわけじゃあないんだよ

俺は以前ミス・ヴァリエールとある用事で同行した事があってね
その時にいろいろと助けてもらったんだよ」

「ああ！そうだったんですか」

「うん、トオル・シユヴァリエ・ド・サイガーって言えばわかる？」

「えっ！あ、あの最近いるんな所で有名なあの…？」

「やっぱり平民の人にも知られてるみたいだね」

最初は多少怪しんだ様子だったシエスタも

話をしていく内にそれなりに警戒心が薄れていくように感じられた。

因みに俺が噂のやり手商人だというのにやはり驚きを浮かつた。

最近、初対面の人間は大抵こういうリアクションなんだよな…

「私もこれからサイトさんの所へ行くところだったんですよ

もしよろしければ案内いたしましょうか？」

「あ、そうなの、じゃあお願いしようかな」

またしても偶然、彼女もサイトの下へ行く途中であつたとはな。

ならば遠慮せずに同行するとしよう…

*

「……………」

が、連れてかれた先がいろんな意味で壮絶だったのである…

「まあ！もうこんなに飲んじゃったんですか！一日一本って言うてるのに！」

「ごめんなしゃい…」

ヴェストリの広場の片隅に敷かれたボロ臭い一つのテント。

シエスタはその中に顔を突っ込んで籠の中にあつたパンやハムやらを取り出したいる。

そしてテントの中にいたのは瓶のワインを直接あおるサイト。顔は真っ赤つかでアルコールの匂いがプンプンと漂っている。もうデロンデロンのへべれけ状態であつた。

「つかまだ昼時だぞ？ どんだけ飲んだんだよコイツは……」

（好都合とはいえコレは流石になあ……）

つまりはルイズにシエスタとの現場を目撃されて

使い魔クビ宣告を受けてやさぐれた状態だという事なんだが……

とりあえず酒臭くてかなわないんですが！

「ほらしつかりして下さいサイトさん！ お客様が来てるんですよ！」

「ふええ俺に客……？」

シエスタが無理やりテントの中からサイトを引っ張り出してくる。

サイトはされるがままでグツタリしている。呂律も回ってない。

正直いゝんな意味で情けなさすぎる……

「ういゝトオルじゃんかよゝ久しぶりゝ」

「おま……再開の一言目にしちゃあ随分ノリが軽くないか？」

「ひょうがないじゃんゝそれにお前が死ぬとは思わないしゝ」

ダメだ……完全に出来上がってしまった。会話にならない。

「エスナ……」

というわけでシエスタに見えない位置からこつそり魔法を使用する。

エスナが酔いにも効くという事は以前、自分で立証した事だ。

「ふいゝ……つてアレ……トオル……？」

「気分は晴れたかいヒモ野郎……」

正気に戻ったサイトを見て、よくわからないが俺は頭を抱えてしまった。

サイトがさつきまで自分の情けなさに落ち込んでorzってしまいそれをシエスタが慰めつつも、再起動を果たすのに大体10分程かかった。

「でだ…何でお前はこんな場所で飲んだくれてヒモになってんだよ？」

「…クビになつたんだよ…使い魔をよ…」

同郷者のよしみというのもあって、ボソボソとした口調ながらもサイトは素直に理由を説明してくれた。

「はあ…だから前に言つたろう？あのままじゃいずれ捨てられるって」

「うっせ…俺だつて説明しようとしたさ…」

けど、あそこまで強情だとは思わなかったんだよ…」

「説明つて…お前何かやらしかたわけ？」

「……………」

それに対してサイトは口を噤む。ああうん、流石にそこは説明しづらいよね…けど

「…主人の前で他の女とでもイチャついてたりしたのか？」

「いいいい！！？」

「……………」

ちよつと悪戯心が芽生えたのでからかってみたら予想通りサイトはあたふたし始める。

会話が聞こえてたのか、後ろにいたシエスタも顔を真っ赤にしていた。

俺はそれに気分を良くしてしまい、更なる追い討ちをかけてみた。

「何でそっちのメイドさんが顔赤くしてるの？」

「ちちち、違いますってば！！！！！！」

「違っつて何が？俺は何も聞いてませんが？」

「いや、その、あう……」

「ビンゴか……つまりビンゴなんだな？」

案外サイトじゃなくてあなたの方から仕掛けたとかだったりして」

「#x~!」

「お前はエスパーか何かか！？」

シエスタの方は最早言葉になっていなかった。

サイトと2人で顔を真っ赤にしてバタバタと慌てている。

あーもう、見てて面白いわコイツらwちよつと悪趣味だったが。

シエスタはサイトの事になると本当に大胆になるからな。

そういう面含めて彼女がお気に入りキャラだったのだ。

それを……あのルイズがねえ……だからこそだ。

「でもさ、実際どうすんのさサイト？」

一生ここでテント張ってヒモ生活する気か？」

「だって……追い出されちまったし……行くアテなんて無いしよ……」

再びサイトはいじけ始めてしまう。狙うならここだな……

「サイト、確か使い魔をクビになったんだよな」

「そうだよ……何度も言わせんなよ……」

「で、今は行くアテも無くてテント生活と」

「ああ……」

そして俺は得意げな声で再び勧誘をする。

「だったらそれこそ俺の所に来ればいいじゃん」

「あ……」

盲点だったと言わんばかりな声をサイトは発する。

前回よりかなり手応えが感じられるな。よし、もう一押し……

「使い魔をクビになったって事はつまり自由の身なワケだろ？」

つまりお前がどこで何をしようがアイツには関係ないじゃん」

「そうか……言われてみればそうだよな」

「俺のトコに来ればデカイ屋敷だってあるし

知っての通りFFの道具だって使い放題だぜ？」

「うーん…けどなあ…」

「それにさ、前はとりあげられちまつたろ？」

「今日もまた土産を持ってきてあるんだ」

「マジで!？」

土産の一言にサイトは思いつきり反応する。

まあ前回ルイズにガンブレードを没収されていたしな…

俺は袋の中から二本の剣と、更に小手を一つ取り出す。

「おおお…それはもじゃ…」

「と、とても立派な剣ですね…」

剣を指差してサイトはワナワナと震えている。

シエスタも見た目からして立派なその剣を見て感想を述べていた。

「俺の扱う武具の中でも最高クラスの品さ」

そう言っつてまずサイトに小手を手渡す。

「スゲエ…これが最強アビリティの一つ』にとりゆう』…」

装着した小手の力をガンダールヴの効果で読み取っていた。

というより、俺の想像が正しければ…

「じゃ、振ってみ？」

「お、おう…」

サイトの肩をポンと叩いてやる。

サイトは剣を二本同時に手にして、まずは右手の方を一振り。

すると凄まじい風圧と共に、神々しい白い光の柱が切っ先から放たれる。

「うおおおお!？」

サイトは最早、完全なハイテンションになり、今度は左手の方を振るう。

そして剣の振りの風圧から放たれたのは黒色混じりの原初の炎による爆発だ。

ガンダールヴの効力により、追加効果が確実に引き出された結果だ。サイトに渡したのは、ラグナロク、ライトプリンガー、そして源氏の小手、全て？仕様となっている。ラグナロクはフレア、ライトプリンガーはホーリーの追加効果を持ち共に各種の能力を向上させる力がある。攻撃力も勿論抜群だ。源氏の小手はサイトの言ったように『にとりゅう』の効果をもたらす。

FFにおいて『みだれうち』と組み合わせるのは最強の組み合わせ一つと言える程メジャーなものなのだ。

しかもサイトはガンダールヴによって追加効果を確実に引き出せる。最強の攻撃力に達人級の太刀筋、更にフレアとホーリーの乱射：ハルケギニアはおるか、FF世界でも通用しそうな鬼コンボだよ。

「どうよサイト？」

「すっげー…マジすっげーよ…今の俺ならオメガにも勝てそうだよ」「いや、それは無理だ」

興奮のしすぎでまた変な方向に頭が振り切れてるらしいな…

というより何故にそこでオメガが出てくる？

「まあそういうわけで、俺についてくればこの手の武器も使い放題ちよつと俺も武器のテスト要員が欲しかったし

それに近々ゴールドソーサーも完成するんだ

当然俺の権限で遊び放題だぜ？」

「行きます。もうマジで全力でついて行きますトオル様」

そう言つてスライディング土下座をサイトはかます。よし！食いついた！

「サイトさん！いいんですかそんな勝手に…」

だが、ここでシエスタが心配そうな顔をしてサイトを呼び止める。するとサイトは表情が急変して、迷いを見せる。

こいつのモテっぷりはギャルゲレベルだかな。
俺についてくれば、シエスタと離れ離れにならなくてはいけない。
この世界で初めて優しくしてくれた相手故に、思う事もあるのだろ
う。

でも俺にとっては寧ろそう思ってくれた方が助かります。

「ああ、ならいつそ君もついてくるかい？」

「えええ！？」

予想外の言葉にシエスタは再び慌てふためく。

「あつ！それいいじゃん！シエスタも一緒に行こうぜ！」

「で、でもサイトさん……」

俺の言葉に同意したサイトもシエスタを誘う。シエスタは尚迷って
いるようだ。

「なに、今までの流れから考えれば君は随分サイトと仲がいいみた
いだからね

結構長い期間になるから離れるのは辛いだろうし……

それにこっちとしては大勢の方が楽しいし……」

「……………」

「いや別に無理にとは言わないよ。いきなりこんな事言う方がおか
しいし

君にだって色々と事情はあるだろうからね……だけど……」

そこまで言って俺はシエスタの方に近寄ってそっと耳打ちする。

「……ここで二人きりの時にアピールしとけば……」

サイトの心も固まるかもしれないよ……？」

「……………」

すると、シエスタは何かを決意したような表情に変わる。

「わかりました！私、学院の方から許可を取ってきます！」

そう言っつてシエスタは物凄い勢いで駆けていった。

「なあ、シエスタに何言っただよ？」

「…いずれわかるよ」

はぐらかすかのようにサイトに答えておく。

(本当にサイトの事になると周りが見えなくなるよね…)

俺とシエスタは初対面だったというのに、

サイトの事をちらつかせるだけでこつも上手く行ってしまつとは…
だがこれでいい。いずれはサイト同様にシエスタも引き込む予定だ
つたのだ。

彼女のサイトへの好意を利用するような形になってしまつが

そのサイトを今度こそ完全にこつち側に持つて来る予定なのだから。
本来原作ではこの後、キュルケやタバサと共に宝探しをして
タルプでゼロ戦を発見した後に帰還し、ルイズと元鞘に収まる。

だがそんな事は始祖が認めても俺が認めねえよ。

これ以上ルイズとサイトの仲は深めさせない。

そもそも自分でクビにしたのだから何の文句も言わせない。

実際原作でも、泣き喚いてサイトが折れてうやむやになって終わっ
たのだ。

自分でクビにしたのだからそんな甘い展開にはさせんよ。

万一噛みついてきたらFFの力で返り討ちにしてやるだけだ。

奴には自分のしでかした行為の代償を支払って頂こう…

シエスタの方にしたつて俺には重要なキーパーソンだ。

今すぐは無理だとしても、しつかり関係は作っておくべきなのだ。それに今回のやり取りを見るに、彼女はサイトを上手く使えば難しくはないだろう。

一度は屋敷に戻るとはいえ、タルブ村の襲撃もあるのだから上手く話をつけて彼女に村まで案内してもらえば一石二鳥だ。

更に襲撃イベントを上手く利用すれば二人の好感度を更に高める事も出来るだろう。

アルビオン編が失敗した以上、今回は上手くいく事を願わんばかりだ。

…それに何より、シエスタは本当にお気に入りキャラなのだ。

だがそれは異性としてではない。物語のキャラとして、そして何より俺は彼女の献身的な恋への姿勢が小説を読んでる時から気に入ってた。

…ならば、俺というイレギュラーがそれを成就させてやる。

多少サイトに手荒な事をするような事態になったとしてもだ。

アイツは確かに好きだが、女たらしなのだけは修正せねばな、シエスタの為に。

とにかくそういう意味でもサイトとシエスタを共に連れていけるのは好都合なのだから…

(サイトの隣には…シエスタがいるべきなんだよ…ルイズなんかじゃなくてな…)

第18話：常識外れな力が白い目で睨まれるのはある種のお約束

「なあトオル…」

「何だ？」

「お前ってひよつとしてロリコンなのか？」

「しばくぞテメエ…」

10歳前後の、それも善意で助けた少女に手を出すような鬼畜じゃねえっつーの。

サラリと酷い事言つてのけるサイトに、俺は「顔だけは」満面の笑みで返答した。

冒頭から3流コントでお送りしております。
トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

今、俺達はガリア領内にある、俺の屋敷の敷地内の草原へと来ている。

ここはいわゆる、FFモンスターの放牧地とも言える場所であり、今までに召喚した多数のFFモンスターがのびのびと暮らしている。

「ほらほらシエスタお姉ちゃん！こっちこっち」

「ああ…そんなに慌てないで…」

「大丈夫！その子達はとっても賢いから、落ちそうになっても自分

から止まってくれるよ！」

太陽の様に明るい笑みを浮かべて、チョコボに跨って草原を疾走するリアと

その後ろから、少しオドオドしながらも、同じようにチョコボに跨るシエスタ

リアはシエスタに会うなり、物の数分ですぐに彼女になついていた。リア本人が人懐っこい性格というのもあるし、またシエスタ自身も沢山の弟や妹の面倒を見ているからか、

その手の子供に懐かれやすいオーラでも発していたのかもしれない。そこで、早速シエスタの手を引いて、この草原にいるモンスター達を紹介したり

一緒にチョコボに乗って草原を駆け巡ったりと元気一杯に行動していた。

シエスタの方は、リアの勢いに困惑しながらも、されるがままといった感じだが

子供の面倒を見るという事には長けていそうなので、何とか見た目的には手間のかかる妹の遊びに付き合っているといった感じだった。

まあアレだ、結論から言えば物凄い絵になる光景なんだよ。

もっとわかりやすく言えばまたかと思われるが、可愛い、その一言に尽きる。

俺とサイトはと言えば、そんな2人の事を遠目でポケーっと眺めながら

草原の一面に腰を下ろしてのんびりしている感じた。

「でもどうよサイト、こんな風にのんびりするのなんて久しぶりだろ？」

「そうかもなあ…向こうにいる時はいつつもルイズに振り回されて自分の時間なんて殆ど取れなかったし…」

サイトの表情は穏やかなものである。まあ当然といえば当然か。

サイト自身の落ち度も多少はあったとはいえ、ほぼ一方的にクビを

宣告されていたのだ。

やさぐれた心に対し、こういう場所で羽を伸ばすというのは、効果抜群であろう。

「それに何と言ってもこのモフモフ感…ホント癒されるよな〜」
そう言つてサイトは、自分の側にいた一匹のモーグリの胸元の毛を撫で撫でする。

それに関しては本当に同意せざるをえない…マジで気持ちいいんだもんよ…

しかし、やはりこのタイミングでサイトを連れてきたのは正解だったかもな。

本人もかなり満足してるみたいだし…これなら今度はいけそうか？とまあ、そんな事を考えつつ俺は、側に寄ってきた最も付き合ひの長いパートナーである銀竜の頭を撫でてやった。

*

しばらく草原でのんびりした後、俺達4人は屋敷へと戻ってきていた。

「しかし本当に良かったのか？招待してるのはこっちだったのにそんなわざわざね…」

「とんでもございませぬ！私の様な平民まで招待してくださったんですら

せめて昼食ぐらいはお礼させて頂かないと……」

屋敷のキッチンで料理をしていたシエスタに俺は尋ねるがシエスタは全く気にしていないという風に大鍋を抱えながら返答した。

因みにこの屋敷にある食材や調理器具は商売の資金でほとんど完備していた為、

グラントロワ王宮にも劣らない品揃えである。

シエスタはそれをフル効用して、俺達に昼飯を作ってくれていたのだ。

「うわあ！美味しそうだねシエスタお姉ちゃん！」

机の上に運ばれた大鍋の中身を見て、リアは爛々と目を輝かせる。

流石に本職の人間が作った物なだけはあるといった感じた。

鍋から漏れるいい匂いが鼻をくすぐる。

というより……何か懐かしいというか……普段自分が作っているのに近いというか……ああ……これって

「むぐむぐ……うん！とっても美味しい！」

「ふふふ……ありがとうリアちゃん」

そんな風に考えているうちに、リアはもう、大鍋からそれをよそって口へと運び

そして大変満足した感じにシエスタに感想を述べていた。

そんな2人の様子を眺めつつ、俺も一口口へと運ぶ。

「む……やっぱりな……というか普通にメツチャ美味しいんですけど……」

「あ、良かったです、ミスタ・サイガーにも気に入ってもらえて」
予想通りとはいえ、シエスタの作った料理はやはり美味かった。

一般ピープルな一大学生が作る料理とでは正に月とスッポン程の差がある。

いや、別に自分の料理が食えないほどマズイとかそういう事を言いたいのではないよ？

実際問題、普段の俺とリアの食事は俺が用意しているのだから。

「しかし、この辺じゃあまり見ない味付けだけど……どういう料理な

のかな？」

「私もそれ思いました、どちらかというところ、サイガー様が作る料理に近い気もしたけど……」

何となく察しはついてたんだが、俺はシエスタの方を見てこう尋ねる。

それを聞いてリアもまた、この料理に関する疑問を述べていた。

「私の村に伝わるシチューでヨシエナヴェっていうんですよ。」

父から作り方を教わったんです……その父はひいおじいちゃんから教わったそうなんですけど」

ああやっぱりね、納得。これがそのヨシエナヴェだったというわけか。

シチュー、というよりかはほとんど和風の寄せ鍋に近い味付けだもの。

俺自身が、ハルケギニアにある、日本風の味付けに近い食材やら調味料やらを集めていたのもあって

シエスタの作ったのもやはり、それに近いものがあつた。

山菜やらキノコが入った、ハルケギニアではまずお目にかかれない独特の香り……

シエスタの家系の血筋とはいえ、よくここまで近い物を作れるよなあと感心する。

「サイトさん、おいしい？」

次いでシエスタはニッコリと笑みを浮かべてサイトにこう尋ねる。

「うん、とつてもおいしいよ」

「そ、そうですか……良かったです……」

サイトに味を褒められたシエスタは顔を赤くする。初々しい奴だねえ……そこがいいんだけど。

そのサイトはといえば、確かに笑みを浮かべているのだが、それはどこか哀愁の漂う笑みであつた。

望郷の念……というやつが生まれているのだろうか……

（それに比べて俺は……意外とこっちで暮らす事を割り切ってる感が

あるよな…)
今更ながら、俺ってそっち方面に対して薄情なんじゃないかと思いはじめたりしました…
いや、本当に今更なんだけどね…

*

あつという間に夜がやってくる。

「それでね、この子がカーバンクルって言うの！」

「どの子も可愛いわね…リアちゃんのお屋敷にはこういものが沢山いるの？」

「そうだよ、ゼーんぶサイガー様がしょうか…じゃない、連れてきてくれるの！」

リアは窓際のソファにシエスタと一緒に腰掛けながら、自分の可愛がっているムーやチョコボ、カーバンクルといったモンスター達をシエスタに紹介している。

ハルケギニアでは見た事のないような生物ばかりで、シエスタも目を丸くしているようだ。

「お前への贈り物を考えていた…」

「うーん…ごめんやつぱはチェンジで。お前にセフィロスは似合わない」

「やつぱはそつ…？」

俺とサイトはというと、召喚した武器をいろいろと試したりしていた。

サイトが身の丈の何倍もある長刀・正宗を構えてカッコつけてセリフを言うが

悪いが壊滅的に似ていませんでした。

（因みにさつきまでアルテマウェポンを構えて、クラウドの物真似をしていたりもした）

まあ、こんな感じに各々方で楽しい時間を過ごしていたのだ。

「そっぴやトル、明日はどうするんだ？」

と、ここでサイトが唐突に今後の予定について尋ねてくる。

切り出すなら今かな…何分残された時間はそんなに多くない。

本来なら屋敷ではなく、直接向かうべきだったくらいかもしれないし。

「明日はちよつとねえ…宝探しに行こうかと…」

「はあ？」

「そんな怪訝な顔すんなよ…アテはあるんだよアテは。商売中に聞いた情報の1つなんだが…」

トリステインにある『竜の羽衣』ってマジックアイテムを探しに…」

「『竜の羽衣』ですか？」

すると、その会話を耳に入れたシエスタが会話に参加してくる。

全部知ってるのを一々誤魔化さないといけないというのは、意外とまどろっこしいのだが

かといってそれを正直にベラベラ喋るわけにもいくまい…

「おや、何か知ってるのかなシエスタ？」

そっぴやわけて、シエスタに自然な感じで反応を返しておく。

「知ってるというか…私の故郷にある秘宝なんです」

「へえそれは偶然…ということはシエスタはタルブ村出身なのかい？」

「はい、けど秘宝と言ってもほとんど名ばかりの秘宝ですよ？村の皆は凄いありがたがってますが…」

おずおずとした口調でシエスタは説明を続けていく。

「そしてその持ち主が…私のひいおじいちゃんなんです」

「シエスタお姉ちゃんのこと？」

ここで、カーバンクルを肩に乗せたりアも会話に参加してきて、シエスタはコクリと頷いて答える。

「ある日ふらりと私の村にひいおじいちゃんは現れたそうです。

その『竜の羽衣』を纏ったものは空を飛べるとか言われていて…

実際にひいおじいちゃんはそうやって私の村にやってきたって言うてました」

「ふーむ、それは興味深い話だねえ…」

「サイガー様の乗ってる竜みたいな感じでしょうか？」

「けど村の皆がひいおじいちゃんに、その『竜の羽衣』で飛んでみるって言ったんですが…」

いろいろあつて結局飛ぶ事が出来なかったみたいで…それでそのまま村に住み着いちゃつて。

一生懸命お金を作つて、貴族様に固定化の呪文をかけてもらつたりもして…

とにかく大事に大事にしてきたそうなんです」

昔を懐かしむかのように、一つ一つ丁寧にシエスタは説明していた。すると、その辺りになって今度はサイトが口を挟んでくる。

「けどそれって村の名物なんだろう？ヨシエナヴェみたいな。そんなの持つてつたらダメだろ」

「いえ…私の家の私物みたいなものですから。それにサイトさんやミスタ・サイガーが欲しいと仰るなら父にかけあつてみます」

シエスタは多少悩んだ感じながらも、こうやって返答する。

「うーん…何か聞く限りだとも胡散臭いんだよね…」

サイトの反応はイマイチ芳しくなかったが、悪いが一切関係ないです。

「でもまあ、実際見てみたら意外と面白いかもしれないぞ？」

それにタルブ村って言ったら自然豊かでない場所だつて聞いてるし」「よくご存知ですね、近くにとつても綺麗な…ここのお屋敷みたいな草原もあるんです」

「あとはそうだな…美味しい葡萄も取れるとか聞いたけど」

「面白そう！私も行ってみたいですサイガー様！」

タルブ村についての会話が弾み、リアも元氣一杯な声を発して参加してくる。

うーん…本当はリアを行かせるのはあまり望ましくないんだけど…ちよつと今回は物騒な事態に進展しかねないからね…

まあけど、リアは俺の秘密を全て知らせているから、守る手段はいくらでもあるか。

「いいでしょサイガー様？私も行っても？」

「…そうだな、最近お前1人で留守番が多かつたからな、今回は一緒だ」

「やったー！！」

カーバンクルを小脇に抱えたまま、リアは嬉しそうにピョンピョン飛び跳ねる。

そんな彼女を見ていて俺も幸せな気持ちになつてくるわ…

行動や仕草の一つ一つが…一々可愛くて仕方ないんだよね本当…

「まあそういうわけで、明日はタルブに行くつて方向性で決まりだな。いいだろサイト？」

「ああ…みんなこれだけ期待している風ならな」

「シエスタの故郷なんだからな、お前らも仲を深めるチャンスかもよ？」

「ちよつ……嫌だ…かかか、からかわないで下さいミスタ・サイガー…！！」

「お、おイトオル！俺とシエスタはそんな…」

そんでちよつと茶々入れてみたら、予想通りの反応を見せる2人。それを見ておかしく大笑いする俺とリア。

実に平和で居心地のいい時間が流れていた。この2人を招いて良か

つたよ…

*

そして真夜中、他の3人はそれぞれ用意した部屋にいる。

「さーて…俺もそろそろ寝るかな…」

商品の手入れにキリをつけ、自分の寝室に移動しようとしたのだが。

「チヨイと待ちな」

唐突に俺を呼び止める声が響く、だが部屋には俺以外に人間はいない。人間は…

「…こんな時間に何か話す事があるのかデルフリンガー？」

部屋の片隅で、柄から微妙に顔を覗かせたデルフがカタカタと揺れていた。

「オメエさんと2人きりでないと話しづれえからな」

デルフの声には明らかかな…とまでは言わないが、若干の敵意が感じられた。

やはり出現を恐れる第四の使い魔の事と、何か関係があるんだろうか？

「それで？2人きりになってまで何を聞きたいの？」

眠い眼を擦りながら俺は尋ねる…いやホント、明日も早いから手短かに頼みたいわ。

「率直に聞きてえのは1つだ。お前さん、自分の力がどれ程のもん

か自覚あんのか？」

何が言いたいのかわくからん質問である。

「…まあ、確かにこの力はハルケギニアでは異質だろうね。」

けどそれ以前に俺は1人の人間だぜ？俺1人で出来る事なんて限界があるだろうに」

「いいや、お前さんは間違ってるんだよ。その力は使いようによつちやあ

世界中を一瞬で滅ぼせるような力だ」

「使いようによつては、な。けど俺はそんな使い方する気なんてサラサラ無いし

そんな事しようとするれば、俺がまず先に消されるだろうよ」

話していて段々イライラとしてくる。なんたつてこんな突っかかるような物言いなのだろうか。

この第四のルーンが絶大な能力を誇っているのは事実であるが、まるでその所為で俺自身が攻められているような感じではないか。

「デルフ、つまりはこの力を持っている俺を警戒してるわけ？」

「そういうこつた。正直言えばお前さんには命を絶つてほしいくれないんだよこつちは…」

「…オイ、いい加減にしないと溶かすぞ？」

剣相手に大人気ないかもしれないが、流石に聞き捨てならなかった。何が悲しくてコイツに、率直に言えば死んでくれなどと言われねばいかんのだ。

「相棒は随分とお前さんを気に入ってるみたいだが、はつきり言うて俺はそれが気に入らねえ

出来たらお前さんは誰とも関わって欲しくねえんだよ」

「力を持つてるだけでつてか？何でそんな事をお前に命令されなきゃいけないんだよ？」

「…お前さんは知らねえだろうが、そいつの力の持ち主はとことんイカしてやがったんだ

物忘れの激しい俺でもはつきり覚えてらあ。その第四の使い魔…も

う1人の始祖は

使い魔になつた後でもブリミルの奴を殺そうとしてたんだかな」

「何千年前の人間の確執を持ってくん。俺には一切関係無いだろが」

「それだけじゃねえさ…そいつの力を持った奴は力の使い道を間違えて大暴れしやがったんだからな。」

ブリミルが止めなきや今頃ハルケギニア存在していねえ…

それにだ…テメエの所為でガンダールヴの奴は…」

「いろいろ興味深い話だけど、悪いがこれ以上は野暮だ」

心底イラついていた俺は、話を途中で切り上げてデルフを鞘に勢いよく押し込んで無理矢理黙らせた。

「全く…不愉快この上ないな…」

始祖の時代に関する記憶が飛び飛びなデルフが、こつもハツキリ覚えてるのは意外だった。

どうやらこの世界における第四の使い魔は、いろいろと危険な人間であつたらしい。

ブリミルはおろか、ハルケギニアすら破壊しようとしていたとは…

そしてその力を受け継いだ身である、俺の事を警戒していたと…

だがそんな事俺には一切関係が無い。俺は別にこの世界が嫌いなわけじゃないし

破壊をすれば快樂を得られるようなキチガイDSでもない。

俺はあくまでも、自分の幸せの為だけにこの力を振るっているにすぎない。

世界を滅ぼすだなんて心底馬鹿馬鹿しい…そんな昔の人間と

異世界の、それも現代日本人の感覚をゴツチャにするなつてんだよ

全く…

俺がジョゼフから授かったこの力、使い方を決めるのは俺自身だ。

世界を滅ぼすとかそんな馬鹿げた事するつもりはないし、

他人に捨てると言われてホイホイ捨てれる程の物でもないのだ。

「まあ…俺の詳しい事なんて、デルフには知る由も無いがな…」

そう一言だけぶつくと呟いて、俺は寢室へと入っていった。

第19話：マントを羽織った青肌禿頭を連想します（前書き）

ちょっと今回、読み手を結構選ぶシーンがあるかもです。

第19話：マントを羽織った青肌禿頭を連想します

朝焼け眩しい空の下、二匹の銀竜が空を舞っております。

片方には俺とリア、もう片方にはサイトとシエスタが乗っている。因みにシエスタはサイトの後ろで彼の体をギュッと抱きしめたりしてるもんだから

彼女の体に付いた2つの双壁が、サイトの背中に強く押し当てられていて

サイトは嬉しいやら、気恥ずかしいやらといった感じの表情を浮かべている。

「…シエスタお姉ちゃんって意外と大胆ですよネサイガー様？」

「あいつに限らず女つてのは大胆になる時つてのがあるんだろーよ」

「ふーん…よくわかりませんが、つまりシエスタお姉ちゃんは

あの人のことが好きって事なんですよネ？」

「まあ一目瞭然だわな。あれが演技だったらシエスタの感覚を疑うよ」

「あはは…ですよネ…」

ホントにな…よく見えないけど、シエスタの方も幸せそうな顔してるし。

二人して銀竜に跨っているその姿は、どう控えめに見ても仲の良いカップルそのもの

決して先頭に「バ」は付かない。見ている第三者も癒されるそんな感じの光景なのだ。

そのシエスタが原作では、二番目でいいんです…なんて悟っちゃったセリフを言った時には
ラノベという世界とはいえ、ちょっといたたまれない気持ちになっ
たりしていた。

アイツがルイズとサイトのサポートに回るなんて、そんな勿体無い
展開になど俺がさせない。

押し付けがましいことこの上ないかもしれないが、サイトの隣にい
るべきはシエスタなのだ。

いや…ティファニアとかでもアリかもしれないが…少なくともルイズ
だけは無い。

絶対無い、何が何でも有り得ない。というか俺がさせない。

何故かと言えば俺が嫌いだから。それだけ。アイツとサイトがくっ
つくとかマジ勘弁。

この世界における唯一の同郷者を、誰があんな小生意気なだけのま
な板娘などに渡すものか。

シエスタだって本来ならサイトと結ばれたいはずなのである。

サイトにしたって、やたらと女性関係が軽率な部分さえ何とかすれば
シエスタとは絶対によりよい関係になれる筈なのだ。

だったらそれを、出来る限りサポートしてやりたいと思う。

サイトもシエスタも原作の中では、特にお気に入りキャラである
だけに。

俺は他人と接する時は、自分の社会的な立場とか利益とか、
大人の事情が関係しない限りは好き嫌いで判断して動きますから。

好きな人間には好意的に接するし、困っていたら損得関係無しに助
ける。

嫌いな人間は無視を決め込むか、とことん蔑む。その他大勢はその
場の状況で対応を決めていく。

自分と、自分の好きな人間数名、それと自分の近距離にいる第三者
の人々

その人達が幸せであるならそれ以外の人間なんて正直どーでもいい。

そして、俺が好きなキャラを助けるのだって、俺の心を満たす為の自己満足かもしれない。

前述したが、サイトとシエスタをくっつけようという考えだって見ようによっては押し付けた。

でも、それでサイトとシエスタが幸せになってくれるならそれはよし。

それを当人達が本気で望まないとするならば、それもそれだ。

俺の自己満足で幸せになる人間がいるなら、それでいいというだけ。心の汚い人間かと思われるかもしれないが、人間なんて所詮そんなもんだと思ってるからね…

冒頭からくどくどと失礼。 トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

要約すれば、俺はサイトとシエスタを両方ともこちら側に引き込んだ上で

2人に結ばれてもらいたいと思っている、とまあそういう訳なのである。

今はこうして4人でタルブ村へと向かっている。

くどいようだが、2人の仲をより深めてもらうというのがもう1つ。タルブへ襲撃してくるであろう、レコンキスタへの迎撃準備があるからだ。

当然、その為の荷物が俺の小脇に置いてある布袋にしまつてある。何せ今回は、初めて強大な力を発動させるわけだからね…
今までの小技と違って大胆に動くわけだから、周りから諭されないよう注意せねば…

*

まあ、何はともあれまずは竜の羽衣である。

今回もまた、それ程苦労する事無く、目的地のタルブ村へと到着していた。

「で…これが件の『竜の羽衣』なわけか…」

てつきり改変の影響で、FF的な何かに変わつてたりするんじゃないかとか密かに思つてたのだが

流石にそこまでは及ばなかったらしく、『竜の羽衣』は地球にあるソレであった。

「これって飛空艇…ですか…？でもサイガー様のよりは…」

リアもまた、寺院に保管されていたソレをまじまじと眺めている。

詳しい話は追々するが、リアは以前、俺がジヨゼフに頼まれて召喚した

FF世界の飛空艇を見た事があつたので、それと重ね合わせていた。

といつてもこれとFFの飛空艇では差がありすぎるのだが。

「サイトさん、どうしたんですか？私、何かまずいものを見せてしまったんじゃない？」

一方で、シエスタは心配そうにサイトにこう尋ねるのだがサイトの方は完全に『竜の羽衣』に視線が釘付けとなっていた。

そりゃあそうだろう。俺たちの世界でも完全なアンテイクとはいえず軍オタが辺りに見せれば、それなりの反応が返ってくるであろう品があるのだから。

「なあトオル…これってもしかして…」

「…『竜の羽衣』…って言う割にはちよつとキツイ冗談ではあるわな」

ゼロ戦を見上げたまま、興奮気味な声色でサイトが尋ねてきたので俺は当たり前障りの無いの答えを返しておく。

「シエスタ」

「は、はい？」

「お前のひいおじいちゃんが残したものは他に無いのか？」

「えっと…あとはお墓と…遺品が少しだけ…」

「それを見せてくれ」

落ち着いた感じながらも、サイトの言動には明らかに重みがあった。何せこの『竜の羽衣』…ゼロ戦は紛れも無い地球の品なんだからな。

そのままサイトの要望に応え、シエスタは共同墓地の一画へと俺達を案内する。

白い墓石の立ち並ぶ中で、一個だけ異質な黒い墓石の前で俺達は立ち止まる。

「えーっと…サイガー様、何かハルケギニアでは使われてない文字が書いてありますよ？」

墓石を覗き込んだリアが、キョトンとした感じで俺に尋ねてくる。

「ひいおじいちゃんが死ぬ前に自分で作った墓石だそうなんです。

異国の文字で書いてあるので誰も読めなくて…」

それに対してはシエスタが説明をしてくれた。

「説明されるもまでも無く、俺とサイトにはこの墓石と文字が何なのかはすぐにわかった。」

「海軍少尉佐々木武雄、異界二眠ル」

「はい？」

「えっ…お兄ちゃん、それ読めるの？」

墓石の文字をスラスラと読み上げたりしたもんだから、シエスタはおろか、リアも目を丸くしている。

「この文字でしかも海軍少尉…となればこの人は戦前の人間ってわけだなサイト？」

「ああ…というかトオル…お前随分と落ち着いてないか…？」

「おいおい、俺やお前みたいなのがいる時点で、こんなのもう今更なんだよ、俺にとってはな…」

一応、このような言葉を返しておいたが、サイトはやはり落ち着かない様子だ。

「サイガー様、これについて何か知ってるんですか？」

当然の事ながら、リアが俺の今の発言に対して疑問を述べてくる。

「要するに、この墓の人間はな、サイトの故郷の人間と同じってことだな」

「ああ、そういうことですか…、という事はつまりシエスタお姉ちゃんはやんは…」

「サイトの国の人間の血が通っている…そういう事だな」

「成る程、だからシエスタお姉ちゃんの目とか髪の色とかが、サイトお兄ちゃんにどことなく似てたんですね」
納得したといった感じに、ポンと手を打ってリアはこう呟いた。
「でもシエスタお姉ちゃんのひいおじいちゃんと、サイトお兄ちゃんが一緒の国の人だったなんて」
「何か、運命的な物を感じる…というわけか？」
「そう！そんな感じですよサイガー様」
そして俺とリアがこのように会話したら、シエスタはまた顔を赤らめてわたわたと慌て始める。
しかし、サイトはさっきからずっと墓石を眺めてばかりで関心が薄いようだった。

*

夕暮れ時、俺とリアは村にあるそれなりにいい宿屋に宿泊していた。シエスタは俺達も自分の家に泊まればいいのにと提案していたのだが、リアはともかく俺は貴族なのだから、色々気を使わせると断っておいた。
本音としては全然OKだったんだが、やはり貴族と平民では問題が生じるの事実。
シヨゼフから授かったシュヴァリエの称号も、メリットばかりでは

ないということだ。

というわけで今、俺とリアは窓際のテーブルに座ってくつろいでいるといった感じだ。

「うん…お屋敷で遊ぶのいいですけど、

たまにはこういう場所に来るのも楽しいですねサイガー様！」

「そうだな、特に最近何かと留守番が多かったしな…」

リア旅の道中ずっと一緒だったカーバンクルを、右肩に乗せたまま指で弄って遊んでいる。

因みに屋敷の方は、警備代わりの鉄巨人や、その他大勢のモンスターがいるので留守にしても無問題だ。

「けどサイガー様、東方ではあんな物がたくさん作られているのですか？」

「俺もここに来る前は…資料上でしか見た事ないが

昔はあれと同じ物が何隻も作られて、戦争で活躍していたらしい…」

「あれと同じのが…という事はやっぱりあれって飛ぶんですか？」

「さあ…直接見た事あるわけじゃないし…詳しく調べないと何とも言えないな…」

「そうですね…仮に飛んだとして、サイガー様が召喚した飛空艇とどっちが速いですかね？」

「そいつは実際飛ばしてみないとわからんだろう」

ゼロ戦に関する話題が弾みつつ、俺は注文したワインを一杯口へと運ぶ。

やはりサビエラ村で飲んだ時と同じく、良質な味と香りが口内に広がっていった。

（レコンキスタをうまくこと撃退して…土産代わりに何本か買ってくかな…）

ちよっぴりほろ酔い気分でそんな事を考える。

「むぐ…うん、甘くて美味しい！」

リアの方は、村の露店で購入した葡萄を美味そうに口へと運んでいた。

ワイン用だけではなく、食用の葡萄もま良質だったということである。

うーん…これは真面目に葡萄畑の購入とか考えてみる価値あるかな…

*

その後、リアを宿屋で待機させてから、俺はある場所を目指す。

銀竜は使わず徒歩だったとはいえ物の数分でそこに到着した。

「ここか…」

俺の屋敷にあるのと同じだった広い草原…成る程、シエスタがサイトに見せたがるのも納得だ。

草原の向こうの山間から漏れる夕日が彩りとなっており、実に感慨深い光景である。

しかし、いい加減そんな感動に浸ってばかりいるわけもいくまい。

近い内にこの草原を拠点にしてレコンキスタが攻めてくるのだから（原作との時間軸を合わせると、もうそう遠くはないから…）

そんな事を考えつつ、持ってきた袋から魔石と…そして召喚用のマテリアを数個取り出す。

これらを駆使すれば、恐らくは物の数秒でカタがつくであろう。

本来は、レコンキスタの艦隊を潰すなどというのは注目が集まるの

は間違いないのだが

ルーンではなくこれらを用いた召喚ならば、召喚獣は役目を終えた後に消えるだけだ。

俺自身の姿さえ見られなければ、俺とその大元を結びつける事など出来まい

いや、たとえそうでなくとも、タルブ村は俺の好きなキャラであるシエスタの故郷でもある。

なら、多少無理があったとしても助けるべきだと俺の中では決定付けられている。

冒頭で言ったように、好きなキャラへの自己満足の善意による救済というやつだ。

「ここにずっといるってわけにもいかんし…ここを中心に銀竜を数匹徘徊させて監視させるか…」

いや銀竜はダメだな。アレを使ってるのは俺しかいないんだからバシる可能性がある…

適当な飛行型のモンスターを徘徊させて、内一匹を俺への報告と運搬に…ん…？」

魔石を片手にあーだこーだ思考していると、誰かの気配を感じる。すると離れた場所からサイトとシエスタがやってきた。

(するつてーとアレか…2人きりで会話をしに来たってやつかな…) 原作でも、この草原をサイトに見せたかったと言って、色々と自分の思いをシエスタは告げていた。

(…そんなシチュエーションで側にいるのも野暮か)

空気を読む…というわけでもないが、俺はその草原からそそくさと離れていく。

詳しい話の内容は、あとでサイトに会った時にでも聞けばいいだろう。

*

さて、そんなこんなで翌日の朝となる。

「最早、何でもありって気がすんな？確かに武器ではあるんだろうけど」

「お前にだけは言われたくねえ…」

俺とサイトは再び、ゼロ戦の保管されている寺院へとやってきていた。

因みにリアはシエスタとその家族の下で遊ばせている。

リア自身人懐っこいし、カーバンクルも側にいる事もあってか

シエスタやその他家族達からも、好意的な印象を持たれているようであった。

「でだ、調子はどうなんだいサイト？」

「…ダメだな、保存状態は完璧だけど燃料はカラッケツだ」

「ああ…それじゃ確かに飛ばないわな」

で、その間に俺とサイトは2人きりでゼロ戦について詳しく調査中というわけだ。

戦闘機もガンダールヴにとっては武器と見なされるらしく、

操縦方法や内部構造もバツチり頭の中へと入ってくるらしい。

つまりは、FFの戦艦とかもサイトの手にかかれば動かせる可能性があるというわけで…

第四は道具を生み出し、その道具を他の使い魔が操る…確かに理想

的な形だな。

「しっつかし戦前のアンティークとはいえ、こんなもんが見つかるなんてな？」

「ああ……」

「？…どうしたよ、元気ないじゃんか」

ゼロ戦のコクピットから降りてきたサイトは浮かない顔をしている。さしずめいろんな思いが渦巻いていて、迷っているといったところか…

「トオル…お前はどうかだよ？」

「何がだよ？」

「その…お前は帰りたいつて思わないのか？」

真剣な表情でこう尋ねてくる。まあ当然といえば当然の質問か。

サイト側からしてみれば俺も同じ、何も知らずに召喚された地球人の筈なのだから。しかし…

「…実を言うと、今はあんまり思わねえんだよな」

「どうしてだよ？向こうにはお前の事心配してる奴らだって…」

「確かに帰れるなら帰れるに越した事は無いさ、けどそれっていつになるんだよ？」

明日か？一年後か？それともずっと遠い未来の事か？」

「そ、それは…」

「そんないつになるかもわからない事を考えても、自分を追い詰めていくだけだ」

「だったらそんなん考えるだけ無駄だろう？だから俺は普段は考えないようにしてんの」

「こっちの世界で如何に楽しむかだけを考えてるな、でないと色々損だろう？」

「はあ…ポジティブなんだなお前」

「よく言われるよ、ここに来る前から結構その場の切り替えは早かったしな」

サイトに聞かせたのは殆どが本音だ。前にも言ったかもしれないが

これだけの力があり、そしてリアやジョゼフといった大切な人達が俺の側にはいる。

それら全てを無視してまで、地球の事ばかり考えるのは損だというものだ。

それは俺が、このハルケギニアという世界を知っているからというものもあるのだが

そうでないにしろ、原作というレール上の事以外の、先の未来の事など考えるだけ無駄だ。

だったら今という時間を精一杯楽しめばいい、俺はそう考えている。というより…これだけ色々やっついて今更帰るといのは…いや、やめておこう。

「だからよサイト、お前も本来はこっちで楽しく過ごす権利がある筈なんだよ

あんなワガママな貴族の使い魔なんかじゃなくて、お前自身の意思でな」

「う、うん…」

「今は俺が側にいるし、使い魔だって主人からクビを言い渡されている

いくらでもこっちの世界で楽しむ事が出来るんだぞ？」

「そうだよ…そうなんだけど…」

しかし、これだけ言ってもサイトはまだ迷っている様だ。

果たしてこれは帰りたいという思いなのか…それとも…

「未だに…主人の事が頭から離れないわけ？」

「……………」

それに対するサイトの返答は沈黙、恐らく正解だったのだろう。

これだけあれこれ手を回してもまだルイズの事が吹っ切れていないとは…

やはりルーンの洗脳によるものなのだろうか？だとしたら厄介極まりないぞ…ったく…

「はあ…お前って薄情な奴なんだな意外と」

「…どういう意味だよ？」

その一言が癪に障ったらしく、サイトはジロリとこちらを睨む。だが構わない、ちよつとここでガツンと言っておいた方が後の為にもなる。

「シエスタの事だよ。お前だってわかるだろう？」

「それと何の関係が…」

「アイツは間違いなくお前に惚れてるぞ？その思いを無視するつもりなんか？」

「うっ…けど、俺は一応…あいつの使い魔だ…そんな俺が…」

「だからだよ、それが薄情だって言ってるんだよ」

「ッ…」

サイトの表情が段々と憎々しげな感じになってきたが、俺は構わず続ける。

「平民だ貴族だなんて区分は俺は好きじゃないけどな…」

お前の主人…ルイズって奴は言つとくけど最悪だと俺は思ってるよ道中色々聞いたけど、自分から召喚しといて勝手にクビにしたのたれ死ねだぞ？

そんな奴、貴族どうこう以前に人として終わってるっつーに」

「け、けど…あれは俺にだって…」

「落ち度はあつたかもしれない…けどシエスタはお前が好きだったからそうした…」

そこまでされといて、まーだあのワガママな主人の方がいいってのか？」

「でも…アイツがいなきゃ俺が路頭に迷ってたのだって事実だ！」

感情的な声で反論してくるサイト…やはりどうも様子がおかしいな。「いいや違うな、路頭に迷わせたのは主人の方だ。実際今がそうだろが？」

「あつ…！」

「それに対して救いの手を差し伸べてくれたのは誰だったよ？」

アルビオンの時にだって話してたじゃないか、食事を抜かれた時に

シエスタの紹介で賄って貰ったって…クビになってヒモ化してた時にだって

アイツは色々と世話を焼いてくれてたじゃないか…健気なもんだよ…」

正直、俺がこんな説教じみた事を言う資格なんて無い。

こればかりは悪いが譲れない、ルーンの洗脳にしろこいつの本心にしろ

サイトの気持ちをルイズの側にだけは傾けてはいけないのだ。

「わかるか？みーんなお前に好かれたいからだ…話を聞く限りでは俺はそうとしか思えない。

そこまで真剣な人間、地球にだってそうそういるもんじゃないぞ？その思いに応えずに、あっちこっち別の女に色目使うのが薄情だつて言ってるんだよ…」

「けど…俺は…俺…ッ」

「サイト、いい加減真面目に考えるべきだと思うぜ？

お前はシエスタの思いに立ててやるべきだ。そしてその為のサポーターなら俺が…サイト…？」

「ッッ…ア…アアア…！」

「サイト!？」

様子がおかしいと思ったのは束の間だった。サイトは左手を押さえ苦しげに呻きだしたのだ。

左手…まさかとは思うが…ここまで効果が及ぶのか!？

「サイト!しつかりしろ!！」

「ッア…!や、…ヤメ…俺…は…シエスタと…一緒に…！」

グッア…ち、違う…オレ…の主人は…ル…ルイ…ッッアアア…!！」

とうとうサイトは左手を押さえたままその場でのた打ち回り始める。尋常ではない事態だクソッ…そして予想通りというか何と云うかだがサイトの左手に刻まれたガンダールヴのルーンが鈍い光を放っていた。

「エスナー！！」
いてもたってもいられなくて、エスナをかけてみるが全く効果が無い。

「アアアアア！！や、ヤメロー！！俺の心をカッテにツクリカエるなアア！！」

サイトはマジでヤバイ状態になってきている。左手を右手できつく締め付けて

ドツタンボタンと暴れまわっている。正直見ていられん…
何とかして抑えなければいけないのに…なら、これはどうだ！

「スリプル！！」

サイトに向けて睡眠魔法を唱える。するとサイトの意識が遠のき、横になったまま眠りこける。

それと同時にルーンから漏れていた光も止まっていた。どうやら何とかなつたみたいである。

「軽率だったかもな…まさかここまで酷いとは…」

ルーンに洗脳効力があるとはいえ、主人から離れ、別の女性と結ばれたいと思っただけでコレである。

使い魔のルーンは、主人から離れたいという気持ちによほど敏感に反応するようだ。

「こう考えると、使い魔つてのもロクなもんじゃないかもな…」

改変のおかげもあるとはいえ、俺のジョゼフへの好意的な感情もひよっとしたらルーンによって作用しているのかもしれない。

人の心を勝手に制御するとは全くもってトンデモない話である。

第四の使い魔がブリミルを殺したがる気持ちも、何となくわかるよ
うな気がした。

「とにかく…このままじゃいけないな…」

俺は深い眠りに落ちていているサイトを運ぶ為、彼の体をおぶる。

しかし参ったな…これではどうやってサイトを勧誘すればいいのやら…

シエスタとくっつける云々以前の問題になってしまったな…

第20話：必ず…とは言わないけど愛が勝つのは気持ちがいい

結局その後、サイトはシエスタの家に運び込んでおいた。

シエスタの方には、今までの（主に使い魔の仕事やここまでの長旅での）疲れが出たと話しておいた。

そんなサイトに対しても、シエスタは一生懸命に看病をしていた。

シエスタも家族もまた、サイトの事を気に入っていたので心配をしていたようだった。

何せシエスタの父は、サイトに一緒に村に住んでほしいと言っていたくらいなのだから。

正直いつて救われない話だ…俺が無理矢理誘導しようとしていたとはいえ

恐らくサイトの心はシエスタの方へと傾きかけていただろう。

だが、それを邪魔したのがルイズから刻まれた使い魔のルーンである。

あの時の苦しげに呻くサイトの表情が、今でも脳裏に焼きついてい

る。こんなのが正しい筈が無いのだ。俺がけしかけたからとはいえ、

最終的な決定権はサイトにある筈なのである。サイト自身が俺の話

を聞いたうえでルイズと共に行きたいと結論を出したのなら、俺もあきらめがつく。

しかし、昨日のアレはどう考えても違う。サイトではなく、ルーンがそうさせているようにしか見えなかった。

まったく…忌々しいっただらありやしねえよ…

「…サイガー様？どうしたんですか？」

「えっ…ああ、何がだ？」

「その…何だか機嫌があんまり良くなさそうでしたから…」

と思っただら、俺の側にいたリアが心配そうに声をかけてくる。

…しまった、どうも感情が表に出すぎていたらしい。

「…大丈夫だ、すまないな余計な心配かけて」
すぐに表情を切り替えてリアの法に振り向く。サイトの件は確かに重要な事ではあるが。
それが上手くいかないからといって、リアにまで余計な心配をかけるはいけない。
リアもまた、俺にとっては大切な人間なのだから。

*

結局、調子の悪くなったサイトの看病の為に、もうしばらくこの村に滞在する事となった。
だが、どの道最初からそのつもりだったのだからそれはあまり関係が無い。
俺とリアはといえば、サイトが倒れたその日はタルブ村を見て回ったり、
サイトの為に色々と差し入れを買ってきてやつたりもした。
昼前になってサイトは目を覚ましたのだが、殆ど口を開く事が無かった。
シエスタやリアが話しかけても、曖昧な返事をするばかりであったのである。

やはりルーンの洗脳の増大が尾を引いているのかもしれない…

(予想以上に難攻しそうだよな…コレは…)

要するにサイトを完全に引き込むには、ルーンを何とかしなければいけないわけなのだが、

俺自身が持つ現在の現状の手札では、あれだけ強力な洗脳を防ぐ手立ては思いつかなかった。

ならば、ルーンを消滅させればいいのだが、その方法は1つだけだ。ルーンの持ち主が死ぬ…死ぬまでは行かなくとも、死んだと判断されるような状況に追い込む事だ。

だが、俺はその方法を好まない、というかしたくないと思っている。この世界に来て以来、地球の常識では確実に犯罪となる事だっけいからでもしてきた。

それは北花壇騎士団に入った時からわかっていた事なのだ。

今更人の生き死にどころで躊躇うのもおかしいかもしれないが、いくら自分の側に引き込みたいからとはいえ、いくらでも蘇生が出来るからはいえ

その為にサイトを一度手にかけるなど、やはりちょっと後ろめたい物を感じる。

だが…昨日のサイトの惨状を見ると、そんな余裕も無いのかも…しれない。

ルーンが逆らった、つまりサイトは本心ではルイズに仕えたくないとも言える。

このままではサイトが本心とルーンの板挟みになり、精神がどうなるかがわからない。

(他の方法となると…やはりティファニアかな…)

考えられる他の方法は現状で1つだけ。ティファニアの虚無による記憶消去しかない。

マチルダとの接点は出来ているので、あとは迎えに行くだけにはなっている。

しかし、今はやはり時間が惜しい。今のサイトをルイズに会わせた

らどうなってしまうのか…

「…仕方が無いのかな」

一言だけ、俺は一人でそう呟いて、どうするのかを決めた。

*

そして、想定していた事件の1つがいよいよやってきた。

サイトが倒れた次の日の朝、俺は宿屋の窓を叩くけたたましい爪音で目が覚めることになる。

「ん…朝から一体何なんでしょう…」

ねぼけ眼のまま、リアが窓を開けると、そこにいたのは俺が召喚したコカトリス、

前日の間にタルプの草原や、ラ・ロシエールに待機させていたものの一匹だ。

「あ、あれ？サイガー様、いつの間にこの子を召喚したんですか？」
リアが疑問を浮かべて俺の方を見てくるが、正直それどころではない。

すぐに俺は寝巻きから普段着に着替え、用意していた布袋を抱える。
「リア、悪いが急用が出来た。宿でカーバンクルと一緒に大人しくしている」

「え？あ、あのサイガー様？…」

「いいから、大人しくしているんだ。わかったな？」

「は、はい…」

自然と強い口調になってしまい、リアはしょんぼりとした感じになっ
てしまう。

だがこればかりは仕方ない。こんな事にリアを巻き込むわけにはい
かないのだ。

窓の外に浮かんでいたコカトリスに跨り、即座にヘイストを唱える。

「急ぐぞ」

一言だけ簡潔に告げると、コカトリスは一声鳴いた後、矢の様なス
ピードを出して吹っ飛んだ。

*

草原へ向かう途中で爆音が鳴り響き、遠方から爆発と煙が巻き起こ
る。

それと同時にタルブ周辺の森林や山岳に、燃え盛る船の破片が落ち
てきたのだ。

恐らくはレコンキスタによる、自作自演からの攻撃が始まったのだ
ろう。

「……なーにが聖地を取り戻す為だよ……」

ワルドの言葉を思い出して、胸糞悪くなって舌打ちをする。

こいつら結局の所、聖地奪還をお題目に好き放題したいだけなのだ。ミョズニトニルンのいないクロムウエルがどんな思惑で動いてるか
は知らないが、

自分から不可侵条約を結んでおきながら、作自演で船を沈めて、
そして一方的に相手の国を蹂躪するなど……正直言って正気の沙汰で
はない。

そんな事を考えつつ、猛スピードで飛んでいたコカトリスは、草原
へと到着した。

「バニシュ」

とにかく姿を見られるのは都合が悪いので、事前にこれを唱えてお
く。

こうしておけば、何も知らないハルケギニアの連中は俺の姿を捕ら
える事は出来まい。

因みに頭でイメージした仕様は？。仕様だとちょっと危ないので
……いろいろと……

と、そうこうしている内に雲の隙間から、巨大な戦艦が何隻も姿を
現す。

次々と錨を降ろして停泊していき、そこから沢山の竜や兵隊達が姿
を現す。

本当なら無謀極まりないシチュエーションだ。何千もの兵と何隻も
の戦艦。

それに対して一人で挑むなど……だが、花壇騎士の任務で養ったのも
あるが

不思議と震えや恐怖は無かった。確実に勝てる算段があるからであ
る。

「……役立たず以下のレコンキスタどもが……お前らには絶望を贈って
やるよ……なんてね」

こんな状況だというのに、「冗談じみたことを呟いてしまつ。」

これから起こる事象を引き起こすのは間違いない。俺自身だ。そしてそれは明らかに、世の常識から考えてまともではない。だが、今の俺にはそんな感覚はもう無かった。こっちの常識に順応していた。

敵はタルブに進軍しようとしている。そいつらを倒さなければ俺のお気に入りキャラであるシエスタの故郷が燃やされる。

それを防ぐには目の前の敵を全て潰す。俺にはその力がある。

敵は卑劣な手段で攻めてきた卑怯者の集団：なら一切の情けは入らない。そういう事である。

そして俺は、布袋から魔石とマテリアを1つずつ取り出し、更にレコンキスタの戦艦が停泊している高度より、もっと高い位置へと移動した。

「さあ行け：魔導の力の根源たる神々よ…」

中二病全開なセリフと共に、魔石の方を発動させる。

それと同時に空が赤黒く染まっていき、レコンキスタの艦隊の前に、三つの巨大な影が姿を現す。

それはゲーム画面のデフォルトされた姿ではなく、戦闘時の姿そのもので現れた。

巨大な悪魔のような翼を生やし、腕が何本も生えた黒い体の屈強な肉体を持った神 - 魔神

天使のような白い翼と、獣のような下半身を備えた赤く刺々しい体をした神 - 鬼神

巨大な顔の様な物の上に乗る、日輪を背負って片手を掲げる妖絶な雰囲気を持つ神 - 女神

？の世界における最強の魔石ジハード：その力によって幻獣の創造主、三闘神が降臨した。

そしてそれらは、召喚と同時に俺の意思を汲み取り、艦隊に向かって破壊活動を始め。

魔神が巨腕を振り下ろして艦隊に大打撃を与え、己の属性である氷属性の魔法を唱えて追い討ちをかける。

鬼神が業火と暴風を同時に操り、艦隊の多数を燃やし、そして吹き飛ばしていく。

女神が天から何発もの雷や準星を降りそそがせ、空を舞う竜達に死んでも尚解けない呪いをかけていく。

その光景の様は正に阿鼻叫喚地獄絵図。『天地崩壊』と呼ぶに相応しかった。

こうして事前に高度を上げとかなければ、自分もまきこまれかねない程だ。

しかし、艦隊の方はこれで壊滅するとして、まだ降り立った地上戦力が少し残っている。

俺はそいつらにも容赦なく次の攻撃を仕掛けるべく、今度は、適当な武器に装着させたマテリアの方を掲げる。

「円卓の騎士達よ……」

またしても中二臭い口調になる。だがそれとは全く関係なく、彼らは姿を現した。

頑強な甲冑に全身を包み、それぞれの得物を手にした13人の男達……

聖剣エクスカリバーを携えた白い鎧のアーサー王と、彼の両側を固める12人の円卓の騎士達……

？における最強の召喚獣、ナイトオブラウンドの降臨である。

そして13人の騎士達は、三闘神によって染められた赤黒い空の地下で完全に混乱しきって動きを止めていたレコンキスタ兵達へと向かっていく。

ある者は剣を振るい、ある者は槍を振り回し、ある者は杖の先から爆発を起こす。

巨大な長刀、魔法によって放たれた岩石や氷塊、身の丈の何倍もあるろう戦闘斧……

12人の円卓の騎士達による猛攻が、容赦なくレコンキスタ兵達に襲い掛かる。

そして最後にアーサー王が両手でエクスカリバーを高々と掲げて、勢いよく振り下ろす。

それによって放たれた一閃が、地上をレコンキスタ兵ごとなぎ払っていった。

それは、相手に究極の終わりを告げるかのよう…正に『アルティメットエンド』であった。

もう今日はいろいろと、中二成分120%でお送りしておりますw
「あつはっは〜…自分でやっという難だけでもう笑うしかないわな
コレは…」

眼下に広がる一方的な蹂躪を観戦しつつ、俺は苦笑いを浮かべていた。

そして召喚された三闘神とナイツオブラウンドによって、タルブに侵攻する筈だったレコンキスタの艦隊は、予想通り物の数分で壊滅するのであった。

もしれん…

「…はあ…はあ…うおっ！これは一体…」

すると、そんな壮絶な状態の草原に、デルフリンガーを携えたサイトが姿を現す。

恐らくレコンキスタが攻めてきたとの情報を耳に挟んで、居ても立つてもいられなくなったのだろうか。

だが、本来はゼロ戦とルイズの虚無によって滅ぼされる筈だったレコンキスタは

こうして俺の力によって壊滅している。最早原作もへったくれもないわな。

「デスペル」

そして俺は自身にかかったバニッシュを解除し、その姿をサイトの前に晒す。

「うおお！？い、いきなり現れんなよ！というかトオルこれは一体…」

「スリプル」

驚いているのにはお構いなしに、俺はスリプルを唱えてサイトを眠らせる。

「デメエ…やっぱりその力でコイツらを…！」

「黙ってる駄剣が」

デルフが何か言おうとしていたが付き合う暇は無い、すぐにデルフを黙らせた後

サイトを抱えてコカトリスに乗って人目につかない場所へと移動した。

草原近くの森林の中、サイトを横たわらせてまだ試してなかった事を行う。

「デスペル」

サイト自身にデスペルをかけてみる。しかし、やはりそれによってルーンが消える事は無かった。

「やっぱりな…期待はしてなかったけど…エスナ」

それによる解除は早々にあきらめて、今度はエスナを唱えてサイトを起こす。

「んあ…トオル？」

「目は覚めたか？」

瞼をこしこし擦りながらサイトは起き上がる。

「…そうだ！レコンキスタの奴らが攻めてきたって…！」

「心配すんな、俺が片付けた」

「…って何だよ…もう知ってたのかよ…」

「言つとくが俺がやったなんて口が裂けても言つなよ？でないとな倒になる」

「へいへい…」

感情の浮き沈みが激しい会話を行うが、今となっては最早レコンキスタはどうでもいい。

「…サイト、出来る限り心を落ち着かせて答えてくれ」

「…おお」

極めて真剣な表情を取り繕って、俺はサイトに持ちかけた。

「言葉にしなくていい、頷くだけでいい…とにかく答えてくれ」

「何だよ」

「お前本当はルイズの下から離れたいんだよね？」

「!?!?!?!」

それを言った瞬間に、サイトの顔が歪み始める。くそ…頼むから引っ込んでろよガンダールヴが…

サイトの体を摩りながら、彼を落ち着かせて聞いていく。

「どうなんだサイト、本心が残ってる内に聞かせて欲しい

本当はルイズの下を離れてシエスタと一緒に自由に暮らしたい、そうだろう？」

「ツツ……ア……!」

また昨日のようにルーンが光を放ってサイトの精神を蝕んでいく。

しかし、サイトはそれに抵抗しつつ、震える体で何とか頷いて肯定の意を示す。

そして俺は最後の質問を投げかけた。

「ならそのルーンの内縛から俺が解放してやる……」

その苦しみが和らぐ代償に力を失ってもいいのならお前を助けてやる。どうだ？」

「ツツツアアア……!!」

体の震えがどんどん強まっていく。その最中でもサイトは必死に自我を保とうとして

そしてその質問に対しても頷いて答えた。なら決まりだ……

「本当はこんなの…間違ってるかもしれないが…」

しかしサイトの精神も最早限界だ。その苦しみを一刻も早く断ち切るべく、1つの魔法を唱える。

「デス……」

そのたった一言でサイトは事切れる。三闘神やナイツオブラウンドなどよりこっちの方がよほど恐ろしい…

サイトは何も知る事無く、一度その命を完全に失ってしまったのだから…

蘇生はいくらでも出来るとはいえ、やはり望みもしない殺しを行う

のは心が痛む。

しかし、それと同時に左手に刻まれていたガンダールヴのルーンも消滅していた。

「アレイズ」

そしてすぐさま、サイトに対して蘇生の魔法を唱える。

白い光がサイトを包み込み、そしてゆっくりと閉じられた両眼を開く。

「気分はどうだ？」

「まさかあんな簡単に殺されるとは思わなかったよ」

「すまない」

助けるためだが一度殺したのは事実…本人から言われるとキツイ。

「けど…今はすっげースッキリしてるよ。何か…解放された気分だ」

「そうか…」

「ありがとなトオル…これで俺も正直に生きられそうだよ」

「…そう言ってくれると助かるよ」

サイトは穏やかな表情を浮かべていた。俺に対しては特に何とも思っていないらしかった。

そうして俺とサイトは互いにガツシリと手を取り合った。

サイトが漸く、本当の意味で、自分自身の意思でこのハルケギニアの地を踏んだ瞬間だった。

*

完全復活したサイト共に、俺はタルブの村へと帰還する。

「あ、サイガー様！」

「サイトさん！」

宿屋の前にいたシエスタとリアが、俺とサイトの下へと駆け寄ってくる。

「一体どこ行ってたんですかサイガー様？こっちでは色々で大騒ぎで大変だったんですよ？」

「そうなんですよ！アルビオンがいきなり宣戦布告をして攻めてきたって言うし…」

その直後に謎の天変地異と共に怪物が現れて、アルビオンの艦隊が壊滅したとか言うし…

「サイトさんもそんな危険な草原に1人で行っちゃうしで…」

リアとシエスタが色々と報告を行う、それに対して俺とサイトは苦笑を浮かべる。

まさか俺がやりました、なんて口が裂けても言えるわけねーじゃん…
が、リアの方はそれに対してピンと来る物があったのか、俺の耳に顔を近づけて静かに囁く。

「…ひよっとして…サイガー様の仕事ってそれだったんですか？」

「…わかっているとは思いますが皆には内緒な？」

「…わかっていますよ…サイガー様は何でも出来る方ですからね」

そう言っただけのリアはニヤリと微笑む。流星に俺とそれなりの期間を共に過ごしただけの事はあるな…

まあどの道この秘密も、近い内にシエスタには教える事になるかもしれないがな…

「シエスタ…」

そしてそんな状況下で、サイトが突然シエスタの肩をガツチリと掴む。

おいおい、周りに人は俺とリア以外いないとはいえ、もうやっちゃ

うわけですか？

「な、何ですかサイトさん？」

シエスタの方はと言うと、真剣な面持ちのサイトに対して緊張している風だった。

だが、サイトの方は唇がややプルプルしながらも口を開いた。

「前に草原で言ってたよな…帰る方法が見つからないその時までずっと待つてるって…」

けど、待つてる必要なんて無い…確かに俺はいつか帰らなくちゃいけないのかもしれない…

でも、そんな理由で女の子を泣かせたりしたくない、俺が帰る事になるかもしれない…

そんな日が来るまで…シ、シエスタ…」

「サ、サイトさん…」

サイトもシエスタも顔が真っ赤に染まっている。

(頑張つて…サイトお兄ちゃん…！)

リアは俺の後ろでその光景を眺めながら、ひそひそ声で声援を送っている。

かくいう俺も内心では滅茶苦茶ドキドキしていた。そして、サイトは決定的な一言を搾り出した。

「き、君が好きだシエスタ！その日が来るまで俺と一緒にいて欲しい…！」

「…！！！」

その瞬間にシエスタの両目から涙が溢れて、そしてサイトにひしと抱きついた。

「はい…！喜んで…！どこまでもサイトさんについていきます…！」

「シエスタ…」

自分の胸に顔を埋めるシエスタを見て、サイトは緊張から吹っ切れたような安心した表情になった。

来たよ！マジ来たよ！サイ×シエ成立しちゃいました！マジでキタ…！！！！！！な気分だよ！

予想よりかなり早かったとはいえサイトとシエスタが結ばれました
ー！！これが見たかったんだよ俺は！！

何て感動的なシーンなんだろうね！！もう見てるこっちが泣きそう
だよホント！！

「おめでとう！サイトお兄ちゃん！シエスタお姉ちゃん！」

リアも満面の笑顔でパチパチと拍手をしながら2人を祝福していた。
俺も同様に笑みを浮かべて軽く拍手をして2人の事を祝ってやる。

「良かったな2人とも」

「はい！ミスタ・サイガーの言ったとおりでした！ホントにサイト
さんの気持ちが固まって……」

「何だよトオル！？シエスタにそんな事吹き込んだのかよ！？」

「恋に悩める少女にちよつと助言を呈しただけだよサイト君？」

「サイガー様：そのセリフ臭いです」

「……アハハハハハ……」「……」

タルブ村の一画、レコンキスタが攻めてきた事などまるでどこ吹く
風のように

俺とサイト、シエスタとリアの笑い声がしばらくの間響き渡ってい
た。

ハルケギニアに来て以来、間違いなく今まで一番幸せな日だった。

第20話・必ず…とは言わないけど愛が勝つのは気持ちがいい(後書き)

今までで一番ぶっ飛んだ話になっちゃったかな…

第21話：平和な日常？いや、色々自制が外れ始めてきた日常

「実にめでたいではないか！なあトオルよ？」

最近お前がやたらと忙しく飛び回っていると思ったら

お前の同志が増えているよとはな！」

「ええまあ…私自らが自分で確かめてきた者達ですからね
きつとマスターとも良い関係を築けると思いますよ…」

「おう、そう固い話は無しにしようではないかトオルよ！

お前が連れてきたというだけでも、俺と対等に付き合う権利がある
のだからな

それに、お前のお膳立てで結ばれたのだろうその両氏は？」

「ちよつとしたアドバイスをしただけです…決めたのは彼らですよ」

「なに！男女が結ばれるというのは古来より人間の幸せの1つだ！
少し前ならともかく、今の俺ならそれがどんなものがよくわかる
ぞ？」

今日は皆で朝まで飲み明かそうではないか？なあ？」

終始ハイテンションで高笑いを繰り返す、俺の主人のジョゼフ。

俺はその彼の隣に座って、これまでの経過報告を行っていたわけ
ある。

今いるのは俺の屋敷の大広間。白い上品なテーブルに料理が所狭し
と並び

その席に着いているのは、俺とジョゼフを含めた5人の人物。

「……………」

「シエスタお姉ちゃん…大丈夫だよ…おじさまはとってもいい人
だから」

当たり前なんだが、シエスタはまるで石のようにカチカチに固まっ
ている。

何せ一介の田舎娘と、大国の国王が同じ食事の席に着いているのだ
から。

ハルケギニアの常識では、天と地がひっくり返ってもありえない話なのである。

そしてそんなシエスタを、隣に座っているリアが必死に宥めている感じだ。

いや、リアも元は平民だったが、前も言ったとおり今ではジョゼフとも気さくに接している。

「はあ…前々から思ってたけど…ホントにムチャクチャだよなお前？」

「まあな…けど悪い方ではない。見た目のとおりのフランクな人間だから」

「いや…それよりも…つまりはお前あの王様つてのと…」

「…だからそれは言うな。思い出したくない…」

サイトはシエスタ程ではないとはいえ、俺の主人が一国の王である事に驚きを浮かべていた。

あと契約の事には言及すんな、本当に頼む。あの感触だけは思い出したくない…

言われてみればジョゼフの登場も久しぶりだよな？

トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

時系列がまたしてもぶっ飛んでいるので、その後の話から始めたいと思う。

あの後、タルブ村にアンリエッタ率いるトリステイン軍がやってきたりして

いろいろと事情聴取を行っていたんだが、目撃者が口を揃えてこう言っていたのだ。

『アルビオン軍はその卑劣な行いによって、始祖からの罰を受けて消え去った』と。

…もし、それがマジ話なら本当にブリミルは酷い神だよねえ…って話。

しかし、ブリミル教が完全に浸透しているハルケギニアにとっては、三闘神とナイツオブラウンドは、神の所業にでも見えたのだろう。

最初はポカンとしていたトリステイン軍だったが、段々と情報を整理していく内に

「始祖が我々をお救いになってくれたのだ！」とか言い始めて、村人と一緒に喜んでいた。

当事者からしてみれば実に滑稽だったが、別に構わん。そうなるのが狙いだったのだから。

因みにその間サイトは隠れてもらった。万一あの色ボケ女王にでも見つかったりしたら

それこそルイズ云々の話で面倒に発展しかねなかったからね…

それでまあ、後は原作とそんなに大差は無いといった感じだ。

完全な第三者の力だったとはいえ、突然のアルビオン軍敗北のゴタゴタにより

トリステインは、ゲルマニア皇帝との婚約を一先ず保留にした上で同盟を締結したらしい。

その後、アンリエッタは女王に即位したんだとかなんとか。どうで

もいけど。

そのゴタゴタが片付いたのを見計らって、シエスタは魔法学院での仕事を辞めた。

コック長のマルトーは当然驚いていたそうだが、詳しい理由は話さぬよう俺が口止めしていた。

そして、シエスタの家族とも話し合った結果、彼女は俺の屋敷で奉公する手筈になったのだ。

当然の事ながら、サイトも一緒に、正式に俺の仲間となって、俺の屋敷に住む。

更に更に、シエスタは勢いでサイトに告白されてそれを受け入れた事まで話していた。

それを聞いたシエスタの父親は大層喜んだ後に、真剣な表情でサイトに一言言っていた。

「娘を泣かせたら殺す」と…あの時の顔はマジで怖かったですハイ…でもまあ結果的には最高なのである。サイトとシエスタを一度にこ

ちら側に引き込めたのだから。それで、俺の同士となった以上は俺の秘密の大部分を知る権利がある…

…というか知らせておかないと、後々仕事をするのに窮屈になりかねないので、

手始めに、自分のマスターを紹介しようという事にしたわけなのである。

シヨゼフはそれを聞くと、すぐさま俺の屋敷での会食の席を設けたのだ。

で、冒頭の場面に至るといっわけである。

とはいえ初っ端からジョゼフとの会合は刺激が強すぎたかもしれない…シエスタは特に。

しかし、当のジョゼフはそんな空気など全く気にしていないようである。

「では、新たな我々の同士の来訪を祝って乾杯といこうではないか！」

ジョゼフが赤い液体の注がれたワイングラスを手取る。

それを見て俺は周りに視線で合図を送り、同様の行動を取らせる。

「ここに、こんな高いワイン…わわわ、私なんか飲んで…」

「だから落ち着いてってシエスタお姉ちゃん…！大丈夫だから…！」
シエスタは未だに緊張しており、手にしたワイングラスずカタカタ揺れて今にも落ちそうだった。

流石にここまで来ると可哀想になってくる…あとで謝るところかな…
そんな中で、ジョゼフが乾杯の音頭をとり、5人一斉にワインを飲み干すのであった。

…が、俺は致命的なミスを犯してしまったのに後になって気づいた。

「らりりが王様ですか、王様だろうと始祖様だろうと、私とサイトさんの恋路は邪魔できないわよ！」

「クハハハ！！いや実に面白い女性だな！さっきまでは小動物のようだったというのに…」

そこまで思われているならそっちのサイトとやらも幸せものだな！」

「と…ぜんねす！サイトさんとわたしは固い絆で結ばれているんですから！ひっく」

……え、誰が喋ってるのかって？シエスタだよシエスタ……
酒瓶を直接手にして、ジヨゼフの隣で酒をあおりまくっているの
ある。

乾杯の後にワインを口につけたのがそもそも始まりだった……
その瞬間にシエスタは豹変して、何杯もワインをおかわりしてグビ
グビと飲み干していた。

ジヨゼフもその飲みっぷりを気に入ったらしく、酒蔵にあった自分
の秘蔵酒とかまで持ち出す始末。

でだ、あつという間に出来上がってしまったというわけである。

完全に忘れていた……シエスタが酒癖悪いって事……六巻で示されてた
じゃないかよ……

「シ、シエスタお姉ちゃんが……アハハハ……」

シエスタの暴走を目の当たりにして、今度は逆にリアが放心状態に
なっていた。

もう何というか……カオスだよこれは……この上なくカオスだよ……

「……サイト」

「何だ……？」

「この事は忘れような？」

「ああ……というか今すぐ忘りたいよ……」

サイトもズーンと暗い影を背負っている……そりゃ確かに忘れたいわ
な……

自分の彼女がこんななあってんだもの……というか今すぐ何とかした
い。

だがジヨゼフが煽っている手前、彼女にエスナをかけるわけにもい
かない……

ましてや今酔いが冷めたりしたら、シエスタは恥ずかしさで憤死し
かねない。

とにかく今はこのカオスが早く終わるのを祈らんばかりである。

だが俺の思いを踏みにじるかのごとく、シエスタがズシンズシンと
音を立ててこちらにやってくる。

「おいサイト、それにサイガー」

「は、はい」

「お前らももつと飲め！」

「頂きます……」

容赦なくシエスタからの催促が来て、俺は10杯目のワインを口に
つける。

自分にエスナをかけて騙し騙しやっているとはいえ流石にキツイで
す……

ああ……どうしてこんな事になってしまったのだろうか……

そんなわけでジョゼフの言ったとおり、宴会はシエスタが飲み潰れ
る明け方前まで続いた。

因みにシエスタに付き合っていたジョゼフは、ケロツとした面持ち
であった。

「マスター……あれだけ飲んでよく平気でしたね？」

「俺は元から酒癖は強いほうなのでな、昔シャルルと一緒に酒樽を
1つ空にした事もある」

「……そうですか」

そんな何気ない会話を交わした後に、ジョゼフはグラントロワ宮殿
へと戻っていった。

その後は（主にシエスタによって）散々散らかってしまった大広間
の掃除をしたり

放心状態になっているリアや、飲み潰れてダウンしているシエスタ

をベッドへと運んだりした。

そして、朝日が昇りきった頃にシエスタが目を覚まし、事の顛末をサイトから聞かされて、全力でorzっていました…

「なんか…招いた早々から凄い事になっちゃいましたねサイガー様

…」

同じ頃に我に返ったりアの言葉に、俺は頷く以外の答え方が見つからなかった…

*

まあ、そんなこんなで時刻は昼時になる。

午前中の内に、俺の能力とか屋敷の内装とかの説明終わらせて

(またしてもシエスタが、見るもの聞くこと全てにビビりまくっていた)

今はモンスターの放牧されている草原へとやってきている。

「さあサイト、戦れ！」

「ちよつと待て、鬼かテメーは？」

ビシッと親指を立てて言う俺の言葉に、サイトは冷静にツッコミを入れる。

彼の両手に持たされているのは、以前渡したラグナロクとライトブ

リンガー。

そして彼の前にいるのは、大量のティラノサウルスとサボテンダーである。

「何を言うか、お前だってシエスタを自分の手で守りたいだろう？」

「いやそうだけだよ…いきなりこれは無いだろ？もつと順序があるんじゃないか？」

「能率的な問題だよ、大丈夫だ。俺が召喚した奴らだから基本大人しい。

とにかくお前は狩って狩って狩りまくるだけでいいんだ」

ぶつくさ言っている感じのサイトに一応の説明をしておいてやる。

何せ今コイツは二本の剣以外に、皆伝の証と源氏の小手？仕様

それに加えて魔石の全てを体中に装着しているわけである。

逆に魔石の積みすぎで動きづらいくらいだとも愚痴っていた。

選別するの面倒くさかったので、一度に全部つけてみたってだけなんだが…

ただまあ、一番手っ取り早く成長させるにはこれが一番なのである。実の所を言えば装備品だけでもそこそが行けそうな気がするのだが、今のサイトは、ルイズへの忠誠から解き放たれた代償として、ただの高校生と化している。

本当は　アップ系とかのアイテムを大量に用意出来れば良かったのだが

アイテム召喚の代償がかなり大きいので、必要個数を揃えるのに時間がかかるのだ。

故に魔石による基礎的な身体能力の向上と、それに加えFF魔法の習得をしておこうという手筈だ。

その為に、経験値と魔法習得値の高いモンスターであるこの二種類を大量に呼んでおいたのだ。

こいつらを狩り続けていれば、1〜2週もすれば、ガンダールヴ時代の力を遥かに超えるだろう。

因みにMPに関して、事前にソーマの雫を一杯飲ませておいたか

らガリガリ上がっていくはずだ。

何分、サイトだってシエスタと正式に一緒になった以上、カッコ悪いところを見せたりしたくないとか息巻いていたし。

「それにさ…カッコいいところ見せればシエスタも褒めてくれるかもよ？」

そう言っただけははなれた位置にいたシエスタの方を指差す。

「サイトさーん！頑張ってー！！」

すると、これからサイトが何をするかを何となく察したシエスタはサイトに向かって大きく手を振りながら笑顔でエールを送っていた。

「うおおおお！！かかってきやがれえええ！！」

現金なもので、シエスタの応援でサイトは一瞬にして闘気を燃え上がらせ

二つの獲物を手に、皆伝の証と源氏の小手による『二刀流乱れうち』によって

テイラノサウルスとサボテンダーをバツバツサと斬り伏せていく。というか、俺が召喚したから大人しいというのもあるのだが

今のサイトはただの高校生の筈が、まるで修羅の如しであった。

「凄いですねサイトお兄ちゃん…」

「好きな女の子の前では張り切りたくなるんだろっよ」

「そりゃそうなんでしょうけど…気合入りすぎじゃないですか？

ほら、サボテンダーが一撃でやられてるし…」

「あ、マジだ…」

リアの言うとおり、素早いだけでなく、滅茶苦茶頑丈で普通は1ダメージしかから食らわない

？仕様のサボテンダーが一刀のもとで絶命しているではないか。

ガンダールヴがあった頃の記憶を頼りにもしてるんだろっけど…

(これ…強化するまでも無く強いんじゃないかねえの…?)

因みに全部倒すと同時にサイトは元に戻り、全身に疲労が溜まって身動きが取れなくなっていた。

そんなサイトを見て、シエスタが慌てて駆け寄って行って彼の体を支えて看病していた。

俺もテイラノサウルスとサボテンダーを蘇生してからそちらへと向かう。

「グオオ…体中痛え…ト、トオル…回復魔法使ってくれ…」

「使ったらシエスタが看病する必要が無くなるけどいいのか？」

「……………」

「いや、悩むなよ」

シエスタに膝枕された状態のサイトとシユールなやり取りをしていたり。

「サ、サイトさん、さっきは本当にカッコ良かったです」

「そ、そうだった？」

「それに…別にサイトさんが疲れていなくても…こ、このくらいの事なら何時だって…／＼／＼」

その状態でシエスタが顔を赤らめながらお惚気を見せてくれちゃったり

そんな光景を見て、キモイ事この上ないが、俺はニヨニヨが止まらなかつた。

だって本当に初々しいんだもの。見てることちも幸せな気持ちになつてくるんだもの。

そして今度は夕暮れ時、今はジョゼフと一緒にある場所へと来ている。

リュティスの外れに建造した、簡素な石造りの四角い建物、その地下へと来ていた。

「お疲れ様です陛下！それにミスタ・サイガー！」

そこで働いている人々が、俺たちの姿を見るなりお辞儀をしてくる。工具と機会油の匂いがプンプン漂い、作業服に身を包んだ大勢の若者達がいる。

「調整の方はどうですか？」

「作業員達が気合入れて働いてるから、とても順調に進んでいますよ」

「そうですね：あなた方には無理をさせてとは思いますが」

「なーに気にしないで下さい！というよりこれだけの未知の技術の塊に出会えるだけでも

私達は職人魂を擲られるってもんです。みんな陛下とサイガー様のおかげですよ」

そして奥の方で指示を出している主任とやり取りをした後、作業場全体に目を見渡した。

そこに映るのはいくつもの巨大なシルエット……飛空艇だ。

ジョゼフに頼まれたものや、好奇心で自ら召喚したもの……とにかく様々なものがある。

現状では、赤い翼、ブラックジャック、レッドローズ、

果てはラグナロクやリヴァイサン級といった超技術の塊まで保管してある。

そしてこれらの解析や、ハルケギニアでも運用出来るようにする改造などを

国内に溢れている、仕事に困った職人達を呼び寄せて行わせているのだ。

流石に、霧動力やヤクト対応型飛空石とかだと、色々問題もあるのだ…

（といってもラグナロクやリヴァイアサンは、ほとんど放置状態ではあるが）

当然、これだけの数の未知の物品がある以上、この秘密工場はトップシークレットであり

職人達を集う際も、事前にライブラをかけたりにして、怪しい輩ではないかを厳重に調べた上で、

尚且つ、この工場内で寝泊りさせて仕事をしてもらっているのだ。工場の周辺には、新型のゴーレムという名目で多数のミスリルゴー

レムが配備されているので
少しでも怪しい輩が来たら、すぐに始末出来るようになっていく。

職人たちには、東方の技術で作られた船を、ずっとこの地に隠しておいたという事で納得させていた。

それ以上に、俺が他の商売で稼いでいる莫大な資金による大量の給金と

未知なる技術の探求という、職人魂を燦らせる要素もあつたので、誰も俺やジョゼフに対して疑念や不満は持ち合わせていないという

のが幸いといったところか。
でも、とにかく整備が完了する前にここが見つかるのだけはとにかく

マズいので
最近少し忙しかったのもあり、今はこうして視察に来ているという

わけである。
「こうして人が集められるのもマスターのお力添えあつての事です

らね」
「気にするなトオルよ！俺もこいつらが実際に飛ぶのを見てみたい

しな！
それにお前が商売をしているおかげで、給金や寝食の配給にも困ら

ない……」

工場全体を見渡しながら、俺とジョゼフがやり取りを行う。

「こうして平民が腕をかけて、お前が生み出した品々を使うサポーターをしてくれる……」

お前に出会って平民の大切さを再認識したな！王宮の老害貴族どもよりよほど価値があるな……！」

両腕を大きく広げて、演説でも行うかのような仕草と声量で言うジョゼフ。

実際の所、ゴールドソーサーの建設の件なども含めて

最近のジョゼフは人当たりが良くなってきたと、ガリア内では評判になり始めているのだ。

改変の影響とはいえ、ここまでジョゼフが気さくない人になるとは想像もしていなかった。

もつとも、シャルル派の人間には、どうせ何か企んでいるからその芝居だ、みたいに見られていたが。

(万一シャルル派にここを見られたらシャレにならんよねえ……)

内心で苦笑いを浮かべる。ぶっちゃけた話自分もジョゼフ派みたいなもんなのだから

この手のオーバーテクノロジーの管理だけはマジ気をつけないといかんからな……」

「俺はこのブラックジャックで空を飛んでみたいものだな！」

「はい、調整は8割方済んでますから近いうちに飛べると思われま……す」

「そうか！その日が待ち遠しいものだ、大空を舞いながら賭け事に興じるのも面白そうだからな！」

「とうかマスター、ブラックジャックに乗りたい理由ってそつちでしよう？」

担当作業員も交えて、楽しげな会話を行う。

本人が言ったようにジョゼフは、ほぼカジノ目的でブラックジャックを使いたがっていた。

ハルケギニアの戦艦よりも遙かに速い速度を出す事などの魅力などは、あまり興味が無かった。

（まあそういう余分な内装があるから、ファルコン号に負けてたわけだけどね…）

ありえない話だが、セツツァーがジョゼフと会ったら意外と気が合うんじゃないかとも思ったりした。

そういった感じで、俺のハルケギアでの生活がまた過ぎていく…

第21話：平和な日常？いや、色々自制が外れ始めてきた日常（後書き）

この執筆速度がいつまで保つか不安…

第22話：任務その3精霊討伐

さて、サイトとシエスタが仲間になってから数日が経過しました。
（毎日のようにあの2人の惚気合いを見せ付けられていますとも
大人の階段上つちゃうのもそう遠い日ではないかもしれない）
そんな中で、久しぶりに北花壇騎士の仕事が舞い込んできた。
そういうわけで今はラグドリアン湖に来ているトオル・シユヴァリ
エ・ド・サイガーです。

「水の精霊ねえ…」
いる場所から、勿論どんな任務なのかはわかりきっている事である
う。

湖の増水によって村一つが水没、それが原因の精霊討伐の任務なわけ
だが。

こっちの世界で言う所の、所謂水属性の魔法というのは精神操作の
面も含んでいる。
原作と連動していた、ルイズ惚れ薬事件がその最もたる例と言える
だろう。

それで思い出していたのだが、水の精霊はその名の通り、湖の水を
変幻自在に操り

かつ、触れた者の精神を操作することなど、呼吸するのと同じくら
い容易く出来ると。

要するに、水の精霊が含まれている、もしくは操っている水に触れ

た時点でアウトなのだ。

「…こつちでいう精霊の類って妙な部分でチート臭いよな」

本体は勿論、奴の持つてる秘宝なんか生者死者問わずに精神を操る事が出来る。

だがまあしかし、やりようはいくらでもあるから構わないのだが。

「しっかし…まだ来ないのか…」

湖の水面から水没した家屋の屋根が見える。

そのすぐ側の岸边に生えている一本の木に寄りかかりながら、俺は欠伸をする。

タバサは実家に立ち寄っているため、今は俺が一人で待っているという感じだ。それはつまり…

「きゅいきゅい!!」

聞き覚えのある声を聞いて、俺はそちらへと顔を向ける。

見ると、丁度シルフィードが地面に着地したきたところであった。

「よっ、やつと来たか」

気さくな感じで降りてきたタバサに声をかける。わかっているが返事は返ってこない。

「え…あなた確か、ミスタ・サイガー？」

そしてシルフィードに乗っていたのはタバサ一人ではない。

燃えるような赤毛と褐色の肌が特徴的なタバサの友人、キュルケである。

この任務にキュルケが同行してくる事は当然事前に知ってはいたが…

「おやタバサ、任務に余計な人間を連れ込むとは珍しいな？」

「彼女は協力者、邪魔にはならない」

いつものように知らないフリをする。タバサはそれに対して淡々と答えるのみ。

何分俺は嫌われているのだから当然の反応であろう。

「さてミス・ツェルプストー、今この場にいるという事は

当然彼女が何者なのかも、そして俺が何なのかも知っているわけなんだよな？」

「…この娘のお屋敷で聞いたのよ…最近は任務の最中にも王家の監視が一人ついてるって…」

でもそれがミスタ・サイガー…あなただったなんて…」
困惑した様子でキュルケは語る。成る程…王家の監視ねえ…

恐らくはペルスランのおっさん辺りがそう吹き込んだのだろうな…別にタバサ筆頭のシャルル派の人間の俺に対する評価など知ったことではないんだけどね。

「まあそう見られても仕方ないかもしれないけどね…陛下と仲が良いいのは事実だし…」

でも別に俺はタバサを任務中にどうこうする気なんて全く無いよ。あくまで個人的な理由でこの組織にいるに過ぎないから。そこは心配はいらないさ」

「そうは言うけど…じゃあつまりあなたはアルビオンの時も？」

「そ、説明がめんどいから他人のフリをしていただけだよ」

「っていうよりあなた…結局あの後ついてこなかったけど何してたのよ？」

「いや実は直前になってマ…フーケに抵抗されちゃってね…」

その所為でかなーり長い一悶着があつて、それが済んだ頃には全部終わってたつて感じなの」

「……………あなたみたいな優秀なメイジが？」

「向こうもトライアングルだ、しかも名だたる怪盗…上手いこと逃げられそうになって」

後の始末が凄く大変だったんだよ」

「……………」

これ以上聞くことも無いのか、そこまで言ったらキュルケは口を閉じる。

その視線には…少なくとも好意的な物が含まれていないのは間違いないだろうね。

しかし、俺の中のキュルケのポジションは「どっちでもない」だ。

正確に言うと「どちらかといえば好きなキャラ」だが、

サイトやシエスタと比べたら優先順位はかなり下の方になる。何もしないならこつちも何もしないし、余計な詮索をしてくれば痛い目見てもらう事になる。

少なくともタバサの素性を知った直後のこの場面で

俺に何かふっかけてくるなんていう、無謀極まりない事はしないとは思うが。

「ああ、そうだ…」

ポンと手を叩き、一つ気になる事があったのでキュルケに尋ねる。

「あの時同行してた他のお仲間は元気でやってんの？」

「他のつて…ええ、ギーシュはあの後も特に変わらないわ」

「それは何より。彼、なかなかユーモラスな人物だったから気に入っててね」

半分以上が本音だ。実際ギーシュとはもつと関係を深めておきたいとは思っている。

…つつても、今の状況下だと最悪あきらめる必要がありそうだけど。「けど…いろいろあつてヴァリエールの方はすっかり元気なくしちやつてね…」

「例の公爵家の三女のお嬢様が…一体何があつたんだ？」

「あの娘…ふとした弾みで自分の使い魔をクビにしちやつたのよ…」

「使い魔つて…サイトの事か？」

「ええ…それからしばらくしてサイトが姿を晦ませちやつて…」

本当は私達で何とかしてあげようと思つただけど…」

「学院のどこにもいなかったのか？」

「そうなのよ…きっと愛想を尽かせて逃げ出しちやつたんだろうけどそれつきりで…」

情報を聞くころと思つて、彼と仲の良かった子に話を聞くころとしたらその子も家の事情がどうとかがつて理由で学院を辞めちやつてたし…彼大丈夫かしら…私も物凄く心配なのよ…ヴァリエールもそれからすっかり落ち込んだんじやつて…」

最近はお口に授業にも出ないで、寮の自室にこもりつきり…」

「……ま、自業自得なんじゃ……ねーの？追い出したのが……本人……ッ
……ならね」

「確かに使い魔はメイジにとってパートナー……あの娘がサイトにした事は良くなかったわ……」

けど……あんなに落ち込んだりじゃってると流石にほっとけなくなるのよ……」

物悲しげに語るキュルケに、表面上では冷静さを保って話を聞いていたが

腹の底ではザマーミロwwwと舌を出して大笑いをしている俺w

昼時とはいえ直接見てもいない以上、俺が連れて行ったなんて情報は入ってなかったらしい。

他の学生は平民の使い魔の事など、一々認識してなかったといった感じか？

サイトがいなかったという理由からなのか、宝探しもしなかったみたいだし。

まあそれもまた然程重要ではない。クビにしたのは自分なのだから落ち込むなり泣きべそかくなりしていればいい、例えば俺の下にいるとバレたところで返り討ちだ。

自分の使い魔を自分の意思で捨てたのに、それを返せと言われて返す馬鹿などいない。

サイトはルイズが刻み付けたルーンの呪縛から解放され、俺の下でシエスタと共に自由に暮らしている。

それを側で支えてやるのが、俺のやりたい事の一つなのだ。

その幸せを脅かそうってんなら、ヴァリエール家だろうがトリステイン丸々だろうが

何の躊躇いも無く潰せますとも。ええそうですとも。

慎重とかそんなの関係ない。俺と俺の好きなキャラの幸福を邪魔する奴らは

悪いけどはつきりいって消えてもらっ他無い。何故なら俺が迷惑だから、それだけ。

「まあじゃあ再会話はこの辺にして…さつさと片付けようか？」
そしてその場の空気を切り替えるかのように、わざとらしく俺は言う。

今この2人と腹の探りあいなんざしてもしょうがない。とにかく今は精霊討伐だ。

「さつさとつて…この任務の内容わかってるのミスタ・サイガー？
当然の事ながら、妙にノリの軽い俺に対してキュルケが疑問を投げかけてくる。

前述したように、精霊の力はハルケギニアの人間にとっては絶大だ。ちよつとそこら辺のオーク鬼を仕留めてきますとか、そういう次元の話ではない。
すると、タバサの方もずっと寄ってきて意見を述べる。

「精霊は水の中、けどこの中全部を探するのは時間がかかる」
言うとおり、今やラグドリアン湖は村一つを沈めるほどの規模になっているのだ。

その中の一部にいる精霊の本体を見つけ出して攻撃するのは容易ではない。

「まあ確かにそうだな…それに相手は水の精霊…俺とタバサじゃ分が悪いし…」

そして人差し指で頬をポリポリかきながら、俺も同意意見を述べておく。

水の精霊に最も有効なのは火属製の魔法なんだが…

タバサは水と風のトライアングル、俺は設定上では水と風のスクウェアだ。

「それなら、私の火で炙り出してみる？」

と、ここで更にキュルケが口を挟んでくる。彼女は確かに火のトライアングルメイジ、

この中では（本気の俺を除いて）精霊に対して最も有効打を与えられると言えよう。

とはいえそれでもまだFF的な基準で考えると、全力で攻撃してフ

アイガレベルくらい。

膨大な規模の湖を縄張りとする、水の精霊を仕留め切れるかは不安が残る。

要約すれば、まともに作戦を立てようとしてもまどろっこしいだけなので…

「……いや、せつかく来てもらって悪いんだけどミス・ツエルプストーと

それにタバサはサポートに回ってもらいたいと思う」

「ちよつと…何ですよ？」

「何の対策も無しにここに赴いたわけじゃないって事だよ」

そう言つて俺は、持参してきた布袋を引っ張り出す。

要は俺自身の力ではなく、何かを媒介とした力なら何も問題は無いわけだ。

「ーわけで今回も、ラ・ロシエールの時みたいなスタンスで行こうと思う。

どの道、キュルケとタバサには俺の正体がある程度割れている以上、多少派手にやっても問題は無いし、言及も出来ないからね…

「新作の秘薬とマジックアイテムを持ってきている、そいつで精霊を仕留める

2人はそうだな…シルフィードに乗って後ろから援護って感じでお願ひ」

「マジックアイテムって…精霊を仕留められる様な代物まであるわけ？」

「前に見せたカエル薬と魔封じの芳香は俺の引き出しの一つに過ぎないって事だよ

俺が花壇騎士にいる最大の理由は、その手の品のテストが出来るからかな」

「テストって…そんな理由で…」

とっさに思いついた虚実を並べ立てたら、キュルケの表情に更なる動揺が浮かび上がる。

（自分の親友は家族の為に命がけ…その監視者は手持ちのアイテムのテスト…それじゃあねえ…）
自分でついた嘘だが、確かにこれじゃあ薄情な人間と思われても仕方ない。
だが何度も言うが、キュルケは好きでも嫌いでもないのです、どう思われようが構わない。

*

キュルケの非難を浴びせるかのような視線も何のそので
俺は銀竜に跨って、湖の上空へとやってきていた。
その背後には、シルフィードに跨ったキュルケとタバサがついてきている。

「それで、一体どんな強力なマジックアイテムを使うの？」
キュルケが背後で試すかのような口調で聞いてくる。
いや全然マジックアイテムでは無いんだけどね…でもそういうことにしておきたいから。

「あ…ちよつと今回は強力な代物だからね。驚かないでくれよ
俺は布袋から何の変哲も無い、黒い鉄球を取り出す。

「一々湖の中を引つ掻き回すのメンドイだろう？だから…」
「だから？」

「これを使って湖全体を吹っ飛ばす」

「えっ…ちよっ…吹っ飛ばすって…」

何を言ってるのだコイツは？って感じのキュルケの声は一切無視して俺は手にした黒鉄球を湖の中央付近目掛けて勢いよく投げつける。

そして鉄球が湖の水面に落ちるのを見計らって、頭の中でイメージをし、そして呟く。

「アルテマ」

発動するのは究極の名を冠した、FFで最も強力とされる魔法の一つ（そうは言っても？では散々な扱いだっただが…ミンウ無駄死にとか言われたし…）

湖の中心で光が収束していき、そして耳を劈くような大音響と共に大爆発を起こす。

その爆発によって湖の水が、まるで上下を一瞬で逆にしたかのような勢いで四方八方に飛び散る。

俺とタバサ、キュルケはかなり上空にいたのだが、爆発によって飛び散った水が僅かにかかる。

「な、なな…何なの今の爆発は…!!」

当然の事ながら、キュルケは目を白黒させながら全力で驚いているようである。

タバサの方も声こそ発さなかったが、いつもの無表情が若干崩れかかっていた。

しかし後ろの2人のリアクションはどうでもいい。問題は水の精霊だ。

「ふむ…端の方にもいんのか…？」

爆発によって生じた大穴に、凄い勢いで周りの水が流れ込んでいき、大きな渦を作る。

しかし、精霊らしきものは眼下の光景を見渡す限りでは見当たらない。

「じゃあもう一発…」

「待って」

黒鉄球の二個目をぶちこもうとしたら、何故かタバサに呼び止めら

れる。

そしてその理由はすぐにわかった。

『うおおおおお!!』

爆発が起こった辺りがボコボコと蠢いている。

と思った矢先に、そこから巨大な水の塊が一直線にこちらへ飛んできた。

「ようやくお出ましか」

『今の爆発は貴様らの仕業か!!』

水の塊が人の形を形成する。そしてこちらへと体の水を伸ばして攻撃しようとする。

だが速度は…思ったよりは遅いな。慌てる必要も無いだろう。

「トルネド!」

というわけで、カモフラージュの必要が無い風属性の魔法を使う。

上空で発生した大竜巻は、人の形を保った精霊を一瞬にしてバラバラにする。

『これしきの魔法でえ!!!!』

が、思ったとおり有効打にはならないらしく、精霊はまたすぐに形を整えていく。

やっぱり火で蒸発させないと駄目っばいねえ…

「ミスタ!下から来るわよ!」

「ん?ってうおおお!!」

キュルケの忠告が飛んできたと思ったら、下から巨大な何本もの水柱がせり上がってくる。

銀竜とシルフィードがすぐさま回避行動を取る。危ねえ危ねえ…

『逃がさん!!』

と思ったら、精霊がその水柱をさらに自在に操ってこっちに向けてくるし…

つーか多すぎるわ!!逃げ道無くなるだろうよ!!

「エアロガ!トルネド!」

必死に風魔法を使って全方向から飛んでくる水を吹き飛ばす。

タバサもエアハンマーやら何やらを使って凌いでいるが、如何せん水の量が多すぎる。

「きゅい!!きゅい!!」

シルフィードの恨みがましい鳴き声まで響いてくる。いやお前は黙つてろって感じだが。

かといってこつちがピンチである事に変わりはない。

自制云々の前にこつちが死んだらシャレにならないからな…

「トルネド!!」

もう一度竜巻を起こして水の包囲網を突破し、精霊から距離を取る。俺はその間に、カモフラージュ用の道具である赤い液体の入ったビンを取り出す。

「ファイヤーボール!!」

と、その間にキュルケが魔法を唱えて火球を水の精霊へと飛ばした。水の精霊はそれにまともにもぶつかって更に形を崩す。よしナイス援護。

「フレア」

その隙について液体をビンごと精霊へと投げつけると同時に、すぐに魔法を唱える。

ファイガとは比較にならない原初の炎が、精霊と周りの水を包み込む。

『ああアア!!貴様!!何故貴様がその力ををヲヲ!!』

亡者の呻き声の如しな、水の精霊の絶叫が辺りに響き渡る。

…つてちよつと待て、また何か興味深いワードが出たな。

(とは言っても…今はそんな場合ではないな)

精霊が何を知ってるかはわからんが、それを探ってる暇など無い。

俺は更にカモフラージュの品その3である赤い粉末を取り出す。

「シルフィード!地面に下がってる!今からちよつと荒業を使う!」

「きゅい!!」

そして事前に警告を入れておく。いくら「どつちでもない」スタンスとはいえ

何も言わずに巻き込むのはあまりに悪人すぎるからな。

シルフィードは突然の怒鳴り声に驚きながらも、素直に従って急降下する。

それを見計らって俺は赤い粉末をばら撒き、そして更なる魔法を發動する。

「メルトン」

次の瞬間、俺と水の精霊がいる上空に、純然たる熱の放流が流れ込んでくる。

それを見計らって銀竜にヘイストを唱え、俺は急上昇してそれから逃れる。

『ぐうううアアアアアア！！！？？？』

巻き込まれた水の精霊は、先ほどよりも更に大きな絶叫を上げつつ自らを形成している水の塊が見る見るうちに縮小していく。

(いやあ怖い怖い……)。

メルトンの熱風から逃れた俺は、水の精霊の有様を見てヒヤヒヤしながら呟く。

？における、ある種アルテマ以上に凶悪な、味方も巻き込む最強の魔法……

単純な熱エネルギーはファイガやフレアを大きく上回る。

その熱量によつて精霊は完全に消滅したかのように見えたが……

「しぶといな……」

メルトンの熱風が収まる僅か直前に、一滴の雫が湖の中にピチヨンと音を立てて落ちる。

すぐさま俺は銀竜を急降下させて後を追う。

丁度水面スレスレというところで水の精霊が再び姿を現す。

それを見て俺は布袋から更なるカモフラージュを取り出し、

さっきの俺の警告で地上にいたキュルケとタバサも迎撃態勢を取る。

『待て！攻撃するな！私にはもう貴様らと争う意思は無い！』

……と思つたら、人の形を形成した水の精霊がいきなりこんな事を口走った。

つまり降参するって事ですかい？その方が都合がいいけど。

「…そっちがその気なら俺もこれ以上やるつもりは無いよ」

そう言つて俺は迎撃態勢を解く、後ろにいるキュルケとタバサも同様にした。

「精霊を力でねじ伏せるなんて…あなた本当に無茶苦茶ね…」

キュルケが疲れきつた声で何か言ってるが、今はあまり関係が無い。争わないって言った以上、こっちの要求を聞いて貰わなきゃ困るからな。

『単なる者達よ、何故に我を襲うのだ？』

「アンタが水かさを増やして村が一つ水没してね、

それでアンタを退治してくれて任務を俺達3人が請け負ってるわけ」

『そうか…では我が元の範囲に収まればお前達は我を襲わないのだな？』

「そういうこと。元々それを何とかするのが大前提だったからね。そっちがそうしてくれるってならまあ、アンタを襲う必要は無いなるわな」

「アンタアンタって…あなた水の精霊相手に…」

相変わらず後ろからキュルケのツッコミが入りまくる、

ちよつとうるさくなってきたな…驚くのも無理は無いけど…

『…良かろう。このままでは我はお前に滅ぼされかねぬからな』

どうやらこっちの要求を聞き入れたらしい。

『だが幻想の力の使い手とは…単なる者とはいえ久しく見たな』

「幻想の力？」

何か聞き覚えのある単語が再び聞こえて俺は首を傾げる。

…この言葉を用いていたのはジョゼフだけだ…それを水の精霊が使っているとなると…

「ちよつと？幻想の力ってどういう事よミスタ・サイガー？」

結論付けると同時に、後ろにいたキュルケが俺に疑問を尋ねてくる。

何か重要な情報が聞きだせそうだけど…こいつらがいたんじゃ逆に仇になる。

「…さっきの俺が使ったマジックアイテムを超常的な何かと勘違いしてるんだろ？」

確かに精霊が言うところの、単なる者が持つ力にしたら異常だからな」

キュルケに対して適当にはぐらかした後に、

俺は知っている情報の裏づけをする為にある事を尋ねる。

「一応聞きたいんだけど、何でこんなに水かさを増やしたか教えてくれるか？」

『…いいだろう幻想の力の使い手よ、お前になら話しても良さそうだ』

原作とは違って、アツサリと水の精霊はそれを了解した。

何よりこの口ぶり…理由はどうあれコイツも知っている側という事になる。

『……数えるのも愚かしいほど月が交差する時の間、

我が守りし秘宝を、お前たちの同胞が盗んだのだ』

「秘宝？」

『そうだ。我が暮らす最も濃き水の底から、その秘宝が盗まれたのは、

月が三十ほど交差する前の晩のこと』

「月が三十っていつとつまり…」

「およそ二年前」

こっちの時間の数え方をいまいち把握してない俺に対し、タバサがフォローをしてくれた。

『水かさを増やしていたのは秘宝を取り戻さんとする為。ゆっくりと水が浸食すれば、

いずれ秘宝に届くだろう。水が全てを覆い尽くすその暁には、我が身体が秘宝のありかを知るだろう』

「なんともまあ…」

知っていたとはいえ気が遠くなる話だと思っ。

生死や時間の概念が無い精霊とはいえ、そこまでしようとする考えが凄いわ…

「その秘宝とは？」

『アンドバリの指輪。我が共に時を過ごした指輪だ』

今度は俺の後ろで質問をするタバサに対し、水の精霊が説明を始める。

『死という概念を知らぬ我には理解出来ぬ事だが、我が秘宝は単なる者達には

死者に生命を呼び戻す秘宝と呼ばれている。死を免れぬお前達にはなるほど命を与える力は魅力と思えるのかも知れぬ。しかしながら、アンドバリの指輪がもたらすのは偽りの命。旧き水の力に過ぎぬ。所詮益にはならぬ』

「そんな凄いお宝を持つてくとはねえ…誰がどのようにとかは覚えてんのか？」

『……風の力を行使して、私の住处にやって来たのは数個体。眠る我には手を触れず、

秘宝のみを持ち去って行った。また、個体の一人がこう呼ばれていた、クロムウエルと』

「クロムウエルって確か…」

「聞き違いでなければ、アルビオンの新皇帝の名」
精霊と俺達3人のやり取りがどんどん続いていく。

というかやつぱり持ってたのはクロムウエルだったのね…

本当にミヨズニトニルンの干渉無しでどうやったのかが甚だ疑問だわ…

「…つまりこのままほつといいたらラグドリアン湖は

アルビオンに到達するまで水かさが増え続けていたってわけだな」

「なんともまあ…さつきから無茶苦茶すぎる話ばかりね…」

俺の言葉にキュルケは半ば呆れた感じの声で答えた。

つっても向こうが降参してきたとはいえ、精霊も指輪を盗られたま

まじや仕方ないだろうし…

「…わかった、じゃあ俺がその指輪を見つけてアンタに返すその代わりにアンタは今後一切水かさを増やさない。これでどう？」

『…良かるう。感謝する幻想の力の使い手よ』

というわけで精霊に原作通りの持ちかけをして、手を打って貰った。

「ちよつとあなた…いいのそんな安請け合いして？」

「どの道水かさを止めるのが原因だったんだし、

いくら力でねじ伏せたからってそのままってわけにもいかないだろう？」

さつきからの超展開の連続にキュルケはついていけないといった様子だった。

そんな俺達を他所に、水の精霊は湖の中に戻ろうとしたが…

「待って」

直前でタバサが精霊を呼び止める。

「水の精霊、あなたに一つ聞きたい」

『なんだ？』

「あなたは私達の間で『誓約』の精霊と呼ばれている。その理由が聞きたい」

『…我とお前達では存在の根底が違う。故にお前たちの考えは我には深く理解出来ぬ。』

しかし察するに、私の存在自体がそう呼ばれると思う。

我は変わらぬ。お前たちが世代を入れ替える間、我はずっと水と共にあった

変わらぬ私の前故、変わらぬ何かを祈りたくなるのだろう』

ものっそい長つたらしいこと喋っているが、俺にはよくわからん。

が、直後にタバサが膝について目を閉じ、祈りを捧げるポーズを取る。

それと同時に更にキュルケがその肩にそつと手を置いた。

何を祈ってるのかは知る由も無いが…まあ、またしても俺には関係の無い事であった。

*

さて、無事に任務完了というわけで帰り支度を整える。

「…ちよつといいかしらミス・サイガー？」

が、そんな俺の下に、キュルケが一人で深刻そうな面持ちで俺の側へとやってきた。

「何だ？デートのお誘いならお断りだよミス・ツエルプストー」

「お生憎だけどそういうのじゃないわ」

俺の軽い冗談をサラリと跳ね除けて、キュルケは質問してきた。

「…あなたって…一体何者なの？」

「…その質問を以前にタバサにもされたけど」

またかよ…疑いたい気持ちにはわかるが、同じ事何度も聞かれること
ちの身にもなつてほしい。

「ガリア北花壇騎士零号にして、ガリア王ジョゼフ閣下と親交の深い
一商人のメイジ…」

それ以外に説明のしようが無いよ」

「…ただの一介の商人が火のスクウェアの魔法をも上回るような
強力なマジックアイテムをいくつも所有しているものなの？」

「企業秘密、としか言いようが無いね。貴重な商売道具の流通先とか

もしくは製造方法とかは商人にとっては死活問題になるんだから」

「なのに…任務で堂々と使えるの？」

「さっきも言ったけどアレは新商品のテスト。開発中の商品が人目につくのは好ましくないから

こうやって裏仕事である北花壇騎士の任務で試している。これで納得？」

よくもまあ、こんな陳腐な嘘が口からペラペラ出るものだと自分で思ってしまう。

最近、というかタルブで大暴れした辺りから段々自制が効かなくなってる気はしてたが

かといって、誰彼構わず俺の正体をバラすなんて自殺行為はするべきではない。

正体を知られるよりは、胡散臭い人間だと思われてた方がまだいい。

「…もう一つだけ聞かせてくれる？」

「答えられる範囲の話なら」

先程よりも更に深刻そうな表情を浮かべて、キュルケは聞いてきた。

「…あなた、タバサを助けてあげたいとは思わないの？」

「思わないよ」

キツパリと切り捨てておく。言いたくなるのもわかるが、悪いが俺にも立場があるのだ。

「けど…あの子の過去の事は全部知ってるんでしょ？」

「一応はな、けど俺には関係の無い話だよ」

「…その、あなたの力でもタバサの母親の毒は治せないの？」

「仮に治せるからとしても俺は治さない。王家のゴタゴタに首突っ込んで

寿命を縮めようとするほど俺も馬鹿じゃない」

俺がタバサに同情してるとでも思っていたのだろうかキュルケは？何か随分、彼女の普段の行動らしからぬ不自然な質問だな…タバ

サが絡んでるからか？

「そう…悪かったわね余計な事聞いて」

「いいえ、こちらこそ申し訳なかったね」

互いに全く誠意のこもってない声色でやり取りを終え、キュルケをくるりと振り返る。

「…あなたって見た目と違って薄情なのね、そんなんじゃ女の子とデートなんて一生出来ないわよ?」

「…ご忠告どうも。けど誰にでも愛想振りまいて、変な輩を呼び込むよりはマシだよ」

…去り際に小言を言われたが、負けじと俺も言い返してやったのだった。

悪いがキュルケとの接点がどうこうとか、タバサの事に関わってる暇なんぞ無い。

マチルダとティファニアの迎えとか、請け負った以上指輪を奪還する必要があるとか、

それに関連して、水の精霊が何故FFの魔法について知っているのか改めて聞き出すとか…

他にもサイト、シエスタとの付き合いや、新しい武器の実験、商会の立ち上げについての検討、

今やってる秘薬と武具の商売の整理、飛空艇の視察、ジョゼフとの遊びの付き合い…

やるべき事…というよりも自分のしたい事がこれだけある中で好きでも嫌いでもない人物に割いてやる時間など全く無い。

何度も言うが俺には俺の立場がある。漸くガリア国内での足場が固まってきた最中に

シャルル派を刺激して国内を不安定にさせるとか愚の骨頂でしかない。

今の俺にはジョゼフ、リア、サイト、シエスタ、まだ迎えに行つてはいないがマチルダとティファニアも。

これだけの大切な人がいる。その人達の幸せを無視してまでタバサを助ける理由なんて生まれえない。そついう事だ。

(…って、やっぱり何か難しく考えすぎだよなあ…いいや、こつ

う日はジヨゼフと飲んで忘れよう（

元々くどくどと考えるのは好きじゃない。

というわけで今日はジヨゼフと一杯ひっかけてこの鬱憤を晴らすとしよう。

そんな事を考えながら俺は銀竜に跨り、帰路へとついでた。

第23話：完成！そして大きく揺れ動く…（前書き）

どうにかギリギリ今月中に更新出来た…

今回かなり賛否両論というか批判が来る話になりそう…

後書きに重要なお知らせあり。

第23話：完成！そして大きく揺れ動く…

ガリア王国首都リュティス、サイガー特別自治区にて。

「…というわけで、この施設を建造したのは、貴族・平民問わずしてより多くの人々に楽しんで頂きたいからだと思っただからです。

娯楽に興ずるという事に身分の差を持ち出すなど逆に愚かしい。

何かを楽しむという事は同じ人間として差をつけるようなことではない。

当然、施設内の揉め事を施設の外で権力を行使して蒸し返す貴族の方面に杖が無いのをいい事に、暴力で貴族をねじ伏せたりする平民の方そのような愚かしい人々にはそれ相応の罰が下される事は最低わかっておいていたが、ないといけません。

ですが、それさえ守って頂ければ、至福の時間を皆さんに約束します」

その自治区の入り口の巨大な門前で、俺は正装で演説を行っていきます。

「では挨拶もそこそこにして…そろそろ開場としましょう。

今日は皆さん、我がゴールドソーサーで目一杯楽しんで下さい」
演説の終わりと同時に門の前に待機していた職員が門を開く。

それと同時に演説開始の何時間も前から来ていた多くの人々が

盛大な拍手すると同時に、職員の案内に従って中へとなだれ込んでいった。

ガリア王国首都リュティス、サイガー特別自治区…またの名をゴールドソーサー

というわけで遂に完成しました。トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

建設開始から早数ヶ月、FFの娯楽の集大成とも言うべきであるハルケギニア版ゴールドソーサーが遂に御披露目の日を迎えたわけです。

先行公開していた竜の首コロシアムやオークションを含め、その他多くの宣伝を 行つてはいたのだが、

開場当日にあれだけの人間が集まつたのは正直言つてビビつたわけだつて開場演説開始の一时间以上前から、門の前が隙間が無いほどギチギチだつたんだぜ？

地球で言う、某黒いネズミがメインキャラのテーマパークもびつくりな光景だつたわ…

(娯楽に飢えてる…っつーことなのかね？)

何せ原作では第一巻の時点で、サイトとギーシュの決闘騒ぎに多数の暇を持て余した学生貴族が、野次馬として観戦してたらしいしな…

*

一応このゴールドソーサーの経営者^{オーナー}は俺自身である。
完成前から施設管理の職員やら、清掃員やらのその他スタッフは
やはり本来の商売である武具と秘薬の稼ぎを給金にして雇っている。
因みにゴールドソーサー施設内には、ここでしか買えないという名
目で
やや強力なFFの武具を販売する店も設置してあったりもする。
他にもコロシアムのモンスターの飼育員や
オークションに出すアイテムの管理人、カードスタジアムのスタッフ
オペラ会場の役者やら裏方やらその他etc…
これだけ大量の人材を雇って動かしてるので
定期的に視察とかもする必要があつて結構大変だったりするのだコ
レが…
とはいえジョゼフに強く頼まれたのもあつたし
俺自身でも楽しみたいと思つていたので、それくらいは苦ではない
が。
因みに警備兵代わりに施設内にはかなりの数の鉄巨人が徘徊してい
る。
以前話したように、貴族からは入場前に杖を預かつておくシステム
なので
あまりトラブルにはならないと思うのだが、
万一の備えとして、何かあつたらすぐに突き出すように指示してあ
る。
（コイツ相手に杖も無しに立ち向かえる奴なんて
ハルケギニアにはそうそういないだろうしな…）
立ち並ぶ鉄巨人や職員達と気さくに挨拶を交わしながら、
俺はゴールドソーサー内の視察を行つていた。

*

さて、ある程度の視察を終えてやって来たのは、施設中央に立つレストラン。

「邪魔するよ〜」

従業員用の入り口から入って気さくに挨拶をする。

「いらつしや…あ、ミスタ・サイガー！」

パタパタと走り回っているウェイトレスの中で、真っ先に気づいたのがシエスタであった。

秘密を共有する同士の1人であるとはいえ、屋敷で何もしないというのもあれだったので、

ゴールドソーサーの完成と同時に、彼女をここの従業員として働かせているというわけだ。

シエスタにしてみても、学院での仕事を辞めて以来手持ち無沙汰だったので、丁度良かったらしい。

因みに、サイトにもまた別の仕事でゴールドソーサーの施設の1つで働いてもらっているのだが、

そっちに関してはまた別の機会に話すことにしようと思う。

そして俺はシエスタの案内で、レストランの最上階へと向かう。

その途中でも何人かのスタッフと会ったのだが、例外なく全員が歓迎と緊張の入り混じったといった感じの表情で頭を下げるばかりだった。

当然といえば当然なんだが…一応は俺、経営者オーナーに当たるわけだし…でもやっぱり慣れない…自分で意図したこととはいえ、俺はそんな尊敬されるような人間じゃないしね…

「どうぞ、こちらになります」

「案内ご苦労だったねシエスタ」

「とんでもございません、これくらいのことには」

俺と軽いやり取りをした後、シエスタはペコリとお辞儀をした後パタパタと急ぎ足で本来の持ち場へと戻っていった。

*

やたらと豪華な装飾扉をギイツと開いて中へと入る。

部屋の中を明るく照らす、天井に吊り下がっている巨大なシャンデリア。

最高級の繊維で織られ、複雑な模様が表現されている、床に敷かれた赤い絨毯。

その部屋の中央に置いてあるのはこれまた最高級のテーブルと二脚の椅子。

そして色とりどりの沢山の料理と…

「来たかトオルよ！ケルブ風ラムステーキが丁度運ばれたところだ！」

…上機嫌でその料理を黙々と口へと運んでいるジョゼフの姿であった。

いや、そこは俺が来るまで待つとくべきだったんじゃないですかね？例によって店の殆どのメニューを注文してる雰囲気だし…

「マスター、嬉しいのはわかりますがそんなに食べられるんですか？」

「食べきれるともさ！ハルケギニアの何の面白みも無い形式に沿った料理と」

お前の召喚した幻想世界の料理とでは天と地程の差があるからな！

！

「はあ…」

FF世界が好きなのはわかってたけど、そこまで言い切りますか？まあでも無理も無いかもしれない。今この目の前にいるジョゼフがここまで気さくなオッサンと化している、最大の要因でもあるのだから…

このレストランはジョゼフの言うとおり、FF世界の食材による料理が楽しめる

ゴールドソーサーの食事施設の中でも最も人気がある。

FF世界の物質として召喚可能な物として、料理や食材なども含まれていたのである。

…正直言っただけで始祖の使い魔の力を、こんな風に使うのもどうかと思っただけ。

そして召喚したそれを、グラントロワ王宮お抱えの料理人達との協力で研究を重ね、

貴族に出しても問題ないレベルまで高め、こうして料理として出す

ことに決めたのである。

食材はある程度の反動はあるとはいえ、ほぼ無尽蔵に召喚出来るので必要な量は常にストックしてある。定期的に俺自身が運んでくれば全然問題無い。

そしてこの部屋はレストランの中でも、位の高い人間しか入れないVIPルームである。

部屋全体にサイレントの魔法がかけられ、入り口の前ではこれまた警備員代わりの鉄巨人が立っている。

そんな場所に、今日はジョゼフに呼ばれてやって来たわけなのだ。

「さて……」

テーブルについて、俺も料理をさっそく頂くことにする。

関係ない話だが、シュヴァリエの称号を得て以来、御偉い方との交渉で必要だったので、

ある程度のテーブルマナーが自然と身につけてしまったりする。

「む…流石に美味しいな…」

正直な感想を洩らす。食べているのはバラムフィッシュのソテー。

?の世界ではウエスタカクタスと並ぶ三大珍味の1つと呼ばれる物である。

「ふむ、俺もその魚は気に入ってるからな」

「とか言いますけどマスター…その前にバツダムフィッシュを食べてましたよね?」

「そうだったな、あれはあれで独特な味がして俺は好きだぞ?」

「好きだぞって…いやまあマスターがそう言うなら深くは聞きませんけど…」

この言葉には流石に…いや流石にとってわけでもないんだが呆れている俺。

バツダムフィッシュというのはバラムフィッシュに酷似した魚であるのだが、

バラムフィッシュとは違って腹痛、幻覚などの症状に襲われる、到底食べられない代物の筈…

なのだがジョゼフは事もあろうに以前、それをペロリとたいらげた事があるのだ。

いろんな意味で規格外な人間なのだが、そんな部分まで及んでいるとは……

胃の頑丈さは雷神とタメを張れるということになるわけなんだよねえ……

その後、しばらく談笑を楽しみながら食事が続けていたのだが

「そういえばマスター……今日のもう1つの目的は何なのです？」

唐突に食事の手を緩めて俺はこう切り出す。ここに呼ばれる前に事前に言われていたのだ。

何でもじっくり話したい事があるのだとか。

「……そうだな、そろそろ本題に入るとするか」

すると、ジョゼフが机に肘を突き、右頬を手の上に乗せた格好になる。

表情はさっきまでの愉快なものと違って真剣である。

無能王……その偽りの仮面の一部を外した姿といったところであろうか。

何にせよジョゼフがこういう顔をするのだから、いつもの個人的な頼みとかとは違うのだろう。

「トリステインと新生アルビオンとの間で戦争が始まったのはお前も知ってるだろう？」

「はい、聞き及んでおります」

ジョゼフの問いに、俺もまた真剣な態度でやり取りを進めていく。

結局この辺の流れは原作の補正力という奴なのだろうか、

トリステイン対アルビオン、というかレコンキスタの戦争は変わら

ずに始まっていた。

まあ別に予想通りの流れだから驚きはしなかったけど。

「その少し前に、トリステインに忍ばせた間諜から妙な噂が届いてな」

「妙な噂ですか…」

「ああ…何でもアンリエッタ女王陛下が誘拐されそうになったのだとか」

「ほう…それはまた…」

知っているとはいえ、初耳だという風に取り繕っておく。

ウェールズの事はガン無視してたし、あの色ボケ女王にもちよつかいは出してない以上

この流れになるというのもやはり計算の範囲内だ。唯一の例外と言えば…

「でもその割には妙に落ち着いていますよね？一国のトップが誘拐されたとあらば

他国にも情報が流れてもおかしくはないと思うのですが？」

唯一の例外…それはサイトの不在とルイズが覚醒していない事である。

以前のキュルケの話によれば、ルイズはサイトがいなくなって以来、ずっと塞ぎ込んでいるとの事。

となれば当然、アンリエッタを救出する条件は整わないのだから、彼女がそのままゾンビウェールズの手によって、アルビオンに連れて行かれてもおかしくはない。

そこまでの事態になれば、俺の耳にも情報が入ってきそうなものなのだが…

「まあそれに関してはトリステインが情報規制をしているのもあるが…こんな噂も耳にしてな」

「それはどのような…？」

「王女の誘拐は事前に阻止され、そしてそれを止めた者は

誘拐犯の魔法を掻き消した上、巨大な白い爆発を起こしてその者達

を撃退したとか…」

「……ええっ？」

思わず聞き返してしまう。自分ならぬ、相手側のご都合主義というやつだろうか？

というか待て、塞ぎ込んでたんじゃなかったのかよ？

流石にサイトもない、他の人物達との関係も円滑に進まない中で唯一の親友を失うわけにはいかないと立ち上がったというやつなのだろうか？

「成る程興味深い話ですね…もしかしたらマスターと同じかもしれませんか」

「ククツ…これしきの力の持ち主が何人現れようと関係あるまい…お前の幻想魔法の力に比べたらな？」

別の虚無の使い手の出現の可能性にも、この世界のジョゼフは鼻で笑って済ませる。

本人が始祖ブリミルの事を「カビの生えた偉人」扱いしていたのだから、ある種の必然である。

といっても今の話が本当なら、ルイズの覚醒は想定外の出来事…

情報を整理し直して、対策を練っておく事に越したことは無いだろう。

「では2つ目の話なのだが…お前には少々面白くないかもな？」

「と、言いますと？」

「両国からの裏側からの協力の取引がうるさくてな…参ってるころだ」

「協力って…マスター、ガリア王国は此度の戦争は中立の立場でありましょう？」

口ではこう言う俺だが、政治の「せ」の字も知らない立場から言わせて貰えば

やはり強国ガリアの力は欲しいというわけなのだろうか？

「まあもつとも、レコンキスタの方は俺が作ったようなものだから自業自得でもあるがな…」

「ほうほうやは「…じゃなくて…ええっ!?レコンキスタをマスターが!？」」

思わず本音がポロリと出そうになってしまった…危ねえ危ねえ…
やっぱりクロムウエルを誑かしたのは原作どおりというわけだったのね…

「ああ…詳しい事情は省くが、あの頃の俺はまあ…色々と病んでいたからな

暇つぶし感覚でクロムウエルの奴を誑かしたのだ…まあ若気の至りというやつだ」

「いや、レコンキスタの発足を考えたら、若くは無いですよ」
速攻でツッコミを入れておく。しかも若気の至りで済ますような問題でもない。

改変があったとはいえ、その辺はやはりジョゼフである。

「お前を召喚して以来ほつたらかしてであつたからな、再三の協力要請にウンザリしているのだよ

トリスティンの方からは財務卿から借金の申し立てがあるしな…」

「はあ…お忙しいですねマスターも」

「なに、あれしきの連中などに遅れを取るような主ではないぞトオルよ？」

だが、もっと手早く済ませられる方法はないものかと思っただけで、得意げに笑みを浮かべてジョゼフは言う。その表情から何が言いたいかが大体読み取れる。

改変されたとはいえ、その辺の価値観もまたそんなに変化は無いのに少々驚く。

…俺は召喚時に、自分遊びに付き合うかはお前の好きにしろと言われている。

なので、ここで俺が快くない返事をしても特に問題は無い。といってもだ。

「…レコンキスタ側でどうでしょう?それに、飛空艇のテストも兼ねて」

「ほう！まさかお前の方からそう言ってくれるとはな？」

「状態を考えれば傍観しておくのが一番なんでしょうが…
かといってレコンキスタを放っておいても後々面倒になるかと思われ
れます」

それに私も色々アルビオンに用がありますから…その辺りはまた後
日詳しくでいいでしょうか？」

「気にするな！お前が協力してくれるというだけでも御の字だ
俺もそろそろ、自分で蒔いた種は自分で刈らねばと思っ
ていたしな
ニヤリと笑みを浮かべて、ジョゼフは満足げにしている。

一応彼とは長い付き合いだし、ここは協力しておく事にする。

原作と同じ流れなのだが、それはそれで助かるのかもしれない。

ホントの所は、トリステインも一緒にふっ飛ばしても構わないのだ
が、流石にそれは動きすぎだ。

それに何もまだ、問答無用で吹っ飛ばすと決まったわけではないの
だ。

というか派手に動きすぎて目立つのもアレだし、指輪の回収やらテ
イファニアの迎えもある。

計画をすっかり練って、あくまで俺が関わっているとわからないよ
うに動かないとな。

つっても…二つ返事で了承しちゃう辺り、やっぱり自分の中での自
制が

段々と緩くなっているとは思ってしまうのだが…今更だけど…

「さて…三つ目の話なのだが…これが一番厄介かもな…」

「どうしたんです改まって？」

先程まで以上に真剣な表情になってジョゼフは切り出してくる。
違和感を感じつつも、俺はワインを口に運びながら返答する。

「…シャルルを支持する連中の囁りがうっとしくなってきたな」

「亡きシャルル様の…？それは何時もの事だと思っ
ていましたか…」

「王宮内でのアイツの支持者どもがな…」

国税を使ってこの様な娯楽施設を建てるとは何を考えている！とい

った感じにな」

「はあ…」

成る程、それで色々難癖つけられていたというわけか。

元より、無能王として国民達に認識させているから、

ゴールドソーサーのような施設の建設は別に珍しくはないと認識されている。

というより、事前の先行公開による宣伝やら何やらもあって

ゴールドソーサーの建設に関しては逆に、市民の支持を集める結果になっているのだが

やはりジヨゼフを心底嫌うシャルル派の人間には面白くないのだろう。

「しかしマスター自らその様に仰るとは…相当参っておられのですか？」

「正直言つとな…しかしアイツにした事は確かに悔やんではいるが、それはそれだ。

そうした事によってお前と巡り合えたのだから今更後悔はしていない」

「まあ…確かに私の幻想の力がマスターの今の最大の優先ですからね」

「少し違うなトオルよ？確かにお前の力もそうだが、俺はお前を召喚したからこそ救われたのだぞ？」

「はい…？」

少し意外なセリフを耳にする。俺自身だからって…そりやどどういう意味だ。

「もしお前がその力を使って俺に齒向かうようなら、逆に俺はどうなっていたかわからん。

しかし召喚された時お前は言ったな？俺の支えとなり、俺の為にあらゆる物を生み出すと

その言葉があつたからこそ俺はお前を信用し、最も信頼の置ける人間として置いているのだ」

場があるからこそだ

ならいつそ、その支えを大きく動かしてみるというのも手であろう？」

そうは言うが：大きく出てきたなジョゼフも。

この段になって自分からシャルル側の事に触れてくるとは思わなんだ。

「要するに、私の力で彼女の母上の治療を餌にしてシャルル派の声を抑えさせると？」

「有体に言えばそうなるな。どちらかと言えば反逆される可能性が大きいと思うが」

「そんな危険な事を私にやれと？先程の言葉が薄くなってきたのですが……」

「違う、最も信頼しているお前だからこそだ。当然断りたいのなら別に構わん。

というより逆にすまないと思っている。やはり難題なのだからな。シャルルの事もまた、俺が蒔いた種なのだからな、

毒花が成長しきる前に刈るか、あわよくば毒を押さえ込むかの二択だ」

…何だかジョゼフという人間がわからなくなってきたな。

シャルル派にちよっかい出されるのが嫌で、意図的にタバサの母の事には関与していなかったのに

まさかジョゼフの方から切り出してくるとは思わなかったのだ。

当然、俺としては今のガリアでの平穏な生活が脅かされる可能性がある
ある以上

この申し出を受け入れるのには正直躊躇いがある。

しかし…その前に言ったジョゼフの、俺だから信頼しているという言葉もある。

そう言った時のジョゼフの表情が到って真剣であった以上

俺をタバサの母親の件に関わらせる為のおだてではないことはわかっている。

まがいあいにも一応、それなりの期間主と使い魔の関係をしてきたのだから

本心の言葉を言う時の表情くらいはわかっているのだ。

故に、俺の事を本気で信頼しているから、この問題を何とかしてほしいと持ちかけたのだろう。

あのジョゼフがわざわざ俺にそう言うのだから、

王宮内でのシャルル派の不満は、相当な物になっているのだろう。

それが爆発したら、俺自身の活動にも逆に支障が出るのは目に見えている。

となれば…いつそこはジョゼフの申し出を受けて入れて大博打に出るのもありなのだろうか？

しかし最近色々ハメを外しているとはいえ、基本慎重に行きたい俺としては…

この話は大きな分かれ目になるであろう…

「…マスター、私は…」

長い沈黙を挟み、俺は自分の意見を述べた。

第23話：完成！そして大きく揺れ動く…（後書き）

話の引きが中途半端ですが…それに関するアンケートが活動報告にあります。

よろしかったら協力お願いします。

第24話：個人的には金だけど、時には力と恐怖も必要だよね（前書き）

アンケートの結果、2番で話を進めていくことになりました
たくさんの投票、本当にありがとございました

アンケートに細かい内容を書き込んでくれた方も多かったので

あくまで全面戦争ルートが大筋になりますが

それらの意見も投票番号は関係なく

上手く使えたら活かしつつ話を進めていきたいと思えます。

第24話：個人的には金だけど、時には力と恐怖も必要だよな

交渉：英語で言ったらネゴシエーション。

柔らかい言い回しにするなら話し合いというやつだろうか？

と言つても、現実の交渉というものではまず、優しいという表現は似合わない。

特に政治・経済・商売関係の交渉なら尚更の事である。

ぶつちやけ言えば腹の探り合い。如何にして自分の手札を上手く用いて

自分側に有利な結果をもたらすか、ひたすら頭をフル回転して考える必要がある。

その為に必要な話術、政治的カード、相手を釣る為の利益、脅迫の為のバツクの力。

とにかく様々な要因が絡んでくるのは必至なわけで。

そして立場が不利な場合、強者である交渉相手を如何にして騙し

また、どのようにして自分側に対するデメリットを小さくするかが焦点と言えるかもしれない。

（とまあ…そんな小難しい理屈を現代日本人の若造が考えるだけ無駄なだけだが）

冒頭の説明も殆ど意味を為さないだろうなあ…

そんな風に考えるトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

事の顛末を…説明する必要も無いかもしれないが
結局、俺はジョゼフの提案である「シャルル派との交渉」を承認し
たわけである。

レコンキスタを潰すのにも当然、色々と準備が必要なのだが、
それをやってる間にシャルル派が暴走しないと言い切れない。
前回も何度か触れたかもしれないが、あのジョゼフが態々口に出す
ほどに

最近のシャルル派を何かとジョゼフに難癖をつけてきているそうなの
だ。

このままではいずれ、ジョゼフの腹心と（シャルル派からは）思わ
れている

俺や周辺にも火の粉が飛んできかねないからという理由もあるが、
それよりも遥かに、この世界に来て以来、様々な面で俺のことを助
けてくれ

俺自身も1人の人物として純粹に好いているジョゼフの頼みという
のが大きい。

交渉なんてものはハッキリ言っただ俺の柄ではないのだが、
ジョゼフ本人が「俺がシャルロットとの交渉の場に出ても余計に刺
激するだけだろう」と言っただし

（いや、今の俺でも十分刺激する事になるとは思っただけどね！）
かといってそこの適当な人間に任せるわけにもいかないというわ
けだから

最も信頼の置ける俺が、交渉の場につく事になったわけである。
まあ、交渉と言っても冒頭で書いたような波乱含みの内容には流石
にならないと思う。

一応、今日の交渉相手はタバサ1人だけだし、余計な事は多分して
こない…と信じたい。

というか本当に面倒なのはジョゼフの方なのだから。

交渉が成功した上で、如何にしてタバサを利用してシャルル派を抑えこむかは

自分が引き受けるべき仕事だとも言っていたしね…

そして重要なのは、彼女の母親の毒を治す力が俺には備わっているという事。

幸か不幸か、以前タバサは俺が死者蘇生をする場面を目撃した事があるのだ

治療法が見つかってない毒を治せる、というのを信じ込ませるのは難しくない。

で、簡単に言えば母親の治療と引き換えに、彼女にシャルル派を抑える防波堤となってもらうのだ。

中世ヨーロッパがベースなハルケギニア、ここガリア王国も例外ではなく

王位継承も当然、血縁関係が何よりも重要になってくる。

そして先代の王の血を引く亡きオルレアン公シャルルと、現王ジョゼフの兄弟

その直接の後継者として血を引く者は、タバサと後はイザベラであるろう。

ああ…もう1人いるけどそっちは後回しにしておきます…まだロマリアにまで関わりたくないし…

(ぶっちゃけあの展開を見た時も目から鱗だった覚えがあるわ) 言うまでも無いが、残されたシャルル派が慕うのは後継者であるタバサである。

そのタバサから直に「現ジョゼフ政権には逆らわない」と一声かければ

各地にいるシャルル派も、少しは静まってくれらるうと考えるの事だ。

だが一番懸念すべき問題は、俺でなくともわかると思っが

それでも尚逆らうであろうシャルル派が少なからずいるであろう事そして…タバサ本人がこの交渉に応じず、本当の意味で全面戦争に

なる可能性がある事だ。

この世界に来て以来、北花壇騎士での経験もあるので
罪も無い一般人や、自分が好意を抱いている人間ならまだしも
自分に敵対する人間の死にまであれこれと感傷を抱くような心持
はしていない。

とはいえ、国内外問わずして、シャルル派の人間が全員襲ってくる
となると

やはりこちらもそれ相応の強大な力で迎え撃つことになるので
そういう無駄な大量虐殺をするというのは気が進まないものである。

……ここまでやっておいて本当に今更な話ではあるのだけど
フーか自分で言っていて、やはり地球の常識が大分薄れてきている気
もするし。

(まあ始まる前からあれこれ考えるのも仕方ないわな……)

とにかくタバサの応じ方次第だ。そういうわけで俺は一旦考えるの
を打ち切り

グラントロワ宮殿の一室であるその場所で、椅子に座りながらのん
びりタバサを待つ事にした。

*

テーブルに用意された果物等に舌鼓を打ちながら待つ事数分。

「……………」

「やあ、来たな」

いつも通りの無表情で、タバサが部屋の入り口に姿を現す。

一切の無駄な拳動をせずに、俺と向かい合うようにして反対側の席に着いた。

因みに話す内容が内容なので、部屋の中には予めサイレントの魔法がかけられている。

そして俺もテーブルに両の手を着いて表情を真剣なものへと変える。いよいよ交渉のスタートというやつだ。

「さてと…何故お前がこの場に呼ばれたかは聞いているか？」

「大事な話があると聞いた」

相も変わらずの淡々とした口調でタバサは返答する。

一応詳しい内容は、俺が直接話すという事になっているのだ。

「えーとじゃあ…理由と結論、どっちを先に言っただけ？」

「……結論」

少しの間を置いて、やはりタバサは冷静な表情と口調を崩さぬに咳く。

結論が先か…そっちの方がタバサにとってはインパクト大だろうな。

「了解。じゃあご希望通り率直に述べるけど、お前の母親の治療を行う用意がある」

「……………」

そのたった一言で、明らかかな動揺をタバサは見せる。

必然だろう。タバサが何よりも望んでいた事を加害者側に関わっている人間から言われたのだから。

しかし、流石のタバサもそこまで単純ではなく、

少しした後にもたすきに落ち着きを取り戻して俺に聞き返してきた。

「…目的は？」

「ま、そりゃあ普通は疑うわな…何の対価も無しにそれをやる意味が無いんだもの…」

俺がタバサと同じ立場でも思う事であろう考えを言った上で、更に

続ける。

「最近建造された娯楽施設の事は知ってるよな？」

「…ゴールドソーサー、ジョゼフが作った遊戯施設、それにあなたも関わっている」

「そう、確かにあれは陛下の頼みもあって、俺が主体で作り上げた娯楽施設だよ

ただ… 国税を使ってまで遊び目的にあんな巨大な施設を作ったとか何とかで

シャルル派の反感を更に高める結果にもなってしまったわけだね…」

「……………」

聞かれたこと以外は一切喋らずに、沈黙を保ってタバサは聞いていく。

「とりあえず結果を先に言った以上、理由を全て述べなければならぬ。

「でだ、陛下はそれを抑えるのに大変な苦勞を為さっているという事なんだよ。

このままでは反乱を起こされて武装蜂起されるのも時間の問題だともね…」

それで、上手い具合にその不満の声を押さえ込む手立てがないかとお考えになられて…」

「……………」

「そして普段から親しくさせてもらっている俺に、どういうわけかお鉢が回ってきたんだよ

いっその事今まで押さえ付けていた楔を逆に引き抜いて、それを餌に大人しくしてもらえないかと…」

「……………」

話している内に意図が読めてきたのか、タバサの体が微妙に震え始めている。

心境はわからなくもない… 今まで散々弄ばれてきた親の敵に

タバサ視点から見れば、あまりにも身勝手な理由で掌を返されてい

るのだから。

しかし悪いが、タバサ1人の意思など俺にはあまり関係が無いのでな…

「それを踏まえた上で結論を纏めるところ。タバサ、お前の母親の毒を治療する

その代わりにシャルル派の人間達にこれ以上

陛下の邪魔立てはしないでほしいと、お前自身の言葉で伝えてもらいたいと」

淡々と説明する俺に対し、タバサは明らかな敵意の視線を向けてくる。

「以前、あなたはこの事に関しては関わらないと言っていた」

「俺もそのつもりだったよ…でも流石に陛下から直々に命令されて首を横には振れないだろう？」

「あなたが母さまの治療が出来る保障が無い」

「それに関してはお前が最も理解出来る事だと思うが？」

死者蘇生の秘宝がある以上万病に効く特效薬なんてのも当然持ち合わせている

その秘密を知っているからこそ、陛下は俺を交渉人として選んだのだからな」

「治療が済んだ後、私達を解放する保証も無い」

「そっちに關しても陛下から言伝っている。治療とシャルル派の鎮圧が済んだ上で

お前と母君に新たな家名登録をして、王家とは無関係の一貴族として生活してもらおうぞうだ」

タバサからの疑問を事前に用意していたパターン通りに受け答えしていく。

どんどん質問を答えていくうちに、俺は一度大きな溜め息を吐いて、こんな事を切り出してみる。

「ふう…つまりだ、簡単に言つと復讐と母親、どっちを取るかと暗に陛下は聞いてるんだらうよ」

「ッッ……………」

タバサが再び悔しげに声を漏らす、俺は気にする事無く、半ば冷徹に続けていく。

ここで畳み掛けておかないと、後でこじらせるのも面倒臭いし。

「一緒に任務をこなしてきた間柄だし、その位の意図は俺にだってわかるよ

ただあくまで俺個人の意見として言わせてもらえば、お前はこの交渉を飲むべきだと思うがな」

「…何も知らないのに、何をぬけぬけと…！」

…うおっ、ちよつとびっくりしてしまった。

歯を食いしばり、敵意を剥き出しにしてタバサが震える声で俺に言い放つてくるとは。

確かに俺の言葉は事情を知らない人間の戯言に聞こえるのかもしれない。

しかし何度も言うが関係ない。俺には俺の目的があるのだから。

「知る知らないの問題じゃない、あくまで政治的な話で言ってるんだよ

陛下はもう、お前の母君の身の保障だけではシャルル派を抑え込めないと判断している。

ここでこの交渉条件を飲めば、お前が望んだ優しい母君も戻ってくるし

シャルル派に対する後処理も、最小限の損害で済むかもしれない
逆にこの交渉を蹴れば、母君は狂気に飲まれたままだし

いずれはシャルル派が蜂起して、その争いを鎮静化するのに多くの血が流れる事になる

そうなつたらこの国を根底から支えている国民達に、どれだけの被害が出ることになるのか…」

「……………」

多くの血が流れる、というニュアンスは流石に堪えたのか
タバサはハツとした感じに表情に多少の困惑を浮かべる。

俺はそれを確認し、更に容赦なく追い込んでいく。(最早悪役だよコリヤ…)

「それに国内情勢が乱れば、何より俺の商売にも影響が出てくる陛下とのお付き合いを始めて大分経つけど、ガリア内での立場が漸く固まってきたんだ

そんな折に大規模な反乱なんか起こされたら、俺も色々困るんだよ…」

「そんな…個人の我侭で…」

「我侭は承知の上だ、けどそれは残念だけど大半の人間は同じ事なんだよ

結局俺がこうして交渉の場に駆り出されているのも陛下の命令だからに過ぎない

利害関係云々が大きい以上、俺は陛下の命令には従わなきゃいけない立場なんだ

俺は所詮成り上がりのシュヴァリエだからな、忠誠どころより利益で動くタイプなの

だからよけいな個人の感情を持ち込んで、お得意様の機嫌を損ねるような

そんな明らかに自分が不利益になるような真似はしないの」

やってられない、そんな風な雰囲気を取り繕って俺は説明をする。

交渉はジョゼフに言わされてるからという下りは当然嘘である。

確かに言いだしっぺはジョゼフの方だが、これは冒頭で述べている通り俺の方から承認した事だ。

しかし…交渉でバカ正直に自分の真意を全て述べる必要など無いのだ。

相手に自分の意見を飲ませる為ならある程度の嘘は当然の様に必要になるのだから。

「わかる？ 結局の所、俺もお前も陛下の気まぐれ次第というわけなんだよ

国王の命令一つで、成り上がり貴族でしかない俺は勿論のこと

相対する派閥の神輿とも言えるお前ですら簡単に捻れるだろうよ」

「……………」
とにかく、従うしかないという空気を俺は作っていく。

タバサは最早、俺に対する不快感を隠そうとすらしていなかった。

「…まあ、とりあえず言いたい事は全部伝えたつもりだ。後はお前次第だよタバサ」

復讐を忘れて国家から身を引いて安寧な暮らしをするか

あくまでも陛下打倒に傾倒し、多くの血を流す茨の道を進むか…」
そしてもう一度、タバサに決断を迫る。

「当然、お前が交渉を飲むというなら俺は裏切るつもりは無い

陛下のご命令通りに、俺の秘宝なり何なりを使って必ずお前の母君を治療するつもりだ」

更にもう一度、従っておくべきだろうと遠まわしに念を押ししておく。

「……………考える時間が欲しい」

そしてタバサが出した結論は、今この瞬間では決められないというものであった。

まあ確かに今までの事を踏まえれば、この場ですぐに答えを出すというのは難しかろう。

何より交渉を蹴るなんて言った時点で、宮殿から出れずに幽閉される可能性だってある。

そういう点も踏まえれば、これもまた予想の範疇である。

「…わかった、陛下から一週間までは猶予を与えとも言われている。」

一週間後にまたここに来てくれ、その時にまた答えを聞く事にしよう」

「……………（コクッ）」

小さく頷いた後、タバサは席を離れ、特に言葉を発する事もなく部屋を後にした。

「……………ふう〜…疲れた〜…」

交渉終了後、俺は椅子にだらしなくグテーツと倒れこんで情けない声を上げる。

意外とヒートアップしていたが、ああいうダークなキャラはあんまり得意じゃないんだよな…

予想はしていたとはいえ、感情を露にしたタバサからのプレッシャーも結構堪えたしな…

まああとは後の結果次第だ、とにかく言うだけ言ったのだから

一週間後の再度の交渉で、タバサが快い返答をしてくれるのを願うばかりである。

第25話：現実には優しくない！（現実離れた世界なだけで）

『人生はそう上手くいくものではない』

人間、生きていれば死ぬまでに必ず一度はこの手の台詞を口にする筈である。

（というか言わない人間がいたら逆に見てみたい）
20年弱しか生きていないような若造でも、軽く二桁は口にしていく。

それは、ここハルケギニアに来てからも例外ではないのは重々承知している。

第4の使い魔のルーンによって、常識外れの力を手にしていても、刃物で心臓を刺されたり、頭を吹き飛ばされたりすれば普通に死ぬ自分はおくまでもすごい力を持つ人間名だけで、決して神ではないのだから。

だから物事を進める際には、常に悪い場合の展開を頭の中に入れておくべきなのだ。

で、その認識は実能的を得ていたというか、概ね予想通りというかなんというか…

「…つつてもやっぱり穏便に事を進めたかったんだけどなあ…」
ため息を吐く。元より成功したらラッキーくらいの認識ではあったけど。

かといってここまで極端な突っ撥ねはどうかと思うんです。

そんな風に愚痴る俺に向けられているのは、大量の杖でしたとさ！

ではこの場をどう切り抜けるか？

次の考えを巡らすトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

時間はあっという間に流れて、タバサと約束した一週間後。

俺は再びグラン・トロワ宮殿に赴き、タバサの返答を聞きに行く予定であった。

何分最近は忙しいので、到着したのはまだ朝日が眩しいの時間帯である。

ゴールドソーサー完成に伴い、仕事量が膨大に増加したのが一番の原因。

アトラクションの整備がどうか、施設内のレストランの食材がどうか、

警備用鉄巨人のメンテ、竜の首コロシアムのモンスターの世話、クレームの処理…その他諸々

更には秘薬や武具、オークションに用いる品々の注文表やら整理やらで

昼夜目まぐるしく働き通し、休む暇なんか殆ど無いような生活になっ

てきているのである。簡単な雑務とかは、ジヨゼフが手配してくれた部下達に任せる事が

出来たんだが

何分、俺の下で取り扱っている品の大半はFFのアイテム。

つまりは俺がルーンの能力で召喚して生み出している物が殆どなのだ。

先を見越して、屋敷の地下を何回も改築して作った巨大倉庫があるので

品不足に陥るといふ事態は当分は無さそうなんだが、ガリアでは当然見たこと無いような物ばかりなので

何かわからない事があると、逐一俺が説明しないとイケないのだ。

おかげであっちに行ったりこっちに行ったりで、てんてこまいなのである。

形式上ゴールドソーサーと、薬品武具の商売で何人もの協力者がいるので

俺を中心とした一種の商会的な集まりが出来上がってはきているのだが

(それでも…やっぱり秘密を知ってる人間が少ないってのは辛い…)

商品整理と各地訪問を同時にこなすのはやはりくたびれるものである。

やはり自分の秘密を全て知る、優秀な助手が1人くらいは欲しいと
考えてしまうのだ。

…その為にはやはりマチルダだろう。あんまり放っておいたら俺の
渡した宝石が底を尽きかねない。

出来るだけ早くにアルビオンに赴いて、迎え入れたいものである。

ティファニアと一緒に。

少々話がズレてしまったんだが、まあそんな事を考えながら部屋の椅子に腰掛けて天井をぼーっと眺めながら、タバサの到着を待っていたのである。

朝はそんなに強くない方なので、欠伸がひっきりなしに出てきてたまらない。

「……………？、何か妙に騒がしいような……………」

そしたら数分後、宮殿内にいくつもの足音が響いているのを察知した。

いくらハルケギニア随一の強国、ガリアの王宮とはいえ、

こんな朝早くに宮殿内で起きている人間といえば、精々メイドくらいなものである。

こんな朝っぱらからバダハタ騒ぎ回るのはどう考えてもおかしい、
というか貴族の品位に欠けるというか。

「ちよつと見てくるか……………」

疑問は解消出来るに越した事はない。タバサもまだ到着していないし。

というわけで椅子から立ち上がって外の様子を見てこようかと立ち上がった矢先。

「いました隊長！アイツです！」

…部屋の扉が思いつきり開かれ、杖を携えた数人のメイジ達が一斉に俺を包囲したのだ。

で、冒頭の場面に至るといっわけである。

タバサから答えを聞く筈が、やってきたのは十中八九シャルル派であろう貴族達。

しかも、何となくだが相手は誰もがそれなりの使い手だということがわかる。

一応、俺も北花壇騎士零号の肩書きがあるし。

で、全員が明らか敵意のこもった視線を向けているのだ。

もうね？メーザーアイでも発射するつもりかよ？つてくらいにギラギラと…

(参ったなあ…)

想定範囲内とはいえ、ここまで悪い方向に転がるものなのかと考えてしまう。

いや、普通の人間の思考で言えば絶体絶命のピンチと言えるのだからうが

生憎、ハルケギニアの常識から外れている俺にとってはそういう場面ではない。

「…一体全体これは何の騒ぎなんですか？」

わけがわからない、そんな雰囲気装って俺は言葉を発する。

王宮内で出来るだけ騒ぎは起こしたくないから、冷静に対処しなければならぬ。

こんな状況になった時点で交渉も糞も無くなってしまったが

今はとにかくこの場をどう切り抜けるかを最優先にするべきだ。

「トオル・シユヴァリエ・ド・サイガー、神と始祖と正義の名において貴様を逮捕する」

「……………」

一瞬「デス」という単語が喉下までせり上がってきたが、グツと堪える。

もう本当に反吐が出るくらい腹立たしいセリフだったが、焦ってはいけない。

「…何を仰ってるのか…私は今日ここでシャルロット様との会談があつてそれで…」

「黙れ！無能王の犬が！」

シャルル派の1人がピシャリと俺の言葉を遮る。こりゃ話にならないかもしれんな…

「…かどいつもこいつも犬だ何だと…慣れているとはいえやはりちよつと腹が立つ。」

「どうにも状況が飲み込めないですね…まずは私をこうしてる理由を聞きたいのですが」

俺がそう言つと、メイジの一団のリーダーと思わしき人物が、杖を構えたまま前に出る。

「自らの弟君から冠を奪い、碌な国政も行わず遊戯に耽り、そして正当なる王位後継者であるシャルロット様を虐げる無能王…

その暴君に手を貸し私腹を肥やす貴様を我々は許さぬ」

「はあ…それはまた大層な事ですね…」

沸々と感情を高ぶらせて語るのはいいけど、こっちは冷める一方よ？そりゃ確かにジョゼフは自らの憎しみを抑えきれずにシャルルを殺害したが

ジョゼフに王冠が渡つたのは、別に策謀とかそんなのではない。

前王が堂々と宣言した事の筈なのである。

ましてや、最近のジョゼフは俺を召喚した影響によつてかなり丸くなっている。

ゴールドソーサーの建設も、大半の国民には受け入れられていたのだ。

それをまあコイツらは理屈つけてネチネチと…

いや、当然立場の違いによる考えの相違だというのは理解している。今更ジョゼフを信用しようという人間がシャルル派にいるわけもないだろう。

でも…話し合いをしたいと持ちかけた先に待っていたのは刃…

これはジョゼフ派だのシャルル派だの関係なく、人としてどうかと思っただよ。

(似たような展開で、オルレアン夫人が犠牲になった所為もあるのかもれないが)

「けど、私はシャルロット様と交渉をしようと赴いたんです

あなた方は関係がない。シャルロット様の答え次第なのですが…」

「ほざくな！今更貴様らが我等に手を差し伸べるはずが無かるう！」

「そうだ！ここへおびきよせたのもシャルロット様のお命を奪っためだったのだろう！」

そしたらまたメイジの一团がやんややんやと騒ぎ始める。

しかもだ…今の話の内容を総合してみるに…

「…シャルロット様は今どちらに？」

「今、別の部隊が保護に向かっている。これ以上貴様らのいいようにはさせん」

「んで…それはシャルロット様も承知の事なのですか？」

「当然だ、我らが直接聞くまでも無い。シャルロット様が無能王の軍門に下るなどある筈が無い！」

「…成る程」

理解した。つまりこいつら自分で勝手に思い込んでるだけって事になる。

タバサの答えがどつちかはまだわからないが、もし俺ら側の交渉を飲むつもりだったのならば

こいつらのやってる事は完全に裏目に出ていることになるのだ。

それなのにこのシャルル派の一団は、タバサの意思を無視して、こうして反乱を起こしている事になる。

…胸糞悪い以外の何物でもない。正直な話、こいつら自身が単に俺のことが気に入らないから、こうして襲撃してきたってならまだ理解できる。

こいつらの大義名分はタバサ…つまりは自分の正義を他者に委ねて責任逃れしてるようなもんだ。

正確に言えばもっと違うかもしれないが。賢くない俺にはその程度にしか思えなかった。

そういうタイプが俺は一番…というか死ぬほど嫌いなんだよ。

自分の我侭でマチルダやサイト、シエスタを引き込んだ俺も似たようなものかもしれないんだが…

同属嫌悪？いや、違うか…俺は自分が悪人で自己満足の為の行動という自覚がある。

でもこいつらは違う。自分達が正しいと勝手な思い込みをしている。こうする事によってタバサが救われ、国が平和になるという根拠ゼロの幻想を抱いているのだ。

自分がやっている行動のおかしさも顧みないで…

「でもいいのですか？こんな事をすれば反乱分子と見なされただけやすみませんよ？」

「王の権威を盾にするつもりか？無駄だ、無能王の玉座の下にもカステルモール殿率いる別働隊が向かっている。貴様に縋れる者など誰もいないのだ！」

「そうですか…」

結論。この交渉は完全に裏目に出ってしまったようだ。展開的には14巻冒頭そのものである。

おかげで国内のシャルル派の不平不満を爆発させる結果になってし

まったようだ。

…というよりタバサに同情する…というか申し訳ない気持ちすら生まれるな。

こつちから手を出したとはいえ、自分の意思とは無関係にこんな事になっただから…

「わかりました…」

そしてそうとわかったなら、もう猫を被る必要も無いだろう。

俺は久しぶりにキレかかっていた。タバサが可哀想とかこいつらがムカつくとかそれ以前に

「さあ、大人しく…「デス」こ…ち…ら…」

従うフリをして一団のリーダーに即死魔法を唱える。その瞬間リーダーは事切れる。

「隊長！」

「き、貴様！杖も使わずに…」

「ヘイスト」

慌てふためいている一団を掻い潜り、一直線に俺はジョゼフの下へと向かう。

…それ以前に、俺はまだこんな所で死にたくない。あんな無茶苦茶な理由で死んでたまるかっつての。

俺にはまだやりたい事がたくさんあるのだ。いや、死んでもジョゼフが

フェニックスの尾でも使って生き返らせてくれるかもしれないが、

それはバカの考えだ。

死ねば基本的に何もかも終わりだ。死んでも次があるとかそこまで落ちぶれるわけにはいかない。

最近はずが外れまくっているけど、超えてはいけない一線は超え

るわけにはいかないのだ。

案の定、王宮内は大騒ぎになっているが、脇目も振らずに玉座の間へと到達した。

「マスター！」

声を張り上げて扉をブチ破り、中へと突入する。

「……………って心配するまでもなかったかもしれないけど……………」

そしたらまあ…部屋の中は凄い事になっていました。

床にはシャルル派の貴族と思わしき人達が、何人も倒れこんでいた。恐らくその大半が既に息を引き取っているだろう。

「おお！無事だったかトオルよ！」

直後に耳に入ってきたのは聞き覚えのあるいつもの声。

聞こえた方向に目を向けると、そこに立っていたのはジョゼフ。

「マスターこそ…御無事で何よりです」

「まったくだ…お前がやられるとは考えもしなかったが…ついカッとなつてしまつてな

怒りという感情が発生したのは、シャルルを手にかけて時以来かもしれん」

つかつかと歩み寄ってくるジョゼフは、シャルル派のメイジの1人を抱えていた。

「ぐ……………お…のれ…無能王…が…！」

「黙っている下種が」

ジョゼフの屈強な腕に捕まっている血だらけのメイジが呻くがそれを聴いた瞬間、ジョゼフは腕に力を込め、冷酷な眼差しでメイ

ジを見下ろす。

「散々恨みを買っている俺ならいざ知らず、全くの無関係であるトオルにまで手を出すとはな…」

つくづく俺は人を見る目が欠けているかもしれないカステルモール？
貴様のようなクズの叛意すら見抜けなかったのだからな。正に無能王だよ！」

「ぐああっ！！」

ジョゼフがメイジ：カステルモールを思い切り蹴り上げる。

悲鳴を上げながらカステルモールは床を転がっていく。

にしても…ここまで怒ったジョゼフは、原作から通しても目にした事が無かった。

味方である俺が、背筋がゾクゾクと震えているくらいだ。

原作でも最強クラス虚無の使い手にして、あらゆる知識に精通している超人…

そんな人間を相手にしているという時点で勝ち目など無いに等しい。原作ではヴィットーリオの助力によって、運良く自爆してくれたようなもんだったのだから。

（考えてみれば、この世界のジョゼフが真実を知ったらどうなるんだろうか？）

こんな状況なのに余計な事が頭に浮かぶ。だが、目の前のカステルモールには特に何も感じない。

自分を殺そうとしてきた連中を哀れむような筋合いは無いしね。

「こ、これは！」

「カステルモール殿！」

と、この段になって先程俺を襲撃してきた一団が玉座の間へと突入してくる。

「さて…どうしますかマスター？」

「聞くまでも無い事だ。コイツらは話も聞かずにお前を狙うようなただのクズだ」

突入してきた部隊を前にしても、特に慌てる素振りを見せない。

ジョゼフはシャルル派の一団に向かって杖ではなくある物を構える。
「おのれ無能王め!!」

シャルル派の一団が一斉に飛び掛ってくるが、ジョゼフは既に準備を終えていた。

その両手に構えられていたのは白金のボディが目を引く銃であった。

「お前から貰ったコイツの実験台代わりとして消してやる」

「…ってマスター、それは…」

啞然とした俺を他所に、容赦なくジョゼフは引き金を引く。

次の瞬間、銃口の何倍もあるう大きさの白い閃光が放出される。

「な、何だこれは!?!」

「うわああああ!!」

シャルル派の一団は成す術も無くその閃光に飲み込まれていく。
そして、それが収まった時には、全員が黒コゲになっていた。

(エゲツねえ…)

人死には耐性がついてきているとはいえ、これはとんでもないオーバーキルだ。

ジョゼフは以前俺が渡した最高クラスの銃、エクゼターを用い波動弾による必殺技、ハイパーショットを使って敵を纏めて焼き払ったのだ。

魔法は勿論、剣術や銃の扱いも一級品のジョゼフは、手足の如くこれを扱える。

「陛下!ミスタ・サイガー!よくぞ御無事で!」

と、そこへ丁度ジョゼフの護衛の騎士達が慌ててやってくる。

背を向けたジョゼフはそちらに振り向こうともせず、早口で言い捨

てる。

「人を集める。このクズどもの死体を残らずリユティスの各街道の門へと吊るせ

残りのクズどももそれを見れば反乱の意志など薄れるだろうよ…

最も…今日生き延びたところで俺はこれ以上容赦するつもりは無いがな…」

「は、はっ!」

護衛の騎士達はまるで魔王にでも会ったのかという感じの面持ちで足早に玉座内にいたシャルル派の死体をかき集めて部屋を後にする。

部屋の中は再び、俺とジョゼフの二人きりになる。

「…すまなかつたトオルよ。お前に依頼したばかりにこんな危険に晒す事になるとは…」

「とんでもない、危険は重々承知の上でしたから…」

今までの冷酷さはどこへやら、心底申し訳なさそうな声色でジョゼフはそう言ってくる。

だが俺自身が言う様に、こうなる事は想定していたのだから

ジョセフに謝られると、かえってこっちが申し訳ない気持ちになっ
てしまう。

「しかしマスター、これからどうしましょう?こうなってしまった
以上

もうシャルル様の派閥を抑え込むのは不可能かと…」

「だろうな…かえって裏目に出ってしまったというわけだ」

「それにシャルロット様も…どうやら奴らの独断で保護されている

みたいですし」

「保護だと？全く…俺のお気に入りに手を出すようなクズどもが体の良い言い訳を…」

イラついた様子でジヨゼフは吐き捨てる。ちよっと入れ込みすぎな感じもあるが。

寧ろ俺はそっちの方も怖い。俺が殺されたりでもしたら、今の愉快なジヨゼフが

原作の狂気のジヨゼフへ逆コースなんていう最悪の展開も起こりかねない。

死んだら終わりとか、それ以上に重要な問題な気がしてきてしまう…

「まあ…俺が原因の様なものだ。答えをまだ聞いてない以上無碍に扱うわけにもいくまい…」

そう言つてジヨゼフは身に着けたマントを大きく翻して続ける。

「シャルロット・エレエヌ・シュヴァリエ・ド・パルテル

シュヴァリエの称号と身分を剥奪、生母・旧オルレアン公爵夫人の身柄を拘束

その上で再度、俺とクズどもものどちらにつくか交渉を行う

交渉の場はサハラとの国境に位置するアーハンブラ城だ

そして交渉の地とすると同時に決戦の地ともする。

シャルロットはともかく、もうこれ以上シャルルの側につく連中は見過ごせん

こちらから堂々と宣戦布告をして、過激な連中はまとめて掃除してやる。

シャルロットの身柄をこちらで再度確保し、エサにすれば簡単に食いつくだらうよ。

このゴタゴタをとつと片付けなければ、遊戯を行うことすら出来ぬのだからな…

これ以上国内を混乱させて、余計な不安を植えつけるのも望むところではない

ましてやガリア本土で反乱を起こされたりすれば…多くの臣民の血

を流す事になろう……」

淡々と説明を続けて、ジョゼフは俺の方に振り向いて更にこう続けた。

「その為には一切の容赦はいらぬ……トオルよ、悪いがお前の力を貸してくれぬか？」

ガリア国内にいらぬ不安を与えるのはお前も嫌であろう？

それを消し飛ばす為にもお前の力をアーハンブラ城に集結させてくれ」

「はっ！！」

返事は考えるまでも無い。ジョゼフの言葉に対して反射的に力強い声で返答し、その場で片膝をついた。

全面戦争になってしまったわけだが……これも仕方ないことなのかもしれない。

俺はともかく、あんな感じに反乱の手がガリアやサイトやシエスタに伸びたら俺は一生後悔するしな。

穏便に事が運べば最良だったのだが、その望みは今日のこの反乱で塵芥になった言えよう。

人生はそう上手くいくものではないのである。

第26話：小鳥を鳥籠へ（小鳥というにはチト凶暴だけど…）

「さあ回復してやろう！全力でかかってくるがよい！」

・四天王最後の刺客、ルビカンテの紅蓮のマントが大きくなびく。

・敵でありながら威風堂々としたその姿に、怒りに燃えるエッジは臆することなく…

「サイガー殿？それは何です？」

「…陛下から褒美に頂いた物語本だよ」

ガタゴトと音を鳴らしながら揺れる馬車の中、隣にいた騎士団員に声をかけられ

俺は手にしていた本、ジョゼフの持っていた幻想伝の和訳本を閉じてそう答えた。

怒りというのは人間を強くするんだそうで。

トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

方針を決定した後のジョゼフ行動は、もう本当に迅速であった。時間経過の関係上、まだそう遠くには行けないだろうと目星をつけ、ジョゼフは側近の兵士達に命令して、タバサ並びにオルレアン夫人の行方の搜索を開始した。

長年チェスや何やらの遊戯で培った才能なのか

ジョゼフは少数の兵士を、国中隙間が無いように的確な位置に配置していったのだ。

その結果、あの反乱の日からわずか二日後に、タバサと夫人の居場所特定されたのである。

見事としか言いようがないというか…一種の恐怖すら感じるね。

彼に睨まれたら最後、もうどこにも逃げ場は無いのだろう…

そして今日、その潜伏先に俺とその他数名の北花壇騎士達が乗り込む手筈になっているのだ。

正直、今のタバサ立場は相当に不安定な物となっているだろう。

自分の与り知らぬ場所で反乱が起き、母親の治療と王への反乱

どちらを取るか答えを伝えられぬままに、過激なシャルル派の連中に保護…というよりはそういう建前で半ば強引に拉致られたようなものなんだから。

いくら好きでも嫌いでもない認識の相手とはいえ、ちよっぴり同情してしまう。

望まぬ親切は、単に大きなお世話、というよりただの不利益にしかならないのだから。

よしんば、昨日の反乱でジョゼフの首を取れていたとしても

結局はタバサは傀儡にされて、他のシャルル派に利用されるだけの様な気もするし。

しかし、こうなってしまう以上、もう甘い態度で臨むことは出来ない。

今のジョゼフはこれまでに見ないくらい怒っているのだから。

それに何より俺自身、あの一件でシャルル派の人間に対する評価が

急降下してるし。

いくら俺がジヨゼフに味方する立場の人間であるとはいえ話も聞かずに正義だ何だと妄言を吐いて襲い掛かってくるとかマジ非常識。

今日はもう容赦する気は無かった。抵抗するならちよつと過激に行かせてもらつつもりである。

そうこうしている間に馬車は、タバサの潜伏先とされているガリア郊外のとある村の外れにある一軒家へと到着する。

俺と北花壇騎士達は馬車から降りて、門の前にいた平民の中年男性へと歩み寄る。

「き、貴族様がこんな辺鄙な田舎に何の御用で…？」
いきなりの貴族の登場にオロオロしているようだが俺はお構いなしに、懐からジヨゼフから預かっている書類を取り出す。

「国王ジヨゼフ様の命だ、数日前に行方をくらましたシャルロット様が

ここにいらるとの事だ、家の中を見させてもらいたい」

「シャルロット様が…？ははは…何を仰いますやら

こんな人っ子一人通るのすら珍しいこんな場所にそのようなお方が…」

にこやかに笑って否定する中年男性。

が、俺はそいつの顔より下の方に視線を向けていた。

「いるわけが！「エアロガ」ぐあああ！」

瞬間、表情を豹変させて杖を取り出すよりも前に俺が目の前の中年男性に向けてダミー杖を取り出し、容赦なく魔法を放つ。

エアロガによって男は数メートル程吹き飛び、地面へと倒れ伏す。平民に化けての不意打ち……よほど余裕が無いのだろうかシャルル派貴族は。

こういう場所に隠れている以上当たり前っちゃあ、当たり前の策なのかもしれないが。

「一人はこの男の見張りを、残りの皆さんは家内の搜索と一緒に」「はっ！！！」

後ろに振り向いて他の騎士達に指示を出しておく。

北花壇騎士達はすぐに返礼した後、各々方で行動を開始した。

「シャルロット様！！お逃げ下さいシャルロット様！！！」

風の刃にモロに切り裂かれ、血だらけのズタボロで北花壇騎士に押さえつけられている

中年男性、もといシャルル派のメイジが声を張り上げて叫んでいるが俺はそれに何の感情も抱くことなく、他の騎士達と一緒に家の中へと入っていく。

家の中はそう広くはなく、必要最低限の設備だけ整えてあるといった感じだ。

他の騎士達が各々であちこちを調べている中、

俺は廊下の外れの方にあつた小さな扉が視界に入り、それを開ける。

「……………！！！」

「やあ」

そしたら大ビンゴ、件の人物が俺の姿を見るなり目を見開いて小さく声を漏らす。

ベッドに眠るオルレアン夫人のすぐ側で、タバサは椅子に座りながら寄り添っていた。

「サイガー殿！いましたか！」

するとすぐに他の騎士達がドタバタと音を立てて俺の後ろへとやってくる。

それを見たタバサが咄嗟に立ち上がって愛用の杖を構えるが

「待った、ここは俺に任せて欲しい。他の皆さんは外の監視と応援の警戒を」

「は？し、しかし……」

両手を挙げてタバサと騎士達の両方を制してこう伝えておく。

騎士達は当然、タバサも呆けに取られているといった感じの表情になる。

しかし俺は構わずに続ける。

「いいから、確保は確実に行く。何かあっても優秀な君達北花壇騎士がいるから問題ないだろう？」

「は、はあ……わかりました、お氣をつけて」

今一釈然としない感じだったらしいが、騎士達はそう答えて部屋を後にする。

ボタンと扉を閉め、部屋の中は俺とタバサ、そしてベッドで眠るオルレアン夫人だけとなる。

「さてとタバサ……どうして来たかはわかるね？」

「……………」

いつも通りの冷たい無表情のタバサに対し、ちよつと強めの口調で俺は迫る。

悪いけど今日は流石に真面目に取り組んでおかないといけない。

ここで逃したら事態は泥沼化するだけだ。タバサの答えがどっちであれ確実に連れて行く…

「陛下のご命令だ、シュヴァリエの称号を剥奪、そしてお前と夫人の身柄を拘束だよ」

「……………」

「色々あつて頭が混乱しているのはわかるが、数日前にシャルル派がクーデターを起こしたからな

悪いけどお前にもこれ以上甘い態度で接するわけにもいかないんだ

「よ

「ッ……………」

唇をかみ締めて悔しげな表情を見せるタバサだが、俺は構うことなく畳み掛ける。

「だからこれが最後だ。ここで大人しく従ってついでにければ

まだお前は母親の治療を行えるチャンスがある。逆らえばどうなる

かは…まあお察ししてやつだ

陛下はこの後、シャルル派の危険分子を一齐に肅清するおつもりだようはどっちにつくかだ。今ここですぐに決める」

ダミー杖を構え、普段のタバサと同じような無表情を作って選択を迫る。

強引かもしれないが、王宮でクーデターまで起こされてるのに情けなどかけたら

かえってつけ入るスキを与えることになってしまうのだから。

（というかあくまでハルケギニアの常識で言えば、選択させてやるだけ凄いい恩情になるし）

タバサは杖を握ったまま、しばらくの間硬直していたが

「……………」

やがて小さくコクリと頷いて、杖を傍らに立てかける。

ふう…流石に素直に従うか、ここで断つても何のメリットも無いし何よりここで首を横に振れば側にいるオルレアン夫人にも被害が及ぶしな。

「そうか、じゃあこっちの指示に従ってもらう、とりあえずは夫人の方が…えあつ!？」

刹那、その安心が大きな油断だったのだらうとすぐ後に後悔する羽目になる。

視界からタバサの姿が消えるのと、俺の体が制御を失うのはほぼ同時であった。

俺が油断したスキについてタバサが俺の眼下に潜り込み、足払いをかけてきたのだ。

宙に浮いた俺の体がすぐに急降下し、思い切り尻餅をつく。かなり痛い…

「イテテ…このっ!…!」

冷静な判断力を取り戻した時にはもう遅い。タバサは落とした俺のダミー杖を奪い

自身の長杖を俺に突きつけながら、また無表情に戻って俺を見下ろしていた。

情けない…いい年こいた男が、遙かに小柄な女性に圧倒されるとか、かなりシユールよそれ？

といつても、実戦経験の経験地の差から言えば、タバサが遙かに格上だ。

油断してればこういう事態になるのは容易に想像可能だったはずだ。完全なる俺のミスだよ…

「何のつもりだタバサ…?」

「これ以上あなたを信用出来ない」

『普通に考えれば』絶望的な状況の中で俺が質問し、淡々とした口調でタバサが答える。

「王家全てを敵に回そうというのか?母親の命より復讐が大事だと?」

「…本当はあなたの交渉を飲むつもりだった、けどこれは約束が違
う」

わあ…やっぱりタバサは了承するつもりだったのか。シャルル派の
皆さんマジ無駄骨。

けど従うつもりだったんなら今も従って欲しいんだけど…何故こん
な事に…

「想定外なんだ。お前が保護されているのもシャルル派の勝手だろ
う？」

だから俺はこうせざるを得ないんだよ、国王陛下の命令は絶対なん
だから」

「知ってる。あなた個人はまだ信用出来た。けどあの男は…ジヨゼ
フは絶対に信じられない

こうして強行手段に出て来た以上、母さまを無事にしておく筈が無
い」

…何か話の内容が噛み合わない気がするんだけど。

というか夫人の毒を治療しようって言い始めたのもそのジヨゼフよ？
今ここで軽率な行動を取ったってしょうがないだろうに…

恨むならお前を保護したシャルル派を恨んでくれよ、こっちは余計
な手間になっただけだつてのに…

「…けどこんな事をした方が危険だろうが？お前にしちゃ随分迂闊
な行動だよな？」

「もうすぐこの場所に他の父さまの派閥のメイジ達が戻ってくる
それにあなたは利益で動くと言った。ここで死んだら元も子も無い」

成る程…つまりは逆らったら息の根止めるってわけか…
何なんだろうね…俺の油断の所為でもあるけど…どうしてまあこう
自体が面倒な方へと転がるのか…

「…具体的にどうしろと？」

「あなたを人質にしてここを離れる。その後母さまの毒を治療して
そうすれば命は助ける」

「そんな都合の良い要求通ると思ってんの？少し落ち着けよ？」

いつもの冷静な判断力はどうしたよ？北花壇騎士七号タバサ？」

「黙って…今ここで死にたくなかったら言うとおりにして
いくらあなたが強くても、杖が無ければどうにもならない」

もはや軽蔑すらこもった俺の言葉に、タバサは杖を握る力を強めて
脅迫する。

平静を装っているのだろうが、明らかな怒りと焦りが目に見えてわ
かる。

…正直残念だ。まさかタバサがこういう行動に及んでくるとは。

俺がジョゼフ側の人間だというのがやはり信用ならなかったのだろ
う。

しかも最初に交渉は飲むつもりだったが、クーデターの混乱で考え
を改めてしまったらしい。

シュヴァリエの称号を剥奪し、更には母親の身柄まで拘束しようと
いうのがマイナスだったか。

でもそれは政治的に正常な判断だ。あんな事態になれば、

シャルル派の旗頭であるタバサとオルレアン夫人がとぼちりを受
けるのは明白だろう。

結局は数日前のイザゴザの所為で全てが台無しになっていたのだ。

まあ…タバサに俺らではなくて、強引とはいえ父親を募る人間を恨
めというのは無理があるか。

総括、結局シャルル派のバカ連中が全部悪い。

もう本当にロクな事ない。アーハンブラ城での決戦は本気でやらせ
てもらおう。だがその前に…

「ファイガ」

「えっ？……あああああ！？」

杖を突きつけるタバサに対し、一言呟いて業火を放つ。

予想すらしていなかった俺の反撃に成す術も無く、タバサは火達磨になって転げまわる。

「ウオタガ」

すぐに水魔法を唱えてその火を鎮火する。火が消えた後タバサは床にグツタリと倒れこむ。

「脅迫すんのはいいけど無防備すぎたな」

冷め切った感情で吐き捨てる。さっきまで少し同情してたくらいなのに一気に冷めたわ。

立場の違いがあるとはいえ、あんな無理矢理に襲ってくる奴を庇う筈も無い。

ジョゼフが憎いのは構わないけど、俺はそのジョゼフを大切に思ってるんだよ。

それだけの理由で憎しみを優先して、俺にまで杖を向けるとは流石にキレるわ。

冷酷だと言いたいなら言えばいい。俺の最優先順位は自分自身と、周りの大切な人達。

好きでも嫌いでもないコイツにかける情けなどもうひとかけらもありはしない。

「どう…し…て…」

「世の中にはな、お前の知らない力もあるって事だよ」

衣服や肌のいたる部分がコゲついた状態で、タバサは苦しげに呻いている。

杖が無ければ魔法は使えない…悪いがそれはハルケギニアでの常識だ。

その常識外にいる俺には通用しない優位性だったわけだ。

つくづく自分が恵まれているというのを再認識する次第である。

情報というのは、第4の使い魔のルーンの力よりも遥かに恐ろしい武器となるのだ。

このハルケギニアのある程度の行く末や常識を…「ライトノベル」

という形で知っているのだから。
自分があくまでも地球からやってきた異邦人であるのがよくわかる。

ガシャーン!!

直後、近くの窓ガラスが破壊される音が響く。

「よくもお姉さまを!!」

シルフィードがその巨体に合わない猛スピードで突撃してきた。

「スリプル」

反射的に体を横にそらしながら魔法を唱える。

ここには夫人もいるんだからあんまり暴れないでほしいわ。

シルフィードは部屋の隅へと移動した俺を追撃する前に、動きが急激に鈍る。

「きゅ…い!!…な、なん…なの…ね」

「大人しくしている。これ以上騒ぎを大きくしたくない」

結構本心からの発言。タバサの言葉通りならシャルル派の応援が更に来る可能性がある。

これ以上この場所に長居するメリットなど皆無なのだ。

「ぐっ…きゅ…いいいい!!」

「んなっ…!？」

シルフィードは直後、自分の爪を肉体に突き立てる。

そうする事でスリプルによる睡眠効果を無理矢理覚ましたのだ。な
んっー忠誠心…

「お姉さまを放すのね!!」

爪を振り上げてシルフィードが再び襲い掛かってくる。

狭い部屋で暴れまわるもんだから屋敷がグラグラと揺れる。

流石の不測の事態の連続に俺はかなり我慢の限界が近づいていた。

「あーもうっ…マトラマジック!!」

何故これを使ったのかは自分でも疑問だが、イラついた口調でシルフィードにそれを放っていた。

俺の両腕から何発もの白い光が放たれ、シルフィードに直撃する。

「きゅー!!」

シルフィードは今度こそ、指一本動かすことすら叶わなくなり、その巨体が静止する。

マトラマジック(？仕様)…青魔法の一種であり、当たった相手のHPを1にする。

つまり、シルフィードは完全な虫の息となっている状態なのだ。

ハルケギニアで完全に異質となる魔法である。ちよっとカツとなりすぎってしまったかもしれない…

だが、そう愚痴をこぼしている暇もあまり無い。

「お…ねえ…さ…」

死にかけ状態のシルフィードの言葉は無視して、俺は気絶したタバサを抱える。

「ケアルガ」

シルフィードはともかくタバサに死なれては困る。

タバサに治療魔法を唱え、ファイガのダメージを回復させる。

「………こんだけ騒いだのにまだ寝てるのか」

次いで、ベッドに横になっているオルレアン夫人の方へと近づくと、あれだけの騒ぎであったのに、夫人は未だにすやすやと眠り続けていた。

(後でわかったんだが、かなり強力な水の秘薬で無理に眠らされていたらしい)

結局その後はシャルル派の応援が来る前にその場を離れ
タバサとオルレアン夫人を無事にアーハンブラ城へと運び終わった。
これで手筈は整った。後はシャルル派を上手く煽動しておびき寄せ
るだけである。

それにしても…タバサの態度にも腹が立ったが、今回は俺の油断も
大きいだらう。

まさか逆らうとは…ましてやあんな強硬手段に出るとは思ってなか
ったし。

FF魔法や召喚が使えるのは大きなアドバンテージだが、やはり身
体能力的な問題がありそうだ。

現に、小柄なタバサにあっさり尻餅つかせられてしまったし。

(サイトの奴もかなりレベルアップしてきたし…俺も魔石を使つと
くべきなのかもな)

またしても気づくのが遅すぎるような事を考えながら

馬車の中でユラユラと揺れながら自分の屋敷へと帰っていった。

第27話・影と言っても、別に自ら感情を捨てて生きようとしてるとかではない
考えてみたら確かに前回のトオルは迂闊で残念でしたね…

第27話：影と言っても、別に自ら感情を捨てて生きようとしてるとかではない

シャルロット・エレヌ・オルレアン捕縛の噂はすぐにガリア国内へと広まっていた。

前回のシャルル派による王宮内でのクーデター事件も重なり

ガリアの国民達には動揺が走っている。まあ無理も無い話だけど。

その不安を鎮めるのにジョゼフの部下達がんやわんやの奔走を続けている。

「今の陛下は決して罪無き平民や自身の支持者に手は出さない」

「粛清対象となるのはクーデターを起こした過激なシャルル派だけ」

「陛下を信じ、シャルル派に肩入れするような事をしなければ何も心配は無い」

こういつた具合に国民達を落ち着かせているのだ。

ジョゼフの方といえば、側近の政治顧問達と協力して

国内にいるシャルル派側の有力者達を纏めて牢屋にぶち込んでいた。中にはそれを察知して、捕まる前に行方をくらませた者も何人かいたらしいが

その手の輩はタバサをエサにしておびき寄せ、それでも現れなかつたら追撃するつもりらしい。

この切羽詰った状況故に、俺も王宮へ足を運ぶ回数が大幅に増えた。その際に会った、長年ジョゼフの側近を務めていた重鎮メイジ曰く「あそこまで積極的な活動をする陛下は初めて見た」との事だ。

よほど今回のクーデター事件が癪に障ったという事の表れであろう。これを機にシャルル派が暴走するのは目に見えているのだから、気合が入るのも無理は無い。

国内の混乱は、自分の娯楽にも支障をきたすのだから。

俺もようやく、こつちでの下地が大分安定してきた所なのだ。

余計な不安は根こそぎ奪っておく事に躊躇いは無い。

もう完全にこつち側の住民として染まってきている感じなのだが、

地球側の常識や道徳で考えた結果、自分の幸福を脅かされたらそれこそ目も当てられないのだ。

だから今回は完全本気モードで行かせて貰う事にする。

幾度も自分を殺そうとしてきた連中を助けるような聖人君子ではないので。

俺は俺、自己満足で行動するただの1人の人間に過ぎないのだから。

*

「でも…ここは相変わらずだよなあ」

何となく呆れるというか、逆に感心さえしてしまう。

国内がシャルル派の動向で混乱している最中でも

ゴルドソーサー内は普段の…いや、寧ろいつも以上に賑わいを見せていた。

こんな時だからこそ、娯楽に興じて嫌な事は吹き飛ばそうという考えの人が多いのかもしれない。

(悪く言っちゃうと現実逃避? いや、それは言いすぎか?)

でも、ぶっっちゃけた話ガリア国内では、ここが一番安全なのかもしれない。

何せ並みのスクウェアメイジすら敵うかどうかという實力である

警備用の鉄巨人が何十体と施設内をウロウロしているのだから。

こんな物騒極まりない場所に殴りこみに来るようなアホは常識では

まずいないだろう。

そんな事を思いながら、俺は竜の首コロシアムへと足を運ぶ。

「おや、これはサイガー様」

職員用の入り口の前に立っていた施設の係員が、俺の姿を見るなり頭を下げて挨拶してくる。

「やあ、シャドウはいるかな」

「はい、丁度只今試合中かと…今日もまた一段と盛り上がっておりますよ」

「そうか、ありがとう」

係員と気さくな態度でその様なやり取りをした後、俺は中へと入っていく。

観客席は相変わらずの満員御礼で、貴族、平民間わずして沢山の人が観戦に来ている。

それを眺めつつ最上階にある見晴らしのいいオーナー専用の席へと腰を下ろす。

中央のコロシアムで対峙しているのは黄土色のボディを持つ首長のドラゴン・ブラキオレイドス

反対側にいるのは全身を黒い衣装と兜で身を包んだ男だ。

「グオオオオオオ!!!」

ブラキオレイドスが高々と咆哮し、男に向かって魔法を放つ。

すると、男の周辺に青白い光が現れ、膨大な魔力が収束していく。

「おっと！」

が、男はそれを察知した直後、思い切り地面を蹴り、凄まじい速度で右方向へと飛び上がる。

次の瞬間、さっきまで男の立っていた場所で大爆発が発生する。

「うおりゃああああ！！！」

男はそのまま勢いに任せて、腰に挿していた長剣を抜き放ち力任せにブラキオレイドスの肉体へと突き立てる。

それと同時にブラキオレイドスが白い神々しい光の柱に包み込まれる。

「グギャアアアア！！！」

ライトブリンガーの刃と追加効果のホーリーをまともに受けるがそれでもブラキオレイドスの生命力は尽きておらず、

傷ついた体を無理矢理動かして、男の方へと突進しようとする。

男はそれを見て、手にした剣の切っ先を獲物へと向けて、そして呟く。

「フレア！」

その一言によって発生した膨大な炎の塊が、ブラキオレイドスの巨体を包んでいく。

ブラキオレイドスは炎に焼かれ、今度こそその動きを完全に止めた。

「俺が進むのは戦いだけの修羅の道だ……」

獲物を仕留め、持っていた長剣を力チャリと鞘に納めると同時に男は静かな口調でどこか中二臭いセリフを発する。

その瞬間に階下の一般席からは拍手喝采大歓声の嵐。

「……本当スゲエわ……腕を上げたよなあ……」

俺はというと男の戦いぶりに心底感心して声を洩らしていた。

*

試合後舞台裏へと足を運び、俺は件の黒衣装の男と対談する。

「よう、大したもんじゃん、もう完璧に凄腕戦士だな」

「トオル！試合見てたのか？」

「ああ、ブラキオレイドス相手にあれだけ立ち回れるなんて本当に凄いや

でも最後のクツサイセリフはどうかと思うぞ？」

「いや、別にそれはいいだろ…この格好の元ネタなんだから」

褒められと思っいたら少し落とされ、多少凹んでいる黒衣装の男、もといサイト。

彼は今、この竜の首コロシアムのナンバー2、謎の騎士シャドウとして人気を博している。

（因みに人気ナンバー1は、以前紹介したジョゼフが演じるジークである）

折角魔石による強化もあるし、屋敷でいつまでもダラダラするわけにもいかないのだ

ある程度強化された段階で、この竜の首コロシアムでサイトは働いているのだ。

それでまあ、あれよあれよと言う間にコロシアムでの一大スターになったのである。

ガンダールヴの記憶を体が覚えているのか、サイトの剣術は一流レベルになっているし

魔石によってマスターした？の魔法によって魔法戦闘も完璧。

基礎身体能力も大幅に上昇しており、純粋な戦闘能力は軽く俺を凌駕しているだろう。

…ぶっちゃけ俺も、今からでも魔石の肉体強化をしておくべきだと考えてしまう。

そのくらい今のサイトは強い。勝てないのは多分、加速を発動したジョゼフくらいだろう。

ふと、俺は気になることがあってサイトにこう問いかける。

「ところでサイト…クドイようだけど本当にいいのか？」

俺はお前を危険な目に遭わすのは本望じゃないんだが…」

「それは言うなってトオル、友達が困ってんなら助けるもんだろ？」

今の俺にはそれが出来るだけの力があるんだ、今使わないでいつ使うんだよ？」

多少心配気味の俺に対し、サイトは少しも気にしてないように返答してきた。

ガリア国内の混乱は当然サイトも知っており、それに対して俺に尋ねてきたのだが

俺とジョゼフが近々シャルル派と全面的な対決を行うだろうと説明すると

自分も協力させて欲しいと俺に持ちかけてきたのだ。

正直に言えば、サイトが戦力になってくれるだけでも百人力なのが。

これは言ってしまうえば俺とジョゼフが起こしてしまったイザコザなので

こういうキナ臭い話にサイトを関わらせるのは、あまり気が進まなかった。

随分とまたダブルスタンダードな考えだと思っ人もいるかもしれないが。

サイトは俺にとっての唯一の同郷者だ（細かく言うと微妙に違うのだが）

故に自分で蒔いた種を自分で刈るのに、大切な友人の手を煩わせるのもどうかと思ったのだ。

だが、これに対して逆にサイトは憤慨したようで、俺に対して強く言ってきた。

「自分が使い魔のルーンの洗脳から逃れられたのはトオルのおかげ」
だの

「今手にしている力も、シエスタとの幸せな日々もそうである」だの
「シャルル派というのはよくわからないが、放っておけば過激な行動を起こし

それこそ自分の大切な人であるシエスタやお前が傷つく」だの

「そうさせない為に、何よりジョゼフやお前が困ってるならその助けになる為に

この力を使いたいんだ」だの、とにかく自分の気持ちを洗いざらい吐いていったのだ。

ここまで真正直に言われてしまったら、俺も流石に根負けしてしま

う。
サイトの協力要請を了承して、そして今に至るといっわけなのであ

る。

だが自分でウンと言った以上責任は持たなければなるまい。
サイトの実力から考えて何か不幸が起こるとは到底考えにくいのだが

万一でもそのような事態になったとしても、俺が必ず守る。
サイトに何かあれば俺だって悲しいし、何よりシエスタが一番悲しむだろう。

大切な人達が不幸な目に遭うのなんて俺は見たくないからな。

前回油断してタバサに出し抜かれたばかりなので、しみじみとそう感じてしまう。どうも最近は大底が固まってきた事にかまけて、警戒を怠っていたらしい。なのでアーハンブラ城では慢心せず油断せず、最大限の戦力を用意する心構えだ。前みたいな事で自分やサイトが大怪我でもしたらやってられないからな。

「…わかったよ、何回も済まなかったなサイト。けど…」
「何だよ？」

「ケガはしないようにな？シエスタを泣かせるのはお前も嫌だろ？」
「ハハッ！心配すんなって。やっとお前に恩を少し返せるんだから寧ろお前の方こそ気をつけるよ、身体能力は並なんだからな？」

「プッ…お前に言われるとはな」
互いに笑顔を見せ、俺とサイトは握り拳を作り、それをぶつけ合う。この様な何気ない穏やかな時間を守る為にも、絶対にこの動乱を鎮めてみせると強く思った。

*

一気に所変わって、サハラとの国境沿いアーハンブラ城。

ラグドリアン湖と正反対の場所に位置する、切りだった丘の上に立つ古城。

その周辺で着々と俺は、FF要素による軍備増強を進めていた。

「銀竜大隊が上空を飛び回って…鉄巨人とベヒーモスが城内警備…
ミスリルゴーレムとデスライダーの連隊が外周警戒…」

後は東の入り口に2ヘッドドラゴンを配置して…西側にいにしえの
テツキヨジンと…

地上戦力の補強にマシンヘッド数十体にブラックウイドー…それが
ら…」

実物の全貌は詳しく知らなかったのだが、意外と広大な敷地に建て
られており

それを全部網羅するにはかなりの数の戦力が必要になっていたのだ。
逆を言うと、それだけ戦力を置くのに余裕があるとも言えるのだが…

だが今回の敵戦力が未知数である以上、出来る限りの準備はしてお
く次第だ。

しつこいようだが前回、タバサにスキを突かれて形成を崩されたの
だ。

そんな事があっておきながら気楽に考えるという方が無理なのであ
る。

城の内外問わずして、今まで召喚してきたモンスターと、追加召喚
の戦力を配置し

城の半径数キロ圏内にも、ある程度の戦力をばら撒いていくつもり
だ。

ジョゼフの話によれば、シャルル派の支持者はクーデターで逮捕し
た分を除いても

国外に潜伏しているのも加えて、まだかなりの数がいるとの事。

その大半がタバサ救出の為にいつどのように攻めてくるのかわから

ないのだ。

その肝心のタバサを搔つ攫われたりしたら、それこそまた事態は泥沼化する。

だからもう油断はしない。いつ敵が襲ってきてても大丈夫なように確実に戦力を整える。

というか、俺の気持ちが一我慢ならぬ。今のシャルル派への評価はゼロを突き抜けてマイナスだ。

自分を殺そうとしてくるような物騒な連中は、さっさと消してしまいたいよ本当に。

オーバーキルと思われるかもしれないがそんなの関係無い。

さっきも言ったが今回の俺は本気モード。「俺TUEEE!!キモイ」と、言いたきゃ勝手に言えばいい。

もうこれ以上、自分の幸せを脅かす連中に振り回されるのは御免だからな!

「サイガー殿、お連れしてきた二体の竜王の配置なのですが…」

「ああ、それなら城の城空にだね…」

とか、考えている間に協力者のジョゼフ派の人達に、戦力配置に関して色々聞かれ

考えを一旦打ち切った後、そっちの対応に頭を切り替えた。

(こつというのはジョゼフが一番上手いんだけど…)

首都や各地の沈静と、久々の政治活動で忙しいらしいしね…)

*

一通りの指示を出し終えた後、城内の奥に位置するタバサの寝室へと赴く。

当然扉には強力なロックスペルがかかっている

入り口の前には3体のグランベヒーモス、窓には数体のアーリマンが飛び交って警戒している。

部屋の扉のロックスペルを、特別なマジックアイテムで解除して開く。

丁度、タバサは目を覚ましたところのようで、すぐに俺の姿を捉える。

「お目覚めかな？」

冷め切った感情で声をかける。もうタバサには何か特別な感情は何も感じはしない。

「ここは…」

「サハラとの国境に位置するアーハンブラ城だ」

囚われの身でありながら相変わらずの冷静な口調での切り出しに俺は機械的な口調で淡々と答えるだけだ。

「母さまは…」

「隣の部屋。会いたきゃ勝手にしてくれ」

それを言った瞬間にタバサは駆け出す。彼女の原動力の一つとなっていたのが母親の治療なのだ。

もともと…復讐で視野が狭まって自分でそのチャンスを不意にしたばかりだけだ。

俺はその後をゆっくりと追い、ベッドで深い眠りにしているオルレアン夫人に寄り添うタバサを見る。

次いで、タバサはこちらへと振り向いて憎々しげな視線を向けてくる。

「私達をどうするつもり？」

「シャルル派を誘き寄せさせるエサにする、それでこっちの戦力で一斉掃討する」

「！……！」

「今更驚く必要あるか？クーデターなんて起こした以上無事では済まないのは明白なんだよ

俺は陛下にお前らの監視と戦力の集結を任せられてるんだ」

驚くタバサに対しても、やはり俺は淡々と説明を続けるのみ。

「というかエサに使うと言っても、何か肉体的なダメージを与えるつもりとか無いし。」

「今となつてはさっさとシャルル派を消したいという気持ちでいっばいなのだ。」

タバサとオルレアン夫人の処遇は二の次といった感じだ。

まあ、それでも尚抵抗するというなら仕方ないけど消えてもらうしかないが。

「お前があそこで首を横に振った結果がこれなんだよ。恨むなら自分の判断ミスを恨みな」

「……母さまをどうするの……」

観念したように力が抜けるタバサであるが、小さくポツリ呟く。

やはりまだ母親の事があきらめきれないのだろう。

「知らないな。陛下からはエサにしろという事と殺すなという事しか言われてない

まあ、俺自身は拷問とか尋問をする気は更々無いけど……」

「私の使い魔は……」

「そつちも知らないよ。殺してはいないからどっかに逃げたんじゃないの？」

「……」

「ああ、それこそ逃げようなんて考えるなよ？外にはシャルル派掃討用の大量の戦力が蠢いている

大切な母親の無事を願うなら大人しくここにいるんだな」

抵抗する意志がもう欠片も感じられないタバサであるが

俺にしてみれば関係ない。伝えることだけ伝えてさっさと戦力増強の続きをしたい。

実際、オルレアン夫人は、同情を感じるくらいやつれていたがそれに関しての処遇はまだ全然わからないのが現状なのだ。今はとにかくこの動乱を上手く鎮めるのが最優先なのだから。

まあ、これだけやってタバサと夫人が動乱後に無事でいられるかはかなり微妙だけど。

「じゃあな。不幸だとは思うけどこれが現実だよ」

出際にもう一言だけ呟いてタバサの部屋を後にする。一々こんな事言う必要ないかもしれないが

やはりタバサに対する感情もマイナス方向に傾いてるんだろうか？
まあどうでもいいけど。

決戦の日は近い。こちらの圧勝は鉄板だろうけど油断大敵。
目の前に迫っているその日に向けて今はただ集中するのみ。

第28話：味方の時のセフィロスもビックリなワンサイドゲームです（前書き）

確かにサイト再召喚は重要な問題ですね…

でもその話までどう持っていていつて解決するか…

アルビオン編やマチルダ、テファ回収イベントも控えてるし…

イザベラやジョゼットもどう扱うか先が見えない…

というかジョゼットは出番自体が見えない…

第28話：味方の時のセフィロスもビックリなワンサイドゲームです

屋敷で品物整理をしている際、唐突にその報告は舞い込んできた。

「サン・ロマンから艦隊が？」

『はい、陛下が配置なさった騎士隊を全滅させた上

無断で何隻もの戦艦を無断で発進させているとの情報が…』

「…十中八九シャルル派の連中でしょうね」

『でしょうな、その他にも各地域から不審なメイジの一団がサハラの方角へ進行しているとあります』

「いかがいたしましたしょう？」

「各配置に通達して下さい。武器を持たぬ市民達の防衛が最優先だと絶対に市街地を戦場にはいけない。全ての決着はアーハンブラ城でつける」

上手い具合に連中を誘導。詳しい事は陛下の指示に従うように」

『わかりました』

やり取りはそこで途絶える。とうとう来たか…と気が引き締まる思いになる。

筋書き通りで怖いくらいだが、敵が正面から来てくれるなら非常に都合が良い。

戦力はほぼ完璧に整えてある。向かってきた連中を全て返り討ちにしてやる。

「しっかし便利だよなそれ」

「ああ…そういう原理で動いてるんだらうな？」

そんな事を考えている矢先、ソファの隣に立っていたサイトが話しかけてくる。

因みに、今さっきまで俺が話しかけていた相手は、机の上の鉢に納まっている草だ。

ただの草と思うなかれ、これは「ひそひそつ」と呼ばれるFFのアイテム。

簡単に言ってしまうえば電波無制限の通信機というやつである。

どんなに距離が離れていても相手と連絡が取り合えるかなりの貴重品なのだ。

情報伝達手段に疎いハルケギニアにおいては、これ以上ないくらいに役に立つ。

でも本当に原理はどうなってるのか？見た目ただの雑草なのにな…

「じゃあまあ…いよいよってわけだ、行こうかサイト？」

「ああ…」

サイトも普段のお調子者な面はなりを潜め、非常に真面目な表情を浮かべている。

原作でも知っての通り、やる時はやるナイスガイなのだ。

「守りの指輪とリフレクトリング…あとリボンも持っていくか？」

「俺は英雄の盾も一応…後、魔石とマテリアもそれなりに…」

倉庫から引っ張り出してきたFFアイテムを出来る限り無駄なく引っ張り出してくる。

警戒は最大限にしておく。現地で召喚していたのでは、召喚のリスクで余計な体力を使う。

だったら最初から保管しておいた物を持っていった方がいいのは当たり前前だ。

そして一所の装備を整え、俺とサイトが銀竜に跨ろうとしたところで「サイトさん！」

背後から呼び止める声が聞こえ、そちらに振り向くと、そこにはシエスタとリアが立っていた。

シエスタは心配そうな表情をしており、目にはうっすらと涙も浮か

んでいる。

…世の男性諸君にはこれ以上ないくらいのシチュエーションかもしれないよね。

こんな顔で心配された男は一撃KOだよ。何よりシエスタは純粹に可愛いし。

派手派手しく着飾った貴族の令嬢なんざとは比べるのも失礼な程の、自然美を持っているのだから。

サイトはそんなシエスタを見て彼女に近寄り、そつと体を抱きしめて囁く。

「心配するなよシエスタ、トオルが今日の日の為に万全に整えてくれたからさ」

必ずすぐに終わらせて帰ってくるよ」

「はい…信じてますサイトさん」

男らしく笑ってみせるサイトに対し、シエスタもつられてはにかむ様な微笑みを見せる。

甘い甘い甘い…何て幸せなシチュエーションなんでしょうが。

これから戦場に行くというのに、眼福物な光景をありがとうな気分だ。

さて、俺の方はというと一緒にいたリアの方へと歩み寄る。

「じゃあリア、屋敷のモンスターがいるから問題ないとは思っけど

…気をつけてるよ？」

「ええ、パパつと終わらせて早く帰ってきてくださいねサイガー様？」

「…シエスタに比べて随分ドライじゃないか？」

「だってサイガー様やおじ様が負けるなんて少しも思っけませんしおすまし顔であっけらかーんと答えるリアに、ちよつとズッコケてしまうような心境になる。」

信頼の証と言えば嬉しいのだが…もう少し気の利いた言葉は言えないのか？

まあ自分より大きく年の離れた少女にそんな事を期待する方が危な

いのかもしれないが…

リアも完全に順応したという事でもあるんだろっな…

「まあ確かにそうではあるけどな…じゃあ言うとおりのパッと片付けてこようか？」

「はい！頑張ってくださいねサイガー様！」

リアの言葉がおかしくて、つい俺は笑顔を浮かべてしまう。

それを見てリアも、楽しそうに笑みを浮かべて言葉を返してきた。

*

銀竜にヘイストを唱え、猛スピードでぶっ飛ばし、アーハンブラ城へと到着する。

城の周辺では俺の召喚したデスライダー、ミスリルゴーレム、銀竜、アーリマン

無人機動兵器であるマシンヘッドやブラックウィドー、

更にはジヨゼフのお気に入りでもあるバハムートやティアマト、

その他諸々の戦力が所狭しと配置されており、皆が皆臨戦態勢を取っている。

寧ろこの戦場に人間の兵士はそれ程多くは存在していない。

此度の戦力は俺の召喚したモンスターが7割以上を占めている。

まあ一体一体がえげつないくらいのおバーキルであるし、

俺とジヨゼフが発端となった反乱に、余計な第三者を巻き込むのは望ましくなかったからだ。

城の入り口付近で銀竜を着地させると、近くにいた何人かの兵が俺とサイトに敬礼してくる。

そんな偉い人間ではないのだけどなあ…どうにもこういうのはむず痒い気分になる。

とりあえずやんわり手を挙げて返礼した後に城内へと入っていく。

城内を警護する鉄巨人やベヒーモスを見渡しながら、城の一番高い場所に位置する大広間へと足を運ぶ。

「只今到着しました、マスター」

「来たかトオルよ」

城の窓際でソファに座りながら、ジョゼフが返答してくる。

いつもの愉快的な態度は完全に失せており、無能王などとは到底呼べない王としてのオーラを放っている。

普段見ないジョゼフの雰囲気緊張したのか、隣にいたサイトもゴクリと唾を飲み込んでいた。

「状況はどうなっていますか？」

「サン・ロマンから発進した艦隊がすぐ近くを進軍中だ

といつても、お前が配置した銀竜の攻撃によって既に大多数が損傷を受けてるだろうがな

こっちの本丸に来る頃にはズタボロになっているだろうよ」

「そうですか…ではあまり苦勞する必要は無いと？」

「ああ…といつても俺は一切の情けはかけぬがな。こっちに辿り着いた連中は全て消すだけだ」

冷酷な口調でジョゼフが吐き捨てる。何というか怖い…こんなキャラだったっけ？

「ちょ…ジョゼフさん、もう少し穏便にいった方が…」

「サイトよ、お前の言いたい事は大体わかる。つい最近まではただの平民だったのであるう？だがな…」

するとジヨゼフがこちらに歩み寄り、そのダンディーな顔をズイトサイトに近づける。

「これは国の為でもあるのだ、厳しいことを言うようだがここで連中の罪を見過ごせば

そのとばっちりは国民に返ってくる可能性もあるのだ。だから俺は容赦しないのだよ

トオルを召喚した事によって俺は変わったのだからな、それによって民の大切さもある程度わかってきた

だから国や民の平穩を脅かすクスどもを生かす理由などありはしない」

「は、はい…」

完全に圧倒されてしまい、引き気味にサイトは返事をする。

…本当にジヨゼフってこんなキャラだったか？見てるこつちもハラハラしてしまうよ…

やっぱり相当にご立腹なんだろうな…さっさと片付けてまた平穩な日常に戻したい…

「そうだとオルよ、もう一つだけ話がある」

すると、唐突にジヨゼフは話題を切り替えてきた。

「連中とは関係ない客人が無謀にもここに来てな…しきりにお前に会いたがっていた」

「客人？」

「ああ、ここから少し離れた上空を飛んでいるのをお前の銀竜が捕らえてきてな

俺としてはさっさと始末しても良かったのだが、どうしてもお前に一度会わせると五月蠅くてな

今はシャルロットの部屋にいる。暇があれば会っておいてくれぬか？処理はお前に任せる」

「はあ…わかりました」

こんな時期にアーハンブラ城まで会いに来るようなキャラっていたか？
しかもジョゼフの口振りから考えれば、言葉通りの意味では無いだろうし…まさか…

*

「しっかし驚いたなあ…あのジョゼフさんがあんな顔するなんてさ」
「ま、仮にも大国の国王を勤めてるから…あっちがマスターの真の姿なんだと思うよ」

部屋を後にした俺とサイトは再び廊下をテクテクと歩いている。
サイトはさっきのジョゼフの姿によほど驚かされたようで、ちょっと疲れた感じに言葉を発していた。

「あ…そついや客人とか言ってたっけか…サイト、ちょっと先行っててくれるか？」

「ああ、わかった」

ジョゼフの言葉を思い出し、一旦サイトと別れてタバサの部屋へと向かう。

話の客人というのには、実はある程度の目星がついてたりする…

部屋のロックスペルを再び専用のマジックアイテムで解除し、扉を開ける。

「あつ…！アンタは…！」

「きゅいー！」

「…やつぱりか」

ここまで予想通りすぎると余計な疲れを感じてしまうよ。

オルレアン夫人に寄りかかるようにして眠っているタバサの側にいたのは

彼女の使い魔で、今は人間の姿を取っているシルフィードと

そして燃えるような赤毛と褐色の肌が特徴的な…うん、キュルケである。

シャルル派に関係が無いタバサと縁のある人物、と言えば彼女くらいなものである。

「何でお前がここにいるんだミス・ツエルプストー？あとそれとよく生きていたなシルフィード？」

とはいえ思うことなど特に無い。彼女もタバサと同様で俺の中の優先順位は低い相手だ・

それより何よりシルフィードがここにいる事の方が驚きなんですけど。

HP1にしてやったんよ？現実観点で言えば死の淵って奴よ？

それなのにシルフィード（人型）は体にある程度包帯を巻いているとはいえ

意外とピンピンしているのだ。韻竜の生命力ってやつを侮っていたかもな…

「こ…この…お姉さまをどうしたのね！この悪魔…！」

「悪魔とはまた随分だな…」

俺の姿を見るなりシルフィードが怒鳴り散らしてくる。狭い部屋で喚かないでほしいな。

「別に何も、俺は陛下の指示に従ったまでだ」

マニユアル的な対応でシルフィードの言葉を受け流し

次いで俺はキュルケの方へと目を向ける。本当に何で1人でこんな場所に？

いやまあ、気持ちはよくわかるんだけどね…

「それよりミス・ツエルプストー、ここに来た目的は何なのさ？

というより俺に会いたがっていたっていうのにも合点がいかないんだけど」

「目的も何も無いわよ…親友が困ってたら助けに行くのが当然でしょう？」

「なるほど」

「しかも捕らえたのがあなただったって言うし…それを伝えに来たシルフィードはズタボロだったし…

何が起きているのか気が気じゃなかったわ…」

「ふーん」

「拳句にあの娘が幽閉されてる場所に近づいてみれば

あなたが使ってた竜の大群に襲われて私達まで捕まる始末…もう滅茶苦茶よ…」

「それは大変だったね」

「……アンタ頭寝てるんじゃないの!？」

適当に返答しすぎたのか、キュルケは突然金切り声を上げ始める。

「こうまでなってもあなたはあの恐ろしい顔した王様とやらに付き従うの!？」

実の母親の近くで心を痛めてるあの娘を見て何も思わないわけ!？」

感情を爆発させて、キュルケは言いたい事を一辺に吐き捨てていく。

親友のピンチが眼前に迫っていて、冷静な感情を保てないようである。

気持ちはよくわかる。俺も同じようにサイトやリアが危機に陥っていたら慌てるだろうし。

でも…やっぱり俺に助けを求めてくるのはお門違いな話なんだよな。

「…その恐ろしい顔した王様でもな、俺にとっては従うべき人物なんだよ

大体俺とタバサには同じ北花壇騎士の一員であるくらいしか接点が無い

どっちを優先するかなんて言うまでも無いんだ。

ツエルプストー、お前がタバサを大切に思うように俺も陛下に好感を抱いている。

結局は立場の違いだ。自分の価値観を他人に押し付けるなよ。俺にはただの迷惑でしかない」

「ッ…！けどあの娘は利用されるだけ利用されて拳句こんな目に遭ってるのよ…！」

「可哀想だとは俺も思うよ。けど、悪いが俺にも生活がある命を賭してまで他人を助けるような聖人君子でもないしな」

悔しげにひしひしと呟くキュルケに対し、あくまでも俺はドライに対応する。

ここまで思ってくれる友人がいるなんてタバサも幸せ者である。

勝手に幻想を抱いて暴走した支持者なんかより、よほどタバサを理解しているよな…

『ミスタ・サイガー、敵の主力艦隊が銀竜の警備を振り切ってこちらに…』

と、そんな場面でポケットに携帯していたひそひそうから連絡が入る。

すぐに俺はポケットから引っ張り出し、相手に対応する。

「迎撃の準備を、目に入ったシャルル派の艦隊は全て消すつもりでお願いします」

『はっ！』

簡潔に答えてすぐに通信を切る。敵が来たのならこんな場所でお喋りしてる時間は無い。

キュルケとの会話を打ち切って、すぐに扉の方へと歩いていく。

「…これからあなたはこうするのよ」

と、出際にキュルケが背中越しに問いかけてくるが、俺は振り向かずに答える。

「誘き寄せた艦隊が来た。それを殲滅しに行く」

「…あんな凄い力を振るう事に抵抗は無いの？」

「無いな、ましてや俺の命を狙ってきた連中に対する躊躇いなんざ余計に無いよ」

銀竜とやりあってこっちの戦力がある程度わかっているからこそその質問なのかもしれないが。

自分で答えたとおり、今回の俺は手を抜くつもりなど無い。

「わかったわ…シルフィードの言う様にあなたって本当に悪魔かもね」

「そりゃどうも」

キュルケの皮肉ものらりくらりとかわし、扉を閉めてその場を後にする。

使ったマジックアイテムをしまつと、自動的に扉にロックスペルがかかる。

処理は任せるとジョゼフに言われていたが、敵が来てるこの状況で考えてる暇など無い。

リアも言っていたが、万全の状態で戦闘を始めて、とっとと終わらせたいものだ。

逃げようとすれば廊下のグランベヒーモスか、窓のすぐ外にいるアーリマンにやられるだけだしな。

城の正面口へと移動する。既にサイトとジョゼフ、その他数名の兵が集まっていた。

そしてしばらくすると、遠くの空に黒い点がいくつも現れる。

「あれだな……」

ポツリと呟く。肉眼に映るくらい艦隊がはっきりした形になってきたが

ジョゼフの言ったように銀竜の攻撃によって、艦隊は報告の数より少なくなっていた。

それでもまだそれなりの数が残っているのは流石と言うべきか。

人口約1500万人の内、シャルル派の支持者が何人いたかはわからないが

国内外全ての戦力を結集した結果、銀竜程度なら潜り抜けられるだけの数が揃っていたということか。

だが逆に都合がいい。アーハンブラ城周辺には銀竜以外の化け物がズラリという。

ここまで到達した事の方が逆に不幸に思えてしまつかもな。

「無能王ジョゼフに告げる！」

すると、魔法で拡散された音声か、突如として響き渡ってきた。

「自らの弟君であり、真の後継者たるシャルル様をその手につけて

玉座でぬくぬくと自らの欲望を満たすばかりの貴様を我らは決して許さない！！

拳句、このような辺境の地にシャルロット様を幽閉するなど、その蛮行は最早見過ごせぬ！

貴様が用意した自慢の竜の群れも潜り抜けてきた我らの戦力に勝ち目は無い！

即刻シャルロット様を解放し、王の座を明け渡すのだ！！」

……無茶苦茶言ってやがるな、その自信はどこから来るのかと小一

時間問い詰めた。

あーもう何か凄いイライラしてきた。この妄想バカどもが。

「何だよ、あいつ等好き勝手言いやがって!!」

隣にいるサイトも実物を目にして、流石に怒りを隠せない様子だ。

ジョゼフの方はと言うと、仏頂面のまま微動だにしない。

この程度の事では怒ったりしないようだ。流石は大人である。

「トオルよ……」

「はい、では行きましょうか」

ジョゼフに話しかけられ、軽く返事をしておく。

そしてジョゼフは特に何かを言うわけでもなく。スツと手を挙げて

一言だけ口にした。

「攻撃開始だ」

……それを皮切りに一斉にモンスター達が動き始める。地獄の始まりというわけだ。

上空に待機していた銀竜の大隊が空を真っ白に埋め尽くしていく。

三桁を軽く超える銀竜の群れが、敵の艦隊から出撃してきた竜騎士達に容赦なくツイスターを放つ。

それで大半の敵は風の刃に飲み込まれ、墜落していくのだが中には上手く避けて、銀竜に対して反撃をする猛者もいるようだった。

地上に降りた敵戦力はと言うと、ある意味空よりも酷い目に遭っていた。

「……………ピピッ」

「……………うわああああ!!」

地上から攻めてくる敵を確認するや否や、マシンヘッドが目標をサ―チし

敵に向かって容赦なく波動砲を連射しまくるのだ。

しかもマシンヘッドは城周辺に何十体と配置してある上に

トライアングル程度の魔法ではその強固な装甲にまともなダメージが与えられない。

一方的に相手はやられるばかりで、地上は波動砲の雨霞で一種の地獄絵図になっていた。

更にはその背後からガチャンガチャンと音を鳴らして黒い蜘蛛形のメカが現れる。

正式名X - A T M 0 9 2、通称ブラックウイードと呼ばれるその兵器は

メイン装甲にあたる所から黄色の閃光、レイ・ボムを放って地上をなぎ払う。

次の瞬間に敵の立っていた地面が爆発し、黒い蜘蛛はマシンヘッドを引き連れて更に進撃する。

銀竜の猛攻を掻い潜って、やっとの思いで城の近くに来る相手も数人いるみたいだが

それを発見した周辺警戒用のデスライダーが瞬時に馬を走らせて突撃し

近づいてきたメイジ達を一突きで絶命させる。

運良く攻撃を免れた相手も、デスライダーと一緒にいるミスリルゴ―レムに攻撃を阻まれ

次の瞬間にはその頑丈な巨体でプチッだ。
しかもデスライダーには相手の体力を吸収する能力が備わっている
ので
生半可なダメージはすぐに回復される。何だろっねこのトンデモな
無理ゲーは。

もつと不幸なのは城の西側の入り口に行ってしまった敵さんだろう。
あそこの入り口を守護するいにしえのテツキョジン…
リメイク版FF?の裏ボスであり、巨体に似合わぬ素早い動きを見
せる。

ゲームでは一度に4回も行動するような一種のキチガイで、破壊力
も抜群だ。

「…あつ、メテオ使いやがったなテツキョジン…」

ポケーッと戦場を眺めてる間に、城の西側から轟音が響き、赤黒い
光が広がる。

もつとも、テツキョジンが一番怖いのはメテオよりブレードのなぎ
払いだったりするのだが…

万全の準備をしてきた結果がこれなのだが、もうマジで圧倒的過ぎ
る。

城の中に配備したベヒーモスと鉄巨人はいらなかったのでは?と思
うくらい。

でもしつこいようだが油断は禁物。敵を完全に滅するまで戦いを終
わらす気は無い。

これ以上余計な不確定要素を残さない為にも、確実に叩き潰す。

「さて…サイト…おいサイト！行くぞ！」

「へっ…あ、ああ！わかった…」

サイトもこの一方的なワンサイドゲームに啞然としていたようで、

暫く反応が返ってこなかった。

俺と違って、あまりこういう実戦に出たことないだけ無理も無いが…でも取り乱したりしないだけ気丈なものである。原作でのフーケやワルドのイベントや

竜の首コロシウムでのモンスターとの戦いが甲を成したという感じが。

「リジエネ…プロテス…ヘイスト…シエル…ブリンク…レイズ…」
ありったけの補助魔法を唱えて、銀竜の一体にサイトと共に乗り込む。

「行け」

俺の指示に銀竜が大きく咆哮し、矢のように一直線に敵の艦隊へと突っ込んでいく。

艦隊は銀竜の力で殆どが壊滅していたが、中には攻めあぐねている物もある。

その乱戦の中を掻い潜り、俺とサイトは敵の旗艦を目指す。

中には俺らの姿を見かけて魔法を放ってくる者もいたが
装備しているリフレクトリングによるオートのリフレク効果を発揮していたので

敵の魔法は問答無用で放った本人に全部跳ね返っていく。

中には魔法を使わず突っ込んでくる者もいたが、ブリンクの効果もあり、あっさりと回避できた。

「あれだな」

しばらくして、一際大きい戦艦が自分の視界に映ってくる。

「行かせん！」

「無能王に手を貸す愚者どもが！！」

が、そうはさせじと敵の竜騎士達が一齐にこちらへと向かってくる。俺が魔法で殲滅しようとして手を伸ばすが

「グラビガ！！」

その前に、後ろでサイトが魔法を発動する。圧倒的な重力の塊が敵を飲み込み、殲滅する。

「助かったよサイト」

「気にすんなトオル…あいつら自分から攻めてきておいて…！」

礼を言う俺にはあまり反応せず、サイトは敵への怒りを露にしていた。

俺から話を聞いてたのもあり、シャルル派の行動はただの身勝手にしか見えないのだろう。

銀竜から飛び降りて旗艦の甲板へと着地し、サイト共に前へと突き進む。

「む、迎え撃…」

「うおりゃああああ！！」

「ぎゃああああああ！！」

通路で何人もの兵と出くわすが、次の瞬間には全てサイトが一太刀で撃退していた。

「ファイガ」

サイトが取りこぼした分は、後ろにいる俺が燃やしていく。

「くそっ…引けえ！司令の守りを固めろ！！」

敵の1人が大慌てで叫び、残った兵を後退させていく。

「トオル！」

「ああ…敵の大將は近いな…頭を討ってさっさと降参させるぞ」
「わかった！」

俺の言葉にサイトは駆け出し、その後には俺が続いていく。

通路の突き当たりにある、グズグズの扉を蹴破り、中へと進入する。

「引つかかったなバカめが！」

すると入った瞬間、下品な声が聞こえると同時に

「ファイヤーボール！！」

「エアハンマー！！」

「ウインディアイシクル！！」

「ライトニングクラウド！！」

待っていたのは俺達を取り囲むメイジの一団と魔法の洗礼。だけど…

「な、なにっ…」

「ぐおああああ！！」

…放たれた魔法はリフレクトリングの効果でまとめて跳ね返って敵に直撃する。

「…バカはお前らだ」

呆れ返った表情で呟いてしまう。ハルケギニアの常識で考えたら無茶な話なんだが…

「ま、魔法が跳ね返るだ…き、貴様何をした！」

その常識外れの光景に敵司令はぶるぶる震えながらも、杖を構えて必死に抵抗している。

が、そんな腰の抜けた姿では何の恐怖も感じない。

「敵の司令はアンタだろ？さっさと大人しく降伏してお縄についでくれ

状況を見ればわかるだろう、アンタらの勝ち目はもう万に一つも有り得ない」

「だ、黙れ無能王の犬が！シャルロット様を苦しめる重罪人め！！」
圧倒的不利な状況だと言うのに、そんな戯言を司令は口走る。

そーかそーかご苦労様だよ。そのシャルロット様が望みもしない事ばかりして

余計に足を引つ張つてると気づけないアホが。こういう宗教臭いのつて本当に反吐が出る。

「何言つてんだよ！艦隊を奪ってここまで来たのもトオルに勝手な脅迫してきたのも全部アンタらのした事だろう！それを自分達の行動は棚に上げて、全部相手に押し付けてんじゃねえよ！」

相手が悪者なら何したっていいっていうのかよ！」
後ろにいたサイトが感情に任せて声を張り上げる。

すると、司令はいきなり高笑いをして小馬鹿にしたような口調で言い始める。

「ハハハ！何も知らない平民風情が生意気を言うてないわ！！我々の行っている事は全て、無能王から王座を奪還する為の正しき行為なのだ

その上でシャルロット様を王座に据え、亡きシャルル様のご意志を継ぐ！」

それこそが無能王の支配から民を解放し、そして幸せにする為の唯一の方法なのだからな！！」

「デメエ！！」

…司令、完全に死亡フラグをおつ立ててしまいました。
相手が平民だという事に油断して言いたい放題になってしまっている。

ハルケギニアの三流悪党の典型的な敗北パターンだよな。

「平民がメイジに敵うと」おらあああ！！」「ぐへっ…」

キレたサイトの一撃を喰らって、一発で伸びてしまった艦隊司令。ある意味哀れすぎる。

同情するつもりは全く無いけど。

「あー本当にムカつくよなこつこつという輩は、さて…」
伸びている司令を抱えて、敵旗艦から脱出する。

上空に待機していた銀竜を呼び寄せ、高い位置へと飛び上がる。

「あー皆さん見えますか？司令さんは見ての通りです、さっさと降伏しろ」

イライラがいい具合に募ってきていたので口調もついつきらぼうになる。

敵の集団に見える位置で、伸びている司令を見せびらかす。

「し、司令！！」

敵の残りは一瞬動揺を見せるも。

「よくも！」

別の敵が司令が側にいるにも関わらず魔法を放ってくる。

当然リフレクトリングの効果で見事に反射してお陀仏なのだが。

するとそれで後に引けなくなったのか、残った敵が一斉にこっちに襲い掛かってきた。

「何だよアイツら！味方がいるのにお構いなしかよ！！」

「だな…救いよつの無いバカどもだ」

サイトの言葉に同意を示し、俺はひつとらえて来た敵司令を別の銀竜に任せる。

その後を追おうとする敵集団だが、すぐに別の銀竜が割り込んできて邪魔をする。

俺はというと、元から容赦するつもりは無かったが、この流れで完全に吹っ切れてしまった。

懐から魔石を一つ取り出して、召喚を行う。

「セイレーン、ルナティックボイス」

魔石から眩い光が放たれ、ハーブを携えた見る者を魅了する、美しい女性が現れる。

セイレーンはその歌声を戦場に一気に拡散させていく。

「!!!!!!……!!!!!!」

「~~~~~!!!!!!」

それを聞いた、もう殆ど残っていない敵兵全てが、口を押さえて慌て始める。

ルナティックボイスは敵全てに沈黙効果を与える召喚魔法だ。

口を開けない以上、魔法が全てのハルケギニアの人間から魔法を奪い取った結果となり

これで勝敗はもう完全に決まったようなものなのだが、これで済ませる程甘くは無い。

「マスター、仕上げ頼みます」

ポケットから取り出したひそひそくに話しかける。

それから数秒もしない内に二つの巨大な影がこちらに突っ込んでくる。

「さて、離れるぞサイト」

「ああ……」

敵を討ち取ったサイトには、不快感しか感じていないようだった。

まあしょうがないか、俺も敵を倒してスッキリ、みたいな気持ちは少ないし。

そして近づいてくる二つの巨大な影、バハムートとティアマトの背後へと移動する。

「ご苦労であったなトオルよ!」

「ありがとうございます…ではマスター、お願いします」

バハムートの上に乗っかっているジョゼフは、いつもの笑みを浮かべていた。

そしてすぐに敵の残党の方へと振り向き、そして呟く。

「消える、我らの楽しみを脅かすクズどもが」

バハムートの口に神々しい白い光が、ティアマトの口に禍々しい黒い光が収束していく。

その圧倒的な姿に残ったシャルル派貴族が啞然とした瞬間
二体の巨竜に収束されたエネルギーが、敵に向かって解き放たれた。
メガフレアとダークフレア…二つの巨大な力が敵艦隊を旗艦含めて
破壊していった。

アーハンブラ城決戦。ガリア国内が一つに纏まる最大のきっかけと
呼ばれる戦いは
ジヨゼフ側の圧倒的な戦力の前に、シャルル派が完全敗北する形で
幕を閉じたのであったとき。

第28話：味方の時のセフィロスもビックリなワンサイドゲームです（後書き）

次の話で戦いの事後処理やタバサ、キュルケの待遇を決めて

その後アルビオン戦介入、テファ回収編に突入という感じですかね。

ただ好調だった執筆スピードも、そろそろ危ういかもしれない…

第29話・考えてみたら本当にアルビオンはどっなっているのだから？。(前書き)

作者ちよっぴり迷走気味かも…

ジョゼフってこんな感じだったかな…

第29話：考えてみたら本当にアルピオンはどうなっているのだろうか？

「幻想を捨てて、支配を受け入れるべきだったという事ですかね…」

「ほう？トオルよ、俺は幻想伝の二章『帝国への抵抗』に出てくるパラメキア皇帝のように欲深い男だということか？」

「そこまでは言いません、けどあの日現れたシャルル派の連中が根拠の無い幻想を抱いていたのは確かなことでしょう…」

「クク：全く以ってその通りだな！」

アーハンブラ城通路、全てが終わって静まり返ったその通路を俺とジヨゼフが並んで歩いていった。

原作ではある意味こうていを上回るぶっ飛んだ人だったけど。そんな風を感じるトオル・シュヴァリエ・ド・サイガーです。

動乱の結果は前回説明した通り、FF世界の圧倒的な力によって、王軍側の完全勝利で終結した。

ジヨゼフはその後すぐに王宮へと戻り、俺とサイトが捕らえた敵司令を尋問。

戦闘に参加していなかった、行方の掴めていないシャルル派の居場所を洗い浚い吐かせた。

それにより残っていたシャルル派も捕縛。シャルル派という派閥は

完全に崩壊した事になる。

国内に残っていたシャルル派の家族は領地の縮小や完全没収。

司令の家族など動乱に深く関わっていた者や、家族も根深いシャルル支持者だった場合

国外追放や爵位の取り上げ、場合によっては処刑などの厳しい罰も科されたという話だ。

俺の方はというと、アーハンブラ城とその周辺に配置した戦力の後始末が主な仕事だった。

生憎ガリア国内の領土は広く、FFモンスターを保管する土地はいくらでもあったのだが、

一度集結したものを、また散らばらせていくというのは少し手間がかかった。

自分で呼び寄せた力は自分で責任を持つのが当たり前だから苦は感じなかったが。

また、此度の戦いでサイトにはシュヴァリエの称号が授与されることとなり、

原作同様に名前を「サイト・シュヴァリエ・ド・ヒラガ」と改める事になった。

貴族を毛嫌いしているサイトとしては、初めはこの褒章に難色を示していたのだが

サイトの勇猛果敢振りを目の当たりにしたジョゼフが、サイトをますます気に入っていたし

俺の時と同様、自分と上手く付き合う為の、周りに対する盾程度に考えておけという説明で

サイトはシュヴァリエの称号を受ける事を了承したのである。

因みに俺に対しては男爵への格上げも提案されたが、そっちの方はお断りしておいた。

あくまで俺は王と親交のある一商人のメイジ、ゴールドソーサーのオーナーであり

自己満足を満たすために、のんびりやるには余計な地位はいらない

と考えてるしね。

(とはいえ今回の戦いの噂で、また名が広がってしまいそうではあるのだが)

後は、シャルル派貴族の没落により、王宮内では政変が進んでいるらしい。

国王ジョゼフを中心とした、新たな国の基盤が誕生するのも間近である。

この動乱と政変が他国の耳にも及ぶのはそう遠い話ではなく

果たしてトリステイン、ゲルマニア、アルビオン、ロマリアの四国がどのようなアプローチを仕掛けてくるかが気になるところである。

まあロマリア以外は戦争真っ只中だし、それどころではないかもしれないけど。

その戦争も、以前ゴールドソーサーでのジョゼフとの取り決めで、俺らが終わらす事になるんだが…

で、一所ジョゼフの仕事が落ち着いたところで、今日は最後の問題を解決する為に

こうしてジョゼフと共にアーハンブラ城へと足を運んでいるというわけである。

扉の前で眠そうに欠伸を上げる、妙に眠そうなグランベヒーモスを一瞥した後

いつものように扉のロックスペルを解除して、ジョゼフと共に部屋へと入る。

「直に会うのは久方ぶりということかシャルロットよ！」

「!!」

「きゅい!!」

部屋に入るなり、気さくにそんな事を言うジョゼフ。相変わらず母親につきっきりなタバサは、ジョゼフの姿を見てすぐに表情を一変させる。

隣にいたシルフィード（人型）も同様であったが、何故かキュルケだけは妙に怯えている感じだった。

昨日の一方的なワンサイドゲームを間近で見ていた結果なのだろう。自分が無謀であったという事を思い知らされてしまったんだろうな。コイツには勝てないと。

「タ、タバサ……」

「……………」

数日前の強気な態度はどこへやら、怯えきった表情でキュルケは親友へと声をかける。

しかしタバサは動じておらず、復讐心ありありの視線でジョゼフを睨みつける。

本当に気丈なものである……ここまで自分の意志を貫ける人間はそうはいない。

「お前がお姉さまをつっ!!」

と、いきなりシルフィードがジョゼフに飛び掛ってきた、何してんですか？

「エアロラ」

「きゅい!!」

キュルケもいる手前、俺は懐からダミー杖を取り出して手頃な魔法を放つ。

エアロガには劣る中規模な風の塊がシルフィードに直撃し、部屋の隅へと吹き飛ばす。

「よせ、トオル」

「……申し訳ありませんマスター」

ジョゼフに制されて杖をしまう。まさかジョゼフがあれくらいの攻

撃を受けるとは

微塵も思っていないかったけど、まあ念の為というやつである。

「口元が母に似ているな…それとその意志のこもった瞳…昔のシャルルを見ているようだ」

「……………」

ジョゼフはまるで親しい関係の人物と話すかのような口調でタバサに話しかける。

当然タバサは何も答えない。側にいるキュルケはハラハラしているように

ベッドでは夫人が眠っており、シルフィードは端っこで伸びている。そんな光景を俺は眺めている。

「悲しいことだなシャルロットよ！お前が素直に従っておけばまだここまでの悲劇を起こさずに済んだかもしれぬのになあ？」

「ッ……………」

「憎いか？お前の父を殺し、母に毒を盛り、お前の人生を狂わせたこの俺が憎いか？」

そうだろうな！一時はお前に殺されることで、あの日の後悔を拭きうとも考えていた！！」

ジョゼフはタバサに対し、まるで原作の時の真意の見えない楽しいげな口調で話していく。

側にいる俺は黙って話を聞いているのみ。この件の裁定は全てマスタ―たるジョゼフが決める事。

「だがそれも過ぎた話だ。今の俺には最高の仲間パートナーがいるからなあ…その事に比べれば、俺が今までしてきた事など全て些細なことよ」

「……………何の為にここに来たの？私と母さまをどうするつもり…！」
表情が益々強張っていき、怨念でもこもっているかのような声でタバサは尋ねる。

そんなタバサのプレッシャーもジョゼフは何のそので、飄々とした態度で続けていく。

「んー、そうだな……妥当な線で行けば当然お前と母は処刑されるこ

とになるう

まあ、俺の本音で言えば今更お前をどうしようと思ったところではなかったのだが…」

すると、ジヨゼフはそこまで言っつつかつかとタバサの方へ近づいていく。

「がッ！！」

「タバサ！！」

「ちよっ…マスター！！」

予想外の事態に俺も声を張り上げる。ジヨゼフがいきなりタバサを殴りつけたのだ。

タバサは床へと倒れ、顔面蒼白になったキュルケが彼女の体を起こす。

「雌猫が…よりもよって俺のパートナーを人質にしようなどとな

…」

いきなりタバサすら上回る憎しみのこもった表情をジヨゼフは浮かべる。

タバサが俺を利用しようとしたことを今になって咎めてきたとは…すると、今度はキュルケの方へと振り向いて話し始める。

「そっちのお前、確かゲルマニアの娘だと言っていたな？」

今日、派遣した使者からお前の処理に関する返事の国書を貰ってきたところだ。

戦争さえ回避出来れば、小娘の1人くらい煮るなり焼くなり好きにしてくれとな」

「そんな…！」

「当然であろう？貴様のやっている事は単なる国境侵犯なのだからなシャルロット同様に処刑されても何ら不思議ではない」

うわちゃあ…やっちゃましたか…ゲルマニアってそんな雰囲気もあるし。

ガツクリと項垂れるキュルケを前にして、俺は微妙に同情的になる。原作でもタバサの救出の際、似たような事態にはなっていたけど

原作のジョゼフやら色ボケ女王の介入でなあなあになっていたようなもんだっし。

でもやはり自業自得と言ってしまったえば、それまでなんだけど。

「全く、哀れとしか言いようが無いな…シャルロット如きに関わった結果だ…」

俺は今心底不愉快なのでな…今すぐに貴様らの首を俺の手で刎ねてもいいくらいだ…が…」

そこまで言ってジョゼフは俺に向かって視線でサインを送ってくる。それを確認した後、オルレアン夫人の眠るベッドの方へと近づいていく。

「国内整備が万全でない今、俺はゲルマニアと事を交えるつもりなど無いし」

そもそもその程度の事で難癖をつけるつもりもないしな…それと、さつきは些細なこととは言ったが

一応、シャルロットの母の心を壊したのは俺だ。だからこれが最後の清算だ」

ジョゼフが言葉を紡ぐ横で、俺はオルレアン夫人の容態を確認する。すやすやと眠る夫人はやつれきっており、見るからに不健康だとわかる。

拳句に娘を娘と認識出来ないような毒を盛られるとは、辛かったのは明白だろう。

マントの後ろに手を隠し、ルーンの力を発動してある物を取り出す。

「母さまに…何を…！」

「黙って見ている」

タバサが俺に縋ろうとしてきたが、それをジョゼフが邪魔をする。

俺は召喚したアイテム、万能薬改の小瓶を取り出し、夫人の口を開かせてそれを飲ませる。

その後杖を取り出し、夫人に対してライブラを唱えて状態を確認。

「……身体、精神共に正常ですマスター」

「そうか、全く恐ろしいものだな！お前の力はエルフの毒すら物と

もしないか！」

「……え？」

再び笑みを浮かべて感心するジヨゼフを他所に、タバサは状況を理解できずにキヨトンとしている。

ジヨゼフは再び口調を憎々しげなものへと変えてこつ吐き捨てる。

「シャルロット、そしてキュルケとやら。貴族の称号と杖を剥奪した上で

お前達を国外追放処分とし、王宮兵士とトオルの召喚した竜達がお前達を死ぬまで監視する。

正気に戻った母と共に、お前と母は俺の前に完全に平伏した事を思い知らされるのだ。

お前は父の敵である俺に敗北した惨めな思いを抱えて一生を過ごす
がよいわ」

それを言い終えた後、足早にジヨゼフは部屋から撤退する。

完全に面食らっているキュルケとタバサを眺めた後、俺もジヨゼフの後に続いて退室した。

「……トオルよ、俺は甘かったらうか？」

「政治的に見れば甘いのでしょうか……これはこれで良かったと思いますよ。」

国の方には処刑したと発表しますし……」

「そうか……今更情がわくとは思わなんだが……まあ後腐れは無くなつたな

俺の犯した罪は消した。これでまた何も気にせずにお前と遊戯に耽ることが出来る」

ちよっぴりセンチになっていたジヨゼフは、すぐに気持ちを切り替

えてまた笑みを浮かべる。

結局、なんやかんやでタバサの母親は治療するという流れになったわけ。

そして俺のFFモンスターによる永久監視で生活させるとの事だ。

ジョゼフは改変の影響によって、理解力のある愉快な人物になつてはいたが

まともな心を取り戻した影響か、狂気に落ちていた頃の自分の罪をそれなりに気にしていたらしい。

で、タバサの母親を治療した事によってそれを清算したというわけだ。

シャルル派が崩壊し、反乱発生のリスクが殆ど消えたからこそ出来た裁定であった。

いきなりタバサをぶん殴つたのは予定外の出来事だったけど…

それもまあ、俺を人質にした事をチャラにする為の制裁だったという感じだろう。

政治的な判断としては本人の言つたように、処刑するのが一番妥当なのだけど

さつきも言つたがシャルル派は壊滅し、王家の監視とFFのモンスターがいる状況で

わざわざ救出に行くような人間もいるまいという事で、このような処遇で決定したのだ。

キュルケの方はというと完全にものついでだ。

ジョゼフも、今更小娘1人の領土侵犯で、ゲルマニアとの関係をこじらせたくないと考えており

だったらついでにタバサと一緒に追放してしまおうと考えたわけである。

杖も貴族の称号も取り上げられ、24時間監視体制ではキュルケもタバサも逆らわないだろう。

逆らつたところでFFのモンスターに単独で勝つこと自体不可能な話だしな。

色々とスッキリしない部分もあるけど、これで今回の動乱の後始末は全て終了となった。

*

さてさて、国内整備も順調に進み、あつという間にヤラの月フレイヤの週。

地球で言う所の1月1日、つまりは元旦、新年の幕開けとなった。

ジョゼフの召喚の儀式から始まり、リアとの出会い、マチルダの勧誘、

サイトとシエスタの引き込み、シャルル派の沈静と、本当に様々なことがあったものである。

今日もまたいつもの様に王宮へと呼ばれ、月明かりの下でジョゼフとカードをしながら対談である。

「月日が経つのも早いものですねマスター……」

「まったくだなトオルよ！新年の幕開けをこれほどめでたく思えるのも新鮮な気分だ……」

他愛の無い話が弾んだ後、やがて原作の流れに関わる重要な話へとシフトしていく。

「こんなめでたい時に…戦争をしている国々もあるというのはですか
らね……」

「だな…トリスティンとゲルマニアも愚かなものよ…」

お前が退けた艦隊の光景をブリミルのお力などと阿呆をぬかしおつて…

攻め込んだ結果が財政不足だからな… トリスティンの使者には財務卿も頭が痛いそうだよ」

「やれやれ… 必要な理由で自分から攻め込んでいって何がしたいのでしょうかね…」

此度のトリステインといい、以前のアルビオンといい…」

「まあな… 俺も嘗ては不必要な争いを自発的に起こしたりもしたものだ…」

会話の途中でゲームが終了し、再びシャッフルして新たなゲームを始める。

新年から10日間、銀の降臨祭の最中は両国で休戦をしているのだが、

原作ではその最終日、ミヨズの奴がアンドハリの指輪でトリステインの兵を狂わせ

そのどさくさでジョゼフが艦隊を派遣してアルビオン、もといレコンキスタを壊滅させて戦争は幕を閉じる。

だがジョゼフは依然言ったように、俺を召喚して以来レコンキスタには不干涉なので

果たして糸の千切れた傀儡であるクロムウエルが、今何をしているやらである。

「とはいえ私も水の精霊と約束をした手前、それを破るわけにもいきません…」

私から見ればどっちもどっちですが、レコンキスタは放っておくと面倒ですしね…」

「クハハ！…その話を聞いた時たまげたものだ。精霊すら退けたのだからな」

「ありがとうございますマスター…では予定通り明日からという事です？」

「そうだな…降臨祭の最終日に到着するように、お前の召喚した飛

空艇の一部を動かすでしょう

今回は俺も身を偽り同行する。お前の言っていたハーフェルフとやらにも興味があるしな！」

互いに気分が高揚した状態で会話がスルスルと進んでいく。

国内のイザゴザが片付いたので、いよいよマチルダとティファニアを迎えに行く。

それに加えクロムウエルから指輪の回収などもついでに行うのである。

前回の討伐任務の際、水の精霊はこの第4の使い魔について何か知ってる口振りだったので

それについて詳しい話を聞きなおすのにも非常に興味があるし。

もう何か原作も自制もへったくれないような状況になってきているが

七万の足止めであるサイトもない、ガリアも艦隊を動かさないと
いう状況で

レコンキスタ側が勝利したりすると、調子付いて色々と面倒になり
そうな気がするからである。

まあそもそもあの蚤の心臓クロムウエルでは、大したことは出来そ
うな気はしないし、

ミヨズがいない中で指輪イベントが発生するかも微妙なところなの
だが

念には念をだ。どの道指輪を取り戻す必要がある以上、衝突は避け
られないので

だったらちよこつとだけ原作のルールに戻ってみようという感じで
ある。

レコンキスタは確実に滅び、トリステイン・ゲルマニア連合軍は肩
入れされた側だから強くは出れない。

トリステインはそもそもアウトオブ眼中だし

ゲルマニアは最悪の場合、キュルケの一件を盾にすれば何も言えま
い。

そもそもこの介入行動自体、シャルル派の反乱前にジョゼフに協力すると取り決めた事だ。

断れないわけではないが、原作のイベントの一つとして、体験しておきたいというのが大きい。

相手は知つての通り以前のシャルル派と同じ、無断で侵攻してくるような非常識集団なのだから

別に心は痛まない。寧ろほっといた方が俺は危険だと考える。それだけである。

まあレコンキスタの介入はついでで、本命はマチルダ・ティファニアの迎えだが。

いよいよご対面となる…バストレボリユーシオン胸革命と…

実物を見るのはどれだけ衝撃的なのか…実に楽しみな話だよ。

ええ、俺は悪人であると同時に変態である自覚も多少ありますとも。あ、かといってやましい事は考えてないよ？信じてくださいマジで

…無理かな？

それ以前にティファニアに変な事したらマチルダに殺されかねないしね…

*

ジョゼフとの対談を終えて、夜遅くに屋敷へと帰宅する。

大分眠気も来ていたので、すぐに自室のベッドで横になろうと思っ

てたのだが。

「……………何してるんだリア？」

「あっ！…サイガー様静かに…」

真夜中だというのにリアが起きており、サイトの個室の扉の前で突っ立っていたのだ。

不自然極まりない話である。何をしてるんだと思っただら…

「今いいところなんですよ！サイトお兄ちゃんがシエスタお姉ちゃんを部屋に連れ込んで…」

……………その一言で全てを察した俺は、何とも言えない心境になって苦笑いを浮かべる。

そのままリアの首根っこを掴んで部屋へと運ぶ。

「何するんですか！」

「はいはい、子供の教育には悪いですからね。早く寝ましょう。

というかお前なんでそっち方面の事を知ってるんだよ？」

「サイガー様に会う前は私、物乞いで生活したんですよ？それくらいの知識は自然に身につきます！」

「ああそう……………」

小声で誇らしげに囁くリアだが、別に自慢にならんぞそんな事…すぐに部屋へと運んで扉を閉める。

個人的には複雑な心境なんだけど…まあ今のサイトなら間違いは起こさないと思いたい。

というか起こした時点でシエスタ父ちゃんに鬼の形相で殺されるしな…

シエスタもこの手の事に関しては積極的だし、

これはこれで幸せなんだろう…そう思い込むことにする。

「お幸せにな…お二人さん」

サイトの個室の扉を見ながら一言呟き、俺は自室へと戻っていった。

第30話：何年経ってもダリルの言葉の真意がわからない

「……ウォールセイム、これで俺の逆転勝ちだな」

「うおっ！まさか最後の1枚で逆転負けかよ」

ギャンブル用のテーブルに座り、カートゲームに興じる男が2人。どちらも仮面や兜で素顔を隠している。傍から見るとなかなかシユールな光景。

「しかし心強いものですなミスタ・サイガー。あなたが経営している
コロシウムでも、最強の戦士を此度の遠征に連れてくるとは」

「ええ……」

別の場所でその光景を見ていた乗組員が、俺に話しかける。

とはいえ重要な遠征の最中にギャンブルとは……リラックスしてるの
はいいけど

もう少し緊張感も持ってほしいと、ガラでもなく真面目な事を考え
てしまった。

考えている事の逆が正解。でもそれは大きなミステイク。

結局どっちも間違いじゃね？とか思うトオル・シュヴァリエ・ド・
サイガーです。

今、俺がいるのは飛空艇ブラックジャック号の船内。

以前召喚した物を、ハルケギニアでも運用可能調整したうえで、今回のアルビオン遠征の旗艦として使用しているのである。

？をプレイした方にはおわかりだと思いが、この船の本来の持ち主である

セツター・ギャツピアーニの趣味が反映されており、カジノ施設が内蔵されている。

そこに遊び好きのジョゼフが目をつけたのはある意味必然なわけで、これからアルビオン、つまりレコンキスタを壊滅させに行く旅路中だと言うのに

サイトと一緒にトリプル・トライアドで遊んでいるというわけである。

「しかも、戦争中の国家間に横槍を入れるという危険な任務の前だというのに…」

あのお二方は気楽なものですなあ…やはり歴戦の猛者というものは我々のような凡百のメイジとは感覚が違うのでしょうか」

同乗している乗組員は、そんな様子を強者の余裕と捉え、えらく感心してるようである。

当然なのだかジョゼフは、コロシウムの際に使用しているジークの格好で共に来ている。

そりゃ国王御自らが、こんな任務の矢面に立つといろいろ面倒になるからだ。

因みにサイトの方も、以前紹介したコロシウムでの仮の姿、シャドウとして同行している。

政治的に見れば、他国の戦争に割り込むというきな臭い任務につき、最近シュヴァリエになったばかりのサイトが、実名で参加するのもどうかと思ったので。

俺の方と言えば、ジョゼフと親交の深いやり手の商人メイジとしての足場が固まっております

ジヨゼフの命を受けて仕事をする立場としては、特に問題が無い。何より、ゴールドソーサーのオーナーで、竜の首コロシアムの管轄もしている以上

外面上は、コロシアムにいる凄腕の戦士、ジーク（ジヨゼフ）とシヤドウ（サイト）を

自由に使役出来る立場でもあるので、寧ろ都合が良かったのである。コロシアムでの2人の評判は確かなもので、今回密命を受けた他の貴族達も

この上なくらいに心強い味方を得たと、安心した気持ちである。

とにかく、この原作中盤のイベントでもあるこの戦争をとつと終わらせて、先の事を考えたい。

指輪を回収し、改変されたこの世界の過去はどうなっているかを調べたり

マチルダ・ティファニア兩名を保護し、ガリアでの立場を築いたりする必要もある。

そしてその背後に控えているのは…順番から考えれば恐らくはロマリアであろう。

四の四を求めるヴィットーリオとジュリオが、はたしてガリアにどう関わってくるのか。

そして東方に控えているエルフとの問題や、風石による世界転覆問題などもある。

とはいえ、俺はエルフと全面戦争とかするつもりは全く無いんだけど。

何よりロマリアはまな板ピンクと色ボケ姫がいる、トリステインに次いで気に入らないし。

エルフや風石の問題をどうにかする必要はあるにしても

あのイケメンコンビ率いるロマリアに振り回されるつもりは毛頭無いので…

…ところでエルフで思い出したが、ビダーシャル卿は何をしているんだろう。

原作10巻での彼のポジションを、殆ど俺が代わりにやってた感もあるし。

そして本当に今更ながら思い出したんだが、地球の方はどうなっているのだろうか？

この世界において完全なるイレギュラーな存在である俺だが、ヴィットーリオが覗いている地球は、どういう状況下のものなのか？俺の地球なのか？もしくはラノベ世界のサイトの地球なのか？

可能性としては限りなくゼロだろうけど、俺とサイトの地球は同一存在なのか？

もしサイトの地球である場合、俺の帰還手段は何か別の事を考えねばならない。

可能性としてはヴィットーリオ達が触れていた、エルフの聖地に鍵があるかもしれない。

デルフ（最近出番無いけど）や水の精霊が知っている真実にも、ヒントが掴めそうだし…

（と言つても…ここまでこの世界に首を突っ込んでおいて帰還方法見つかったらとつと帰るとか…そんなつもりは更々無いんだけどね…）

別のテーブルに座り、新たなゲームを始めるジョゼフとサイトを眺めながらそんな事を考えていた。

数日後、ブラックジャック率いるガリアの艦隊は、アルビオンの目
前へとやってくる。

前回は非常に不本意な形で上陸したからなあ：髭子爵にまんまとは
められて。

とはいえ何度来ても圧巻である。大陸が丸々空中に浮かんでいるの
だから。

「降臨祭の最終日：はたして両軍がどう動くかですな」

「ええ：とはいえ、私達の目標は最初からレコンキスター一択ですけ
ど」

船の甲板で眼下に僅かに見えるアルビオン大陸の全景を眺める最中
生真面目な表情をして乗組員が話しかけてきたので、俺も真面目な
声色で返しておく。

アルビオン軍、レコンキスタの軍勢の大半は、アンドバリの指輪の
力による死者だ。

それを操るのがクロムウエル。FFの蘇生魔法に遠く及ばない偽り
の力で

死者を無理矢理蘇らせ、更には生者にすら効果がある洗脳能力で意
のままに酷使している。

外道中の外道だ。死んだ人間を好き勝手に弄ぶとか、並の人間の感
覚では出来んぞ。

しかもそれを虚無の力と偽り、聖地奪還をお題目に、好き勝手に暴
れる始末。

はつきり言ってレコンキスタは、前の過激シャルル派以上に救えな
い存在だと思っている。

いくら酒場の冗談が基で、ガリアに誑かされて始めた事とはいえ、限度ってものがある。

タルブ村では自作自演による、一方的な占領をしようとしたし。

この戦争でも劣勢になると、一般市民の生死もお構いなしにサウスコーダの食料庫を空っぽにしてみたりと、悪どい事ばかりやってる組織だしな。

まあ今回の戦争自体、色ポケ女王がウェールズの敵討ちの為に自分から攻め込んで行ったみたいな理由が半分くらい含まれてたりする。

結論的には何かどっちも救えない状態なんだよね…亡きウェールズにちよっぴり同情。

かといってこれ以上レコンキスタに好きにさせるつもりはない。ここで叩き潰す。

トリステインはその後でいい。今のガリアに物を言う余力などありはしないのだから。

「トオル、ついたのか？」

「おおサ…シャドウ、もうすぐだよ」

と、ここでサイトが甲板へとやってきたので、俺も返答をしておく。サイトはアルビオン大陸を見つめているが、黒い兜から覗ける瞳はどこか寂しげな気がした。

「どうしたよシャドウ？」

「いや…あの時の事…思い出すなあって」

返事を返すサイトの声色は、やはり沈んだものであった。

あのときの事…恐らくはまだ原作のルールが崩れていなかった頃の話。

ルイズと共にウェールズに会った事、そしてワルドとの激闘の事である。

「あの時俺は無我夢中でさ…色々難しい事はわかんなかったけど…でも、ウェールズ皇太子が殺されたり、ワルドの奴と本気で戦った

りして…

今思えば、あの時点でお前とも接触してたんだよな…」

そこまで言っただけは、チラリとこちらに視線を向けて続ける。

「だからさ…こんな事考えちゃうんだよ…もっと早くにお前と仲良くなっておけたら…」

あの時無理にでもお前についてきてもらえたら…ウエールズ皇太子も救えたんじゃないかって…」

「そう…か…」

やめてくれー！そんな物悲しげな視線で俺を見ないでくれー！
言えるわけないだろう…あの時はまだ自己保身が優先で

ワルドにまんまとはめられて、身動きを取れなかったなんてさー！
そんな大真面目に言われたら、こっちも凄い責任を感じるだろうが
ー！

くそ…最近バタバタしてて忘れかけてたけど、レコンキスタへの恨
みが再燃してきた。

完全なる逆ギレだけど…まあいいか、どうせ潰す事に変わりはない
から。

「…あの時行けなかったのは俺のミスなんだから、気にするなよ
どの道お前はまだルイズの使い魔だったんだし、また状況が全然違
ってたんだしな…」

俺が言うのも難だけど…ここでたられれば話しても仕方ないと思う
ぜ」

「トオル…」

「だからさ、とにかく今は目の前の事に集中すればいいと思うぜ？
レコンキスタの連中を潰してこの戦争を終わらせる。

それがそのウエールズさんの無念を晴らす事にも繋がると思うし」

「…そっか、駄目だな俺…また余計な事で沈んで…」

そう言っただけは自分の手でコチンと自分の頭を叩いて、元気を
取り戻す。

「ありがとなトオル、やっぱ同じ世界のお前と話すと気が楽になる

よ

「そっか、そう言ってくれと俺も嬉しいよ」

サイトの言葉に、俺も笑顔を浮かべて返しておいた。

アルビオンに更に近づいた所で、同乗させていた銀竜達を連れてくる。

不干渉だったとはいえ、ジョゼフはクロムウエルとの連絡手段は残っていたので

事前に連絡を入れて準備を進めてあるし、俺の方も商売関係の名目でアルビオンの入国許可は取ってあるので、準備は万端である。

「では皆さん、事前の手筈通りをお願いします。何かあったらひそひそで連絡を」

「了解です！」

「お気をつけてミスタ・サイガー！」

俺とサイト、そしてジョゼフが一体ずつ用意された銀竜へと跨る。

艦隊の乗組員に言葉をかけた後、俺を乗せた銀竜がアルビオンの上空へと飛び立っていく。

飛んでいるのはシティオブサウスコーダ上空、原作ではトリスティ

ン軍が攻め込み

そこを占拠している。今は銀の降臨祭最終日、朝日の眩しい時間帯である。

「おや？彼奴らは何をしておるのだ？」

すると、右隣を飛行しているジョゼフが真っ先に異変に気づいたようだった。

それにつられて俺とサイトもサウスコーダの街並みを眺めたのだが「何だよアイツら…何で味方同士で争ってんだ？」

サイトがその疑問を率直に口にした。そう、トリステイン軍が同士討ちしているのだ。

どーしてまーレコンキスタに限って、こう原作の修正力みたいのが働いているのだろうか？

ミヨズニトニルンのルーンの力無しに、よくもまあ兵士を操れたものだと感心する。

そもそもミヨズの干渉無しに、クロムウエルが軍を維持出来ただけでも意外だし。

原作どおりの予想外の反乱に、トリステイン側の連合軍はてんでんばらばらの様だ。

兵達は皆我先にと逃げ惑い、周りの人間はお構いなしに押しのけていく。

その中には、退却命令の事すら知らずオロオロとしている平民も混じっており

兵達はそんな平民すらも力づくで押し倒していく。

「事情はよくわからぬが…滑稽なものだな」

ジョゼフはフンと鼻息を鳴らして言い捨てる。まともな感情を完全に取り戻しているジョゼフは

一大事とはいえ、味方の平民など意に介さない兵達の身勝手振りに呆れているようだ。

「アイツら…街の人達とかを見捨てて逃げてんのか？」

「中には遠征の補給部隊とかも混じってるだろうな…」

「それって…自分の国の人達まで見捨ててんのか!？」

「生きるか死ぬかのこの状況、一番可愛いのは自分の命なんだろう」

「そりゃ…確かにそうかもしれないけど…そういう人達って危険を冒して」

兵隊さん達を助けにきたんじゃないのか?なのになにを…

クソッ…! 貴族なんてのはそんなんばつかなのかよ!！」

淡泊な反応の俺とは対象的に、サイトはこの光景に激しい怒りを覚えていようである。

原作の中で、誰よりも貴族の身勝手に平民が犠牲になるのを忌み嫌っていたのだから。

とはいえどうするか…ここで時間を食ってるよりは、さっさと本丸を潰した方が…

「どけどけっ! 邪魔だ!」

「きゃあ!！」

と、そんな状況下で女性の悲鳴が耳に入ってくる。

見ると、一人の女性が兵士に強く跳ね飛ばされ、足を怪我して倒れているではないか。

「まずいぞ! 助けなきゃ!」

真っ先にサイトが反応し、銀竜に指示を出して女性の方へと近づく。

「おい! 大丈夫か!？」

「う…ぐすっ…あ、足が…」

俺とジヨゼフも一緒に降りて、街道の端に倒れている女性の方へ近づく。

サイトに抱きかかえられている女性の足は変色を始めており、あらぬ方向へと折れ曲がっていた。

いくら余裕が無いからとはいえ、あんまりであろうこれは。

「大丈夫…すぐ良くなるから…ケアルガ」

泣きじゃくる女性をサイトは落ち着かせ、治癒魔法を唱える。

淡い光が女性の足を包み込み、一瞬で正常な状態へと戻していく。

「ほら、立てるか?」

「へ…あ、あれ治ってる…凄い！」

女性はしばらくキョトンとしていたが、すぐに立ち上がって喜びを浮かべる。

サイトの方もそれを見て安心したようだ。

「どこの誰かもわからないけど、とにかくありがとうね！」

すると女性はすぐに兵士達にかけていくのと同じ方向に走っていく。

「えっちよっ…おい！大丈夫なのか！」

「大丈夫！これでも足には自信あるから！」

アンタ達もアルビオン軍に見つかる前に逃げなさいよ！」

後ろで呼び止めるサイトもお構いなしに、女性はあっという間に見えなくなってしまった。

取り残された俺らは呆然とするばかりである。

「クク…全く、腰抜けの兵なんぞよりよほど逞しいものだな」

ジョゼフだけはその女性の奔放さに感心しているようであった。

にしても…何か見覚えあるような気がしたのは気のせいだろうか？

この世界では珍しい髪の色をしてたし…

*

そんな一幕があった後、クロムウエルのいる駐屯地に到着する。

赤レンガで作られた発令所の前に三体もの竜が降り立ったのを見てすぐにレコンキスタの兵士達がやって来たが、かまわず俺は事前の

手筈どおりに行動する。

「ガリア王ジョゼフ様の命を受けてやってまいりました
トオル・シュヴァリエ・ド・サイガーという者です」

そう言つて、ガリア王家のサインが刻まれた書類を兵に手渡す。
すぐに兵は発令所の中に入り確認をし、すぐに戻つてきてこう言つた。

「クロムウエル閣下が謁見を許可するとの事だ、ついてこい」

言われるがままに俺とサイト、ジョゼフが兵の誘導に従つて発令所へと入る。

その王本人が目の前にいるというのだから、ある意味笑えない話なんだが…

発令所に入ると、聖職者の格好をし、青く光る指輪をはめた男が迎えにくる。

気よさそうな笑顔を浮かべてはいるが、明らかな焦燥も感じ取れた。

「お初にお目にかかりますクロムウエル閣下」

私はトオル・シュヴァリエ・ド・サイガー、ガリアからの使いです」

「おお！君の話はワルド君から聞き及んでいるよ！よくぞ我が軍に手を貸してくれた！」

儀礼的な俺の挨拶に、クロムウエルは歓喜しているようだったが、彼としてはさつさと敵を何とかしたいのだろう。すぐに本題を投げかけてきた。

「それでガリアが誇る艦隊はどこかね？さつそく敵の連合軍を攻撃してもらいたいのだが…」

「慌てなくともすぐに到着いたします…私が陛下から預かった

最強のガリア艦隊の力を以つてすれば…敵の連合軍などすぐに消し

飛ばせるでしょう」

「おおお！何とも頼もしい事だ！」

クロムウエルはすっかり舞い上がっている。原作でもこの時点で引くに引けない所に来てしまっていた状態での援軍に安心しきっていたのだ。

精々浮かれている。その地獄で仏に会ったような喜びがすぐに地獄へ逆戻りなのだから。

他人の心を自分の思うがままに操るような外道に、かける情けは無い。

「では艦隊の到着の前に…ちょっと面白い物をお見せしましょう」

「ほう、それは何かね？」

すっかり調子づいているクロムウエルを前にして、俺は一言呟く。

「ミュート」

バタタッ

次の瞬間、クロムウエル以外のアルビオン兵が全員、糸の切れた人形のように床に倒れる。

…全員死んでたのかよ、マジ最悪すぎる…俺でもこっちはしないぞ？

「な、何だ！？一体何が起こっているのだああ！？」

ふわふわした幸せ気分から一転、クロムウエルは狂ったように喚き散らす。

アンドバリの指輪で操っているとはいえ、所詮は魔法の力によるもの。

確証は無かったが、全ての魔法を無効化する時魔法「ミュート」の力には逆らえなかつたらしい。

指輪から発する魔力で常に操っている以上、指輪自体が魔法を無効化する

ミュートの空間に置かれて干渉力を失い、操られていた兵の制御が解けてしまったのであるう。

「どうだシャドウ？こいつらはみんな本来死んでいるべき人間だつたんだ

なのにこのオツサンが自分の私利私欲で好き勝手に酷使してたつてわけ」

「デメエ…！」

倒れた人間達を見渡しながら、サイトに向かって話しかける。

サイトの方は我慢の限界が近づいており、自爆寸前のボムの如しであつた。

「ヒ、ヒイツ…！」

「おつと逃げるでないぞ？」

完全に腰の引けたクロムウエルが逃亡しようとしたが

ジョゼフがクロムウエルの背後に回りこみ、彼を捕らえる。

その状態で俺はクロムウエルの方へと歩み寄っていく。

「アンドバリの指輪、確かに頂いたよ」

もう抵抗する意志すら無いクロムウエルの指から指輪を外して頂くすると、俺の後ろからサイトがやって来て、クロムウエルの胸倉を掴む。

「このクソツタレがあー！」

「ぐへっ！」

鉄建制裁…我慢の限界が来たサイトにクロムウエルは殴り飛ばされる。

言っておくが魔石のパワーアップによって、サイトの腕力自体が凄まじいものになっている。

一発でクロムウエルは発令所の壁に叩きつけられて気絶する。

「サイト…気持ちわかるが落ち着け」

肩を震わせて息をするサイトの肩をポンと叩き、落ち着かせる。

「トオルよ、目的は果たした以上ここに用は無かるう」

「そうですね…引き上げるとしましう」

次いでジョゼフにそう言われて、クロムウエルを抱えて外に出たのだが…

「貴様ら何をしている…！」

…騒ぎを聞きつけた他の兵士に囲まれてしまいました。

ミュートは発令所の中限定で発生するように調整しておいたので、魔法は使える。

念の為ライブラをかけてみるが、アンドバリの指輪の効果は見られない。

「お前らあああ…！」

すると、何も言う前からサイトが腰のラグナロクとライトブリンガーを構えて突撃する。

「他の国の貴族なんて…どいつもこいつもクソツタレだあ…！」

ウェールズさんがどんな気持ちで死んでいったと思っただあ…！」

激情に任せるままにサイトは剣を振るい、ラグナロクのフレアの爆発や

ライトブリンガーのホーリーの閃光で敵をなぎ払っていく。

今のサイトは誰にも止められまい…完全にキレてしまっている。

「さて…俺も最近運動不足だったからな…！」

そう言った瞬間、ジョゼフの姿が掻き消える。

「…！！………」

「なあっ!?!？」

更に次の瞬間、アルビオン兵の数人が切り裂かれて倒れ付していく。直後にゾーリンシエイプを構えたジョゼフが一瞬だけ姿を現し

また消えて、また数人の兵士が倒れての繰り返し。

久々に見るが、やっぱり加速は恐ろしい…こんな誰も勝てないだろ。

爆発や幻惑などの他の虚無魔法が可愛く見えてしまうレベルだ。

(…本当に俺も魔石強化しないとヤバイかもな)

サイトとジヨゼフによるワンサイドゲームを呆然と見詰める最中で暢気にそんな事を考えつつ

「メテオ」

別の兵士に向かって容赦なく魔法を唱え、降り注ぐ隕石群で敵を倒していく。

もう本当にいろんな意味でやりたい放題である。

敵の本陣が、たった三人の人間でズタボロにされていつてんだから。

*

後から来たアルビオン兵を全て全滅させ、再び銀竜へと乗って飛び上がる。

丁度その時、ブラックジャック号率いるガリア艦隊の姿が見え始めていた。

『ミスタ・サイガー、御無事ですか？』

「ああ、目的は全て終了したよ」

ポケットのひそひそうから通信が入り、それに答える。

銀竜の進行方向を艦隊へと向け、更に続けてやり取りをする。

「じゃあ、後の始末をしておこうか。残った敵兵に降伏勧告を」

『了解致しました』

丁度ブラックジャック号が目の前に来たところで通信を終え、ひそひそをポケットにしまった。

新生アルビオンは事実上のリーダーであるクロムウエルの捕縛により壊滅。

サウスコーダ南の平原に展開していた七万の兵達も

ガリア艦隊の足止めによって大半が消滅。残りの兵達もクロムウエルが捕縛された時点で

全員を降伏させ、ひっそらえる形になった。その混乱に乗じて

トリステイン側連合軍が無事にアルビオンから脱出するのに成功。

何かこつちのやりたい放題で、凄いうやむやな感じになったが

そんなわけでトリステイン連合軍と新生アルビオンの戦争は

俺達ガリアの横槍によって、一応は連合軍側の勝利で幕を閉じる。

まあ、指輪の奪還が主だったから勝敗はあまり関係ないけど。

何よりの本題は寧ろこの後に控える、ティファニアとの対面なのだから。

第30話：何年経ってもダリルの言葉の真意がわからない（後書き）

意外とアツサリ…

確かにティファニアとの接触のが重要ですが。

第31話：革命じゃねえよ！凶器だよアレは！

怒涛の進攻であっさりとアルビオン戦は終了したわけだが俺にはまだこの国で他にやる事が残っている。

捕縛したクロムウエルを艦隊に預け、旗艦ブラックジャックを除いた他の艦隊は

戦後処理やら、国への報告やらでそれぞれの方向へと飛んでいく。

で、戦争終結から数日後、事前の調査で調べたデータを頼りにサウスコーダに存在する森林の中を突き進んでいく俺とサイト、そしてジョゼフ。

地元では『忘却の森』と呼ばれて誰も近づかない影響もあってか、戦争による被害は皆無だと言える。

そして俺達はその忘却の正体が何であるか知っているのも、何も問題は無い。

「けど本当なのかトオル？こんな森の中に人が住んでるって…」

「調査の結果ではここで間違いないよシャドウ。」

ましてやこんな森の中だ、人数人が隠れるのにはうってつけだ」

未だにサイトとジョゼフはそれぞれ、シャドウとジークの格好のままである。

もともと、ここにいる限りはサイトはともかく、ジョゼフは変装しててくれないと困る。

サイトもシャドウの格好は気に入っていたので

ジョゼフが変装したままなら、自分もこれでいくかという単純な理由である。

「しかしハーフェルフとな…この世界で互いを憎みあう種族の間での禁断の子か…」

実に興味深い話ではあるな」

「ええジーク…以前マチルダと接触した際に聞いた限りでは…

彼女はかなりの苦勞を重ねてきて、この地に身を置いているのです」
ジヨゼフの言葉に真剣な態度で返答しておく。

ティファニアの不幸振りは、タバサと並んでトップレベル…いやそれ以上かもしれない。

ただエルフとの間に生まれた子供というだけで、国を追われてこんな場所にいるのだから。

どこぞの魔法が使えないまな板娘や、王族で自由が利かずに不幸ぶっていたような

そんな連中とは比べるのもおこがましい。彼女はハーフエルフという立場ゆえに

人間は勿論、エルフ達とも微妙な態度を取られかねない状況なのだ。それでもめげずに頑張つて生きてきた彼女は、本当に立派だと思う。

普通だったら精神が参ってしまうのが先だろう。ましてや年齢的にはまだ子供なのに…

だから俺がそれを救済する。こんな場所においやられている状況からせめて人並み以上の幸せは掴ませてあげたいではないか。

というかだ。このまま放っておけば、彼女は恐らくロマリヤに利用されるであろう。

知つての通り彼女、ティファニアはアルビオンの虚無の担い手。

ジヨゼフが召喚した俺…つまりは第四の使い魔を本来召喚する筈だった立場にいるのだ。

四の四を求めるロマリヤのヴィットーリオが、彼女に接触しないわけが無い。

その魔の手から守るという意味合いでも、彼女の救済は必要なのである。

「そのエルフっていうのは別に…人を取って食つような連中とかじゃないんだろ？」

「んなわけあるか…第一これから会うのがそんなだったら俺は世の

中全てが信じらんねーよ

要はアレだ、俺達の世界で言う民族的な問題だよ……」

「そっか…かわいそうにな……」

まだ見ぬハーフェルフの少女の事を思い、心を痛めるサイト。

民族とか宗教の関係で排他されるとか、俺が一番嫌いな事である。

地球…というより現代日本人的な考えの典型というやつであるが

ただ耳が長いだけで、殺す理由になるなんて、狂ってるんじゃないか
言いが無い。

自分がハーフェルフとして生まれてくるなんて選択不可能だとい
うのに

そんな事で人を咎めたりする理由なんて、一生涯理解できないだろう。
だから嫌なんだよブリミル教ってのは。始祖様が絶対に正しいかな
んてわかりやしないのに…

そんなこんなで森の中を歩く事数分、小さな藁葺き小屋の集落が遠
目に見えてくる。

「あれか？」

「恐らくは」

目的地と思わしき場所を発見し、俺とサイトで軽くやり取り。

ここが件のウエストウッド村…といっても村と呼べる規模かどうか
は微妙なのだが。

「とりあえず、どうやってコンタクトを取るかなあ……」

原作知識、という絶対的な前情報を持っているのは俺だけである。マチルダとの接触はそれで良かったが、今回はジョゼフとサイトも一緒なので

迂闊な発言は出来ない。この村のどこにマチルダやティファニアがいるかもわからないし…

「おい、そこでコソコソ何をしているのだ？」

「！！！」

と、ジョゼフがいきなり近くの草の茂みに向かって声を発する。

すると茂みがガサガサと蠢いた後、棒つきれを両手に持った金髪の男の子が姿を現す。

「子供…？」

サイトが首を傾げる。俺の方はと言えばこの子供が何者なのかの見当はついていない。

たぶん、ティファニアが村で世話している孤児達の1人なのだろう。

「あ、怪しいやつらめ！何の用だ！」

棒つきれを構えたまま、精一杯の勇気を振り絞って男の子はそう言ってきた。

とはいえ体が小刻みに震えているのを見れば、本当は怖いのだとすぐにわかるが。

「怪しい奴らって…オイオイ」

「シヤドウよ、今の俺達の格好ではどう控えめに見ても怪しいであろうっ？」

困ったなあという感じで後ろの首を掻くサイトに対し、楽しげな口調でジョゼフが答える。

まあ俺を除いたら、他二名は素顔を隠しており、サイトに至っては全身黒づくめ。

普通の常識で考えたら怪しい。というか事情を知らない人間には怖くすら感じるだろう。

「ジム、何をやっているの？」

今度は別の方向から女性の声が聞こえてきた。

「あ、テファ姉ちゃん！怪しい奴だよ！」

目の前の男の子は声のした方へ叫ぶ、つーか今何て言ったコイツ？
つられて俺もそっちの方へと振り向く。

「！！…あ、あの…」

見るとその方向には帽子を被った少女が1人。

あからさまに不自然な格好をしている俺達3人の事を見て身をすく
ませている。

帽子の下からは流れるように美しい金髪の髪が見て取れ

おっとりとした可愛らしい顔つきに、若草色のシンプルなデザイン
の服を纏っている。

だが問題はそこじゃねえよ…え、何か問題があるのかって？決まっ
てんだろ。

「でけえ…」

スラッとした顕著の体つきの少女なのに、ある一部分だけがどう考
えたって不自然なんだよ。

その体に実った二つのスイカ…いや、メロン？それともサッカーボ
ール？

何て表現したらいいんだろうね、うん。そんな稚拙な例えすらバカバカしくなるよ。

呼吸をする度にぶるんと小刻みに揺れるソレは、世の男性にとってはある種凶器とすら言える。

もうね、あり得ないよ？人間界の理を軽く超越してると違う？

リメイク？のサラ王女や？のティファなんぞ目ではないだろう。

っーかよ、こんなの二次元でもありえない。リアル…いやこの世界リアルではないけど。

何なのコイツは？本当に何なんだ？ドキドキが止まらないのだが？

しかもだよ、ハルケギニアの常識で考えるとだよ？この娘は『つけてない』んだよ。

こんな常軌を超えた凶器を二つも抱えているのにだよ？もうどうなってるのこの世界は？

時間圧縮してもいないよこんなの？闇の氾濫も、巨大メテオの衝突も、無の力も何のそのだよ。

どうすりゃいいの？この圧倒的な存在を前にして俺はどうすりゃいいんですの！？

ああああああああああ、誰か俺を…

「こんな辺鄙な村の真ん前で何を突っ立ってんだいアンタは…？」

…後頭部に激痛が走って俺は正気に戻る。危なかった…

今が無かったら俺はもう帰れない場所にまで到達していたかもしれない…

「心配するなトオルよ、お前はもう十分おかしな場所に到達している」

いきなりジヨゼフにポンと背中を叩かれてそんな事を言われる。

地の文を読むんじゃない！！普通に怖いわ！！

「マチルダ姉さん！！」

目の前にいた帽子の少女・ティファニアが声を上げる。

そして俺達の背後にいたのは見慣れた緑髪の女性、そう

「フーケ！？」

フーケ…違うよ、マチルダだよ。ああそうか…サイトに説明すんの忘れてた。

「ストップだシャドウ、詳しい話は後ですから今はやめろ」

「トオル！けどコイツは…！」

「いいから、全ての責任は俺が持つ」

既に剣に手をかけていたサイトを抑えておく。

サイトはしぶしぶといった感じに剣にかけた手を引っ込める。

それを制した後、マチルダの方へと振り返った。

「久しぶり、遅くなったけど迎えに来たよマチルダ」

「そうかい、アタシとしては二度と来なくても良かったんだがね」

忌々しいといった感じにマチルダが答える。ティファニアとジムと

呼ばれた男の子は

何が何やらさっぱりといった様子であった。

*

「それじゃあ以前にマチルダ姉さんが話していた商人さんっていう

のは……」

「そ、俺がその商人、シュヴァリエ・ド・サイガーってこと」
ティファニアの自宅、簡素な丸テーブルに俺とサイトとジョゼフが
座り

反対側にマチルダとティファニアが座る形となる。

ティファニアは俺が、マチルダから話を聞いていた人物だと知って
目を丸くしていた。

「しっかしな、たつてアンタがソイツと一緒にいるんだい？
自分の本来の主人はどうしたんだよ？」

「そこに関してはあまり深く突っ込まないでくれよマチルダ
ティファニアと同じで彼にもまた色々と言えない事情があるんだか
ら」

仏頂面をするサイトは、顔を隠す為の黒い兜を外していた。

マチルダとしては、破壊の杖の一件で煮え湯を飲まされた相手が
本来いる筈の無い場所にいる事に疑問を浮かべている。

俺らの同士として正式に迎える以上、隠し事をする必要は無いので
こうして正体を明かしたのだが、その背景について説明するのはも
う少し段階を踏んでからだ。

まあもつとも……もう1人いる人物のインパクトに比べれば微々たる
物……

「それよりもマチルダ姉さん……本当なの？こつちの人がガリアの……」
「間違いないよ……この男の顔は見間違いようもない……」

まったく……そりゃ大国ガリアの王がバツクにいたなら
アンタの無茶苦茶ぶりにも納得がいくつてもんだよ」

ティーカップに新しい紅茶を注ぎながら尋ねるティファニアに
それを睨りながらマチルダが、くたびれたように返答する。

「気にするな。トオルは単なる俺の気の合う友人の1人にすぎんか
らな！」

そのトオルが助けると決めた人物なら、お前達も俺と対等に付き合
う権利がある」

「やれやれ…噂に聞く無能王だけど…こりゃ確かに変人だわね」
相変わらずの気の良い笑顔で豪快にしゃべるジョゼフに対し

マチルダはもう何が起きてもどうにでもなれ、と達観した感じにな
っている。

そりゃこんな辺境の村にガリアの国王が直々に来たりすれば、そう
いう反応にもなる。

「それに…」

すると、ジョゼフは帽子に隠れたティファニアの頭を見ながら核心
を突く一言を言う。

「ハーフェルフというのが…どんな者か気になっていたからな」

「!!!!」

その言葉にティファニアはビクンと体を震わせる。

自分や、エルフである母に対する今までの仕打ちを考えれば当然だ。
このハルケギニアにおいて、エルフとは忌み嫌われる種族なのだか
ら。でも…

「しかしまあ、トオルから聞いていたように素晴らしい美貌の持ち
主だな！

これほどまでに美しい女は俺も久方ぶりに見るかもしれん」

「本当だよなあ…何でこんなかわいくて優しそうな娘が国を追い出
されたりしなきゃいけないんだか」

ジョゼフもサイトも、ティファニアに対して好意を含んだ言葉を投
げかける。

ティファニアはその言葉に一瞬キョトンとなり、慌てて聞き直して
くる。

「あなた達…エルフが怖くないの？」

「何を怖がれというのだ？王宮にいる頭の腐ったブリミル教徒ども
に比べれば

初対面とはいえ、お前の方がよっぽど信用ができると思うが？

それとも、お前は夜な夜な人を襲うような趣味でも持ち合わせてい
るのか？」

「うんうん、こんな娘を虐げる世の中の方がよっぽどどうかしてるぜ」

ティファニアの質問にも、ジョゼフとサイトはキツパリと即答するだけである。

サイトはもとより、ジョゼフも原作では、自分の野望の為に利用する目的とはいえ

エルフであるビダーシャル卿と何の抵抗も無く手を組んでいた事実があるし。

この世界のジョゼフはFF世界の楽しみと知っているのだから今更エルフがどーのこーので騒いだりしないのが当然なのである。

「わかるティファニア？陛下もサイトも、そして俺も

君がハーフェルフである事なんか気にするつもりは全く無いんだ

そして何より俺には力がある。君達を世界の目から守れるだけの力が
理不尽にアルビオンから虐げられ、こんな目に遭っている君やマチルダを

俺は純粹に助けてやりたいと思っっているんだ」

そして俺も本心からの言葉を発する。明らかな困惑を見せている目の前の少女ティファニア。

彼女には幸せになる権利がある。耳が長いだけで虐げられるなんて間違っている。

原作というレールをぶち壊した以上、今後この場所に何が起こるかはわからない。

だから今ここで彼女は救われるべきなのだ。これ以上の不幸に遭わせない為に。

言い訳がましいけれど結局は俺の自己満足。でもそれで構わない。

俺の身勝手でも、ティファニアやマチルダのような本当に不幸なキアラが救われるなら

俺はそれを純粹に嬉しく思う。

すると、ティファニア顔を赤らめて、もじもじしながらこう言う

きた。

「…本当にいいの？私なんか来ても迷惑じゃないの？それに子供達だっているし…」

「全然問題ないよ、これでもガリアではそれなりに名が知れているからね

子供の10人20人住める邸宅くらいならすぐに確保できる

こっちの財力で君たちの生活の仕送りだって可能だし…難なら仕事も用意してあげられるしね

それに、どっちにしたってマチルダは俺の下で働いてもらうつもりだったし」

ティファニアの言葉に何てこと無いといった感じに返答し

言い終わったところでマチルダ「まあね」と言いつつ、ティファニアに話し始める。

「それに私も仕事をしようにも出来ない立場にいたからね

前にコイツとあった時に貰った礼金がまだあるとはいえ…それも無限じゃない

こいつらに雇われて金が入るし、ティファの安全も確保出来れば万々歳

それにお前も、そろそろ外の世界を見た方がいいと思ってたしね、

丁度良かったのさ」

今までのキツイ表情が一変し、柔らかな笑みをマチルダは浮かべている。

それを聞いてティファニアは突然、涙を流し始めた。

「馬鹿な子だねえ、何で泣くんさい？」

それを見たマチルダがハンカチを手渡してやり、ティファニアはそれで涙を拭いながら続ける。

「だって…私の為にに苦労してるならどうして言ってくれなかったの？」

「娘に心配かける親がいるかい？」

「マチルダ姉さんは私の親じゃないわ…」

「親みたいなものさ、小さい時からずっと一緒だったしね」

…何とも感動的なシーンである。マチルダは裏の世界にまで落ち延びてまで

ティファニアを守り続けてきたのだ。それで尚、盗賊フーケという一面を知ったら

ティファニアが悲しむ…そんな思いをずっと抱え続けながら。

ティファニアもティファニアで、素性の知れないマチルダに疑問を持ちながらも

この小さな集落を守る為に、ずっと戦ってきたのである。

時には本人も未だ知らない虚無の力を使って、自分の身と

何より一緒に暮らす子供達の平和を守る為に…

そんな事を思っつてしまい、つられて泣いてしまう。隣にいるサイトも同様で

ジヨゼフも泣いてはいなかったが、しみじみとした感じで2人を見つめていた。

*

泣きじゃくるティファニアが落ち着く頃には、辺りはすっかり闇に包まれていた。

子供達もいるので、ガリアへ向かうのは明日という事で話を進めた。俺はティファニアの案内で寝床を用意してもらったことになった。

「にしても…マチルダから話は聞いてたけど本当に綺麗な子だよなえ」

「そ、そんな…綺麗だななんて…その…」

「いやいやお世辞とかじゃないよ、何よりその…」

…いけない単語が喉下まで出かかってしまつて、グツと堪える。

もう本当に凶器だわ…見てるだけで頭クラクラする…いつから俺はこんな変態になつたんだろう…

純粹に彼女を助けたいという気持ちさえ、これでは邪よこしまに見えてくるではないか。

とりあえず少し落ち着くべきだな…

「あ、そうだいけない！」

と、何の脈絡もなくいきなりティファニアが声を張り上げる。

「どうしたんだいテファ？」

「そうなのよトオル…さん！ちよつと困つた事になつてて」

「困つた事？」

「ええ」

まだ完璧には心を許していない所為か、たどたどしいさんづけであつたが

何やら困つている様子であるのは間違いなかつた。

「つい最近この近くで行き倒れている人を見つけたんです…

凄く酷いケガを負つてて…その人の治療をしてからじゃないと」

大ケガをした人？原作では七万の大群に向かつていつたサイトになるが

生憎この世界のサイトは俺と一緒にいるぞ？では誰だというのか。

「もし良かったら俺が治してあげてようか？」

「いいんですか？でも…」

「心配ないつて、これでも水魔法には自信があつてね…」

まあ以前七万の兵士がガリア艦隊の足止めを喰らっていたのだ。

その中の誰か一人がこの村に行き倒れてきたとしても不思議ではあるまい。

よほど害のある人物でもない限り、FF魔法でチヨチヨイと治してやればすぐ解決するしな。

得意げに答えて、ティファニアにその件の人物の下へと案内してもらう。

「……………えーと、ティファニア？この人がそうなの…？」

「ええ…数日前に森の中で見つけたの、凄く酷いケガで…」

マテマテマテマテマテマテマテマテマテマテ…こ、このタイミングでそんな…

おかしい…いくらなんでもおかしい…こんな…ティファニアの迎えという一大イベントが

ようやく円満に終わると思った矢先だよ？何でこんなトンデモない地雷が設置してあるの？

しかも得意げに治してやるとか…俺は地雷をフルパワーで踏みつけてるじゃないか？

何故だ何故だ何故だ…よりもよって今はサイトも一緒にいるんだぞ？何でこんな面倒なことになるんだよオイ…！

「あ、あのトオルさん？」

完全に思考停止している俺にティファニアが話しかけてくるが俺はベッドで眠る、小柄なピンクのブロンドの髪をした少女から目を離せなかった…

何だよ…何でルイズがここにいるんだコンチクショoooooooo!!!
!!

第31話：革命じゃねえよ！凶器だよアレは！（後書き）

怒涛の更新ラッシュもこれでひとまず終わりかな

明日はまず無理です。

明後日以降は…運が良ければ早くに出来るかも…

ルイズはこの為にあえて温存していました。

ここでサイトとの完全決別をするつもりです。

ではまたいずれ。

第32話：こんなにいい気分になっていた私を邪魔するのは誰だー！（ルイズで

実に3カ月ぶりの更新…

引っ越しやらパソコンの買い替えやらで時間がかかってしまいました。

（投稿は携帯ですが、雛型はパソコンで作ってたんです）

さて、外部のサイトでもこの小説がチラホラ語られていて嬉しい限りなんです。

同時にBL臭いという意見を多数見かけて凹んでいます…

私は腐女子じゃなくてただのヲタクな野郎ですし

BLも好きじゃない…寧ろ嫌いな部類です。

それとも、自覚無しにそういうのを書いてしまっている重症患者という事なんでしょうか？

散々待たせてグチグチと失礼…ともあれ第32話始まります。

第32話：こんなにいい気分に浸っていた私を邪魔するのは誰だー！（ルイズで

朝日眩しいウエストウッド

周りは木々に囲まれ、小鳥の囀りと共に目が覚める。

隠れ家的な印象が強いとはいえ、大自然に囲まれたこの村での朝は
何とも清々しい気持ちのいいものである。空気も美味しいし。

「ほれ？その程度では俺は捕まえられんぞ？」

「くっそー！ー！ー！」

窓の外ではジョゼフが、村の子供達相手に、加速を用いた超速鬼ご
つこで遊んであげている。

ほのぼのとはするが、ある意味とつてもシユールな光景です。

そんな雰囲気の中、窓から差し込む日の光を浴びつつ

椅子に腰掛けモーニングテイーを静かに啜る俺。

「うーん…何と爽やかな事だろう…」

「朝っぱらから、なーにを似合わないことをしてんだいアンタは」

…後ろからマチルダに小突かれて、現実を引き戻される。

どれだけ周りが優雅でほのぼのでも、俺の心の中は沈みっぱなしで
当にどん底に到達してます。

アレクサンダー来た！これで勝つる！ インビンシブルでまとめて

乙 なん…だと…？

あの時のガーランドくらい、昨日の桃色との遭遇は完全な想定外だ。
冒頭の眩きも混乱気味な、トオル・シユヴァリエ・ド・サイガーで
す。

まあそういうわけで、ティファニアに案内された先にいた重傷人というのが

ご存知、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールなのでした。

もうね、何でこんな事になってしまったのかと全力で頭を抱えてしまっ。

ティファニア曰く、森で倒れていたのを発見して、自分の家に連れてきた。

何でも既に死にかけだったらしく、母親の形見の指輪を用いて何とか命に危険は無い状態まで持ってこれたんだとか。

で、そのすぐ後に俺らが尋ねてきて、あのような状況になったというわけである。

そんでまあ、あれこれ悩んでる内に朝になっちまったわけで

うん、冒頭でモーニングティーなんて飲んでたけど、一睡もしてないから俺。

目の下なんかバリバリ隈が出来てるしね…優雅だとか、そんなのは程遠いわけなのよ…

それにしても勿体無い…ティファニアの指輪はアンドバリの指輪並の貴重品…

本来はサイトを救う為に使うはずだった物を、何でよりによってルイズなんぞに…

「おやおや、随分とお悩みのようだね？」

と、人の気持ちを知ってか知らずか、マチルダが俺のすぐ横でニヤリと笑みを浮かべていた。

「マチルダ…ミス・ヴァリエールの事は知ってたのか？」

「アタシもあんた達が尋ねてくるほんのちょっと前に帰ってきたば

かりだったからね

あの娘の事情はティファニアから聞いたばかりだったんだよ」

「そうか…」

スラスラと喋るその口調に、恐らく偽りは含まれていないだろう。こんな事で嘘を吐いても仕方ないだろうけど。

「まあアタシは小娘の1人や2人、どうなるうと知ったところではないけどね…」

すると、途中でマチルダが真剣な表情になって更にこう続けた。

「けどティファニアが悲しむような真似だけは許さないからねあの娘は優しいんだ、だからくれぐれも処理は慎重に頼むさね」

「わーってるよ…俺だってせっかくあんた達を迎えに来たのに余計な火の粉をお2人にばら撒いたら意味無いからな」

「ならいいんだ」

そこで会話は終了し、マチルダは俺がいた部屋を後にする。

クドイようだが、俺は決して誰彼構わず救済する聖人君子では無い。寧ろ、自己満足を満たす為に奔走している悪人である。

好きな人間は損得関係無く助け、どちらでもなければ、状況で判断して対応を決める。

そして…嫌いな人間は徹底した無視か蔑みを行う。

とはいえ、自分から面倒を持ち込むのは望むところではない。

いくらルイズが、ゼロ魔の中で五指に入る嫌いなキャラであるといつても

マチルダやティファニアがいる手前、下手な行動はかえって裏目に出してしまう。

ましてや、今のこの場にはサイトがいるのだ。故に2人を会わせるのは非常にまずい。

サイトは既にルーンの呪縛から解放されており、ガリア貴族としての地位も手にしている。

今更ルイズがどうこう言おうがどうにもならないのが現状なのだが、あの桃髪ヒステリーの事だ、色々難癖つけて騒ぎ散らすに違いない。サイトという緩和剤が存在しない以上、原作から殆ど成長していない可能性も有り得る。

その責任は少なからず俺にもあるんだろうが、かといって何の後悔も無い。

嫌いなキャラがどうなろうと俺の知ったことか。

アイツは自分でサイトをクビにしたのだ、だからサイトが何をしようと言ッにはもう関係無い。

要は全てルイズの自業自得、俺達が攻められる謂れは無いのだ。だから、面倒を起こされる前に俺が対処すべきである。

「…とりあえずスリプルでも何でも使って…」

気づかれないようにトリステインの領地にも放り込む方向でいくかな…」

とまあ、そんな風に考えを纏めていたんだが…

ドオオオオン！！

突如、狭いこの家の中から凄まじい轟音が響き渡る。その方向は恐らく…

「……………」

嫌な予感が全開です。第六感が全力で警報を鳴らしている故に言葉

すら出ない俺。
思わずヘイストまで唱えて轟音のした部屋へと一直線に向かっていった。

*

すぐに轟音の発生源へと辿り着く、そこにいたのは3人の人物。

「あ、あなた…何をいきなり…」

「あ、ああアンタは関係ないのよ…！わ、わわ私があるのはそ、そそそっちの奴よ…！！」

「……………」

ベッドから起き上がり、杖を片手に鬼の形相を浮かべているルイズ。そんな彼女の視線の先で、腰を抜かして震えているティファニア。そしてティファニアを庇うようにして立っているサイトだ。

何が何やらさっぱりだったが、一つだけ確実に言えることがある。状況は最悪であると。

「あ、ト、トオル…さん…」

「ティファニア、下がっている。彼女は俺が何とかする。君は子供達を頼む」

「え…でも…」

「いいから、詳しい話は後です。黙っていてすまなかった」

何よりの落ち度はティファニアに要らぬ心配をかけさせてしまった
点に尽きる。

さっきマチルダに言われたばかりなだけに、余計に凹むよ…

そういうわけで少し強めの口調で念を押し、ティファニアを部屋か
ら撤退させる。

そして部屋にいるのは俺とサイト、そしてルイズの三人だけだ。

「…何でこんな事になってんだサイト？」

「…それは俺が聞いてえよ…たまたまこの部屋の前を通りかかったら
ルイズを看病してるティファニアがいて…俺を見た途端に杖を振っ
てきたんだよ…！」

サイトの口調の端々から怒りが感じ取れる。

そりゃあいきなり爆発を起こされたりしたら、どんな善人でもキレ
るわ。

だが…よりもよってこの2人を接触させてしまうとは…

昨夜の内に手を打っておくべきだったと深く後悔する…

せつかくルイズからの呪縛から解放されたサイトに、余計な負担は
かけたくなかったのに…

タバサとのやり取りで再認識したばかりではないか…気が緩むと足
元掬われると…

なのにもまたこれだもの…自分で自分が嫌になってしまつよ。

とはいえ悩んでばかりもいられまい、頭を切り替えて現状をどうす
るかを考える必要がある。

つーが無茶しますねルイズさん、ティファニアの介抱があつたとは

いえアンタまだケガしてるのよ？

それでよくもまあ寝起きに一発、失敗魔法なんか使う気になれますね？

正直言つて理解不能だわ、何がお前をそんなにイラつかせる？

「あ、アンタ、今までどこをほつつき歩いてたのよ？ご主人様に無断でどういっつもり？」

「…はあ？誰がご主人なんだよ？」

すると、俺がいるのもお構いなしに、サイトとルイズが問答を始めてしまう。

「こ、この…よよよ、よくもそんな口がきけたわね？わ、私が姫様の為に

命を懸けて戦つてたつていうのに…あ、ああアンタはそんなマントまでつけて何のつもりよ？」

「別に、俺今ガリアで貴族やってんの。使い魔クビになつたからねどこで何しようが俺の勝手たる？無茶苦茶言ってるんじゃないよ」
怒りに震えて口調が定まらないルイズに対し、サイトの口調はとてつもなく冷え切っている。

ルーンの洗脳による偽りの情も抜けきり、冷静な頭でルイズの事を判断している結果だ。

そりゃあ自分の事を散々こき使い、拳句路頭に迷わせた小娘の事などどうでもいいのだろう。

というか、俺がサイトと同じ立場なら多分斬りかかってるよ、ルイズに対して。

寧ろサイト本人より隣にいる俺がキレています。うん、何の反省もしてねーよこの桃色まな板。

「そ、そうね…弁解する機会を与えないのは卑怯よね。

だから、言いたいことがあるんなら今の内に言いなさい」

すると、ルイズは無い胸を張っていきなりこんな事を言い出す。

弁解の機会もクソも無いと思えますが、アンタが自分でクビにしたのだから。

ごめんサイト、デス唱えていいかな？いい加減俺の限界が近そうなんだが。

が、それを聞いてサイトがすーっと大きく息を吸い込み。

「バカだろ。お前に言う事なんて何もねーよ」

ルイズの言葉を一刀両断に切り捨てた。

「な、ななななな……」

「そもそも何を言えっただよ？お前が俺をクビにしたんだろ？

いい加減その上から視線をやめたらどーなんだよ？俺はお前の道具じゃねーんだ！！」

わなわなと震えるルイズに対し、サイトも口調を荒げ始める。

「トオルに会ってよくわかったよ。お前はおかしいってな！！

使い魔ってのはご主人様の奴隷なのか！違っただろ！俺だっただけ1人の人間なんだよ！！

それなのにお前は貴族がどーたら言っただけ俺を物みたいにこき使っただけアルビオンの時だっただけ有無を言わさず連れてっただけ、命がけで戦っただけの……

しまいいにはクビにしたような最低野郎に今更何を言えっただよ！

「！

「こ、この……！！！」

耐え切れなくなったのか、ルイズは杖をサイトの方へと向ける。

それに対してサイトは少しも臆することなく挑発する。

「何だ？またそうやって俺を無理矢理従わせるのか？魔法を使えないゼロのお前が！」

「私はもうゼロじゃないわ！！！」

瞬間、杖の先から光が放たれ、サイトの位置で爆発が起きる。

しかし、その場所には既にサイトの姿は無い。

「かはっ……！！」

ルイズが足をふらつかせて仰向けになると、サイトが彼女の目の前に現れるのはほぼ同時であった。

同時にサイトは仰向けになったルイズの上ののしかかり、

ラグナロクの切っ先をルイズの喉下に突きつける。

「ひっ…！」

冷たい刃の感触が、ルイズに小さな悲鳴を上げさせる。

だが、それ以上にサイトの表情が何よりも、氷のように冷たかった。完全に置いてけぼりな俺も、今のサイトの表情にはゾクリとくるものがある。

「…んでよ…っ…！」

すると、そんな圧倒的不利な体勢で、ルイズは突然声を震わせて泣き出した。

「どうしてよ！どうして誰も私を認めてくれないのよ！？」

虚無にだつて目覚めた！姫様からの期待だつて頂いた…！！

なのにどうしてよ！どうして使い魔のアンタが私を拒否するのよ！これ以上私に何が必要だつて言うのよ！？」

癪癪を起した子供みたいにルイズは喚きだす。成程そういうことなのね。

この小娘はサイトが自分に従わない理由を「魔法が使えないからだ」と思っていたと。

だから伝説の虚無に目覚めた自分を拒否する理由がわからないと、そういうことか。

「…戯言ほざくのもそろそろやめにしとけよ小娘が」

うん、大人げないけど遂に俺もプツンした。

まあ仕方ない、もとから嫌いなキャラなんだし。遠慮なんてする気はない。

「戯言つて何よ！私は「そのうるさい口を閉じてる」「」

こちらを睨んで反論してくるルイズの言葉をピシヤリと抑える。こいつの言葉なんて聞くだけ無駄だ。

「まあなんだ…サイトからお前のことは散々聞かされてたけど

まさかここまで頭が悪いとはなあ…ヴァリエール家のレベルも落ちたもんだ」

「あ、あんた！成り上がりのクセに私の家族までバカにしないで！」

「まあ…ゼロというコンプレックスを抱えてたのは…本ツツツツツッ当に少しなら同情できる…」

「が、お前のサイトに対する態度を見てそれも失せたわ」
完全に固まってるルイズに更なる言葉を投げかける。

魔法が使えるから貴族。これはハルケギニアに置ける常識であり負の塊だ。

故にルイズも、魔法が使えない（と、思い込んでいた）時には、多大な苦勞をしていたのだろう。

周りから嘲笑され続け、どれ程の歯痒さを味わってきたかを想像するのは難しくはない。

けど、こいつもこいつで結局はハルケギニアの貴族であるということだ。

魔法が使える貴族、使えない平民、そして貴族に平民が逆らうのはご法度。

故に使い魔とはいえ、平民だったサイトを奴隷同然に扱っていたのだ。

そこが多大な認識違い、こいつの最悪な一面だったというわけで。メイジと使い魔、その両者に求められる関係とはなんなのか？

簡単だ、ハルケギニアでの常識で言えば、生涯を共にするパートナーである。

キュルケのフレイム、タバサのシルフィード、ギーシュのヴェルダンテ…

扱いに差はあれど、皆が皆使い魔を大切にしており、使い魔も主人に応えようとします。

他でもない自分もそうだ。改変の影響があつたればこそとはいえずジョゼフは俺を対等のパートナーとして、様々な施しをしてくれる。だから俺もジョゼフに対して、好意を持って接することが出来る。

原作のジョゼフだって、シエフィールドの事を物として扱ってはいたが

それ相応の扱いはしていたし、彼女自身もそれを幸福だと思ってい

た。

…それらも結局は、ルーンによる好意の刷り込みが大きいのかもしれないが。

俺のジョゼフに対する行為もまた、偽りなのかもしれないし。

だがルイズは違う。こいつは使い魔を平民として見ている。それが大きなミステイク。

サイトにも家族がいる、生活がある、帰るべき場所だってある。

それら全てを無視し、自分の意のままに従う人形を無意識の内に作るうとしていたのだ。

ルイズはサイトを必要としていたのではない、「使い魔」というシンボルを欲しがったのだ。

だから自分の中で、そのシンボルとして役不足なサイトを思うが儘にこき使い、拳句クビにした。

そんなのが「貴族」ですか？使い魔とはいえ平民を物の様に扱うのが「貴族」ですか。

立派な貴族たろうと、魔法以外の面でのスキルは非常に優秀だったのに。

結局はルイズの性格が最悪だったからそれら全てが倒壊してたわけだ。

このまな板娘も結局は、ハルケギニアにいる劣悪な貴族と大差は無

い。

原作後半では改善されてたが。俺のいる世界のルイズは完全なダメ人間。

その原因に俺が一部絡んでいるのも自覚しているが、今は関係ない。このルイズをどうしようかと俺の勝手。俺もルイズと大差ないかもしれないがこの際構わない。

何故なら俺の幸せにこいつは邪魔だから、それだけである。

「…さてとサイト、この小娘をどうするかはお前に任せようか？」

「トオル…」

思考を切り替え、ルイズにラグナロクを突き立てたまま微動だにしないサイトにそう持ちかける。

「元はコイツがお前を呼び出したのが原因だったからな

だからコイツをどうしたいかはまず、お前の判断に任せるよ」

「そうか…わかったよ…」

冷めた声でサイトは返答すると、ラグナロクを高く振り上げる。

そしてジタバタともかくルイズへと一直線に…

ザクッ！！

…刺さると思った剣の先は、ルイズの首下スレスレの床へと突き刺さっていた。

「…ここでお前を物みたいに壊したら、俺もお前と同じになっちゃうからな

もうお前の事なんてどうでもいいよ、トリスティンに戻って勝手に

してろ」

そう言い残してサイトは、俺を残して部屋から退散してしまった。予想の範疇だったから別段驚いてはいない。サイトの性格的に殺すとは思えなかったし。

（シャルル派との戦いでの大暴れを考えれば、この世界のサイトも結構変わってる気もするが）

「さてと…あんなに気絶してら」
本当に殺されると思っていたのか、ルイズはピクリとも動かなくなっている。

だがこれは手間が省けたかもしれない。サイトがいなくなったのもある意味好都合だ。

仮にまだこの場にいたとしても、適当に誤魔化してただけで、結果は変わらないけど。

「ストツプ」

念には念をだ、ルイズの時間を停止させてから、俺は彼女をぞんざいに抱き上げる。

サイトはああ言うってたが、悪いが俺はアイツのように嫌いな人間に對しスツパリ割り切る柄じゃない。

今回は無視する方がリスクが高いのは明白。だからこっちで身柄を押しさえさせてもらう。

マジでやっтерることがルイズ以下になってきてるけど知るものか。全ては俺と、そして俺の周りの人達の平穩と幸せの為だ。

ましてや人を道具扱いしたこの小娘に、余計な情けをかける必要など無い。

まあ…とりあえずティファニアにだけはバレないようにしとかないといけないよね…

「あの色ボケ女王への…交渉材料にはうってつけだしな」
頭の中で非常に黒い事を考えながら、俺はルイズを抱えたまま出発の準備をしているみんなのもとへと向かっていった。

第33話：あの会食でガストラ皇帝を信用した人いるのかな？

ハガルの月の第一週、まあ単純に言えばハルケギニアで言う二月の一週目。

アルビオンの首都ロンディニウム、そこに位置するハヴィランド宮殿にて

「やっぱり断った方が良かったかなあ…？」
すぐ隣を歩くジョゼフには聞こえないよう一人で囁く。

いやもう本当に…場違いとかそんな次元じゃないからねこれは？

思えばRPG全般に置ける冒険者たちって

結構スカズカと他国の王宮に入ったりする辺り神経図太いよね？

毎度の如く無駄なことを考えるトオル・シュヴァリエ・ド・サイガ
ーです。

今日、ここハヴィランド宮殿で何が行われるのかと言うと

先の戦争の事後処理である諸国会議…

まあ悪く言えば戦勝国同士による利権の奪い合いって感じだろうか？
知っての通り、俺とジョゼフがいらんお世話をかけたおかげというか
連合軍と新生アルビオンの戦いは連合軍側の勝利で幕を降ろしたわけだ。

が、ゲームみたいにめでたしめでたしで終わるわけもなく、
その後アルビオンをどうするかってという問題が付きまってくるわ

けで。

あれだけおおっぴらに横槍をいければ、そりゃガリアも無干渉で済ませられる筈も無く。

ガリアのトップであるジョゼフがこうして会議に呼ばれたわけだ。

「すまないなトオルよ、だが心配するな。お前は黙って成り行きを見ているだけでよい

どうしても無理ならば俺だけでも充分だからな」

「…すみません」

と、緊張している俺の心境を察してかジョゼフが声をかけてくる。

それに俺はやんわりと返答しておく。

諸国会議となれば当然、各国のトップを筆頭に沢山のお偉いさんがやってくる。

そんな中、いくらジョゼフ親交が深いとはいえ

一介のシュヴアリエ如きがこんな場所にくるのはどうしたって不自然だ。

護衛とかならまだしも、会議の場であるホワイトホールにまで同行するのだから。

この道中も、明らかに権力的に格上の貴族達に白い目向けられっぱなしだったし。

そういう事例は多々あれど、今回は王族クラスばかりだったので流石に息が詰まる。

そんな場所にジョゼフが、俺も一緒に来て欲しいと頼んできたのが

事の始まり。

ハルケギニアでの、最も信頼している人物の頼み故に、そう簡単に断るわけにもいかず

それに断る理由もないし、商売の方も別段忙しかったわけではないし。

それに何よりジョゼフの意図する事は大体わかっていた。

改変の影響で大分変わってきたとはいえ、外面的な印象は、まだまだガリアの無能王である。

ハルケギニアでいう常識的な考えの王族からしてみれば、ジョゼフはこの世界きつての変人だ。

まあ原作でも、それは他国を欺く一種のポーズだったわけだけど。

ガリア国内で行われたシャルル派粛清や王国内での政治変動も

他国関係者の多くには、無能王が反乱を恐れた末の横暴、という風に見えているらしい。

しかしジョゼフ本人はそんな他者の評判など、どこ吹く風なわけで無能王なら無能王として認識させておいた方が面倒が少ないと考えている。

それで、諸国会議という政治的に重要な場に、シュヴァリエ如きを連れて行くという…

つまりはジョゼフの他国へのポーズを強める飾りとして、俺が同行してるわけだ。

まあ俺も他人がどう思おうが、基本的には気にしないタイプではある…

自分と自分の周辺人物に面倒がかからない限りでは、だが。

そうこうしている間に会議が行われるホワイトホールの前へと到着

する。

「ジョゼフは貴族に似つかわしくない、豪快な勢いで扉を開けようとする。」

「……ガリアもその国の格に似合わぬ王を……優秀な弟を殺して玉座を……恥知らず……」

「が、直前で中から侮蔑の声が聞こえてくる。どこをどう聞いたってジョゼフの悪口だ。」

「そりゃあ弟を殺したのは事実だが、玉座は最初からジョゼフのモンだったぞ？」

「それを知らない他国の人間が知ったか知識を口走っているのを聞くのは気分のいいものではない。」

「まあ……ラノベ読者という神視点でしか知り得ない情報どうこうで物語の登場人物に難癖付けるのも、我ながら滑稽な話ではある。」

「あんな風に言ってますけどマスター？」

「クク……言わせておけばよいのだ」
「そんな悪口も全くお構いなしに楽しげに笑うジョゼフ。流石、器が違うと言うか。」

「躊躇うことなく思い切り扉を押し退けてホワイトホールへと入っていく。」

「ガリア国王陛下下！」
「扉の側にいた衛兵が慌てたように、新たな主賓の参上を告げる。」

「これはこれは！お揃いではないか！うむ、実にめでたいことだ！ハルケギニア諸国の王達が一同に会するなど、実にめでたい！」

「またしても場の状況に相応しくない楽しげな口調でジョゼフは言う。そしてズカズカと大股でホール内を移動し、ある貴族の隣で静止してその肩を叩いた。」

「戴冠式には出席出来ずに失礼したな皇帝閣下！」

「その冠を抱く為に城をくれてやり、頑丈な扉と少量のパンと水で実に健康的な生活をさせてやっているご親族は元気かね？」

「贅沢は体に悪いからな。私も見習いたいものだよ！」

…端から聞いていけば物凄い皮肉である。

ジョゼフが相手をしているゲルマニア皇帝、アルブレヒト三世
要するに自分が王になる為に政敵を幽閉したってことだ。

いきなりそんな事をふっかけられた皇帝は「う、うむ」と曖昧な返
事しか返せないようだ。

次にジョゼフはその隣に座る女性に声をかける…ってあれはまさか
「アンリエッタ姫も久しぶりであるな！最後に会ったのはラグドリ
アンでの園遊会だったか

あの時も美しかったがいまはそれ以上だ、これほど美しい女王がい
ればトリステインは安泰であろう！」

その賞賛の中に、毛ほども本当の言葉が含まれていないのは誰が聞
いてもわかるだろうよ。

ジョゼフを前にして色ボ…アンリエッタは気の無い返事で「ええ…」
としか返さなかった。

ジョゼフはアルビオンとロマリアの代表は完全無視して、
さもそれが当然であるかのように、自分の席に腰を下ろす。

それに追従する形で、俺もアルブレヒドとアンリエッタにそれぞれ
頭を下げて会釈をする。

アルブレヒドは怪訝な顔をしていたが、アンリエッタは上の空とい
う感じであった。

というかアンリエッタは明らかに体調が悪そうである。表情も心こ
こにあらずという感じだ。

まあどうでもいいが、というか理由も大体わかるし。

その後俺はジョゼフの座る席のすぐ横に移動し、同時にジョゼフが
指を鳴らす。

すると、ホール内に沢山の給仕達が豪華な料理の乗った盆を抱えて
入ってくる。

王達の座るテーブルの上は、あつという間に御馳走で埋め尽くされ
る。

次いで、給仕達は王達の前に置かれたグラスにワインを注いでいく。

「ガリアから取り寄せた料理とワインだ！みすばらしい物で恐縮だが精々楽しんでくれたまえ！」
みすばらしいと言ったって、皿一枚の料理で平民一人が一年は暮らせる値段だぞ？
相変わらずのジョゼフの態度に、他国の人達も参っているようであった。
そしてジョゼフはワイングラスを手に取り、高らかに言い放つ。
「ハルケギニアの指導者諸君！戦争は終わったのだ！まずは祝いの宴といこうではないか！」

*

数時間後、ハヴィランド宮殿の客間で俺とジョゼフはカードゲームにいそしんでいた。
「しかし、相変わらずの自由奔放振りでしたねマスター…
他国の王族の皆様も面食らったような面持ちでしたし…」
「なに、アルビオンの利益など俺にとってもガリアにとってもどうでもよいのだ
欲しい奴にくれてやればよい、そのようなくだらない話し合いをするくらいならば
こつしてお前と遊戯を楽しむ方がよっぽど有意義だからな」
苦笑いを浮かべながら話す俺の言葉に、ジョゼフは本心からの笑み

を浮かべて返答する。

結局、諸国会議…という名の食事会でジョゼフは食べるだけ食べて飲むだけ飲み

拳句の果てに大欠伸を一つかまして「眠い」と一言言った後、退出してしまっただのだ。

有益な会談など何一つ行われていない、他国の貴族が何か言おうとすれば

ジョゼフはお構いなしに料理とワインを勧め、二言目には乾杯である。

ジョゼフの席で黙って突っ立っているだけの俺からしてみれば、実によくできた茶番に見えた。

確かにあんな態度を取られれば、無能のレッテルを貼られても当然であろう。

で、戻ってきた矢先に人目の気にならない客間で俺とカードゲームに没頭する始末。

ジョゼフはどこまでいってもフリーダムな人間なのだ。そこが魅力の一つではあるが。

俺からしてみたってアルビオンがどうなるうが、果てしなくどうでもいいし。

いや、実はこっち側にアルビオンの正統な王位後継者がいたりするんだけれども。

アルビオン王の弟モード大公…その娘にあたるのが何を隠そうつい最近ガリアに引き入れたティファニアだったりする。

血筋的には現在判明している人物の中で、一番アルビオンの王として相応しかったりするのだ。

しかし、ティファニアを王にするなどそんな馬鹿げた事をする気はないし

何より側にいるマチルダもそんな事させるつもりもないだろう。

自分を追い出した王家に戻すとか、まずそれだけで苦痛になるだろうし

ハーフェルフという立場ゆえ、悔しいがハルケギニアの人々から非難轟々であるう。

その気になれば黙らせることも出来なくはないが、対価に見合うメリットが少なすぎる。

ましてや心優しいティファニアが、自分の為に他者が被害に遭うのを望むはずもない。

ティファニアの望む幸福でなければ、俺が望む幸福でもない。

ティファニアに余計な火種を抱えさせてしまうのは愚の骨頂だ。

だからアルビオンなど放っておいて、俺の目の届く所で幸せになってももらえればそれで良い。

身の丈に合わない地位は余計な輩を呼び込むだけである。

カードをシャッフルし直し、新たなゲームを始めようとした時

俺はジョゼフの席に置いてあるある物が目に写る。

「マスター、それは何です？」

「ああ、これか？」

ジョゼフはそう言っている物をテーブルの上に置く。

それは俺も見覚えのある、古びたオルゴールであった。

「アルビオンの王宮を漁っていた間者が見つけたものだ

何でも偉い貴重品故に俺に預かって欲しいとかな言っただけだ」

「まさか……始祖の……？」

「察しがいいなトオルよ。そうだ、これは始祖のオルゴールと言われている品だ」

俺の言葉をニヤリと笑ってジョゼフは肯定する。

ゼロ魔世界における最重要アイテムの一つ、始祖のオルゴール。

アルビオンの始祖の担い手が風のルビーと共に持つべき品である。

原作でも確かこのタイミングでジョゼフが入手していたからある意

味間違いではないが…

どれだけ原作のレールを崩そうが、不確定部分は直るようになってもなってるのかと言いたい。

「しかしいくら始祖のオルゴールと言え…本物かどうかもわからないのしょう？」

疑わしい目つきでジョゼフに尋ねてみる。いや、多分本物だとは思うけど。

それ以上の疑問点というか、気になる部分があるのだ。

「全くだな、仮に本物だろうと俺は興味がない

憧れであった幻想の力に比べれば、虚無の力など児戯に等しいのだからな」

ふんと鼻息荒くジョゼフは言い放つ。作中最強クラスの虚無使いが言うのもアレだと思うけど。

でも今言ったように、この世界のジョゼフは虚無の伝説には微塵も興味がないのだ。

原作みたいに担い手同士を争わせてどうこうなんて考えていない。

つまりはジョゼフにとってはこのオルゴールは無用の長物なのである。

「そうですね…ではマスター、厚かましいお願いではあるのですが

…」

「なんだ？」

「そのオルゴール、俺に譲ってはくれませんか？」

とはいえ、俺にとっては結構重要なアイテムだったりする。

そういうわけで恐る恐るジョゼフにこんな事を言ってしまう。

「ふむ、別に良からう。俺とお前との仲だからな

何に使うかは知らぬがお前なら他の連中よりは有効に使えるだろうな」

「ありがとうございますマスター」

即答で俺の申し出を了承し、ジョゼフはオルゴールを俺に手渡す。

引越しの関係でゴタゴタしていて、ジヨゼフにはまだ詳しい話はしていないのだが

知つての通りアルビオンの虚無の担い手はティファニアである。

となれば、ティファニアの更なる覚醒には必要不可欠なアイテムである。

こつちとしてみれば自衛手段など魔石やマテリアでどうにでもなるのだが

燃費が悪いとはいえ、虚無は使い方次第でFF魔法以上の力を発揮するチート能力だ。

今後何が起ころかわからない以上、手札は多いに越したことはないだから、本来持つべきはずである人物の手元に置いておいた方が都合が良い。

というかティファニアの自衛もそうだが、ロマリアへの牽制目的の方が強いかもしれない。

未だに原作でもその最終目的がいまいち不透明な、あの腹黒国家が喉から手が出るほど求める物。

それが四の四、始祖の担い手と秘宝である。

こつちの手元にそれがあること自体が武器になるのだから非常時に対する対策にはなるであろう。

…まあ、原作でもかなり挑発的にガリアへ戦争ふっかけたのを考えると

気休め程度にしかならない気もするんだけどね…

二週間ほどの諸国会議を終え、俺は屋敷へと帰宅する。

今ではリア、サイト、シエスタに加え、新居が正式に決まるまでの間だが

ティファニアやマチルダ、更には多くの孤児達も住んでいて結構な大世帯になっている。

その辺りの近況報告はまたいずれさせてもらおうしよう。屋敷に戻るとすぐに俺は地下へと足を運ぶ。

そして屋敷の住民でも俺しか知らない秘密区域へと赴く。

「状態はどうだウルフ？」

「ガハハハハ！全ク問題ハナイゾマスターヨ！！」

「うん、ご苦労さん」

門番代わりのウルフラマイター（？仕様）に軽く挨拶をしておく。ちなみにこいつ、地下倉庫の門番をしている鉄巨人の統括用に召喚した個体だ。

腕は確かだが、やたらと口うるさいのが悩みどころ。

とはいえハルケギニアにはグラビデ系統の魔法や体力低下魔法などない。

鉄巨人以上に無理ゲー全開な最強の門番ではある。

中の牢獄の鉄格子のカギを開け、ベッドで横になって硬直している

人物の顔を覗き込む。

「…聞いた通り問題はないか」

ほっとしたように呟く俺の視線の先には、ストップがかかったままそのままのルイズ。

あの騒動の後、未だに処遇の決定しないコイツを、時を止めたままこうして幽閉してるわけで。

…アンリエッタにバレたら即、首はねモンだけどな。

諸国会議で上の空だったのも、親友たるルイズをあゝの戦争で失ったと思っ込んでるあたりが大きいだろうし。

「しかし、いい加減決めないとなあ…」

ガリガリと後頭部を引つ掻きながら一人でごちる。

当然、自分が如何に犯罪者じみたことをしているかは自覚している。しかし何度も言うがそんなのは今更だ。元はといえば自分で蒔いた種なのだから

自分で処理しないといけないのは当然であろうよ。

現に、今ここにルイズがいるのを知っている人間は俺だけだし。

本当に嫌いな人物がどうなろうと、俺は別に構わんのでね。

だったら使える範囲で使わせてもらっただけであつて。

というか、世界中全ての人間が幸せになれるとかホントありえないから。

誰かの幸せの裏には誰かの不幸が付き物なのは世界の真理よ？

…って話が脱線してるな、失敬。こんなくだらない理論並べたところ

俺がしているの事の言い訳には微塵もならないし。

だったら自覚して飲み込んだ上で、行けるトコまで行くだけである。俺と俺の周りの人間の幸せを維持するという、俺の自己満足を満た

す為に。

「あつちに渡すかこつちに渡すか…悩むよなあ…」
またしても一人でブツブツと呟いてみる。

以前言つたように、アンリエッタとの交渉に使えるとか考えたりしている。

別にトリステイン如きがどうなろうと…いや、シエスタの故郷だけは別だが…

とにかく知つたこつちゃないし、今のガリア相手にちよつかいだしてくると思えない。

しかし、より確実にトリステインと面倒を起こさせない保険としてヴァリエール公爵家三女であるルイズを、偶然発見した上で引き渡すというのは効果が大きい。

まして、トリステインのトップであるアンリエッタがルイズと親友なのなもの。

それだけでもう、トリステインは完全に…とは流石に言い過ぎだがかなりの部分で懐柔出来ると考えてもいいだろう。

まあ…そんないらぬおまけよりかはもう一つ、一種の脅しに使つた方が有効なのだが。

「ルビーも欲しいしなあ…」

ルイズの指から引き抜いておいた水のルビーをしげしげと眺める。

トリステインの虚無の担い手に与えられる水のルビーと祈祷書はルイズを捕縛した時点でこつちの手中に収まっていた。

といつても祈祷書はともかく、水のルビーはロマリアへの牽制程度にしかならないだろうが

本当に欲しいのはアルビオンの虚無の担い手に必要な風のルビーだ。そして、確かそれを今所持しているのは他でもないアンリエッタだつた筈。

…つまりぶつちやけると、ルイズの身柄の代償に風のルビーをぶん取れないかということ。

我ながら随分とあくどい事を考えていると思ってしまうが
とはいえ、所在が不確定な風のルビーを入手する手段としてはこれまた有効。

仮にアンリエッタが持っていないなくても、こっちで探せばいいのだし。

しかし、ティファニアの虚無の強化という大きなメリットはあれどわざわざ嫌いなキャラであるアンリエッタのメリットになる事をするのともうかと考える。

そんな個人的感情で、俺や周りの人達に被害が出そうならそうも言っ
つてられないが

上述したように今のガリアとトリステインの国力差は歴然なので
風のルビーも、ルイズでどうこうする以外の方法でもいいんじゃないか
かと思ったりもする。

そんなんに使うくらいなら、もつと違う人達に引き渡すなり
最悪、このまま地下牢で内々に処理するのだってありだろう。

つつても、アンリエッタ以外といえば、目星がついてるのはコイツ
の実家くらいだが…

個人的にはカトレアさんだけは救えないかなあ…とか余計な考えが
あつたりする。

というかなんであの一家の血筋に名を連ねてるのか甚だ疑問である。
エレオノール？当然大嫌いですが何か？

そしてルイズママことカリーヌさん…あの人は好き嫌い以前に関わ
りたくない。

多分、その気になれば鉄巨人の一体くらい捻れるんじゃないかとさえ思える。

過大評価かもしれないが、それくらい俺の中では印象が濃い人物である。

できたら本当に目をつけられたくないのだ。

…ああ、親バカことヴァリエール公爵は好きでも嫌いでもないです、ハイ。

とにかく、いくら好き側の人間とはいえ、カトレアさん一人救うのにルイズの引渡しと、他余計な方々に目を付けられるのもリスクが高すぎる。

実を言えば、このままルイズを死亡扱いにするのが一番無難だったりするのだ。

誰に引き渡すにせよ、ティファニアの協力は必要不可欠だし。自分の自己満足の為に、わざわざ他人の手を煩わせるのも気が引ける。

だったら初心に帰って面倒を避け、しばらくは商売や娯楽にいそしんでた方が

よっぽど有意義なんじゃないかと思うわけなんだよ。

「……とりあえず、もう少し保留かな」

結局、そんな感じで考えが纏まらなかったのだ。

念の為に追加でストップをルイズに唱えた後、牢獄を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4859k/>

ゼロの使い魔～無能王と七号と...零号？

2011年8月15日04時33分発行